ようこそ、社会の底辺へ

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ようこそ、社会の底辺へ

【Ｎコード】
Ｎ１５８４Ｏ

【作者名】
回収屋

【あらすじ】
引きこもり予備軍の青年、弥富更紗（やとみ　さらさ）は禁制品であるペット『禁魚』を入手した日から、人生が一変する。現実世界で得られない充実感を満たすため、死んだ友人から託された『Ｐ・Ｄ・Ｓ』というソフトを使い、ネットの仮想空間に逃げ込むが、待っていたのは『禁魚』達の悪フザケだった。
やがて始まる弥富の心の葛藤→踏みにじる『禁魚』達。なんとか前向きに生きようとする弥富→踏みにじる『禁魚』達。どん底から這い上がろうとする弥富→踏みにじる……。

惰性で25年生きてきた弥富に訪れる、人災と欲求不満のストーリー！！

【警告】この物語には暴力シーンやグロテスクな表現は含まれませんが、読むと人生を棒に振ってみたくなります。

使用上の注意はよく読めよう（前書き）

はじめまして。本作品を描く作者は基本的に人でなしです。肉体の半分は変態でできています。もう半分は優しさでできてたハズなんですが、金に困ってヤフオクで売りました。そんな人間性を考慮した上で御覧ください。

使用上の注意はよく読めよう

※水替えは週に1回行ってください。
※エサは1日1回にしてください。
※直射日光は避けてください。
※フンやゴミは綺麗に掃除してあげてください。

・
・
・

※著しく心を病んでいる方は決して飼わないでください。

「……もう遅いよ」

一枚の紙キレを持った青年が立ち尽くしながら呟く。部屋に知らない人がいた。テーブルの上には大皿があって、知らない幼児がその上にちょこんと座っている。

「あの～……どちら様？」

ドキドキしながら聞いてみる。

「食事中でしょうがあああああああッッッ！！」

「は、はいッ……スミマセン！」

怒られた。人の家で勝手に食事しているヤツに怒られた。

ムシャムシャ……ムシャムシャ……

（うっわ～、食ってるよ……見知らぬ女が皿の上の幼児を猟奇的に食っちゃってるよ……！）

けれども、幼児は別に痛がるワケでもなく、抵抗する様子もなく。

「さあ、食えよ。もっと食えよ。そして、みんな大きく育てばいい」

しかも、無表情で投げやり気味に呟いてるし。

「美味いッ！　こいつは天然モノだなッ！」

「ああ、そうだよ。ド天然だよ。オマエの血となり肉となってやるよ」

（え～と……こんなハズでは……）

青年はこの二人組のやり取りに大変困惑していた。予想とあまりにも食い違っていたからだ。『取扱説明書』なんてものは非常事態発生時に読めばいい……と、大雑把に考えていたら、早くも非常事態宣言発令。いつの間にやら1LDKの狭い自分の部屋に学生服姿のメガネ少女がいて、西〇屋で売っていそうな子供服を着た幼児を食っている。コレは事件だよ！　カニバリズムだよ！　オマワリさんこっちだよ！

「けふっ……ごちそうさまでした」

「はい、いただかれました」

食事終了。食ったヤツが食われたヤツにペコリ。そして、この部屋の主人である青年に向き直る。

「こんばんは、『浜松（はままつ）』だよッ！」

笑顔で元気良く自己紹介された。

「いや……だからね、ドコのダレなの？」

「浜松。黒出目金のメス。2才と6ヶ月」

「……マジで？」

慌てて取説をペラペラとめくって目を通す。

（やっばあああああああああああ――――――ッッッい！！）

もんどりうつ青年――『弥富更紗（やとみさらさ）』。彼がこのような光景に遭遇してしまった経緯は、1週間前にさかのぼる。

――――――――――――――――　1週間前　――――――――――――――――

「コレか……？」

彼は喪服姿で他人の家の一室に立っていた。手にはポータブルHDが握られている。コレの持ち主は死んだ。この日は持ち主である友人の葬式だった。出席して初めて友人の顔を見た。ただし……遺影という形で。チャットで知り合った唯一の友人で、25年生きてきて、初めて心底から打ち解けた相手だった。葬式の前日に郵便が届いた。郵便はその日に届くよう手配されていて、封筒の中にダイレクトメールが入っていた。友人からの手紙……そこに書かれてい

たのは、自分の死を予測した上での頼み事。

〔弥富君へ　　某月某日、私の葬式に御出席ください。二階の角に自室があります。天井裏にジュラルミンケースを隠してありますので、必ず回収してください。尚、ケースのキーコードは下記のアドレスから入手してください。巻き込んでしまうかもしれないけど、その時はゴメンナサイ〕

意味深な内容だった。いや、それ以前に……葬式って！？　何かの手違いか、悪戯か。しかし、現実にケースは存在し、持参したラップトップで指定されたアドレスからキーコードも入手した。中に入っていたのはポータブルＨＤが一つだけ。弥富はソレをアパートに持ち帰り、デスクトップにつなぐ。すると、自動でネットにつながり、とあるサイトにリンクした。

【裏ペット販売所】――諸外国との取り決めにより禁制品となった生物を売りさばいている、いわゆる違法なサイトだ。もちろん、普通に操作してもアクセスできるサイトではないが、勝手にサイトに注文をはじめたのだ。あまりに唐突な出来事に、ただただ成り行きを静観するしかなかった。で、届いたのは四匹の『禁魚』。そして、二つの専用インカム。

（おいおいおい、コレってまさか……『Ｐ・Ｄ・Ｓ』かッ！？）

『Ｐ・Ｄ・Ｓ』――ネットを介して愛玩動物と仮想空間で会話を楽しめるシステム。専用インカムを飼い主とペットが装着することにより、人語で簡単な会話ができる。知能の高い動物ほどより高度な会話ができ、一時期爆発的な売上を誇ったソフトだ。が、長期間の使用により、非常に高い中毒性を有するという事実が判明し、電脳麻薬を取り締まる情報機関から監視されるようになった。その後、ネット上には偽Ｐ・Ｄ・Ｓを扱う業者のサイトが泡のように湧き、そこからインストールされたソフトが次々とコピーされ、サイト管理者と使用者を含め大量の逮捕者を出した。現在では監視システム

が常設され、よほどのハッカーかジャンキーでなければ手を出さなくなった。
そして、今日……買ってしまった禁魚を水槽に移し、ネットを介してそれぞれの専用インカムを装着した途端の出来事。
「ひいいいッッッ！　『電薬管理局』のメインサーバーに自動アクセスしてるうううッッッ！」
マズイよ！　マズイよ！　人生のハルマゲドン到来しちゃったよ！　この現実から予測される今後の展開としては……監視システムに引っかかる→住所を突き止められる→オマワリさんが踏み込んで来る→痛くされる→拘置所でロープの先を輪っかにする。
「やっばあああああ――――――――――ッい！！　どうする！？　どうする！？」
「うっせえええええええ――――――――――ッッッ！！」
――――ドゴッ！！
「おふッ！？」
ボディブローが入った。セーラー服の不審人物に躊躇なく暴力をふるわれた。
「さっきからやかましいよ！　情緒不安定か！？」
オマエが言うな。
「ワケ分んねーよ……つーか、何で殴るの！？　しかも、リアルに痛いし！」
「ネットにつなげた本人が文句言うな！　現実を目の当たりにして叫べ！　自分は変態であると！」
「何故に！？」
「あたしの服装はネットで検索された情報の中で、使用頻度の高いモノが反映されるんだよ。つまりは更紗の趣味や性癖がバレたりする。オメデトウ！！」
「何が！？　つーか、どうして俺の名前知ってるワケ！？」
「ネットの世界に不可能はない。しかも、禁魚は頭が良いのだ。現

実とアニメの区別がつくくらいにな！」
　微妙な知能だ。
「禁魚？……って、オマエが？」
「呆けるなよ。一目瞭然だろ」
「いやいやいや、分かんねえって！」
　オーバルタイプの赤縁メガネをかけたセーラー服少女の本性が、魚類だなんてダレも思わんし。
（聞いてたウワサと全然違うぞ……）
　弥富の顔色が著しく悪くなる。ネットの掲示板から察するに、犬や猫や鳥の可愛らしいアバターが現れて、簡単な会話が楽しめるって感じだったんだが……現在、目の前には人類百パーセントがいる。しかも、えらく饒舌だし。
「P・D・Sをナメんなよ！　夢も希望も無い社会の出来損ないに、心の安らぎを与えられるんだよ！　高性能ばんざ～～い！」
　エライ言われようだ。
「犬耳・猫耳の美少女キタ――――ッ！　……なんて妄想してたんだろ。いいから本性さらけ出しちゃえよ。期待に胸も股間も膨らませちゃえよ」
　幼児からは下ネタでツッコまれるし。
（と、とにかくだ……ここは落ち着いて大人の対応をしなければ）
　なんとか気を取り直す。
「ところでさあ、『浜松』っていうのは名前？」
「いかにも。ちなみに、この無表情で生意気なクソ幼児は『ポチ』。更紗がエサとして水槽に入れた糸ミミズだったりする」
　ちょ……エサまで擬人化されちまってんの！？
「よ、宜しく……」
　一応は友好的な態度を示そうと、握手を求めてみた。
「調子にのるなニート。引きこもってないで外に出ろ、この童貞野郎」
「やめてッ！　初対面でいきなり負のステータスばらさないでッ！」

弥富、苦悶。
「ポチよ、『ニート』とは何かね？」
「生産性を無視して生き続ける社会の底辺」
神様、助けてください……見知らぬ幼児に言葉責めを受けています。
（それにしても……）
浜松は“高性能”と言っていたが、一見して年齢が反映されてないような気が。浜松は外見１５、６才くらいだし、ポチにいたっては……まあ、糸ミミズの年齢なんぞ気にしたことはないが、見た目は５，６才くらいだ。アバターの基準って何？
「あのさァ……オマエ達の容姿全般って何基準？」
一応、聞いてみた。
「あたしの趣味よ」
「右に同じだぞ」
高性能ばんざ～～い。
（……どうする、俺？）
ネット住民の情報ソースにろくなモノはない。それは周知の事実ではあったが、これはヒドイ。偽Ｐ・Ｄ・Ｓの中には、性風俗を目的とした野郎の妄想タップリなヤツもあると聞いていたが、それはあくまで脳内麻薬の分泌と幻覚が成せる技。だが、今、面前で床に寝っ転がったり食われた部分をウニョウニョと再生させているヤツ等……ふてぶてしい空き巣にしか見えなくて、脳内麻薬なんぞ微塵も出ない。
「さて、更紗……何が知りたい？」
「――――え？」
浜松がメガネをクイクイさせながら一瞥をくれる。
「何故、『電薬管理局』のサーバーにつながったのか……『禁魚』とはどんな生態なのか……どうして友人はこんなモノを自分に託したのか……とか」
そう言って、彼女は問題のポータブルＨＤを手に取った。

ゴクリ……
弥富は軽く息を呑む。
「お、教えてくれ！」
思い切って聞いてみた。
「ゴメン。分らん」
一蹴された。
弥富は装着していたインカムを静かに外す。周囲の光景から、浜松とポチの姿が一瞬にして消える。代わりに現れる四つの水槽。それぞれに禁魚が一匹ずつ泳いでいる。
「――――――――――イカンっ！！」
彼は慌ててデスクトップからポータブルＨＤを引っこ抜き、モデムのケーブルも引っこ抜き、玄関の鍵をかけて照明を消して、ベッドに潜り込みブ～ルブル。
（父よ、母よ、ゴメンナサイ……アナタ達の息子は前科持ちになりました）
彼の憂鬱な日々が始まった。

同じ失敗を繰り返すよう（前書き）

バナナはオヤツ！　オッパイは乳製品！

同じ失敗を繰り返すよう

――――――――――――――― 翌朝 ―――――――――――――――

「やったあああああッッッ！　捕まってない！　生きてる！　俺の勝ちだッッッ！！」

掛け布団が宙を舞う。ドス黒い悪寒に一晩中うなされたが、カーテンの隙間から朝日が差し込み、自分の身の安全が確認できて……起床ォォォォォ――――――――！！

（ということは……）

バレていない。電薬管理局のサーバーに違法アクセスしたにも関わらず、国家暴力は踏み込んで来なかった。そして、この事実から下記の事が予測できる。

?友人の残したポータブルＨＤには探知防止機能がついている。

←

?友人は自分と同い年であるが、ずっとソフトウェアに精通している。

←

?これで安全、且つ無料でＰ・Ｄ・Ｓを満喫できる。

←

?父よ、母よ、アナタ達の息子はなんとかなりました。

「よし、こうなれば次を試してみるか」

これこそまさに僥倖。楽しまなければ損だ。ただ、昨日の浜松とポチの件は、おそらくエラーの一種だろう。そういうことにしておこう。

弥富は『インカム・β』を装着し、今度は『和金』の水槽に『インカム・α』を取り付けた。

（ふむ……コイツはオスみたいだな）

和金のような丈夫で活発な品種から察するに、ビジュアル的には元気な小学生？　それとも、フレッシュなスポーツマン？　興味津々でポータブルＨＤをネットにつなぐ。
「……どち様？」
昨日とリアクションがいっしょ。ガラスのハートが砕け散らないよう、ある程度気を強く持っていたつもりだったが、またオカシイのが目の前にいる。
「やあ、弥富さん。はじめまして。ボクは『郡山（こおりやま）』といいます。宜しくお願いしますね☆」
スマイルだ。フォーマルスーツを着た２０歳前後の青年がペコリと会釈した。
「あのさあ……随分とイメージとかけ離れているんだが」
「そうですか？　ボクは和金として普通の禁魚のつもりですけど」
いやいやいや、優男のツラで営業スマイルしてるから。石○彰みたいな声出してるから。
「……にしてもさあ、どうしてまた『郡山』なんて人間みたいな名前なの？　ペットらしい名前つけちゃダメなの？」
「はあ……しかし、ボク達『禁魚』はＰ・Ｄ・Ｓ専用に調整された生物ですので、こちらの都合じゃどうにも」
「あ、それだよ！　Ｐ・Ｄ・Ｓだよ！　あのポータブルＨＤは特別な仕様なのか？　電薬管理局に探知されないなんて、普通じゃないぞ！」
「さあ……ボクはまだ2才と2ヶ月の青二才なんで、システムの詳細については何とも」
「じゃあ、別の質問。今、オマエが着ているスーツってさあ……」
「ええ、その通りです。御友人である『深見素赤（ふかみすあか）』さんの葬式に出席するため、通販で買われたモノです」
弥富より頭一つ分くらい背が高いせいか、少々キツキツに着こなしている。
（深見……か）

他人の葬式に出るのは初めてだった。そこで初めて友人の顔を見た。あまりに辛くて御焼香は無理だった。出来る限り彼女の棺には近づきたくなかったから。初めて心を許し合えた相手を失った後の空虚感……尋常ではなかった。そこで、弥富に湧き上がってきたのはドス黒い“憎しみ”。

「……もう一つ質問」

彼はポータブルＨＤを凝視しながら深呼吸した。

「友人の仇をとりたい。どうすればいい？」

とんでもない事を言った。声が少し震えていた。

「それはつまり、深見さんの死は電薬管理局のせいだと？」

郡山が目を細める。

「アイツはメールではなく、わざわざ手紙を書いてよこした。ネット上の動きを監視されていた可能性がある。しかも、自分の死を予測した内容の上に、託されたポータブルＨＤには、電薬管理局のサーバーからインストールされたオリジナルのＰ・Ｄ・Ｓが記録されていた……関係が無いハズがない」

「なるほど。つまり、告訴して刑事裁判に持ち込んだり、悪の親玉を潰したりということですね？」

「いや、とりあえず……何かイヤガラセでもできれば……と」

抵抗レベル低ッ！！　そして、郡山の視線がちょっぴり冷たッ！！

「だってさあ……俺って別にハッカーみたいな技術持ってないし、ネットサーフィンが好きなただの引きこもりだし……見ちゃヤダ！

そんな目で見ないで！」

弥富、苦悶。床の上でゴ～ロゴロ。

「う～～ん……イヤガラセとなると、クラッキングとかメール爆弾とか、ネカマになって相手を困惑させるとか？」

「いやいやいや、それこそ探知されちゃうし。つーか、ネカマとか絶対無理だし」

「ハンドルネームは“ネカマユキエ”とか？」

自らバラしちゃってるし。

「穏便で、自分が絶対ダメージを受けないような手段はないか？」
ヘタレの理論だ。
「それじゃあ、他の禁魚達と一緒に相談して、今後の身の振り方を考えましょう」
「えっ、そんな事できるのか？」
「簡単です。同じ水槽に禁魚同士を泳がせれば」
弥富はそう言われてインカムを外し、四つの水槽を見渡す。そこで、初めて実感が湧いてきた。自分は今、とんでもないスキルを身につけたのだ。友人が残したポータブルＨＤがあれば、いつでも安全に国の情報機関へとアクセス出来るのだから。ああ……人がゴミのようだ。俺しかいないけど。
（よし、それじゃあ……）
弥富は黒出目金を手ですくい、和金の水槽に移す。そして、再度インカムを装着。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！！」
弥富、大絶叫。

「もっとイイ声で鳴きなッ！　このクソガキがッ！」
「シバけよ。もっと激しく。そして、食っちゃえよ」
ボンテージを纏った浜松が、天井から吊り下げられたポチを鞭でビシバシやってる。
「やめんかバカ共ッ！！」
「ぬッ、やぶからぼうに何事！？」
「やぶからぼうはオメーだ！　人の部屋をＳＭクラブにするんじゃねえよ！」
弥富、早速、ムダなカロリーを消費。
「やあ、浜松さん」
「ん？　ああ、郡山か。よく来たな。どうだ、オマエも？」

「はい。それでは遠慮なく☆」
ビシッ――！　バシッ――！
「その調子だ。手首のスナップをきかせろ。心の変態を解放しろ」
ポチは相変わらず無表情。棒読みで怖いし。
「ねえ、やめて……拘束具で縛られた幼児を爽やかな笑顔でシバかないで（汗）」
弥富の部屋は事件現場と化していた。
「で、何用かね？」
鞭をブンブンさせながら浜松が飼い主に向き直る。
「いや、俺の前に自分の格好について言い訳はないのか？　それとも、ツッコミ待ちか？」
「うんッ☆」
やめろよ……不意に年頃少女へ戻るのは。
（んん？　あれっ……？）
浜松の一瞬変化した表情から、何か思い出しそうになった。昨日は唐突な展開にあたふたしていたため、相手の顔をよく見ていなかったが、この少女の顔って……
「あッ！　そうだよ、その顔ッ！　何で“彼女”と同じ顔してんだよッ！？」
弥富が浜松をビシッと指差す。
「“彼女”……それはつまり、さっき言っていた友人のことですね？」
郡山が知的な瞳を光らせた。
「どういうことなんだ、浜松！？　深見とオマエは何か関係があるのか！？」
葬式で遺影を見て初めて知った本人の顔だったが、今、ハッキリと思い出した。
「知らないよ。他人の空似でしょ」
「いいや！　そのメガネといい、その束ねた髪を後頭部でまとめた髪型といい……そっくりだ！」

ここぞとばかりに弥富の鼻息が荒くなる。
「まあまあ。ボク達も自分自身の生態については、知らない事が多いものでして、はい」
「……じゃあ、何だったら答えられる？」
どうも信用できない。話を逸らして何かごまかそうとしているように見える。
「ええっと……例えばですね、どうしてＰ・Ｄ・Ｓの使用が電薬管理局に察知されないのか……とか」
郡山が申し訳なさそうに話をふる。
「いや、待て。さっきオマエは、システムの詳細はよく知らないって言ってなかったか？」
「はい、ポータブルＨＤのシステムに関しては。しかし、電薬管理局に察知されないのは、ソフトウェアの問題ではなく、ボク達『禁魚』の存在理由と関係しているんです」
「その通り！　つまり、あたし等禁魚はＰ・Ｄ・Ｓを媒体としてはじめて機能する、生きた『防火壁』なんだよね！」
浜松が腰に手をあてて仁王立ちしている。
「生体ファイアー・ウォール！？　おいおい……妄想族が来ちゃったよ」
愕然とする弥富。
「現実を受け入れろよ。そしてシバけよ」
ビシッ――！　バシッ――！
弥富が心の変態を解放中。
（マジかよ……！）
とりあえずポチをシバきあげといて、彼は力無く床に腰を下ろした。頭の中で火サスのＢＧＭが響いている。インカムを外し、一目散にベッドに跳び込んだ。なんだか寒い……もう夏なのに、あ～～夏なのに。
（なんてモノを……深見、君は俺に何をさせたいんだ！？）
浜松の発言が事実だとすれば、国家レベルの大事件だ。使い方も

効果も知らぬ子供が、核兵器の発射シーケンスをでたらめに弄り出したようなもんだ。

このまましばらく静かにしていたい。コミュニケーション怖い……彼の意識はベッドの中でログアウトしてしまった。

平常心を強く持てよう（前書き）

性欲に負けたのではない。理性に勝ったのだ！

平常心を強く持てよう

「……腹減ったな」

弥富があまりの戦慄に心を侵され、現実からログアウトして2時間程経過……彼は空腹で目を覚ました。無気力な表情で起き上がり、いつもと同じ服装に着替える。駅前の牛丼屋で腹を満たした後、オタクな電気街を彷徨い歩く。ガチャガチャをやって、同人誌を数冊買って、フィギュアをジロジロ眺めた。そして、帰宅。いつもと変わらぬライフワークをこなして、心はすっかり落ち着いて――

「落ち着くかあああああああああああああああああああああああああ――――ッッッ！！」

弥富、発狂。何か別の物に変身しそうな勢いで。

（さあ、どうすればいい、俺ッ！？）

軽く現実逃避している場合ではない。アパートに帰れば、イヤでも四つの水槽と問題のポータブルＨＤを目にするのだから。この状況を打破するには、やはり、禁魚達とのコンタクトを続けるしかない。

「よし、やるかッ」

ガンバレ自分！　負けるな自分！　ダレも応援はしてないけど！

（さて……次は）

二度あることは三度ある。そんな言葉が頭をチラつくが、彼は『らんちゅう』の水槽にインカム・αを取り付け、インカム・βを自分にパイルダー・オン！

「きゃあああああああああああああああああああああああああああ――――――――――ッッッ！！」

弥富の悲鳴。

バタバタバタッ！！
彼は大慌てで玄関からＩ・ｃａｎ・ｆｌｙ☆
あまりのショッキング映像が彼の前に現れたから。次から次へと……これは神様が与えた試練ってヤツですか！？
「……ふぅ」
彼はアパートの外で呼吸を整え、自宅なのにコソコソしながら中へ戻る。待ち受けていたのは――テーブルの上に腰かけて、うちわでパタパタ扇いでいる女が一人。問題なのはその女が……
「何故に下着？」
ブラとショーツでこんにちは☆
「暑いンやもん。もうちょい高性能のエアレーション使ってや」
開口一番に文句言われた。
「なんつーか、その……『らんちゅう』の体型がよく反映されてるな」
全身から汗がダ～ラダラ。ウエストの余分なお肉がプ～ルプル。
「むむッ、それはデブやって言いたいンか！？　ちゃうで、うちはあくまでエエ感じのポッチャリや！　言うなれば青木○んや！」
「やめろよ、ＡＶ嬢に例えるのは……」
外見的には１７、８歳くらいだろうか。赤髪のツインテールとムッチリ・ボディがやたらと目立っている。
「アンタがさっちんやな。うちは『出雲（いずも）』っていいます。よろしゅう☆」
（……さっちん？）
どんだけフレンドリーだよ。
「ええ～……もうなんか聞くのも面倒なんだが、暑いからって、どうしてそんな格好してるワケ？」
「だって、見られるとメチャ楽しいンやもん♪」
オマワリさん、助けてください。俺の部屋にホンモノがいます。
「ああ、そう……こっちは微妙に不愉快だけどね」

「何でや！？　まだ若いのにドキドキを失ったらアカンで！」
「うるさいよ。そして、オマエは常識を失うなよ」
出雲が意味不明なウインクしてくる。M字開脚でパカパカしだす。世界はオマエを『変態』と呼ぶ。
「で、うちに何の用や？」
あ、そうだった。危うく当初の目的を忘れるところだった。多分、長い付き合いになるだろう。まずは、相手をしっかりと認知しておかなければ。本来なら、浜松や郡山から始めるべき事だったんだが、あの二人では徒労に終わりそうなんで。
「オマエ達『禁魚』の生態について、知っている事を全て話してくれ」
「いやや、面倒臭い」
オマエもかよ。
「つまらんなァ～、このシチュエーションならもっと聞くべきコトがあるやろ！　エッチな質問してドキドキさせるとか！」
「……」
弥富の視線が冷たい。
「まあ、ええわ……せやなァ、うち等は『金魚』を人為的に変異させて造られた、いわゆる“希少種”や。本来は記憶障害や鬱病患者に使用する、ドラッグとして開発されたらしいンやけどな。魚類にはあり得ない知能の高さが判明して、P・D・Sの飛躍的なアップグレードにつながったらしいで」
（……ドラッグ？）
初耳だった。が、P・D・Sが愛玩動物に癒されるコトを前提としたシステムだから、あり得なくはない。
「他には……う～～ん、うちより他の連中に聞いた方がエエと思うけどなあ」
「浜松と郡山のコトなら却下だ。ヤツ等は選りすぐりのバカだ」
やさぐれ気味に断言しちゃった。
「ほんなら、『土佐（とさ）』のジイさんに聞いたらええンちゃうかな？」

とうとう最後の禁魚とコンタクトをとる時がきた。

「今度こそ、まともな話が聞けるんだろうな……」

禁魚に対する弥富の信頼度は絶賛下降中。

「なんせ15年も生きとる長老やから、色々知ってるやろ」

出雲はそう言って、やっとテーブルから下りると勝手に窓を全開にし、こちらに背を向け仁王立ち。Tバックを穿くにはギリギリでアウトなヒップをプルプルさせて。

「……何してんの？」

「写メ待ちや」

弥富、インカムを外す。瞬時にして公然わいせつ者の姿が消える。

「不毛だな……」

これ以上の精神的ストレスにはガラスのハートが耐えられない。

(仕方がない……やるか)

一際ガタイの大きい『琉金』の泳ぐ水槽に、インカム・αを取り付ける。そして、今度こそ！　……という期待をこめて、インカム・βを装着。

「きゃあああああああああああああああああああああ――――――――ッッッ！！」

またしても木霊する悲鳴。玄関から本日二度目のI・can・fly☆

(俺、もうヤダ……！)

マジで冗談じゃない。御近所の方々が、様子を見に来そうなくらいの慌てっぷりだ。部屋に戻りたくない……しかし、このまま裸足でアパートの外をウロついてたら、ドコかの母親が子供に“見ちゃいけません！”……とか言いそうなんで、心臓をバクつかせながら、そぉ～～っと部屋の中をのぞく。

――――――居た。大量に吐血した老人が、床の上に倒れている。

「助けて船越さぁぁぁぁぁぁぁん！！」

弥富、泣く。自分の部屋で、いきなり知らないジジイが死んでるんだもん！　ダレか大家さん呼んで！
「ちょっと弥富さん！　さっきからどうかしたの！？　やかましいよッ！」
「あ……スンマセン……（汗）」
隣のオバチャンに怒られた。真っ昼間でなんか気まずい。
（さ、さて……どうしたものか……）
おそらくは出雲の言っていた琉金だろうが、何故に死にかけ（？）ているんだ。
「よ、よ～～し……」
弥富は棚のＤＶＤケースを一つ手に取り、投げる。
ゴッ――
命中。しかも、角の部分が頭部に。
「げふッ！」
更なる吐血。
「いかあああああああああああ――――ッッッん！！」
余計なダメージを与えてしまった。
「だから、弥富さんッ！　やかましいって言ってるでしょうがッ！」
「スンマセン……マジでスンマセン（汗）」
また怒られた。
（うっわ～～……どうなってんだよ？）
寿命？　病気？　悪フザケ？　いずれにせよ、この状態では話をするどころではない。弥富は一度インカムを外し、琉金の水槽に黒出目金をすくって入れる。
「うおおおおおいッ！　血ィ吐いて倒れてるしッ！」
浜松、登場と同時にリアクション。
「いや、そういうの俺が十分やったから」
弥富が冷静にツッコむ。
「ちッ……」
「何で舌打ち！？　どんだけ騒ぎたかったんだよ！？」

「で、何事？　あたし、結構忙しいんだけど」
「いや、オマエ魚類じゃん。泳いで呼吸して、エサ食ってフン出すだけじゃん」
「バカ者めッ！　この姿を見よッ！　白衣の天使として忙殺される毎日なのだァ～～！」
今度はナースだ。イメクラのデリバリーに電話した覚えはない。
「はいはいはい、そして、はい」
弥富の視線はもう蔑みに近い。
「くッ……よかろう。信じないのなら、あたしの最先端医療で患者を昇天させてやろう！」
「逝かせてどうする。黒衣の悪魔め」
で、取り出したのは一本のメス。そして、すかさず執刀。
ザクッザクッ、ザクッザクッ――――ブシュウウウウウウウウウ～～～……
「うわぁ～～い☆　赤い噴水だぁ～～☆」
弥富の瞳が白昼夢を見ている。そして……
「オペ完了ッ！」
わずか5秒で。
「ど、どうなったんだ……？」
「……てへッ☆　死んじゃった♪」
親指を立てるな。ペロッて舌を出すな。
「おい、どうすんだよ……完全に人災じゃねえか」
「ふむ、仕方ない。こうなれば……」
ズ～リ、ズリ……ズ～リ、ズリ……
白目むいたジジイを浜松が玄関まで引きずり、４５？のゴミ袋を頭からかぶせ、ガムテでグルグル巻きにして――
「よし」
「よし、じゃねえ！　真剣な面で無かったコトにすんな！」
「心配しないで。ちゃんと可燃ゴミの日に出すから」
「そこじゃねえよッ！」

ガサガサッ、ガサガサッ
ゴミ袋が動き出す。そして――
バリバリバリッ！
「何すんじゃいいいいいッ！！」
ゴミ袋を豪快に突き破り、ジジイが復活。
パチパチパチッ♪
二人はとりあえず拍手。延命オメデトウ。
「おのれ、浜松ッ！　高齢者を大切にせんヤツは、地獄に落ちるがいいッ！」
「ヤだよ。そっちが先に逝けよ」
ブスッ――！
メス、再執刀。ジジイの脳天から赤い噴水第二射。
「おい……俺の部屋をバイオレンスに模様替えするんじゃねえよ」
「おおッ、お主が儂等の御主人じゃな。宜しく頼むぞ」
握手を求められた。顔面血まみれのジジイに。
「あ、あのさ～～……外見の先入観から人を判断したくないが、アンタ……ホームレス？」
禁魚・『土佐』の外見――ハゲ、ヒゲもじゃ、ボロボロの作務衣。そして、雨に濡れた後の犬みたいな臭い。
「無礼な！　儂は禁魚という希少種の中でも、長老と称えられし猛者ぞ！　見た目で人間性や社会的立場を判断するようでは、まだまだ人間が青いわ！」
土佐、一喝。
「そ～～れ、拾ってこ～～い！」
浜松がポチをポ～～ンと投げる。
「うっひょおおおおおお――――ッ☆」
ジジイ、大喜びでポチに食いつく。
「……おい、尊厳って言葉知ってるか？」
弥富は人を哀れむ心を覚えました。
「で、更紗。土佐に何か用？」

「例によって、質問があったからインカムを着けたんだが……これまた例によって、悪フザケに迎撃された」
「確かにジジイは１５年も生きているだけあって、博識ではあるけどさ。多少ボケているから期待しちゃダメよダメよ、ダメちゃんよ」
「何だよ……やっぱ役立たずかよ」
「黙らっしゃい！　儂の脳ミソには、ネットの海で得た森羅万象の情報がつまっとる！　さあ、聞けッ！　やれ、聞けッ！　即答してくれるッ！！」
　食べカスを飛ばしながら威張るな。
「オマエ達の生態について全て教えてくれ」
「え～～、面倒じゃのう……儂、知らねぇ～しぃ～」
　やっぱりだよ。そして、ガッカリだよ。
　今日も無駄な時間が過ぎていった。

プライヴェートは確保しよう（前書き）

愛で人類は救えないが、チーカマがあればどうにかなる

プライヴェートは確保しよう

夕方――。
ポチャン……ポチャン……ポチャン……
弥富が浜松の水槽に他の三匹を投入する。これにより始まるのは――

「は～～い、これより第一回『人類と魚類の朝まで生討論会』を開始するぞ～～」

狭いアパートの一室で、テーブルを囲んで統一性の無い連中が座っている。テーブルの大皿には酒蒸しにされたポチが。
「さあ、始めちまえよ。ポチをお手軽につまみながら、諸行無常を話し合えよ」
「オマエはしゃべるな、猟奇被害者」
弥富に一蹴された。
「なあ、さっちん。うち、テレ東で観たい番組あるンやけど」
「弥富さん、水草が欲しいです。後、水温は２５℃前後を維持してください」
「御主人よ、え～～あ～～……何じゃったかのう？」
「更紗ァ、女教師は好き？」
「テメー等静かにしろ。勝手すんな。浜松、どっちかというと、好き」
前置き終了。
「では、最初に……電薬管理局と禁魚の関係性について話してもらおう。まずは、そこの間違ったイメージを過大評価した、イカレ女教師から」
「えっ、コレってダメなの！？」
明らかに布の面積が足りないスーツを着た浜松が、普通に動揺し

てる。
「エロゲーを鵜呑みにすんな。ＡＶに洗脳されんな。ニコ〇コ動画は程々にしろ」
ありがたい御言葉がたまわれた。しかし、彼女は負けないし、退かない。湧いて出たホワイトボードの前に立ち、バンバンッと指示棒で叩く。
「皆の者、まずはコレを見てちょうだいな！」
言われて見てみると、何だかえらく抽象的な絵が描かれている。道路標識みたいな人間と、爆発したお花畑みたいのと、ファミコンのドット絵みたいなお城と。
「浜やん、何ソレ？」
出雲が率直に質問。
「見て分かんないの！　コレはアレだ……アレ！」
「……」
静寂と沈黙。
「その、コレは……つまりだ！」
「……」
ダレもフォローする気はないようで。
シクシク、シクシク……
隅っこで泣き出しちゃった。
「はいはーい、自爆したバカは放っておいて、次は郡山」
「コホンっ。では皆さん、この写真を御覧ください」
ホワイトボードに写真が一枚貼られた。
（あ……深見）
今は亡き友人の顔だ。
「ボク等がまず検討すべきは、この深見氏と浜松さんの容姿が、どうしていっしょなのかという点です」
「まあ、興味はあるなァ。うちらの人相や格好は、ネット情報からピックアップしたもンやし」
「その通り。Ｐ・Ｄ・Ｓのシステム上、実在する個人、あるいは死

亡した個人の身体的情報は使用禁止になっていますので」
「どうしてだ？」
弥富が首を傾げる。
「中毒性を高める要因となるからです」
「あ、なるほど……」
確かに。もし、死んだ恋人や夫・妻など、全く同じ姿形をしたリアルなアバターを構築できれば、より深く会話が楽しめるだろう。が、その行為は現実と仮想空間の境界をあやふやにし、人はネットの海から帰還できなくなってしまう。
「何だかのエラーが生じたのか……あるいは特殊な仕様が働いているのか。やはり、ここは本人に聞くのが一番ですね」
「おい、浜松」
未だにシクシクやっている彼女を弥富が呼ぶ。
「絵心が無いんじゃないやい！　前衛的過ぎてダレも理解できないだけなんだもん！」
「いや、その件はどうでもいいから。前衛的って言葉で片付くんなら、早朝の駅の隅にブチ撒かれた物体も前衛的ってコトになっちゃうから」
浜松の絵はゲロと同一視されました。
「まあまあ、弥富さん。おそらく、浜松さんも混乱しているんでしょう」
と、郡山が場を収めようとしている背後で、浜松は自分の頬を引っ張って遊んでるし。
「とにかくだ……どうして同じ人相なんだ？」
弥富がビシッと指差す。
「厳密には同じじゃない！　あたしの方が若干カワイイ！」
「左様でございますか～～、この口はあるだけ無駄ってコトですか～～」
グニィ……
今度は弥富がほっぺたを引っ張る。強張った笑顔で力をこめて引

っ張る。
「い、いはァい！　いふかはッ、ひゃ、ひゃへへッ！」
女教師に対する軽い拷問タイム。
「で……？」
指示棒を奪い取って浜松の脳天をポコポコ叩く。
「まあ、一種の『陰謀』よ」
「『陰謀』だぁ？　一体、ダレの？」
「それは言えない。今の段階では……」
「焦らすなよォ、俺って人に待たされるの嫌いだからさァ」
今度は先っぽで頬をグリグリ。
「あ、まあ、その……こちらにも事情があって」
「知らねえよ。話を意味無く大きくしようとすんなよ。妄想はネットの中だけで間に合ってるから、十分だから」
何故か説教みたいになってきた。
「と、とりあえず、落ち着きましょう。荒んだ状態では正しいコミュニケーションはとれませんから」
郡山になだめられ、プチ拷問終了。なんだか弥富が変な方向に覚醒しかけてる。
「疑うワケやないけど、浜やん……もしかして、勢いだけでハナシ進めようとしてへン？」
出雲が目を細める。
「違うもんッ！　ちゃんと頭の中整理してあるもんッ！」
「ホンマか？」
「……」
「ホンマのこと言うてよ……ホンマのこと言うてよ。大事なことやから二回言うたで」
「ひッ、ひぐぅぅぅ……！」
また泣き出しちゃったし。
「いいかげんにしろよ。話が全く進まねえよ」
空気はすっかりグダグダ。

「おのれッ、更紗！　よくもあたしの泣き顔を衆目にさらしたな！　恥ずかしくて耳の先が熱いじゃん！」
「俺のせいかよ」
「こうなったら、更紗の趣味・嗜好をみんなの前でバラして大恥かかせてやるッ！」
カキカキ、カキカキ……
ホワイトボードに大きく赤字で書いてみる。

?コスプレ　?フィギュア　?アニメのダウンロードサイト　?人妻　?盗聴

「……」
一同、沈黙。
シクシク、シクシク……
今度は弥富が隅っこで泣き出す。
「ま、まあ……?〜?まではオタクの常識ですが、?と?に関して言いますと……性癖は色々あるとしか……（汗）」
郡山が力一杯のフォローを入れようとするが、今の弥富には何も届きそうにない。
「性癖ならしゃあないでぇ。うちかて、他人の前で色んなトコ露出すンの好きやし★」
「オメーといっしょにすんな。警視庁２４時にでも出てろ」
ツッコミのためすぐに復活。
「結局のところ、儂等はネットにつながって初めて情報を得る。ネット上に流れぬ事象に関しては、所詮、推測しかできんのだよ」
土佐のジジイがポツリと呟く。
「推測だあ？　答えは分かりきっているだろ。深見の身体情報が盗用され、浜松というアバターに転用された……他に考えようがあるか！？」
弥富の返答には何故か少しイラつきがこもっていた。

「すまんが、御主人。それもまた推測じゃ。更に言わせてもらうと……そもそも、『深見素赤』という人間は本当におったのか？」
「な、何を言って……！？」
弥富が狼狽する。
「弥富さん。ボク達はもちろん、深見さんを知りません。顔を直接見たワケでもないし、言葉も交わしていない。しかし、話を聞いた限り、アナタもボク達と同じ条件なんです」
「同じじゃない！　俺は葬式に出席し、遺影の顔もしっかりと目にした！　言葉は……確かにチャットの中だけだが、お互い腹を割って会話できていた！」
弥富が激昂する。たった一人の友人の存在すら否定されたら、自分には思い出すら残らなくなる。
「酷いコトを言うようですが、弥富さんが目にしたのは、あくまで遺影だけ。チャットは言う間でもなく、相手の正しい特定など不可能です。つまり、深見素赤について知らないボク達から見れば、弥富さんの発言には大した根拠はないのです」
「うッ……」
部屋の空気がたちまち重くなった。
「では、別の視点から考えてみましょう。浜松さんが言っていた『防火壁』の件を覚えていますか？」
「えっ、あ、ああ……」
「電薬管理局は数年前、動物の脳髄を使った生体ＰＣを開発しました。もちろん、メディアには一切公表されていません。彼等は生体ＰＣを管理・制御するための防火壁開発に時間をかけ、あらゆるソフトメーカーと提携し、プロジェクトを進めました」
「いや、待ってくれ。いくらなんでも都合が良すぎる流れだ。深見は大手のソフトメーカーに勤めていたらしいが……」
「もし、深見素赤が勤務していたとされるメーカーの存在と、電薬管理局との関連性が突き止められれば、友人が実在したという事実も、おのずと確立されるじゃろう」

土佐が貫録のある目で弥富を直視する。
「なるほど……じゃあ、どうする？　手始めにネットで検索してみるか？」
「そうですね。では、出雲さん。頼みます」
「うん、ええよ」
言われて出雲がデスクトップの前に立つ。そして……

――――――ペチャペチャ　――――――ヌラヌラ

「お、おい……何をされているのかな？」
出雲がデスクトップのＨＤに舌を這わせだした。
「御覧の通り、検索や☆」
「いやいやいや、青少年に対する挑発行為になってるからッ！　逮捕の瞬間１００連発だからッ！」
「よし、分かったで！」
あっという間に検索完了。
「さっちんは『人妻メガネっ娘★』っちゅうサイトに頻繁にアクセスしとるで！」
「何の検索しとんじゃあッ！！　頼むからプライヴェートは大切にしてッ！！」
弥富がまた泣きそうになってる。
「う～～む、やはりコレは……」
浜松がゴミ箱の中身をしげしげと覗きこんでいる。
「こらッ！　証拠物件はここにそろっているッ！　ゴミ箱を妊娠させる気かいッ！？」
「だから、やめてェェェ！！　お母さんみたいな瞳で見ないでェェェ！！」
「で、ついでに検索したンやけど、『享輪コーポレーション』っていうのがヒットしたで」
「何か分かりましたか？」

一同が注目する。
「深見素赤っちゅう社員が配属されとった痕跡はあったけど、データが一部暗号化されとるなあ」
「……どうもきな臭くなってきましたね」
郡山がグッとネクタイを締め直す。
「全員、ストップ！」
著しく顔色の悪くなった弥富が、空中に両手を伸ばして声を上げた。
「どうかした、更紗？　そんなポーズをとっても温暖化は止まらないよ」
浜松が訝しがる。
「話が大き過ぎる……俺に考える時間をくれ」
最早、一個人が手軽に解決できるような一件ではなくなった。明らかに、弥富の手に余る空気を発し出している。彼はインカムをそっと外し、ベッドに倒れた。
（明日考えよう……そうしよう……）
これといって何も解決できぬまま、彼の意識は溶けていった。

初体験に対処しよう（前書き）

俺がキモイのか？　キモイから俺なのか？

初体験に対処しよう

ずっと昔、物心がついたばかりの弥富は、夜店で買ってきた金魚をニヤニヤしながら見つめていた。透明の袋の中で小刻みに泳ぐ彼等を見ていると、言葉では表現できない楽しさがこみ上げてきた。急いで家に帰り、大して考えもせず、水を張った洗面器に金魚を放った。彼等は狂ったように泳ぎだし、とっても嬉しそうだった。

翌日――

金魚は全滅していた。いきなり一夏の人生を終えていた。子供だった弥富の心に小さな虚脱感が生まれ、ただ一言……

「死んだ」

と、小さな声を漏らした。それは、ペットを失ったという感覚ではなく、“死”という事実を確認し終えた事務的なリアクションだった。彼は死因が解らないまま毎年夏になると、必ず金魚を見殺しにしていった。学習せず、手に入れた時のゾクゾク感にただ身を委ねるだけで……。そして、現在――

「絶対俺の番だ……絶対俺の番だ……！」

弥富はベッドの中でブツブツ呟いていた。朝――外は雨。正午をまわっていたが、体がだるくて動きたくない。見殺しにしていった金魚達の悪夢に一晩中うなされた。

（関わりたくない……捕まりたくない……死にたく……ない）

憂鬱過ぎる……はッ、まさか！　これこそがＰ・Ｄ・Ｓの中毒症状なのか！？　いや、そんな……まさかな。

「よしッ、今できる事をしよう！」

一大決心というワケではないが、一人でも出来る事を思いついた。彼は四つの水槽にエサを放り込み、デスクトップの前に座る。『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』には幾つかのバージョンがあるが、大元となった本サイトの管理者は尽く逮捕され、ネットから消えている。しかし、派

生サイトは後を絶たず、ダウンロードされたバックアップは、いつでも泡のように湧いて出る。そして、電薬管理局によって取り締まられてきた。

（深見、君は関係ないよな……？）

弥富は真剣な面持ちでポータブルＨＤのアーカイブを開く。そこには、やはり……オリジナルＰ・Ｄ・Ｓが。

「やべぇ……本気にしちまってるよ、俺」

浜松が口にした、『陰謀』などという陳腐な二文字に影響された。いいか、冷静になるんだ、俺ッ！　ＦＢＩは宇宙人を追いかけたりしないし、ＣＩＡは９６時間かけて犯人を追い詰めたりしない！　フィクションとノンフィクションの境目をしっかりと見据えろ！　そうすれば、杞憂は消える。深見は偽Ｐ・Ｄ・Ｓとは何の関わりあいも無いハズだ。そんな悪辣な女性であるワケが……まあ、浜松と何故か同じ顔なんだけど。

――――ピンポ～～ン♪

チャイムが鳴った。友達もオンナもいない一人暮らしの野郎を訪ねてくる連中は、だいたい決まっている。テレビを持ってなくてもやって来るＮ〇Ｋの集金とか、神様の声が聞こえちゃう残念な輩くらいだ。

ガチャ……

「あ、どうも……こんにちは」

ドアの向こうには知らないオッサンが立っていた。スーツ姿で痩せ型の、ちょっぴり顔色がよろしくないオッサンだ。

「弥富更紗さん……ですよね？」

オッサンは申し訳なさそうに微笑んで、ペコリとおじぎする。

「あ、はい……どちら様ですか？」

「わたし、素赤の父です」

思い出した。葬式の時、遺影の前で泣き崩れていた男性だ。しかし、どうして今、目の前に？

「実は……娘の遺品を整理していまして、このようなモノを見つけたんです」
そう言って彼は一枚の紙キレを取り出し、弥富の前で広げた。
「あ……」
思わず声が漏れる。ソレは深見が弥富あてに郵送したダイレクトメールのコピーだった。
「パソコンに残っていたアドレスから、ここの住所を知りました。それと、この手紙によると、弥富さんに何か大切な物を渡したみたいなんですが……」
「え、あ……はい」
マズイ。どうやらポータブルＨＤの事は知らないようだが、このまま素直に返却して中身を確認されたら、通報される可能性も。今やネット住民でなくとも、Ｐ・Ｄ・Ｓの犯罪性は周知の事実。
「よろしければ、見せてもらえませんか？」
「え、ええ……どうぞ、あがってください」
そうじゃないッ！　素直にお客様ご案内しちゃダメだよッ！
「おッ、コレは……？」
四つの水槽に占拠された狭い部屋を見て、深見・父は驚きの声を漏らし、立ち止まる。
「あの、コレのことです……」
そう言って弥富が差し出したのは一枚のＤＶＤ－Ｒ。彼は条件反射的に嘘をついた。
「コレですか……わたしはパソコンはあまり詳しくないのですが、中身は一体？」
「い、一応見ましたけど、暗号化されていて……検討もつきませんでした」
こうなれば、嘘をつき通すしかない。
「そうですか……あの、すみませんが……なにぶん娘の遺品ですので、返してもらってもいいでしょうか？」
そら来た！

「分かりました……ちょっと待ってください」
ＤＶＤ－Ｒの中身はネットで拾った普通のＩＳＯイメージだ。いくらＰＣに疎いオッサンでも、中身を見られたらバレる。
（とりあえず、ソレっぽいモノを入れとけば……）
インストールしてあった海賊版ＯＳを、空のＤＶＤ－Ｒに記録し始める。
「４、５分で終わりますから」
弥富は懸命の作り笑いでこの場をしのぐ。
「そうですか……御手数をおかけします」
深見・父は今にも泣きそうな面持ちで頭を下げた。何だか……やり切れない。娘の遺品と信じこませ、俺はこのまま適当にあしらっていいものか？　我が身の安全と引き換えに、嘘をつき通してもいいのか？
「弥富さんは、その……娘とは親しかったんですか？」
「いえ、そういうワケでは。その……チャットでならよく話をしてました」
「そうでしたか。娘は、その……ひどく人見知りで、あまり外に出て遊んだりしない内気な子だったんです。そのせいか、父親のくせに知らない事が多くて……」
「そ、そうですか……」
やめてくれ、もう聞かせないでくれ！　自分の行為にどんどん罪悪感が募ってしまう！
「ところで、この大きな魚達はペットですか？」
「え、ええ……近所に専門店がありまして」
「そうですか。娘も飼っていたんですよ……主人を亡くした今では、わたしが面倒をみているんです」
（え？　禁魚をか？　いや、まさかな……）
禁魚が違法なペットであることも、また周知の事実。普通の家庭で当然のように飼うワケはない。
「あの～～、一つ聞いてもいいですか？」

弥富は申し訳なさそうな表情で深見・父に向き直る。
「はい、何でしょう？」
「素赤さんの……その、死因とかって分かってるんですか？」
死して発生しはじめた、彼女に関係する数々の謎……その一つでもまずは解決したい。
「実は、医者からは心臓発作によるものとしか……ハッキリとした死因は未だに不明なんです。妻が見つけた時にはパソコンの前で倒れていたらしいんですが、警察はまともな現場検証もしないんです」
や、やべえ……浜松がほざいていた『陰謀』なんてのが、ここにきて現実味を帯び始めた。
「あの……もし、素赤さんの死因がハッキリ解ったら、教えてもらってもいいですか？」
「え、あ……はい。しかし、どうして？」
「彼女の仇を討ちたいんです」
「――――――ッ、え？」
深見・父は目が点だ。
「つ、つまり……死因が不明ということは、何か疑わしい点があるんじゃないかと」
「何か御存じなんですか！？」
「い、いえ……そういうワケじゃないんですが。やっぱり、死んだ親友のために何かできればと」
言った。こればかりは決して嘘ではなかったから、毅然とした態度で言ってやった。
「ありがとう……本当にありがとう……！」
不意に深見・父はうつむき、己の手で両目をグッと押さえた。
「えっ？」
「い、いや……すみません。娘のことを考えてくれる人がいて、とても……嬉しくて……」
やめてくれ。これ以上の罪悪感は背負えない。
ガコッ……

データを記録し終えたＤＶＤ－ＲがＨＤから取り出される。
「じゃあ、コレを」
「はい、ありがとうございます……本当にありがとう！」
感涙にむせぶ深見・父は弥富の手を取り、心からの感謝の意を述べる。
（ごめんなさい……本当に、ゴメンナサイ！）
コップ一杯に溜まった罪悪感が、表面張力の限界を越えそうになって、弥富はひたすら謝るしかなかった。深見・父の顔を直視できない。頼むから早く帰って――
――――カコンッ
床の上に何かが落ちて乾いた金属音が聞こえた。
「――――――ッ、うわッ！？」
思わず向けた視線の先には、おびただしい量の白煙を吹き出す金属の筒が。突如起こった異常事態に深見・父へと目をやる。
――――――――――――――――　ガスマスク？　――――――――
――――――――――
異変。異変。異変。
「かはッ――――――！！」
とてつもない勢いで体中の神経が虚脱し、口から魂がこぼれ落ちそうな気分の悪さに苛まれ、弥富はその場に崩れ落ちた。
ゴトッ……
ガスマスクを装着した深見・父は、デスクの引き出しから隠してあったポータブルＨＤをつかみ出した。
「あ……あ……うっ……！」
何が起きたか全く把握できぬまま、弥富はただ微かな呻き声をあげるだけ。意識はハッキリしている……目も見えている。が、まともに声が出せず、指一本も動かせない。そんな状態の弥富の傍らで、深見・父はスーツの内ポケットから通信機を取り出す。

「回収した。今から確認する」
＜了解だ＞
ダレかと連絡をとっている。彼はポータブルＨＤをデスクトップにつなぎ、アーカイブを開く。
（マジでどうなってんだよ……！？　シャレにならねえぞ……！！）
現状の把握どころではない。自分の人生において、全く縁のなかった暴挙に巻き込まれている。
「……本物のようだ。処分するか？」
＜いや、そのまま持ち帰れ。それと、禁魚は何匹だ？＞
「大型が四匹」
＜なるべく情報が欲しい。Ｐ・Ｄ・Ｓを使って禁魚達から聞き出せ＞
「飼い主の方はどうする？」
＜ガスの効果は３０分程ある。撤退した後、警察に通報しておけ。禁制ペットが四匹も発見されれば確実に現行犯だ＞
「了解した」
深見・父はガスマスクを外して一瞬だけ弥富に一瞥をくれると、蔑むように口元を歪めた。

ゲームは一日一時間にしよう（前書き）

青春を　全力逆走　２４時

ゲームは一日一時間にしよう

「ええッ！？　ボクは無理ですよ、このシリーズ……怖過ぎですよッ！！」
怯える郡山。
「倒れたゾンビはナイフで斬るべしッ！　斬るべしッ！」
コントローラーを汗で濡らす浜松。
「何で画面切り替えた途端にモンスターの死体が消えるン？」
ポテチ食いながら観戦する出雲。
「スタッフが美味しくいただいとるんじゃよ」
つまらなさそうに呟く土佐。
「うわあああああああッ！！　イヌ、イヌ、イヌ！！　窓ガラス破って……やっぱりですよ～～！　カメラアングルが怪しいんですもん！！」
「行け行けクリス！　ゴリラパワーを解放しろ！」
「なあ、Tウィルスの『T』って何や？」
“とんでもない”のT」
明らかに違うだろ。どんだけカプ○ン適当なんだよ。
……ってカンジで四匹はゲームしてた。インカム・βを装着し、突如として背後に現れた深見・父のことなど全く気づく様子もなく。
「ちょっといいかな、君達？」
「ぎゃあああああッ！　出たッ、出たッ、大きいの出ましたッ！」
「ええいッ！　火炎弾でこんがり焼いてくれるッ！」
「なあ、Gウィルスの『G』って何や？」
“ゴキブリ”のG」
撃っちゃえよ、ウェスカー。
……ってカンジで深見・父は完全に無視られている。
「君達、エアレーション止めるよ」
「失礼しました、お客様」

「うおッ、ガスマスク持ってる。まさかのハンク登場ッ！？」
「あ、リセットボタン押してもうた」
「儂、もう眠いのう～～」
四匹はそろって回れ、右。
「さて、君達の飼い主は今回の件にどれだけ関わっている？」
深見・父は腕組みをし、鋭い視線を向けてくる。
「いきなり尋問か？　一体、ドコのダレや？」
「わたしはただの使いっパシリだ。オリジナルＰ・Ｄ・Ｓが通常回線で使われたため、奪取するよう依頼を受けた」
妙な空気が流れ出した。
「浜松さん、どうやら電薬管理局にバレてるみたいですね」
「おのれッ！　こうなれば、証拠隠滅のため核ミサイルを投下せよッ！」
「ラクーン・シティとちゃうで。ここ、日本」
怖いね、ゲームの影響力って。
「弥富更紗は禁制動物所持の現行犯で逮捕される。が、君達の態度次第では、彼を見逃すという選択肢もある」
「つまり、ボク等や弥富さんがどのような情報を得たのか、全て話せと？」
「ああ、そうだ」
「ん～～……お断りですね」
郡山が微妙に苦笑いして答える。他の三匹も、あからさまにイヤそうな顔してるし。
（……？）
この様子に深見・父は眉をひそめ、通信機を手に取った。
「禁魚かシステムにエラーがあるようだ。こちらの要求に正しく応えない」
＜システムに問題はない。そもそも、禁魚にＰ・Ｄ・Ｓをつないで使用する事自体に、ほとんど前例が無いのだ。何が起きるかこちらも分らん＞

「だとしても、これ程までに擬人化レベルが高いものなのか？　とても魚類とは思えんくらい饒舌だ」
＜とにかく、情報の回収を急げ。もし、無理なら破壊しても構わん＞
「了解した」
深見・父は呆れたように軽く溜息をつくと、禁魚達の方に向き直る。すると――
ガシャ――
「――――ッ！？」
彼は硬直した。乾いた金属音がして、太い銃口が自分に向けられていたから。
「かゆい・うま☆」
浜松の口元が歪んだ瞬間――
ドオオオオオオォォォォォォォォ――――――――――――――――ッッッッン！！
空気が重々しく震え、深見・父の意識が吹き飛んだ。
ドサッ……
まるで、自分の脚が消えて無くなったみたいに崩れ落ち、彼は動かなくなった。
「……？」
弥富の前で深見・父は水槽に顔を突っ込み、ブクブクしている。インカムを装着していない彼には何が起きたのか全く分からない。
――――――――――　動かなくなった？　――――――――――
人が死んだ……すぐ目の前で、人が死んだ。動画サイトでしか見たことのない現実が、衝撃と共に訪れてしまった。

（……こんなのねぇよ！）
まさに悪夢だった。身動きがとれないまま死体を目の前にして、事の成り行きを見ていないといけない……どうする？　どうすればいい？　やがて、時間は経過し……

「いや～～、どうしましょうか、コレ？」
「見たかッ、あたしのコルトパイソンの威力ッ！」
「さっさと焼かんと、クリムゾンヘッドになるで」
「ＺＺＺＺＺＺ……（眠）」
インカムをつけた弥富の前で、まだゲームに影響されている禁魚達。
「やべぇよ、やべぇよ、やべぇよ、やべぇよ、やべぇよ……！」
頭に両手をあてて、うつむき加減でブツブツ呟く。変な臭いがしてそうな汗がダラダラ流れ出る。弥富はマズイ世界の扉を開こうとしていた。
「死んでる。コレ、死んでる。あはははははは」
いつの間にか現れたポチが、無表情で死体をゲシゲシと蹴ってるし。
「なあ……オマエ等が殺したのか？　つーか、このオッサンは何だよ！？　ガスマスク持参して、人の部屋で白いヤツ撒きやがったぞ！　もう分かんねぇコトだらけで鼻血噴いちまうぞ！！」
――――ドゴッ！
「おふッ！？」
弥富の腹に浜松の膝蹴りがめり込む。
「落ち着け、バカモノがッ！　そんな根性では、この洋館から脱出できんぞッ！」
「うるせーよ。ハンターに首でも狩られてろ」
「とりあえず、このまま遺骸を放置しておくのは衛生的によくありませんね。夜中にこっそり運び出して、公園で焼却処分しましょう」
郡山が優しい面でとんでもない事をぬかしやがる。

「ま、まずは警察に……って、いやいや、バカか俺！　ええっと～～……おい、どうにかできねえのかよ！？　オメー等が殺したんだろうが！」
「まあ、確かに。浜やんが撃ち殺したなァ」
「う、撃ち殺したァァァ！？」
「おうよッ！　眉間に一発くれてやったよッ！」
「そんな……だって、バーチャルだろ！？　どうして現実に人が死ぬんだよ！？」
「オリジナルP・D・Sと禁魚がシンクロして発生する、副作用の一種じゃよ。大脳が強力な暗示を受けて、肉体にありえない命令を下す」
　土佐のジジイが部屋の隅でポチを食いながら答えた。
「ど、どういう事……だ？」
「知っての通り、儂等の姿は生身ではない。言わば『幻覚』じゃ。見る者の脳幹に強烈なストレスを与え、器質性疾患を引き起こす」
「要するに、この男性は突発的な脳血管障害により死んだ……というコトです」
　郡山はそう言って深見・父の死体の頭をつかみ、乱暴に水槽から引っ張り出した。
「ちょ、待て……と、いうことは……俺にも影響が出るのか！？」
「うんにゃ。さっちんの場合は全くもって安全や☆」
「……何でだ？」
「引きこもりで、貧乏で、社会的地位が無くて、大した技術も無い。おまけに友達いなくて、コミュニケーションとるの下手だからッ！」
　浜松がビシッと弥富を指差した。
「よ～～し、ちょっとこっちに来てくれるかな～～」
　ズリズリ、ズリズリ……
　浜松が物陰に引きずられていく。
　――ゴシャ！　――グシャ！　――ベキッ！
「さて、話を続けようかな」

弥富だけ戻って来た。拳に赤黒い液体を付着させて。
「さっちん……何か一犯罪おかしてへンか？」
「この部屋は治外法権だ」
物陰から弱々しく腕が伸びてきてるし。血文字でメッセージ書こうとしてるし。
「ま、まあ……浜松さんが言いたかったのは、人畜無害な使用者には悪影響をもたらさないという事です」
「なるほど。で、一番の問題である、この死体はどうすりゃいいんだ？」
男の正体は気にかかるが、中年オヤジの亡骸と生活する趣味は無い。追究は後にして、処理方法を検討しなくては。
「せやなァ……外に持ち出すのは危険やから、浴槽でバラバラにしてゴミ袋に詰めたらどうや？」
「却下だ」
「化学薬品で溶かしてみてはどうじゃろう？」
「却下だ」
「醤油とワサビを買ってくるのがベストだぞ～～」
「食うのッ！？」
「う～～ん、仕方ありません。出来る事なら関わり合いたくありませんでしたが、“アレ”に頼みましょう」
郡山はそう言って土佐のジジイに目配せする。
「ふぅ、気乗りせんがのう……」
ジジイが辺りをキョロキョロし始め、姿勢を低くして家具の下を覗き込みだした。
「おい、屋内でホームレスやるんじゃねえよ」
「違うわい！　人探しじゃ！」
「ダレもいねえよ。探すんならテメーの脳内を見ろよ。妖精・Ａがきっと見つかるぞ」
「むッ、コレは！？」
ベッドの下から大量のＤＶＤを発見。

「うわ〜〜……男ってアホやなあ。一人暮らしなンやから、隠す必要ないやろ」
出雲検疫官によって没収。
「違うのッ！　男って生き物は条件反射とパターンで生きてるのッ！　つまり、生きる知恵の反復練習なのッ！」
惨めに弁解する男が一匹。
「おッ、そこにおったか！」
土佐がダレかを発見した。床下に続くパネルを全開にして。
ガタガタガタッ！
騒がしい。ジジイが床下でダレかともめ始め、口論が聞こえてくる。
「こらッ、さっさと出てこんかい！」
「いやですぅ〜〜、もう真夏の天気で気温が高いんですぅ！」
「やかましい！　四の五のぬかすな！」
「大声出さないでください〜〜、子供達が怯えますぅ……」
「知ったことか、このクソ女が！！」
オマワリさん、うちの床下にダレかいます。
「おい……一体、何がいるんだよ？」
「ボク達が最も忌み嫌うモノが潜んでいるんです……ニートにとっての両親、ロリコンにとっての児ポ法、マナにとってのカナなんです！」
いや、三つ目はちょっと違うだろ。
「人間で言うところのインフルエンザみたいなモンや。処置が遅れると死に至る病気の一種や。『白点病』っちゅうヤツやねん」
「おいおいおい……つまり、相当な危険人物が床下に潜伏してるワケか？」
「せやねん。体中がメチャクチャ痒くなンねん！　ジワジワと体液や血液を吸いよンねん！」
禁魚達にとってはカナリの天敵らしい。
「あのさァ……ポチもそうだが、何で禁魚以外の連中まで擬人化さ

れてんだ？　案外、適当なシステムなのか？」
弥富には相変わらずＰ・Ｄ・Ｓへの疑念が尽きない。それなのに、床下から更なる不確定要素がこんにちはしようとしている。そんな窮地の弥富をあざ笑うかのように、物陰から伸びた浜松の手が……

――――――――　来週も・また・観て・ください・ねえ……
――――――――

ダイイングメッセージを残した……ふぅがぁふぐッ。

とりあえず、見なかった事にしよう（前書き）

露出狂じゃないよ。無修正なだけだよ

とりあえず、見なかった事にしよう

「よし、二人で一気に引っ張り出す！　踏んばるのじゃ！」
「わ、分かりました……」
床下よりニュッと現れた手を、土佐と郡山の二人がかりでガッチリつかみ――
「せいやあああああああああッッッ！！」
ズルリ……
捕獲完了。
「あの……どちら様？」
いつも通りのリアクション。またもや妙な人物が増えた。
「御主人よ、この女を使えば上手く死骸を処理できるぞ」
「……おい、ジジイ。ちょっと、こっち来てくれるか」
そう言って弥富と土佐は物陰へ。未だに倒れてる浜松を軽く踏みつけながら。
「いくらなんでもアレはマズイって……いや、マジで」
「何がじゃ？」
「その……アレだよ、キャラの作り過ぎっていうか……ほとんどエロゲーのキャラだぞ」
「みなぎるのは構わんが、気をつけよ。危険な女じゃ。外見に惑わされてはいかん」
土佐の言う外見――フォックスタイプの銀縁メガネをかけ、黒髪の太い三つ編み。年の頃は三十代半ばくらいで、結構な長身。そして、最も目についてしまうのは……
「出おったな、エロ人妻がッ！　その爆乳とデカ尻が不愉快なのよッ！　少しくらい分けろよ、バカヤロー！！」
浜松が甦ってツバを吐く始末だ。
「浜松とメガネキャラかぶってるだろ。空気読めよ。そして、ポチはつるぺったん」

幼児体型が新キャラの脚をポコポコと蹴ったりする。
「や、やめてください～～、痛いですぅ！　子供達が怖がってますぅ！」
彼女の周りを囲むようにして、小さな男の子と女の子が二人ずつ、ビクビクしている。まるでプチ保育園だ。
「オマエのガキ共なんかポチがいじめてやるぞ～～」
と、両手を振り上げてプチ保育園へと突っ込んでいく。
「はいはい、黙りなさ～～い」
ポ～～ンと投げ込まれるゲーム機とヌイグルミ。キャッ♪　キャッ♪　と、群がってくる四人のガキ共……＋ポチ。
「あの～～、ところで何か用ですかぁ？」
肉感美女が困った声で呼びかける。
「アンジェリーナよ、オマエに人間の死骸を処理してもらいたい。できるな？」
土佐が女を睨みつける。それにしても……
（病原体に『アンジェリーナ』って……ドコの女優だよ？）
弥富の視線は何故かさっきから彼女に釘付け。
「ちょいと、こー君。さっちんの様子が何か変やで」
「ええ、確かに。なんだかドキドキしてますね」
「なんとふしだらなッ！　性欲センサーが振り切れてるしッ！」
三匹の野次馬がヒソヒソと。つーか、性欲センサーって何？
「あ、あの～～……アンジェリーナさん？　俺、ここの住人なんスけど、どうして床下に？」
弥富、少々耳が赤い。
「ちょいと、こー君。さっちんたら、敬語使っとるで」
「ええ、確かに。なんだか落ち着きがありませんし」
「目を覚ませ、更紗ッ！　オマエは今、病んだ性癖に惑わされているんだッ！」
情緒不安定は黙ってろ。
「わたくし暖かい場所が苦手でしてぇ、子供達と床下でひっそり涼

んでいたんですぅ」
「さ、左様ですか。ところで、コレなんですが……」
弥富が深見・父の遺体を指差す。業者さんに仕事を頼むような感じで。5千円とか8千円とかで。
「あらまぁ～～、御可哀そうに」
そう言って彼女はメガネを外し、遺体の傍にしゃがみ込む。そして――
――――カプッ☆
噛みついた。遺体の首筋に躊躇なく噛みついた。
「おいッ、ジジイ！」
「何じゃ？」
「どうなってんの！？　何か噛んでるしッ！　吸ってるしッ！」
「ふむ。そのようじゃな」
完全に他人事だ。
「うわ～～～い♪」
更にはアンジェリーナの子供等が駆けて来て、背中や腕や頭へと食いついていく。
「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああああッッッ！！」

※描写に適さない光景のため、しばらくお待ちください※

「落ち着け、更紗ッ！　連中はああやって、生物から養分を吸い取るんだよ……なんとおぞましい！！」
浜松が彼の身体を揺さぶりながら声を上げる。
（そんなバカな……現実には存在しないアバターで遺体を！？）
遺体はみるみる干からびていく。まるで、塩化ビニールの人形から空気が抜けるみたいに、小さくしぼんでいくのだ。
「やっぱ……ヤバイ人なのか？」
弥富が少々引き気味で郡山に問う。

「ええ、もちろん。この時季ですから大人しいですが、春先や秋口だったら非常に危険でした」
「う～～ん……外見的にはとてもそうは見えんが」
この猟奇現場は別として、弥富にとってはまさにストライクゾーン。マジで恋する5秒前だ。
「男はすぐ外見に騙されるからなァ……ええか！　女なんてのはな、神様から男を騙すための肉体をもらっとンねん！　赤ん坊はマネキンの乳首に食いつき、中学生は日々変化するクラスメイトの体を凝視して、男性ホルモンを分泌させる！　で、アキバ系は二次元からの脱出を諦めるンや！」
「いや、完全にそりゃ偏見だ」
とか言ってる内に、深見・父の遺体は文字通り骨と皮だけになってしまった。
「ふぅ、ごちそうさまでしたぁ♪」
「ごちそ～～さまでした～～☆」
母と子供達が口元をフキフキ。
「では、御主人。後はコイツを燃えるゴミの日に出せば、問題無しじゃ」
さらっと完全犯罪が成立した。コレばっかりはコ〇ン君にも解けまい。
（やっちまった……俺、とうとうやっちまったよ！）
ゴム手袋着用。ゴミ袋用意。空気の抜け切ったダッチワイフみたいなのを、ガサゴソとお片付け。

――――――　１０分後　――――――

「はいはい、皆さんそろったかな？　これより、第二回『人類と魚類の朝まで生討論会』を始めるよ～～」
本日も世界は平和。だけど、このアパートの一室だけは悪ノリ全開中。弥富がホワイトボードの前に立つ。現在、１ＬＤＫはキャラの増員により、芋を洗い過ぎ状態。現実ではないのに、みるみる湿

度が上昇しているように感じてしまう。これもＰ・Ｄ・Ｓの驚異と言える。
「さっちん、一つ質問やけど」
「はい、質問は体中の汗を拭いて、下着の汗染みを隠してからにしろ」
出雲、却下された。
「更紗先生、質問ッ！」
「何だ？　落第生の浜松」
「反省の色って何色ですか？」
「オマエの脳ミソと同じ色だ。だから、反省して廊下に立ってろ」
浜松、バルコニーで直立不動。
「いいか！　今、最も俺が知りたいのは……コレが一体、ダレなのかだ！」
そう言って弥富はゴミ袋の中身を指差す。
「深見素赤さんの父親ですね」
郡山が事も無げに言う。
「絶対違うだろッ！　言動が完全にスパイ臭かったぞッ！」
「弥富さん……スパイとか諜報員とか、悪の秘密結社なんていうのはフィクションです。本気にしてはいけない」
「そうじゃな。が、この男の通信内容から察するに、電薬管理局に雇われた可能性が高い。身元云々はともかく、この男からの連絡が途絶えたとなると、御主人は確実に怪しまれ、先方はより強引な行動に出るだろうて」
土佐がとっても不吉な事を言う。つまり、２５年の平凡過ぎる人生に、逮捕フラグが立ちまくったワケだ。
「けど、おかしいなァ……うち等は超高性能な生体ファイアー・ウォールやで。いつの間に突破されたン？」
「ええ、そこなんです。突破された痕跡はボクも確認していません。となると、ゴミ袋の中身は深見素赤さんを監視する役目を担っていて、彼女の最近の行動からここを突き止めたのでは？」

「監視って……実の父親が娘をか！？」
「弥富さん……実の父とは限りません」
郡山が意味深なことを呟く。
「俺は葬式で姿を見ている！　間違いない！」
「御主人よ、可能性だけで推測するのでは切りがない。ここからは課外実習といこう」
「――――は？」
土佐が何かガサゴソと準備し始めた。丈夫なビニール袋、携帯型エアレーション、ポチ。
「この部屋に引きこもっていても解決せん。情報を足で拾いに行くとしよう」
「よっしゃあああああああああああああああッッッ！！」
反省していた浜松が万歳ポーズで雄叫び。窓ガラスを突き破り、一回転して華麗に着地した。
「……おい」
弥富が今後の展開を予想して、あまりにイヤな顔になっている。俺を一体どうする気なんだ？　外に行くだと？　バカなッ、オマエ等は知らんのだ。外の……現実社会の恐ろしさをッ！　オマワリさんがいつもウロついてて、獣みたいに目を光らせている。この小説の作者なんか、大学生時代に逃走中の殺人犯と間違われて、道端でパトカー2台に前後から挟まれ、不審尋問された事があるんだぞ！！（実話）
「ボサッとするな、更紗ッ！　４０秒で仕度しなッ！」
無理だバカヤロー。空を見上げてもラ〇ュタは飛んでねえよ。それはそうと、浜松は何がそんなに嬉しいのか、やたらとはしゃぎながらコスチュームチェンジ中。
「ま、要するに、袋に水をタップリ入れて、ボク等といっしょに調査に出かけるワケです」
郡山に悪意は全く無い。ただ、禁魚全員に言えるのは――
（コイツ等、絶対ノープランだろ……）

多分、俺は試されているんだ。神様の与えた試練なんだ。クリスマス当日のコンビニが、男性アルバイトばっかりになるのと同じ仕組みなんだ。そうだ、そう考えよう……。
「では、各自速やかに外出の準備をッ」
土佐の号令に従い、とりあえず悪意は無い連中が散る。部屋にはポチだけが残り、膝を折ってポツンと座っていた。
「……何だよ？」
「外は嫌いか？」
「ああ。遠出すると不安になる」
「ポチは水槽から出たことない。だから、連れてけ」
「うらやましいな……好奇心一杯でストレスも感じない。こんなに人間臭いのに」
「オマエは人間のくせに、人間らしくないな。どうしてそうなった？」
「無表情で聞くなよ。事情聴取受けてるみたいだろうが」
「ポチ達に人類のような感情は無い。だから、無表情」
「じゃあ……禁魚達のバカみたいな言動は何だ？」
「P・D・Sに不可能は無い。感情は常に演出される」
クスッ……
一瞬だけ、ポチの口元が歪んだように見えた。俺はインカムを外し、またもや一人ぼっちになった部屋で、混沌とした胸中を制御しようと苦しんでいた。

振り返ればヤツが……増えてるよう（前書き）

ペコちゃんが常に舌を出してるのは、体温調節のため！！

振り返ればヤツが……増えてるよう

「全員整列ぅぅぅぅぅぅぅぅ〜〜〜〜ッッッ！！」
――ザッ！
「これより点呼をとる！」
――ザッ！
「郡山！」
「は〜〜い！」
「出雲！」
「はいな☆」
「土佐！」
「うむ」
「ポチ！」
「さあ、食えよ」
――ザッ！
「ここに精鋭四名と携帯食がそろった。弥富の言う通り、外にはいかなる危険が待ち受けているか、想像もつかない。よって、諸君等には命をかける程の覚悟をしてもらう……分かったかッ！？」
「質問宜しいでしょうか？　浜松軍曹」
「何だ？　郡山伍長」
「ボク達……何で軍服？」
「あたしの趣味こそが最優先事項だッ！」
「質問ええかなァ？」
「何だ？　出雲兵長」
「うち等……ドコ行くンや？」
「地平線の彼方だッ！」
「ちょっと、いいかのう？」
「何だ？　土佐二等兵」
「お主の真後ろで、ダレかが拳を振り上げとるぞ」

「ぬッ、殺気ッ！！」
ぐしゃ……
浜松軍曹の顔面にめり込む一撃。
「静かにしろよ、バカ共」
弥富がものすごく厳つい面で登場。足下に鼻血を吹いた浜松軍曹が転がる。
「質問するぞ、弥富少佐」
「何だ？　ポチ衛生兵」
「ドコで何をすればいい？」
「街に出る。そして……『享輪コーポレーション』に行く」
弥富は覚悟した。ここで引きこもっていても、確かに進展は無い。人が死んでいる……しかも、自分の部屋でだ。警察に届けるワケにもいかない現状、彼は初めて感じる衝動にかられていたのだ。
「弥富少佐、具体的に享輪コーポレーションで何をするんですか？」
「深見素赤について調べる。彼女がオリジナルP・D・Sとどう関係しているのか……どうしてそんなモノを俺に託したのか……知っておくべき事は山程ある」
「おおッ、さっちん少佐が珍しくシビアやで！」
「で、会社のある『アキバ』という街へ行くのか？」
「ああ。そうだ」
「それって……隣町じゃぞ」
「だから何ッ！？　電車で一駅の距離だとマズイのッ！？　それ以上の遠出なんて怖くてできるかッ！！　俺は新宿駅で迷子になって、ガチで泣きそうになった事がある筋金入りなんだぞッ！！」
本日もヘタレっぷりを暴露中だ。

――――――――――　で、一同はアキバの街へ　――――――――――

※この街の特徴を下記にまとめてみました。
←

〖カメラを首からさげた白人のカップルが2、3組は必ずいる〗
〖ケバブの店が妙に多い〗
〖野郎率が高過ぎて、屋内は湿度が急上昇する〗
〖リュックサックは体の一部〗
〖美女が商売して、ブサイクが金を出す〗

――そんなカンジ。そんな街に着くまでの電車の中で、弥富はなんかもう……憔悴していた。混雑する車両の中で、タップリの水が入ったビニール袋を抱えて立ってるから。しかも、中には四匹の大きな魚類が泳いでるもんで、注目されるコトこの上なし。
（見ないで……俺を見ないで……）
他人の視線がチクチク刺さってイタイ。電車よ、頼むから早く止まってくれ。
キィィィィィィィ――――
止まった。弥富は俯き加減で足早に電車を降り、階段を駆け下りる。そして、一目散に駅のトイレへと駆け込んだ。
バタンッ！
勢いよく閉められる個室の扉。便器のフタの上に腰かけ、荒い呼吸を整えようとする弥富。他人様から見れば、圧倒的に不審者だ。
「よし。とりあえず、第一ポイントに到着だな」
浜松軍曹がビシッと起立している。今度は眼帯まで装着して、悪ノリは絶好調だ。
「……おい」
弥富がうんざりした感じで呟く。今、禁魚の入った袋にインカム・αが付けられ、カバンの中のラップトップにはポータブルHDがつながっている。外でもネットにつながるよう、専用のプリペイドカードを使っているのだが……腰かける弥富を中心に、周囲にはいつもの四匹が立ってるワケで。
「自分で言うのもなンやけど……うち等、何をしとンねん？」
確かに。一つの個室に総勢五人が集合。しかも、アーミーなコス

プレで。
「痴れ者がッ！　これより、今後の作戦内容を説明するのだよッ！　諸君、コレを見たまえ！！」
と、浜松軍曹が紙キレを一枚ずつ配る。そこには下記のように書かれていた。

『作戦名・当たって砕けた★』
作戦の手順……1．正面から本部ビルに突入
←
2．深見素赤の勤務していた部署に突入
←
3．それっぽいＨＤを根こそぎブンどる。
←
4．笑顔で無事に脱出

―以上。
「……おい、ハナっから砕けてどうする」
「つーか、浜やん軍曹……完全に勢いだけやン」
「ええ、ただの無謀ですね」
「若いモンは死に急ぐのう」
不平不満の空気が漂う。
「知恵が足りない分は根性でカバーしろッ！　我々は特攻野郎・Ｚチームであるッ！！」
要するに、行き当たりばったりです。
（……よし）
ちょっと勇気が足りなくて、無理矢理絞り出してみたデリケートなヤル気が、この場において役に立たなかった。亡き友人のため？
所詮は自己満足じゃないのか？　……そんな自問を始めそうになったから、弥富はインカム・βを外した。そして――
カチャ……

「よし、しばらく大人しくしてろ」
弥富は軽く何か始末をつけたかのように頷き、禁魚の入った袋をコインロッカーに入れた。つまり、彼の現実逃避タイム。日本有数のオタク街は、いつも癒しを与えてくれるから。
「あ～～☆　アドレナリンが良い具合に分泌される～～☆」
弥富、ヘヴン状態。そこいら中に立っているメイドに声をかけられ、店頭モニターは最新機種を宣伝し、ギャルゲーのＢＧＭが流れている。オタクに生まれてよかったあああああッッッ！！
彼はすっかり街に溶けている。ダレからも干渉されず、ダレにも干渉せず、ひたすら一人で街をねり歩く感覚が好き。この街の空気はいつもと変わらない……ハズだったのだが、何か……妙だ。ほんのごく一部、周囲と明らかに同調できていない箇所が、弥富の背後から接近しつつある。その距離、約５メートル。黒のフォーマルスーツに黒のサングラスを着け、紺のネクタイに革靴。オールバックにした黒髪に少々厳つい面。この威容がオフィス街だったなら大した問題ではなかったが、ここはオタク街。メチャクチャ目立っていて、周囲の視線を独り占めしちゃってる。まあ、コスプレ歓迎の街だから色んな人が集まってくるにしても、やっぱ様子がオカシイ……つーか、何か俺の方をやたらと見ていないか？　サングラスを着けてるから、視線の先がドコに向けられているか断言はできないが……。
（と、とりあえず……しばらく歩こう）
不可解な事件に巻き込まれている身だから、余計な想像力が働いてしまうのだろう。なんか、殺気にも近い空気を感じる。まさか……
弥富がゆっくりと振り向く。すると――
（……増えてる？）
さっきまで確かに一人だけだったのが、いつの間にか三人になっている。全く同じ格好して、同じ面したのが増えている。
（いやいやいや、あり得ねえって……！！）
弥富に悪寒がはしり、自然と歩くスピードがアップする。振り向

いてはいけない。コレは単なる偶然のイタズラだ。彼は自分にそう言い聞かせてみたが、危険に対する反射と好奇心には勝てず、再度、そっと後ろを振り返る。

（ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッッッ！？）

また増えとるッ！　五人になっとるッ！　なんちゃら戦隊になっとるッ！

――――ダダッ！

弥富はダイレクトに身の危険を感じ取り、駆け出した。それに合わせて無言の追跡者達も走り出す。

（追われているッ！　間違いなく狙われているッ！）

もう、泣きそうだ。涙で視界がボヤけだしている。とにかく、止まってはいけない……が、ドコまで行けばいい？　やはり、交番か？　よし、左の横断歩道を渡った先に見える！　緊急事態に対処するにはオマワリさんに限る！　弥富は“他力本願”の四文字が大好きだった。

みんなと秘密を共有するよう（前書き）

赤いきつねと緑のたぬきと……碧いうさぎ？

みんなと秘密を共有するよう

走る、走る、走りまくる。野郎のみで構成された人込みを、慣れたフットワークで駆け抜けていく。弥富が目指すのは、交番。国家権力に今こそ役立ってもらわねば、税金分の働きをしてもわねば……って、俺って一円も納めてないけどね。

――ダダダッ！！

「うおおおおッッッ！？」

マジでか！？　脇道からも一人、店の中からも一人……次々と増えていく。明らかに打ち合わせ済みな感じで同じ連中が集合していく。そして、更にマズイ事に、横断歩道の信号が丁度赤になってしまった。

（突っ切るか――！？）

いや、交番の前には強面のオマワリさんが立っている。不審者への対応以前に、信号無視で厳重注意されかねない。真っ昼間に大衆の前で、そんなイタイ姿をさらすワケにはいかない！

……ってなワケで、彼は交番への突入を諦め、目の前に要塞の如く立ち塞がる大手家電量販店へと駆け込んだ。普段なら脇目も振らず、6階のオタクエリアに駆け上がるところだが、今は十人近くの謎のエージェントに追われている。撒くためには、人込みがあってなるべく入り組んだ場所が必要だ。ここからはまさに……リアル鬼ごっこ！

ところで、コインロッカーの中では――

「さて、どうしたものかのう……」

「いきなりつまずきましたね」

「ヒマやなァ、つまらんなァ」

「おのれッ、更紗め！　帰ってきたら軍法会議にかけて、それはもうイヤラしい拷問で責めてやるからねッ！」

四匹はすっかり気合いも根性も腐っていた。浜松にいたっては、マニアックな拷問用具を準備する始末だ。
「とりあえず、ボク等だけで今後の作戦手順を練りましょう」
「ふむ。だが、その前に……確認しておくべき事がある」
土佐は地面に胡坐をかき、自分の長い白ヒゲを弄りながら視線を浜松に向けた。
「浜松よ、今は御主人の目は無い。腹を割って全て話してもらえんかのう」
「ほう、何が聞きたいのよ？」
浜松は大きな十字架を担ぎ、ポチを磔にする準備中。
「ゴミ袋に片付けた例の男……何者か知っとるんじゃないのか？」
「それを聞いてどうするワケ？　特に意味は無いよ」
「そうかもしれん。しかし、同じ種族としてこれ以上隠し事をされていては、正直、気分が悪いのでな」
土佐は本気だった。彼の背後に立つ郡山と出雲も、同様の雰囲気を滲ませている。
「アノ男はただの消耗品よ。深見素赤を監視するためだけに、偽りの肉親を演じていた」
「それって、つまり……実の父親ではないと？」
「父親だけじゃない。母親も弟も祖父母も、飼い犬ですらホンモノじゃない。全て用意されたものよ」
浜松の口調が唐突に変わり目つきが悪くなる。
「……それが事実だとして、何故、浜松さんはそんな事まで御存じなんですか？」
郡山がもっともな質問をする。
「確かにな。儂等が得られる情報は、ネットに流れる事象に限定されておるしな」
土佐があからさまに訝しがる。
「案外、深見素赤っちゅう女と浜やんが同一人物――とかいうオチやったりなァ」

出雲がニヤニヤしながら呟いた。
「そんなバカな。あり得んな。ポチのプライドと生命力にかけて、あえて言おう……そんなオチはカスであると」
ひょこっと現れて十字架にくくり付けられたポチ。ガソリンがブチ撒けられ、松明を手にした浜松が容赦なく点火。
「いや〜〜、よく燃えるね〜〜」
何だか遠くを見てる。まさかとは思うが――――――――地雷踏んだ？
「……（汗）」
「……（汗）」
「……（汗）」
三匹が笑顔でダラダラと汗を吹き出しつつ、沈黙。一番あってはいけない、短絡的結末が見え隠れしだしたもんで。
「このカスめ。このネタばれめ。この中二病め」
ポチがメラメラと燃え盛りながら文句をたれてる。
「はあぁぁぁ〜〜……もうちょい隠し通せると思ったんだけど。世の中上手くはいかないねえ」
何かを諦めたみたいに浜松が大きく溜息をつく。
「バカな……深見素赤という人物の死亡記録は、戸籍データをハッキングして確認してある。つまり、オマエというアバターを操作している輩は、深見素赤の名を語り、御主人に何かをさせようとしている事になる」
動揺する土佐が反論した。
「うんにゃ。そうじゃないんだなあ……深見素赤は決して一個人が手にしてはいけない、超危険物を入手してしまった。故に、電薬管理局から狙われ、監視がつけられ、生命の危機が迫ったため、その危険物を行使してしまった。そして、彼女は『浜松』になった」
浜松は自分を指差し、苦笑いを浮かべた。そして、こんがりと香ばしく焼けたポチをつまみ上げ、今度は電気椅子に座らせた。
「要するに、深見素赤という実在していた人間が、なんだかの方法

で浜松という禁魚になった……と？」
郡山が当惑した表情で聞く。
「簡単に言ってしまえばね」
ポチの四肢がベルトで拘束され、充電開始。
「まあ、待てよ。ポチとしては省エネを推奨するぞ」
いや、オマエ既に丸焼けだから。
「くだらん……出来の悪い都市伝説でも、もう少し気の利いた嘘をつくぞッ！」
土佐がイラつきのこもった声で言い返す。
「信じてもらわなくても結構。あたしは質問されたから言いたい事を言ったまで。当然、物的証拠は無いし、今、目の前で証明することも出来ない。けど、享輪コーポレーションに無事潜入できれば、アンタ達の望む回答をみせられる……かも」
浜松は意味ありげに微笑むと、放電レバーをガコンッとな。
ビリビリビリビリッッッ！！　バリバリバリバリッッッ！！
「あひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ。うひょひょひょひょひょひょひょ」
ポチの瞳は１００万ボルト。いつも通り無表情だけど、なんだかちょっぴり嬉しそう。
「よかろう……では、御主人の帰りを待つとしよう」
空気が重い。同じ種族だと思っていた相手に向けられた、疑惑の目。そして、彼等が待つ飼い主の方はというと――

ザワザワザワッ……ザワザワザワッ……
周囲の客が引いていく。ものすごい注目の目で見ている。そりゃそうだ……全く同じ格好した十人近くの男共が、厳然とした様子で移動しているから。しかも、その場所はダレもが知る大型家電量販店の一階。彼等は一言も発さず、表情も変えず、エスカレーターに乗る。男共の中央には、ＭＩＢに誘拐された宇宙人みたいに、すっかり萎れてうなだれた弥富の姿が。上の階へ上る度に警備員が声を

かけようとしたが、全員が一斉にサングラスごしに睨みつけるもんで、どうにも手が出せない。やがて、彼等は６階に到着し、階の一番隅にある男性用トイレへと入っていく。

ザワザワザワッ……ザワザワザワッ……

中で用を足していた営業マンやオタク達が、唐突な来訪者共を目にして色めき立つ。トイレの中の空気が一変し、「さあ、早く出て行け」……みたいな雰囲気を発しだしたもんで、手も洗わず皆足早に去って行った。そして、中央の個室の扉が開けられ、弥富は便器のフタの上にまたもや座ることとなった。

(助けてッ、キアヌ・〇ーブスぅぅぅぅ！！)

心の叫びはダレにも届かないし、救世主も飛んではこない。彼は同じ背格好した集団に拉致され、密室に押し込まれた。彼等は扉を閉め、数人が中で弥富を取り囲み、じっと見下ろしている。他は扉の向こう側とトイレの出入り口に立ち、すっかり占拠してしまった。父よ母よ、実家で飼ってるオウムよ……俺は知らない世界に旅立つかもしれません。先立つ不孝を御許しください。尚、アパートのベッドの下にあるＤＶＤは見なかった事にしてください。

(さあ……何でもこいッ！)

心の中で軽く遺言を唱え終えた弥富は、勇気を振り絞ってグラサン軍団を睨み返した。

「オマエは何者だ？」

――――――――――――――――――――――――は？

弥富の面が著しく歪む。グラサン軍団の一人が、「そりゃこっちが聞きてえよ！」的な質問してきたから。

「もう一度聞こう。オマエは何者だ？」

「あ、え……その〜〜……俺は弥富更紗といいまして……」

「職業は？」

「無職です……つうか、ニート予備軍です」

「年齢は？　身長と体重は？　血液型は？　好きなアニメのジャンルは？」
――――――――はい？
公共の場で白昼堂々と拉致事件を起こしながら、何でそんなコトを聞く？
「あの……アナタ達って、電薬管理局の関係者か何かじゃ……？」
自分の現状の立場を考慮すれば、自然と導き出される予測なのだが。
「いいや、我々は当局と真逆の立場にある者の集まりだ」
弥富に質問された男はサングラスを外し、スーツの内ポケットからＰＤＡを取り出した。モニターに映るのはその男の顔写真と、何かのＨＰのＴＯＰ項目。
「強引な事をして大変申し訳なかった。我々は『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』。訳あって君の身柄を保護させてもらった」
――――――父よ母よ、実家で飼ってるオウムよ……どうやら御迎えの天使が下りてきました。残念ながら、天使達の顔には慈愛の欠片も無く、なんか微妙に迷惑そうな顔してました。

知らない人についていくよう（前書き）

友達以上、恋人未満……？　それって、友達じゃねーか！！

知らない人についていくよう

小学生の頃、担任の先生に何度も言われた言葉を思い出した……。
「いいですか、皆さん。世の中には悪い事ばかり考え、道端をウロウロしているような人達が沢山います。そんな人達は、アナタ方のような良い子を狙って誘拐したり、自動車に押し込んで連れまわしたりします。つまり、少々頭がオカシイんです。働く気力の無いオジサンや、いつも自分の部屋に閉じこもっている、『ニート』という連中には十分気をつけてください。防犯ベルや、ケータイのＧＰＳ機能をフル活用し、不審者から身を守りましょう。帰ったらさっき配ったプリントを、お父さんやお母さんに必ず見せてください。それでは皆さん、さようならッ☆」

……先生、スンマセン。俺、もらったプリントを帰り道で捨てちゃいました。飛行機にして飛ばしちゃいました。とってもよく飛びました。そのせいでしょうか、２５歳の俺は、先生が頭が変だと罵っていた『ニート』に成り下がり、しかも――
「弥富更紗くん、我々は味方だ。君を歓迎しようッ！」
知らない人達に囲まれてます。トイレの個室から一歩も動けません。多分、この後は地下駐車場に連行され、４ＷＤに押し込められると思います。行き先は国外でしょうか……できれば国内で勘弁して欲しいな……（泣）。
追伸――理科室で飼育していたメダカを全滅させたのは、俺です。言い出せなくてスミマセンでした。
「……は・は・は」
弥富は軽く壊れていた。視界が白くなって、見えたら死ぬ系の幻覚がチラつきだす。
「弥富くん？　もしも～～し、聞いてるかな？」
ＰＤＡを手にした男が、弥富の肩をポンポンッと叩きながら呼び

かけるが、反応はとても鈍い。彼の視界に展開されている、愉快な幻覚は下記のようなカンジ。

／＊天使＊／　／＊天使＊／　／＊天使＊／

【何かよく分かんない絵】

（死）大型犬（死）　（死）少年（死）

天使・A「まいったなあ……こんなトコで気持ち良く死んじゃってるよ」
天使・B「これって残業代出るンすかねえ、先輩？」
天使・C「最近は組合からの指示が厳しいしなあ」
天使・B「見なかった事にしましょうか？」
天使・A「いやいや、そりゃマズイだろ。仮にも我々は神の使いだしさあ、ビジュアル的に美しくくたばったのを放置したら、減給ものだよ」
天使・C「それもそうだな。よし、オレが少年を担ぐから、オマエ等は犬の方宜しく」
天使・A「ちょ、待てよッ……オレ、実は犬アレルギーなんだよ。だから、代わってくれ」
天使・C「やだよ。座敷犬ならともかく、こんなデカくて体臭がキツイのはパス」
天使・B「そんじゃあ、この場で洗礼しときますか」
　ガソリンかけて、ライターで点火。

「ふぁいやああああああああああああああああああああ――――――――――ッッッ！！」
　弥富、白目気味で絶叫。

「うおッ！？　……だ、大丈夫か？」
彼を取り囲む連中が瞠目する。
「……あ、は……はい」
なんとか自力で幻覚と幻聴を振り払ったようだが、状況が好転したワケではない。
「初対面の相手に失礼だが、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓを奪取したのが、まさか君のような人だったとは。我々は正直、驚いているんだ」
「あ、あの……」
「ん、何だい？」
「俺、確かにとっても悪い事しました。でも、できれば痛くしないでください……」
状況が把握できておらず、変な後遺症が発生してるし。
「さっきも言ったが、我々は味方だ。私はコードネーム『すみす・ブラック』。『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』の会長を務めている」
うっわあ～～……友好的な笑顔を浮かべた、お脳が残念な人だよ。普通に考えれば、真っ先に通報すべき輩だよ。
（よし、まずは落ち着け……コイツの言う事が事実なら、トイレを占拠している全員が、ネット犯罪者というワケだ。つまり、友好的態度に対して寛容な対応をしたら、俺まで電薬管理局を敵にまわすハメに……って、深見・父の件で既にバレてるんだっけか？）
ただでさえ、混乱を極めた身の上だってのに、ここにきて怪し過ぎる犯罪集団と関わるなんて、絶対無理！
「知っているかもしれんが、我々は全員がかつて偽Ｐ・Ｄ・Ｓのサイト管理者をやっていた。今では電薬管理局に目をつけられ、不自由な生活をする身だ。多くの仲間が逮捕された……」
その男――すみす・ブラックとやらは自分の言葉に感涙でもしたのか、目頭を押さえてサングラスをかけ直した。
「あ、あの～～、とりあえず……解放してもらえませんか？」
「ああ、もちろん。我々は電薬管理局みたいな、血も涙も無い連中とは違う。コレにサインさえしてもらえば、即刻、自由にしよう！」

そう言って差し出された一枚の紙キレと、何故か初音〇クが表紙にプリントされた、あまり手で触れたくないような冊子。
「……はい？」
不審者集団の言動にいちいちツッコんでも仕方ないのだが、紙キレには氏名と拇印の欄があって、明らかに詐欺の臭いがする。こんな時……どんな顔すればいいんだろう？

――――――　笑えばいいと思うよ☆　――――――

またもや幻聴が。おそらく、自分の中の本能が「ヤベぇよ！　逃げろッ！」って言ってるに違いない。だから、俺は……
「スミマセン……駅のコインロッカーまで荷物を取りに行っていいですか？」
逃走の準備に入った。
「ああ、いいとも」
アレっ？　えらくすんなりと。
「そ、それじゃ……すぐ戻ってきますんで」
トイレを占拠するグラサン軍団をかき分け、弥富はなんとか脱出成功。後ろを振り向く勇気なんか持ち合わせちゃいないんで、足早にエレベーターへ。
ガコンッ――
ドアが閉まる。
（――――よしッ！）
連中は意外とマヌケだった。このまま地下駐車場まで行き、大通りに出て人込みに隠れよう。そして、今日あった珍事はなるべく早めに忘れよう……。弥富は深く息を吸いこんで、額の汗を爽やかにぬぐった。
ガコンッ――
地下駐車場に到着。ドアが開く。で……
「さあ、行こうか☆」

ドアの向こうで、左右から挟むようにして待っていたグラサン軍団。中には明らかに息切れして、ハァハァいってるのも何人かいるし。オメー等……全速力で店の中走り抜けてきたんかい。
（よ、よし……かくなる上はッ）
弥富の視線が大通りの曲がり角に向けられる。目標は、交番。今度こそ国家暴力の出番だ。問題はタイミング。多勢に無勢、正面突破はまず無理だ。しからば――
ピピピッ！　ピピピッ！
不意に鳴り響く電子音。すみす・ブラックが、ズボンのポケットからケータイを取り出した。その瞬間、他のメンバーに緊張がはしった。
「……そうか、了解した」
彼は小声で手短に話を終えると、弥富の方に向き直る。
「申し訳ない、弥富くん。野暮用ができてしまった」
ピ――――――――ッッッ！！
笛を吹いた。地下なんでよく響く。
――ザザッ！
グラサン軍団、整列。
「諸君、予定より少々早いが、本日の作戦を決行にうつす！　何度も言うが、成功すれば我々はネット社会の歴史に名を刻まれる！　が、失敗すれば……永遠にアキバの街を歩けない身の上となるだろう！　それでもヤルかあああああああッ！？」
「おおおおおおおッッッ！」
えらい気合いの入れようだ。絶対、ろくでもない事をするんだろうが、俺には関係ない。どうぞ、ご勝手に。そして、俺のコトはマジで早めに忘れてくれ。
バタンッ！　バタンッ！　バタンッ！
メンバーは次々と駐車してあった車に乗り込み、発車していく。そして、最後の車両からすみす・ブラックが顔を出した。
「明日、こっちから連絡を入れるよ！　じゃあ、また！」

元気一杯で去って行った。
チリン、チリン〜〜
一人だけ、やたらと恰幅のいいメンバーがいて、何故かカゴ付きの自転車をこいで車を追って行った。既にヒィヒィ言ってるんだが。
（なんだかなあ……）
一応、解放された。連絡するとか言い残したが、非通知や知らない番号でケータイにかかってきたら、無視っちまえばいいだけだ。それにしても、国家権力め……あんな物騒な集団を野放しにしておくとは。税金返せッ、払ってないけどねッ！
「さて、駅に戻るか」
安堵の気持ちで歩き出す。その一歩目で、グシャっと何かを踏んだ。
（……あ）
一枚の紙キレと、アニメチックな冊子。アノ男……拾ってけと？
弥富としては無関係を通したかったが、好奇心という名の天使Ａ・Ｂ・Ｃが心の中に舞い降りて――
＜拾っちゃえよ、お客さん☆＞
そう囁いた。

たまにはプライド捨ててみよう（前書き）

ヘンゼルとＧＬＡＹのＴＥＲＵ

たまにはプライド捨ててみよう

飼い主である弥富が謎のグラサン集団に拉致られ、トイレの個室に軟禁されてた頃……コインロッカーで留守番していた禁魚達は、すっかり待ちくたびれていた。
「なァ、ヒマやし外出て遊ばへンかァ？」
出雲はポッチャリなお腹を揺らしながら、グダグダしている。
「それはさすがに……ボク達は水の中でしか生きられませんし」
郡山がなだめるが、彼もまたヒマを持て余していた。
「もうやだッ！　拷問のリハーサル飽きたッ！」
低温ローソクを片手に浜松が文句をたれる。
「そりゃ拷問じゃのうて、ただのプレイじゃぞ」
土佐のジイイが冷静にツッコんでくれた。
「ハァハァ、もう少しだ……もう少しでポチは何かになれそうな気がする」
ポチ、三角木馬に跨って虚ろな瞳になってる。
「アカンっ！　ポチが大人の階段上りかけとるでッ！」
全員がムダな体力の発散手段を模索してて、仕方ないんで郡山が……
「では、アキバの街のシステムネットワークに侵入して、マニアックな店を覗き見して遊びましょうか？」
都合の良いことに、P・D・Sはネットにつながったまま。禁魚の生体ファイアー・ウォール機能を利用すれば、あらゆるハッキング行為が可能となる。
「よっしゃあああああああああッッッ！！　盗撮、盗聴、違法ダウンロード、果ては空き巣に痴漢行為ッ！　あたしの辞書に『正常』という言葉はいらんッ！」
浜松のモチベーションが立派に復活。バタフライマスクを脱ぎ捨て、外出着に御着替え開始。

「思うんやけど……浜やんって絶対、犯罪者の血が流れとるで」
「でしょうね。先程、本人が言っていた“浜松＝深見素赤”というのが事実なら、彼女は電薬管理局からオリジナルＰ・Ｄ・Ｓを奪取した、いわゆる『サイバーテロリスト』という事になります」
「問題は、そんな輩と関わる御主人の今後じゃな。既に法的には共犯者……いや、首謀者の烙印を押されても仕方ない状況じゃ」
三匹の浜松に対する疑惑の念が、刻一刻と膨らみつつある。もし、人間が禁魚になっちまうテクノロジーなんてのが、現実に存在すれば。
「めたもるふぉぉぉぉぜぇぇぇぇぇ～～～～！！」
マヌケな奇声と共に、着替えの終了した浜松が躍り出る。
「……」
残念ながら、その光景に真っ先にツッコんでくれる猛者はいなかった。
「ポチも変身だあ～～」
しかも、感染が早ッ！　ポチが週末の午前中に放送してそうな子供向けアニメの衣装を纏い、浜松といっしょに痛々しいポーズをきめる。背景がやたらとカラフルに光ったり、爆発したりで……なんかもう、ごく一部の大きな成人男性の友達が拍手してそう。
「質問宜しいでしょうか、ええっと～～……」
「アキバ限定魔女っ娘・『ギルティ５』！！　あたしはリーダーのギルティ・ローズ！！」
直訳すると、“有罪な五人組”になる。
「ポチはチームのリーサルウエポン、ギルティ・ブロッサム。魔法っぽい力でローアングラー共を一掃してやる～～」
珍妙なスティックを振り回すな。ウインクをするな。パンチラを気にするな。
「……で？」
出雲がこの上なく冷たい視線を、目の前の物体Ｘに向ける。最早、視線というより一種のビームだ。

「ボヤボヤするなッ！　全員分の衣装を用意してあるんだから、さっさと着替えてちょうだいッ！　そして、アキバの街をサクッと救うのですッ！」
救いが必要なのはテメーの心だ。
「あ、あの……コアなイベントに参加するワケじゃないんで、別に着替えなくても……」
郡山は恐れている。浜松は勢い余って、魔女っ娘衣装を野郎にも着せようとしているもんで。
「バカっ！　羞恥心なんてかなぐり捨てなさい！　この街では、一般常識と平常心の持ち主は生きていけないのよ！　さあ、今日からアナタはギルティ・チェリー！！」
そう言ってズイっと差し出される、フリルまみれのピンクの衣装。
「……何故に？」
思わず受け取ってしまった郡山は、俯いたまま凍りついてる。
「さあ、出雲もコレで心の鎖を破壊するのよ！」
満面の笑顔で手渡される、バイオレットな衣装。なんか、サイズが小さいのが気になる。
「う、うち……裸になンのは平気やけどコレは……いや、マジでアカンて」
ゴクリと息を呑む。何だろう、この不可思議な誘惑……衣装を手に取ってるだけで、みるみる羞恥心が崩壊していくようなカンジ。
「ビンビン伝わってくるでしょ？　体が魔法の力で高揚するでしょ？　さあ、後は変態という名の乙女に変身するだけッ！」
結局、変態になるのが前提みたいだ。
「で、ジジイはコレね」
差し出されたのは目出し帽が一つ……以上。
「あの……儂も？」
高齢者が巻き添えにあった。仕方がないんでかぶってみる。案の定、ただの銀行強盗にしか見えない。
「よし。似合ってるよ、ギルティ・アイリス！」

いやいやいや、一人だけ明らかに仲間ハズレだから。防犯カメラでズームアップされるから。
「ギルティ・アイリスはチームのマスコット担当ね☆」
爽やかに笑顔で言われたけど、目出し帽かぶったジジイがマスコットになるチームに未来はないと思う。
「では、ここにそろったあたし達五人でもって、アキバの隅から隅まで体感しまくるよッ！」
オオオオオオオオォォォォォォォォォォォォ――――――――――ッッッ！！
背景からよく分らん雄叫びが聞こえてきて、巻き込まれた連中をむやみに鼓舞する。
「そ、それで……まずはドコへ……？」
二十歳前後の美青年が魔女っ娘コスプレ……しかも、ピンク。田舎の御両親はきっと泣いています的な……そんな光景。郡山は薄らと頬を赤らめながら浜松に問う。
「『享輪コーポレーション』のメインサーバーへ突入する」
浜松の表情が唐突に引き締まり、メガネを外して目を細めた。
「……ッ？」
他のメンバーは一瞬、言葉につまった。すっかり悪フザケを展開するものとばかり思っていたんで、浜松の発言に対し二の句が継げない。
「本来なら、本社ビルのサーバー室まであたし等を運んでもらった方が効率的だったんだけど、弥富が怖気づいた場合も想定して、ラップトップのＨＤにハッキング用のチートコードを組ませてもらったのさ」
「つまり、さっちんは体良く利用されとったンか？」
二の腕とウエストをパンパンにしながら、出雲が厳しい口調で問う。
「あたし……まあ、深見素赤には『敵』がいた。身を守るためには、一番大事な物を傍に置いておくワケにはいかなかった。だから、オ

リジナルP・D・Sの入ったポータブルHDを、安全な場所に移動しなくちゃならなかった」
「なるほど……引きこもり気味で、友達もおらず、一人暮らしでコミュニケーション能力の乏しい御主人は、最適な該当者というワケじゃな」
土佐がヒゲを弄りながら頷いた。
「あたしが所持したままだと、確実に強奪されてからね。ダレとも繋がりが無く、平凡で目立たないバカ野郎が必要だった。だから、あたしは沢山の人間とチャットして、それとなく相手の社会的立場や性格を分析し、選別していった。更紗はまさにベストの人材だったワケよ」
次第に浜松の表情に微笑みが。ただし、その顔は明らかに悪人の色に変化していた。
「思うんですが……外部から安全にハッキングできるのなら、どうして弥富さんに言ってあげなかったんですか？　もし、彼が享輪コーポレーションで拘束でもされたら、ボク達全員が処理されかねないのに」
郡山が膝を折って座りながら問う。ミニスカ仕様なんで中身が見えそう。
「ああ、それについては心配無用。更紗はハナっから、享輪コーポレーションにはたどり着けないようになってたから。ただ、時間をかけて外出してもらう必要があった。そのためには、別にドコの街でもよかったんだけどね」
更に悪戯な微笑みを浮かべる。完全に悪党の口調になってるし。
「ほう、そいつは興味のあるハナシだなあ」
不意に聞き慣れた声がして、振り向けばヤツがいる。つまり……インカム・βを装着して、怒りに打ち震え気味の弥冨が登場。その手には着火済みの低温ローソクと、乗馬用のムチが……。
「あらららららら〜〜……やさしくし・て・ねッ☆」
浜松は力一杯の営業スマイル。だが、残念。

「ポチ、準備しろ」
「うん、分かった。これで浜松も何かになれるぞ」
瞬時にして裏切ったポチが三角木馬を運んでくる始末。
（うっわ〜〜〜……）
展開をスピーディーに予測した他の連中は、静かにあさっての方向に目をそむけた。とっても晴れがましい笑顔で。

作戦遂行してみよう【突入編】（前書き）

地震速報の途中ですが、緊急アニメです（テレ東）

作戦遂行してみよう【突入編】

＜愉快な拷問の歌＞
作詞：回収屋
作曲：ポチ

1．知ってるコトを全て吐け♪　一言一句漏らさずに♪　言いたくないなら構わんよ♪
怖いオジサンやって来て♪　大きなオモチャで遊んでくれる♪　君の意識は愉快に溶けて♪　生まれて初めて出す声に♪　親兄弟は号泣さッ♪
Ｉ・ｃａｎ・ｆｌｙ～～★　Ｉ・ｃａｎ・ｆｌｙ～～★　ますます頬を赤らめて～～♪
Ｉ・ｃａｎ・ｆｌｙ～～★　Ｉ・ｃａｎ・ｆｌｙ～～★　低温ローソクまとめ買い～～♪

2．我慢なんかしなくていいよ♪　感じるままを受け止めちまえ♪
そこで発見、自分の限界♪　でも、でも、でも、世界は君に期待してるよッ♪　まだまだイケる、開発しまくれ♪　放送コードをブッ飛ばせ♪　性欲に負けた？　いいや、理性に勝ったのさッ♪
ＤＨＣ・ｆｏｒ・め～～ん★　ＤＨＣ・ｆｏｒ・め～～ん★　正体不明の汁垂らし～～♪
ＤＨＣ・ｆｏｒ・め～～ん★　ＤＨＣ・ｆｏｒ・め～～ん★
三角木馬が今日も鳴く・うッ♪

「もう、らめえええええええええええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇ～～～～★」
辺りに響く浜松の嬌声。
「よくもまあ、騙してくれたなあ。しかも、俺が謎の不審者集団に

拉致られて冷や汗かきまくってた時に、オメー等はそろって楽しくイベントかあ？　恥を知れッ！　恥をッ！」
弥富はそれはもう興奮気味で、三角木馬に跨った浜松のケツを乗馬用のムチでベシベシやっている。
「さ、さっちん……ちょっとええかなァ……？」
あまりの覚醒っぷりに、出雲は声がかけにくい。
「ああんッ？　何だよ、ソノ格好は？　全身ピッチピチにしやがって！　魔女っ娘だあ？　外見的年齢を考えろよなッ、この青〇りんがッ！」
ペシペシペシッ！
「はひィィィィ～～★」
血走った目で罵倒され、肉づきの良いケツを折檻された。
「や、弥富さん……これ以上の描写はさすがに――」
仲裁専門の郡山が割って入るが、今回ばかりは彼自身の姿にまず問題が。
「おいおい、勘違いしまくった乙男かあ？　アイドル面は何やっても許されると思ってんのかあ？　鏡をしっかり見ろッ！　スネ毛はしっかり剃れッ！」
ペシペシペシッ！
「はうぅぅぅぅ～～★」
同様にケツを折檻。あっという間に涙目だ。
「ふごふご。ふぉふぉふぉ。はふぉはふぉ」
後ろ手に縛られて地面に転がるポチが、ボールギャグを装着させられて何か言ってる。
「不感症は黙ってろッ」
幼児にも容赦がない。画的には完全に児ポ法に抵触している。
「御主人よ、儂……」
「却下だッ！！」
土佐は一蹴された。目出し帽を装着した不審な高齢者に対し、特にコメントはしたくないらしい。

「ふうううう〜〜……」
一通りツッコミを終えた弥富は大きく溜息をつき、ドカッと腰を下ろした。四つん這いになった浜松の背中に……。
「あふぅ〜〜★」
口から漏れるピンクな声。既に魔女っ娘じゃなくてマゾっ娘だ。
「御主人よ、さっき言っとった『謎の不審者集団』とは何じゃ？」
「白昼堂々と一般人を取り囲み、トイレの個室に押し込んで、自分達の素性を仰々しく明かすような連中だ」
その説明だとただの不良だ。
「まさか……電薬管理局の！？」
「いや、『偽P・D・S友の会』とか名乗っていた」
「……何じゃソレ？」
「こっちが聞きてえよ……また、迷惑なのが関わってきやがった」
『偽造P・D・S』――オリジナルP・D・Sが合法的にネット上を流れていた時分、オリジナルP・D・Sをチートコードで違法に改造したプログラム。擬人化レベルを必要以上に高めてあり、非常に臨場感のある仮想空間を展開できるが、中毒性の高さと禁断症状が社会問題となり、電薬管理局によって取り締まりを受ける。犬・猫・鳥・爬虫類・魚類など、それぞれに適した偽造P・D・Sがネットに氾濫していたが、現在では、ほんの一握りのハッカーや挑戦者という名のバカだけが、電薬管理局への抵抗という形で活動するのみ。『偽P・D・S友の会』とは、言ってみれば軽いサイバーテロリストの組織という事になる。しかも、連中は弥富が電薬管理局から不正インストールした、オリジナルP・D・Sの存在を知っていた。まさか……スパイウェアか何かでハッキングを受けていたのか？
「とにかくだ。当初の予定としては、享輪コーポレーションで手掛かりを探る段取りだったが……おいッ」
「は、はひッ★」
肉ベンチ・浜松を軽く足で突っつくと、予想通りの声が返ってく

る始末。
「オマエ、本当に『深見素赤』なのか？」
弥富は一気に核心を突く質問をした。

「うっしゃあああああああああああああああああ――――――ッツッ！！」
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお――――――ッツッ！？」

さっきまでのマゾっ娘ぶりが嘘のように吹き飛び、肉ベンチが勢い良く立ち上がる。もちろん、座っていた弥富の方は無様に地面を転がって、三角木馬の角に後頭部をゴリッとぶつけた。そう、ゴリッと。

「ここまで追求されたのなら仕方あるまいッ！　ここにハッキリと断言しようッ！　このあたし『浜松』こそが、『深見素赤』の進化した姿なのだよッ！　ぬはははははッ！」
「おォォォいでぇ〜〜（泣）　おォォォいでぇ〜〜（痛）」
踏ん反り返って高笑いする浜松をよそに、残念ながら弥富は地味に痛くて聞いちゃあいねえ。
「いえ、単純に考えてソレはあり得ませんね」
郡山が冷静沈着な視線で浜松を凝視するが、ミニスカからのぞくトランクスが間抜けでどうしようもない。
「あたしの言う事が信じられない？」
「はい、無理です」
そりゃそうだ――そんなカンジで他の禁魚達もいっしょに頷く。
「そもそも、どうやって人類が魚類に？　質量保存の法則を完全に無視した特撮ヒーローじゃあるまいし。科学的に考えてオカシイでしょ？」
もっともだ。他の禁魚達はまた頷く。
「おーけー、おーけー！　ならば、アンタ等の疑問を解消すべく、

当初の予定をすぐ実行に移そうかねえ」
そう言って彼女は弥富に近づき、魔法のステッキをブン回す。もちろん、現実的な効果は何も無い。
「ああ、行けばいいんだろ……」

――――――――　２０分後　――――――――

「いやあ、マジで来ちまったなぁ……」
弥富がそびえ立つ高層ビルを仰ぎ見る。アキバの街では一番の規模を誇る、大手ソフトメーカー『享輪コーポレーション』の本社ビルだ。正直なところ、就職活動すらしたことのない彼にとって、こんなプロの社会人が行き来する建物に入るのは、初めて野グソをするくらいの勇気がいる。しかも、現在の彼の状態は↓タップリの水と魚類が入ったビニール袋を左手に、右手にはラップトップ。第一の難関は、正面玄関に立つ警備の人だ。
（見てるよ、見てるよ……見まくってるよ！！）
弥富の心がポキッといくのは時間の問題。そして、彼にだけ聞こえてくる幻聴タイム。

警備員Ａ（うわぁ～～、なんか面倒臭そうなのがいるなぁ）
警備員Ｂ（この街って頭のオカシイ連中多いからなァ）
警備員Ａ（見ろよ、妙なモン持ってるぜ。顔色も悪いしよ）
警備員Ｂ（頼むから来ないでくれよ……あんなの止めるのヤだぜ）
警備員Ａ（ああ～～……腹減ったなあ。メイド喫茶でハンバーグ食いてぇ）
警備員Ｂ（くっそ～～、今日ってＡＫＢ４８のイベントがあるのにょォ）
警備員Ａ（げッ、アイツこっち見てるよ。ヤベぇなあ……）
警備員Ｂ（おいおい……近寄ってくるよ。何する気だァ？）
警備員Ａ（テロだよ、きっとそうだよ……袋の中身は可燃物に違いないよ！）

警備員B（マジかよ〜〜、捕まえた方がいいか？　でもさあ、オレって面接で柔道やってたとか嘘ついちゃったんだよなあ……無理だよう）

――みたいな会話。しかし、ここで立ち止まるワケにはいかない。後がないのだ。事件解明のためには、勇気ある一歩を踏み出さねばならない。

――――ザッ！

弥富は毅然とした表情で大きな自動ドアの前に立つ。二人の警備員は特に声をかけてくる様子もなく、彼はすんなりと中に入れた。よし、幸先がいいぞッ。このまま首尾良く――

「みなさ〜〜ん、どうかお静かにッ！　我々は『偽P・D・S友の会』と申しますッ！　決して怪しい者達ではありませんッ！」

――――父よ母よ、実家で飼ってるオウムよ……トラブル発生です。広々とした玄関ホールを例の不審者集団が占拠してました。追伸――あまり電話できなくてゴメンナサイ。東京の夏はなんかもう、これからが本番ってカンジです。

「ガンバレヨ、ロクデナシ」

オウムの声が最後に聞こえた。そんな気がした……。

作戦遂行してみよう【潜伏編】（前書き）

神に話しかけるのは、祈り。神に話かけられたら、病気

作戦遂行してみよう【潜伏編】

やあ、みんなッ！　俺は弥富更紗。リアルタイムで現実逃避中の一般人さ☆　え？　どうしてそうなったのかって？　それは御近所さんや世間様がとっても理不尽で、俺の人生にどういうワケか厳しく当たるからッ☆　だから、満面の笑顔で脳内を真っ白にして、体は元気良くスキップするんだ～～☆　ひゃほおおお～～、楽しいィィィィ――！！

「……じゃねえええええええええええええええええええ――――――ッッッ！！」

弥富、一瞬の白昼夢からタダイマ。彼の目の前には、あってはならない光景が展開していた。黒のフォーマルスーツを纏い、黒のサングラスをかけた十人近い連中が、ビルの玄関ホールを囲むようにして立ち、リーダーの男が受付の二人の女性にＰＤＡを見せている。

「私は会長を務める『すみす・ブラック』と申します。どうぞ、御覧下さい」

ヤツ等だ……地下駐車場からドコかへと散開していった不審者集団だ。

（どうする？　引き返すか？）

どう転んでも、関わって無事に済むような状況ではない。ここは出直して……

「おッ、弥富くんか！？」

マズイ……発見されちまった。どうしてこの手の輩は善良な市民をムダに巻き込もうとするんだ？

「こんな所で会えるなんて。おッ、その手に持ってるのは……もしかして！？」

すみす・ブラック、素早くデジカメを構えて撮影しはじめる。

「ちょ、ちょっと！　やめてください！」
さすがに慌てる。禁制ペットである禁魚の所持を動画撮影されたら、立派な証拠物件が出来上がってしまう。
「一体、ドコで入手したんだい！？　これだけ大きく育ったヤツは、裏サイトの写真でも滅多にお目にかかれないよッ！」
何か異様に興奮しているすみす・ブラックに感化されたのか、他のメンバー達がにじり寄って来て同様に撮影しだした。
「こっちに目線くださ～～い！」
「かっわいいい～～～ッ☆」
「コレっていくらぐらいするワケ！？」
「ブラックさん、我々も飼いましょうよッ」
ヤバイ……次々と証拠物件が量産されてやがる。
「あ、あの～～……みなさん、何事ですか？」
もっともな質問をしてみる。
「よくぞ聞いてくれた。我々『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』は、このビルを合法的に占拠しに来たのだよ」
ああ～～、ダメだあ～～……やっぱこの人って選りすぐりのバカだあ～～。
「いやいやいや、占拠って……何を言っているんですか。オマワリさん呼ばれちゃいますよ」
弥富はなるべく声を小さくしてツッコんでやるが、相手は変わらぬ笑顔。
「心配無用！　アポイントはとってある！」
何のだよッ！？
「あの～～、すみませんがお客様……他の来客の方に御迷惑になりますので、御静かにしていただけますか？」
警備員、登場。これだけ目立ってりゃ、そりゃ声かけられるわ。
「おッ、丁度よかった。警備員さん、サーバー室まで案内してもらえるかな？」
「……は？」

警備の兄ちゃん、当惑。弥富も右に同じ。
「アポイントはとってあるんだよ。設計開発部の課長さんを呼んでくれ」
「……お名刺を拝見してもよろしいでしょうか？」
「名刺？　ははははッ、そんなモノ持ってるワケないじゃないか」
「……では、身分を証明する物は何か御持ちですか？」
「ああ、あるよ」
そう言ってＰＤＡのモニターを見せる。
「……少々お待ちください」
警備員は神妙な顔して受付へ。コレって……どうしようもなく不吉な臭いがする。
（撤収ッ！）
弥富は心の中で勇ましく自分に命令を下し、コソコソと隅の男性用トイレへと逃げる。不審者集団のことはいいのかって？　うん、いいよ☆　俺の背景には沢山のお花が舞い散っていて、何も見えてないから～～☆　あはははは～～、探さないでねえ～～☆
――バタンッ！
弥富、またもやトイレの個室へログイン。そして、クソ重いビニール袋を足元に置き、インカム・βを装着する。
「おい……早くも問題発生だ」
便器のフタに腰掛けて、脱力したみたいに俯いて呟く。なんか、トイレの個室がよく似合いだしている。
「きぃおぉぉぉぉぉつけえええええええええええええ――――――――ッッッい！！」
ビシッ！
浜松のけたたましい号令で他の禁魚が整列。今回はアーミーコスプレ。御覧のスポンサーの提供で御送り致します。
【提供】
●遊びは文化・タ〇ラ
●いいえ、ケフィアです・や〇や

●イエスっ！・高須ク〇ニック

「またかよ……もうやったネタじゃねえか」
「いいのッ！　作者が好きだからッ！」
　またしても登場。浜松軍曹率いる禁魚一個小隊。百戦錬磨をムダに偽装したコスプレがどうにもイタイ。
「で、今の俺にとって何の役に立つんだよ？」
「知れたことッ！　更紗のチャレンジャー精神に火をつけて、勇猛果敢に猪突猛進してもらうんだよッ！」
　要するに、玉砕してこいと？
「それにしても、タイミングが悪いですね……さっきの方々は弥富さんのお知り合いですか？」
「断じて違う。友達は選ぶ。テレビに出ても大丈夫じゃないような連中は、オメー等だけで十分だ」
　臭う……弥富からストレスの臭いがする。
「さて、浜松よ。お主が深見素赤であると言い張る根拠……本当にこのビル内で証明できるのだな？」
「ええ、もちろん。目指すは地下のメインサーバー室。各自、抜かりなく準備せよッ！」

　あはははははぁぁぁぁぁぁ～～～～☆　そりゃムリだあああああぁぁぁぁぁぁ～～～～☆

　本日、二度目の白昼夢。あまりに高いハードルを課せられて、弥富はもうなんか笑うしかない。それはそうと――
（どうする気なんだろ、アノ連中……？）
　ザ・集団・ｏｆ・不審者の動向が気になって、トイレの入り口の隙間からコソコソとのぞいてみる。
「さあ、お客さん。こっちですよ～～、痛くしないからね～～」
「あ、あの……アポイントはとって……だから、その……」

いつの間にやら警備員の数が増えて、一人残らず捕まってやがる。特に抵抗できる者もおらず、近所の悪ガキみたいに連行されている。最後に、やたらと脂汗にまみれたデブが二人がかりで引きずられていった……自転車、大事に使えよ。やがて、玄関ホールに静寂と平和が訪れる。

（よしッ！）

弥富はこの上ない達成感で爽やかな笑顔だ。とりあえず収拾がついたので、ここから仕切り直しというコトで……

ガコオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォ――――――――――――ッッッン！！

突如、玄関ホールから大きな音がした。やがて、来客者等の喧騒が聞こえ、バタバタと沢山の靴音が響いてくる。

（な、何事だよ……！？）

一瞬、不吉な静けさが時間を止めた。そして……

「皆さん、御静かに！　その場から動かずに！」

スーツ姿の一人の中年男性が、正面玄関から堂々と入って来て、大きな声を張りながら中二階への階段を上っていく。更に、軍服を着た連中が大勢後に続き、玄関ホールを占拠するように展開する。

「……おい、また何か始まったぞ……」

「そうみたいですねえ」

「せやなァ」

「ふ～～む」

トイレのドアの隙間から顔を左半分だけピョコっと出して、警戒する四人。

「“まぜるな危険”だとッ！？　この浜松軍曹に命令とはッ！　躊躇なくまぜてくれるッ！」

「う～～わ～～。化学の力でポチの意識は朦朧だ～～」

四人の後ろで、トイレ掃除用洗剤を使った毒ガス兵器が製造され

とる。
「たった今、このビルは封鎖されました！　建物内の全員の出入りを禁じます！」
中年男性が中二階から拡声器で警告した。白髪混じりの髪に、無精ヒゲ……青白い顔色をして、目の下にはクッキリと濃い隈があり、仕事に我が身を捧げている真っ最中な感じのオッサンだ。
（なんですとォォォォォ――――――！？）
緊急事態だ。弥富の意識が状況の急変についてこれず、奈落に落ちそうになる。ビルの外周には軍人達が手際良くバリケードをはり、全ての出入り口に見張りが立った。
「一体、コレは何事ですか！？」
エレベーターから血相変えて降りてきた、五十代くらいのオバサンが声を上げる。玄関ホールで立ち往生する来客者も同様で、各々が不安の声を上げだす。
「皆さん、どうか御静粛に！　我々は『電薬管理局』の者です！」

……マジで？

弥富、個室に駆け込む。そして。
「うぅおォェェェ

ぐいぐいぐいッ……ぐいぐいぐいッ……

弥富、暴走。浜松の首根っこをマジ気味で絞め上げる。

「や、やめて……大声出すわよ……更には訴えて勝つわよ……」

ガンジーも思わず暴力を解禁しそうなイラっとする表情で、浜松軍曹がニヤリと微笑んだ。

作戦遂行してみよう【機密漏洩編】（前書き）

赤松健の嫁は絶対に仕込み（存在自体が）

作戦遂行してみよう【機密漏洩編】

人にはそれぞれに得手不得手というのがあってね、出来る事とそりゃ無理だって事があるんですよ。で、さあ……今のこの状況をどうやって打破しろと？　税金で生活している怖い人達が沢山いるよ。使われたら命が“おふッ”って言いそうな武器持っているよ。え？

俺の装備？　使えねえ魚類が四匹と、ラップトップが一台。あとは豆腐にぶつかっても割れそうなハートぐらいだ。そんな戦力分析をしてみたら、涙が止まらなくなってね……目が、ああ……目が……

――――ずびッ！！

「め、目がああああああああああああああッッッ！！」

弥富、浜松軍曹から無言の目潰しを食らう。

「うろたえるなッ！　冷静さを欠いては、達成できるミッションも失敗するぞッ！　水の如く心を静め、氷の如く意識を集中し、風の如く迅速に――」

「この享輪コーポレーションに、『深見素赤』という社員が勤務しているハズです！　今すぐここに呼んでください！」

ぶうううううううううううううううウウウウウウウウウウウウ――――――――――ッッッ！！

浜松が鼻血吹いた。キレイな放物線を描いた。虹ができた。

「おい、呼んでるぞ……オマエの事じゃねえの？」

学校の友達を人身御供として先生に突き出すような、冷酷な声で弥富が言う。

「あ・は・は・は……こ、こんなハズでは……（汗）」

珍しく浜松の表情が硬い。明らかに何か予定外なコトが発生しているようだ。

「でさあ、今更なんだが……オマエが駅のコインロッカーで言って

た“ハナっから享輪コーポレーションにたどり着けない”って話……まさかとは思うんだが、さっきのグラサン集団と関わりでもあんのか？」
弥富の眼光が鋭く光る。
「ぜ～～んぜん関係ないも～～ん☆　あたし、何も知らないも～～ん☆　あ、掃除用具入れに段ボールがあった！　かぶってみよう……わあッ、桃源郷が見えるゥゥゥゥゥ！！」
分りやすく動揺してる。
「よ～～し、自白しやがったな。浜松軍曹、俺の脳内軍法会議の決定に従い、歯を食いしばれぇ！」
「いえっさーッ！！」
「そして、後ろを向いて股を大きく開けぇ！」
「いえっさーッ！！」
「――――せいや」
どごッ！
「おぉぉぉぉぉ～～ふぅぅぅぅぅ～～……（泣）」
股間に蹴りがクリーンヒット。浜松軍曹、悶絶。股を押さえながら、地面を無残に転がっている。
「さ、さっちん……いくらなんでもそれは……浜やんも一応は女の子なンやし」
「貴様も試すか、出雲兵長？」
「え、あ……いや……のーさんきゅうー（汗）」
出雲、自分の股間を手で押さえながら内股で引っ込む。
「で、連中とどういう関係だ？」
弥富少佐の冷徹な尋問は続く。
「ま、まあ……その～～……お友達？」
涙目で転がる瀕死の浜松が、精一杯の作り笑いを浮かべる。
「嘘だな。絶対に嘘だ。どうせ、俺と同じようにチャットか何かの網にかかった被害者だろ？　『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』だぁ……ただのネット中毒者だろうがッ」

「で、でも……結構、役に立つんだよ。オリジナルＰ・Ｄ・Ｓにハッキングするためには、どうしても電薬管理局内部の人間の手引きが必要だったんで、アイツ等の内の一人に潜入してもらって、なんとか奪取できたんだし」
「……で、その潜入したヤツの現状は？」
「逃亡中に見つかっちゃって、ロープの先を輪っかにしちゃった……てヘッ☆」

おいいいいいいいいいいいいいいいいいいいッッッ！！

ヤベえよ！　リアルだよ！　このクソ女、カワイイ顔して他人様の犠牲を屁とも思ってねえし！
「待てよ。ということは、連中がココに来てるのって……まさか？」
「全員で享輪コーポレーションに行くよう、あたしが連絡したから」
なるほど。家電量販店の地下駐車場ですみす・ブラックにかかってきた通信か……。
「も、もしかして……彼等はいわゆる“囮”でありますか？」
郡山伍長が敬礼しながら問う。
「だってさあ、なるべく警備を手薄にするには、何か別の騒ぎを起こしておくのが常套手段でしょ。アイツ等にも活躍の場を与えてやったワ・ケ・よ★」
「浜やん軍曹……血も涙も無いであります」
出雲も敬礼しつつ、メチャメチャ蔑むような視線を送る。
「いいじゃん、別にぃ！　だって、アイツ等悪党だよッ！　Ｐ・Ｄ・Ｓを違法に改造して、ネット上で無差別に配布してたんだよッ！　因果応報って言葉を知る時が来たってだけだよッ！」
どうやら浜松……いや、深見素赤の人間性が露呈しはじめた。コイツってば、とんでもなくビッチだ。
「確かにお主の作戦通り、騒ぎは起きた。警備の手薄な箇所がいくつか出来たじゃろう……が、そこにとんでもない不確定要素が乱入

してきたようじゃな」
　土佐二等兵が軽く溜息をつく。
「ええ、そうよ。電薬管理局の人間と接触するリスクは、ある程度覚悟はしてた。ここは数ある取引先の一つだし……けど、どうして！？　あたしの勤務先を突き止めるのは簡単だけど、連中が兵隊率いてやってきたってコトは、あたしの生存がバレてるってワケじゃん！！」
　浜松軍曹、とっても悔しそうに歯を噛み鳴らしながら、ポチと作製したメイド・イン・御家庭な毒ガス兵器を手に握りしめた。
「おお～～、ついにやるのか。特攻か。ポチは止めない。さあ、未来への懸け橋になってこい、このビッチめ」
「やらいでかあああああああああああああッッッ！！」
　浜松軍曹、玉砕覚悟。
「今、名簿を検索しましたが、その社員はつい最近亡くなっています」
　電薬管理局を名乗る中年男性に対応していたオバサンが、フロントの端末を操作しながら回答した。
「失礼ですが、アナタは？」
「ここの常務を任されている者です」
「常務、この件は警察機関の了承を得た上で実施されております。どのような事実があるにしろ、我々は捜査の手順に従い行動させていただきます」
　中年男性は厳然とした態度で言い切った。
「分かりました。ところで、名刺か何かお持ちでしょうか？」
「私は電薬管理局・実動課の『宇野（うの）』と申します」
　そう言って男は自分のＩＤを見せた。
「『実動課』？……と、申しますと？」
「ネット犯罪者やサイバーテロリストを専門に逮捕する部署です。管理局が調査・分析した敵性因子を追い詰め、壊滅するのが主な仕事ですよ」

『宇野』と名乗る男はそう言って、後ろに控える軍人達に向き直る。
「これより、ビル内の一斉捜索を行う。各自、所定の持ち場へ移動し、警戒を怠るな！」
――――ザッ！
命令を受けて部隊が素早く散開する。来客者達はどうすればいいのか分らず、ただ圧倒されるばかりだ。
「さて、常務。私はここのサーバー室に用があるんですが」
宇野は何か含みのある表情で呟く。
「申し訳ありませんが、アソコは部外者の立ち入りを禁止されています」
「常務……先程も申した通り、我々は警察機関の了承を得ております。異議申し立てなら裁判所にお願いします」
常務の前に捜索令状が差し出された。
「……分りました。では、こちらへ」
常務は開き直ったような面持ちで、宇野と一個小隊を誘導する。マズイ……極めてマズイ状況だ。弥富一行と行き先がかぶったという事は、連中も浜松と同様の目的があると推測される。そして、もっと差し迫った脅威として……
（うっわッ、ヤベッ！！）
捜索部隊の一人が、男性用トイレに迫りつつあるのだ。さあ、どうする？
「よし、御主人よ。今こそ『段ボール箱』の出番じゃ」
「はい？」
「頭からかぶって姿を隠すんじゃよ」
「お～～い、マジで言ってんのか～～……？」

【段ボール】＝さっき、浜松が清掃用具室の中で発見したモノ。中身は空。表面には大きな文字で『愛媛みかん』。人間一人が隠れられるだけの大きさ。使い方次第では、巡回する敵兵をあざむいた

り、敵地へ安全に潜入できたりするとか。

「すねええええええええぇぇぇぇぇぇぇぇ――――ッッッく！！」

プチ・毒ガス兵器を握りしめたまま、浜松軍曹がよく分らん雄叫びを上げる。

「よく見るんじゃ。無性にかぶりたくなってくるじゃろ？」

「ならねえよ」

「やってみれば分かる！　妙に落ち着くし、かぶらなければならないという、使命感に似た何かを感じるハズじゃ！」

そう言って土佐が実演。リアル・ホームレスにまた一歩近づきつつある。

カッカッカッ……

足音がハッキリと聞こえてきた。最早、躊躇している場合ではない。弥富は段ボールを慌ててかぶり、トイレの隅っこで気配をフェードアウトさせる。

ガチャ――

ドアが開いてやって来たのは体格の良いガチムチ野郎。

（不自然だあ……どう見てもこりゃ不自然だあ……）

今更どうしようもない。前進も後退もできない。後は奇跡が起きるのを待つのみだ。

「……ん？」

ガチムチ野郎が不自然１００％の段ボールに気づく。

（も、もうダメだあ……捕まるんだあ……拷問されて吐かされて、新しい自分が覚醒しちゃうんだあ……！）

弥富、ピンチ。昔、とある偉い人が言っていた――“奇跡は起きるものじゃなく、起こすものだ”……と。

「……なんだ、ただの『愛媛みかん』か。こちら一階の男性用トイレ、クリア。異常無し」

軍人さん、無線機で報告済ませて出て行っちゃった。

（いやいやいや、よく見ろよッ！　ダイレクトに異常事態が落ちて

るだろうがッ！）

奇跡……起してみました。九死に一生を得てみました。ミ〇トさん……奇跡って結構安く売ってるみたいです。

作戦遂行してみよう【一時撤退編】（前書き）

シスター「神よ、人々を救う道を御教えください！！」

神「ググれ」

作戦遂行してみよう【一時撤退編】

段ボールの中で可愛い子犬や子猫が鳴いてたら、そりゃダレだって振り向くし、その場にしゃがんでかまってやるだろう。でもね、トイレの床に不自然に落ちてる段ボールに対しては、どんなリアクションが正しいのか……皆さんは考えた事があるかな？　俺自身の意見としては――

「世界はバカで溢れかえってるな……」

弥富は電薬管理局に属する軍人による捜索を回避し、とりあえず気持ちを落ち着かせようと、洗面所で顔を洗っていた。ヒドイ面をしている……25年生きていて、一番のストレスをここ2、3日で一身に受けてしまった。

「どうじゃ！？　これで段ボールの偉大さが理解できたじゃろ！？」

ジジイ、こだわり過ぎだ。

「ポチもかぶってみるぞ～～」

チャレンジ大好きな無表情幼児が、早速、お試しタイム。

「おお～～、素晴らしいぞう。このいるべき所にいる安心感……人間はこうあるべきだという、確信に満ちた安らぎを感じる～～★」

患者が増えた。

「おい、まさかとは思うが……この状況下でサーバー室に潜入しようなんて考えちゃいねえよな？」

弥富が恐る恐る浜松の表情をうかがう。

「あたしは非常識検定5段ッ、今は6段取得のため勉強中ッ！」

うっわあ～～、コイツってばヤル気だよ。瞳の中に“死んでこいッ！”って書いてあるよ。

（こうなりゃヤケだ……事件に巻き込まれた被害者の底力、見せてやる！）

片手に禁魚入りビニール袋。もう片方にはラップトップ。頭には段ボール……装備完了。これより、弥富少佐の決死の作戦を実行に

うつす。ミッション名・【性欲を持て余す】。
カチャ……
ミッション開始。ザ・段ボールがトイレから静かに、且つ慎重に躍り出る。まずは、エレベーターホールまで行って、そこから地下３階を目指す。
カサカサカサ……
俺は今から巨大なゴキブリ。周囲に立っているのはマネキン。だから、なにも心配はいらないんだ。そう自分に言い聞かせるんだ。できる！　絶対に上手くいく！　こんな所で、こんな状況で、こんな連中と道連れにされてたまるか！
カサカサカサ……
「ん？　何だ？」
早速のエマージェンシー。前進することわずか１０秒で、近くの軍人さんに発見されちまった。掃除の行き届いた綺麗な玄関ホールに、薄汚い段ボールがポツンと一つ……完全にリアクション待ちのフラグが立ってる。
（いや、奇跡は今度も必ず起きる！　トイレに巡回に来たヤツと同様に、コイツ等はどいつも大雑把でアホに違いない！）
弥富、珍しく気合いと自信が体にみなぎっている。またもや奇跡を起こす気だ。　やれる……今の君には、幸運の女神が微笑みっぱなしなのさ！
ガサッ――
「おい、オマエ……何やってんだ？」
いとも簡単に取り上げられる段ボール。
「……ですよねえ～～（汗）」
極限まで引きつる弥富の顔面。おい、幸運の女神……速攻で裏切りやがったな。
女神Ａ：「ゴメン、あたしちょっとコンビニ行ってくる☆」

変な幻聴が聞こえ、直後……
「ちょっと、こっちに来てもらおうかな」
二人の軍人さんに捕まって、ズルズルと引きずられていく。（BGM：『ドナドナ』）
「こちら、玄関ホール。男性用トイレの近辺にて、不審人物を一名確保しました」
軍人さんの一人が通信機を手に取って連絡を入れた。
＜不審人物？　何者だ？＞
「生き物が入ったビニール袋とラップトップを一台所持。段ボールをかぶって床の上をウロついていたところを捕らえました。身体検査もこちらでやりましょうか？」
＜……いや、それはこちらでやる。サーバー室まで連行しろ＞
「了解しました」
そう言って軍人さん達が、親切にもエレベーターまで案内してくれた。しかも、さっきの通信内容から察するに、偶然にも目的地へ連行してくれるっぽいし。すげえよッ、またもや奇跡起こしちゃったよッ！

女神A：「あ、ミスドでドーナツ買うの忘れてた～～☆」

やっぱり変な幻聴は聞こえるが、結果オーライだ。
ガコオォォォォォォォ――
弥富と二人の軍人が乗ったエレベーターが、ゆっくりと地下3階まで下りていく。
（うッ、緊張し過ぎてマジ吐きそう……）
行き先は果たして地獄か天国か？　一体、何が待っているのか？
浜松……いや、『深見素赤』の正体は解明されるのか？　全ての疑問がこの先でハッキリするかもしれない。
ガコンッ――
エレベーターが止まる。配電盤や配管の張り巡らされた無機質な

廊下を歩き、突き当たりの部屋の扉が開けられた。
「課長、連行致しました」
ドアの向こう側は更に無機質だった。５０坪程の部屋には膨大な数のサーバーが所狭しと林立し、その中央にはスパコンのような形状のメインサーバーが建つ。そして、メインサーバーにノートＰＣをつなげて作業する宇野と、スーツ姿の数人のエージェントが立っていた。
「御苦労、こちらで引き取ろう」
弥富はパイプ椅子に座らせられ、エージェント達が左右と背後に立つ。まるで、秘密組織に拉致され、拷問一分前な雰囲気だ。
「さて……」
宇野は作業を一時中断して弥富の方に向き直った。
「課長、コレはもしや……？」
エージェントの一人がビニール袋を取り上げ、宇野の前に差し出す。
「ふむ……青年よ、おもしろいモノを飼っているな。『禁魚』は禁制ペットであり、その所持や飼育、あるいは売買といった行為は法律で違法となっている。知らなかったのかな？」
宇野はバカにするように軽く鼻で笑い、ビニール袋を人差し指で突っついた。
「で、君は何者かね？　見たところ……この会社にオフィシャルな用事のある人間とは思えんが」
外見――半袖Ｔシャツ・短パン・ビーサン。背中にリュック……正面玄関の警備員、何で止めなかった？
「……」
弥富は黙秘するしかなかった。当然だ。何て言えばいい？　電薬管理局から指名手配されている深見素赤の正体を探るため、このサーバー室に侵入するつもりだったと？　そもそも、うちのアパートにやって来て、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓを奪取しようとした例の男の件もある。アノ男が電薬管理局の関係者である可能性が高い以上、

ここでヘタな話はできない。
「課長、リュックの中にコレが」
身体検査をしていたエージェントの一人が、ポータブルＨＤを発見して宇野に差し出す。
「青年、中身は何だね？」
「……」
「……結構。何か身分を証明する物は見つかったか？」
「いえ、免許証や健康保険証の類いは所持していません。サイフの中身は……よく分らないポイントカードで一杯です。後、こんなモノが……」
そう言って手渡されたのは、とってもアニメチックなデザインの冊子。ヤバイ。『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』からもらったヤツだ。捨てずに一応持っていたのが、ここでまさかの仇となった。
「ほほう、愉快な物を持っているねえ。『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』？
はっ、連中も懲りないな。片っ端から逮捕しても、ゴキブリみたいに湧いて出る……実に不愉快だよ」
ええ、俺も同じ気持ちです。つーか、アンタ等が来る直前に、まとめて警備員にどっか連れてかれましたけど。
「課長、ポイントカードの記入が正しければ、彼の名は『弥富更紗』。住所は……ん？」
エージェントが眉をひそめた。
「どうした？」
宇野がエージェントの側に寄り、ポイントカードを手に取って凝視する。
「……弥富君。今日、君と我々がここで鉢合わせたのは偶然ではないようだな。『オリジナルＰ・Ｄ・Ｓ』はドコだね？」
やっぱりだ……不正インストールした事実がバレている。くそッ、なにが生体防火壁だよ……ダメじゃん！
「……あ、あの～～」
「何かね？」

「正直に喋れば解放してもらえますか……？」
このままでは確実に懲役刑をくらう。ニート予備軍のまま人生の終焉を迎えたくはない。
「まあ、君の態度次第……だな」
宇野の表情が一層険しくなった。
「実は……」
弥富は洗いざらい正直に白状した。ここ2、3日に起きた出来事――深見素赤の葬式と、そこで入手したポータブルＨＤ。禁魚とオリジナルＰ・Ｄ・Ｓの関係性。そして、一般人に毒ガスを撒き散らしてまでポータブルＨＤを強奪しようとした、深見素赤の父を名乗る男の事も。
「深見素赤の父？　その男はそう言っていたのかね？」
「え、ああ……はい」
一瞬、妙な空気と間が生まれた。宇野は踵を返すと部屋の隅まで歩いて行き、手招きで常務とエージェント達を呼ぶ。
（な、何だ……？）
ヒソヒソ会議が始まった。弥富としては不安になることこの上なしだ。そして、数分後……。
「弥富君、まずは結論から言わせてもらおう。まず一つ。当然、君のポータブルＨＤと四匹の禁魚は没収させてもらう。二つ目。自宅のネット環境をこちらで遠隔制御させてもらう。で、三つ目だが……」
そう言って宇野は一人のエージェントに合図した。弥富の真横に女性が一人起立する。シワ一つないスーツをビシッと着こなす、ポニーテールの黒髪の女だ。年の頃は弥富と同じくらいだろうか、夏だというのに真っ黒い皮手袋を装着している。
「２４時間体制で監視をつけさせてもらう」
「えッ、そんな……！」
「いいかね、弥富君。本来なら、一連の君の行為は情報規制法に十回以上抵触している。腕利きの検事なら、１５年は君を刑務所にブ

チこんでおけるくらいの罪状だ。そこのところをしっかり考慮してもらわんと」
「……はい」
文句の言える立場ではなかった。半分は被害者であるが、禁制ペットをネット通販で入手し、オリジナルP・D・Sを無許可で使用した事実に変わりはないのだから。
「では、簡単に紹介しておこう。君の監視役を務める『津軽六鱗（つがるろくりん）』だ。仲良く頼む」
マジですか……。弥富は真横でビシッと起立する相手の顔を、チラッと盗み見る。
（……うわ～～、お友達にはなりたくねえ～～……）
細面で端整な顔立ちをしているが、見事なまでの仏頂面だ。仕事に生きて仕事に死すみたいな空気が滲み出ている。
「あ、あの……監視ってどのくらいの間ですか？」
「もちろん、君の身に起こるであろう脅威が完全に去るまでだよ」
「……脅威？」
「ああ、そうだ。津軽には監視と同時に警護も兼任してもらう。言いたい事が解るかな？」
「いえ……」
「要するに、君のアパートを襲撃したという男は、電薬管理局の関知していない立場にある相手だという事だ」
つまり、深見素赤の父を名乗っていたアノ男は、電薬管理局とは無関係だと？
「実は、君のアパートの住所を知っていたのは偶然じゃない。つい先日、匿名の情報提供があってね……このポイントカードにある住所に、電薬管理局のメインサーバーへハッキングをしかけたハッカーがいる……とね」
げッ、コレってもしや……複雑な事件に巻き込まれるフラグですか？
「我々『実動課』としては、裏のとれない情報に振り回され行動す

るワケにはいかない。が、そのハッカーがこの『享輪コーポレーション』の社員で、本日、何だかのサイバーテロを画策している……そう言及された。そして、その社員の名が『深見素赤』。しかし、常務がおっしゃるには、その社員は既に死亡していると。しかも、不動産リストを調べたが、匿名の情報にあったのは弥富君の住所で深見素赤のものではないと、先程、判明した」

どうやら、電薬管理局側は深見素赤の生存（？）を知っているワケではないようだ。

「ポータブルＨＤはこちらで管理するが、今後、君の身に同様の事件が発生する可能性は高い。充分注意してくれ」

「それで……俺は具体的にどうすれば？」

「悪いが、基本的には自宅軟禁だ。外出すれば、襲撃されやすくなるからな」

自宅軟禁か……ま、今までも自発的に引きこもってたし、大した違いはない。ただ、ちょっぴり変化したのは、“話し相手”を失った事ぐらいか。

（すまないが……サヨナラだ）

弥富は部屋のテーブルに乗せられたビニール袋を見つめる。魚類が四匹……大人しく漂っている。決して人ではない。ずっと口論したり、バカに付き合ったりした連中は、決して人ではないのだ。だから、気にすることはない……いつも通り、俺は一人ぼっちに戻るだけなんだ。

「では、津軽。彼のことは頼んだぞ」

「了解ですわ、課長」

弥富と禁魚達の無茶な作戦が、ここに完結した。結果は――任務失敗。そして、彼と禁魚達の関係も、ここに自然消滅を迎えてしまった。

新生活を始めよう（前書き）

シスター「神よ、今夜はクリスマスの聖夜を祝いましょうッ！」

神「リア充、爆発しろ」

新生活を始めよう

「諸君、残念ながら目標の回収は失敗に終わった」
一人の男性がＰＣのモニターに向かって呟いた。
＜失敗？　プロの傭兵に整形手術までさせたと聞いたが……＞
別のモニターから声が返ってくる。
「ああ、そうだ。肉親や周囲の知人に違和感を持たれぬよう、数ヶ月かけて訓練もさせた」
男性は薄暗い部屋の中で三台のカメラ付きノートＰＣに囲まれ、椅子に腰かけている。
＜まさかの失態だねえ……当局に嗅ぎつけられるのは時間の問題かしら？＞
＜それより、この計画に出資した分を迅速に回収せねば！＞
＜事が表面化する前にぃ、身辺整理を進めた方がいいかもしれないクマ～～＞
各ノートＰＣのスピーカーから不平不満が飛び交いだす。
「諸君ッ、まだ計画は終わっていないッ！」
男が俯きながら一喝し、各自が声を潜める。
「先兵との連絡が途絶し、行方不明なのは認めよう……しかし、当局に拘束されているとしても、我々の関与に繋がる情報は与えていないし、偽の個人情報は一通り設定済みだ。次の計画に支障は無い」
＜次の計画？　……予備プランがあったなんて聞いてなかったが＞
一人が不愉快さをあらわにする。
「黙っていた事は謝ろう。大事の前の情報漏洩を避けたかったんでね」
＜我々の出資が無駄にならない保障は？＞
「物的な提示を今すぐしろと言うのなら、無理だ。これまでと同様、私の言葉を信じていただくしかない」
＜……いいだろう。で、計画の内容は？＞

「享輪コーポレーションに潜伏させてある内通者からの情報によると、オリジナルP・D・Sは電薬管理局の実動課に回収された。この件で、当局のメインサーバーはより強固なファイアー・ウォールで守られ、外部からのハッキングは十中八九不可能……となれば、別の人間に仕事を請け負ってもらうまで」
＜別の人間？　実動課に内通者はいないハズよねえ……＞
「連中は『深見素赤』の捜索も並行して実施している。ある程度真相が露呈してしまえば、アノ女はイヤでも動かざるをえなくなる。そこを我々が利用する」
＜深見素赤？　……ヤツは死んだと聞いているわ＞
＜ああ、確かにぃ。こちらでも裏をとったクマ～～＞
「いいや、アノ女は生きている。まあ、厳密に“人間”として生きているワケではないが、ヤツは死亡証明書と戸籍データを改ざんして身を隠しただけだ」
＜それが事実だとしてぇ、どう利用するクマ？＞
「保管されている深見素赤の『肉体（バックアップ）』を奪取する」
男は口元を歪めながらそう言った。

「……」
弥富更紗は戸惑っていた。西日がギラつく炎天下の中、自分の背後をさっきからずっと女が一人……追跡しているから。紺色のフォーマルスーツ姿で、この暑さにも関わらず何故か両手には真っ黒な皮手袋。ほとんどパンダ目気味のやたらと濃いアイシャドウが特徴的で、黒髪のポニーテールを揺らして一言も発することなく、彼の２m程後ろを機械みたいに正確に距離をとって歩いている。御近所の奥様方から「まあッ、不審者よッ！」と声がするのは時間の問題っぽい光景だ。
（俺、マジでどうなるんだ……？）
また襲撃される可能性が高いだって？　どう頑張っても絶望しか見えてこない。そろそろ銀行口座の蓄えも底をつく。アルバイトで

も探さないと……そんなタイミングで生命の危機みたいな状況が訪れるなんて。父よ母よ、実家で飼ってるオウムよ――無力なまま人生をムダに漂流する息子を御許しください。後、米でも送ってください。反省して自炊します。

「ロクデナシ。ミズデモノンデロ」

またしてもオウムの幻聴がした。たまには実家に帰れという、天の軽い啓示なのかもしれない。で、そんな物思いにふけってる間に自分のアパートに到着した。築１８年・鉄筋コンクリートの２階建て。８畳フローリングの１ＬＤＫでＵＢ付き。月の賃貸料は６万円。そして、夕暮れの中なんとか帰還した我が家には――

「アイツ等……」

エアレーションの泡だけがブクブクと音をたてる、水だけ入った四つの水槽がポツンと残されている。弥富は数秒間、何も出来ぬまま立ち尽くした。わずか数日の事ではあったが、禁魚達の言動が彼の脳裏を駆け巡った。友達を失った感覚とは違う……何か生活の一部を失ったような不可思議な感覚だ。

（ん……？）

ふと後ろを振り返ると、さっきまでストーカーみたいに背後からついてきた、電薬管理局・実動課のエージェント『津軽六鱗』の姿が消えていた。玄関戸を全開にしたままで。

「ふぅ……」

弥富は玄関戸を閉めて軽く溜息をつき、デスクの椅子に腰かける。彼女は監視役と言っていたから、おそらく、近所を巡回したりしているのだろう。それにしても、２４時間体制で監視？　つまり、彼女を含めて数人でシフトを組んで、アパート周辺に見張りとして立つ……そんな状況だろうか。

（はあぁ～～……こんな事になるんなら、Ｐ・Ｄ・Ｓのバックアップをとっとくべきだったなあ～～……）

彼はとっても残念そうに目頭を押さえながら、デスクトップを立ち上げる。まあ、コピーしていた事が後でバレたら、更に罪状が上

乗せになるんだけどね。
――――ポ～～ン♪
モニターに展開するファイルが一つ。やたらとメモリを使用しているが……俺、何かダウンロードしてたっけ？
『発行元――電薬管理局・開発課』　『名前――Ｐ・Ｄ・Ｓ』
「はいりゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああ――――ッッッ！？」
弥富、絶倒。生まれて初めてな声を絞り出しちゃって、開いた口が塞がってくんない。
（な、何でッ！？　マジかよ……いつの間にッ！？）
バックアップのための操作をした覚えはない。となれば、デスクトップにポータブルＨＤをつなげると、自動でコピーを作成する仕様なのか？　と、とにかく落ち着くんだ、俺。姉歯物件並みに耐震強度不足なハートが、今にも崩壊しそうだ。
キョロキョロ……キョロッ……
弥富は自分の家なのに、空き巣に入ったみたいな気分に陥り、周囲が気になって仕方がない。タイミング良く監視役のエージェントはいない……よし、今すぐ外付けのＨＤにコピーしてやる！
「……いや、待てよ……」
彼は水槽の方に振り返る。そうだ、禁魚達は没収されたんだった。インカムならアキバの中古屋ですぐに手に入るが、話したい相手はもういないんだった。
（腹減ったなあ……）
またもやテンションがダウンした弥富は、とりあえず外付けＨＤにバックアップをとり、冷蔵庫を開けて中を見る。中身はビタミン剤と脱臭剤だけ……“もう少し頑張りましょう”のシールが進呈されそうだ。
「……禁魚のエサって、人間にも食えるのかな？」

──ッて、オイ！　しっかりしろよ、俺！　鬱の症状が見え隠れしているぞ……。
「決めたッ、今夜は断食ッ！」
弥富は自分にそう言い聞かせ、窓から外を眺めた。夕日が強烈な紫外線を攻撃的に浴びせてくる。通学路の方から、家に帰る学生達の喧騒が小さく聞こえてくる。この世はとりあえず平和である。“問題”ってヤツは、いつも世間が目にしない局所より発生する。その『局所』の役がたまたま自分だった……それだけの事だ。
バサッ──
弥富はＵＢの扉を開け、服を脱いで洗濯機に投げ入れる。軽くシャワーを浴びて、汚れと煩悩の残り香を洗い流すとしよう。そうやって、明日も惰性で生きていこう。
ザアアァァァァァァァァァァ～～～～！
どうでもいい事だが、弥富は湯船には滅多につからない。いつもシャワーで済ませる。空の湯船に立ち、ぬるま湯を頭から大量に浴びる。そうすると気分が良い。マイナスイオンでも出ているのかな？
カチャ……
（んッ？）
音がした……ような気がした。
カチャ、カチャ
（んんッ！？）
ハッキリと聞こえた。ＵＢの外からだ。これってまさか……玄関戸からか！？
ガチャガチャ！　ガチャガチャ！
（うおッ、マジかよ……！）
玄関戸の鍵をダレかがピッキングで開けようとしている。なんてことだ、電薬管理局が言っていた“襲撃の可能性”が、言ったその日に現実のものとなった！　マズイ……こっちは丸腰、って言うか丸出しだ。しかも、逃げ場は無い。
カチャン……バタンッ！

（うおお～～！　やっべええ～～！）
鍵がこじ開けられ、玄関戸が閉められる音がした。明らかに外からの不法侵入者だ。畜生が、こんな時に“監視役”はドコ行きやがった！
「………ッ」
現状の弥富に出来るのは、その場に立ち尽くして息を潜めることぐらいだ。１ＬＤＫの狭いアパート、目標を探し当てるのに時間はかからないだろう。
ガッ――
ＵＢの扉に手がかけられた。後は軽く引っ張ってしまえば、中で怯え身動き一つとれない全裸の弥富と御対面……
「――――ん？」
「………よし」
“よし”って……おい。容赦なく開けられた扉の向こうに、エージェント・津軽が立っているんだが。色々とツッコみたい箇所はあるけど、とりあえず閉めていただけますか。ですからね、俺って今、入浴中ですよね？　分かりますよね？　あの～～、ですからね、なぁ～～んでこっちをジッと見つめていらっしゃるのかな……。しかも、彼女の視線が微妙に上下しているし。コレってれっきとした逆セクハラに認定されるよね。

「ちょっとおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお――――――ッッッ！！」

弥富が顔面を真っ赤にして身をよじる。
「心配せずとも、ただ安全を確認しているだけですわ」
彼女は大したリアクションも無く、淡々とそう答えた。
「いや、あの……とにかく、閉めてもらえますか……」
他人様に見せたい肉体は、あいにく持ち合わせちゃいないもんで。しかも、股間のタートルネックが御挨拶しかけてるもんで。どうも

スミマセン、ひとつウエノ男じゃなくて。
「そうですか。では、わたくしはリビングで待機していますわ」
バタン――
扉が閉められる。
（まただよ～～……また変なのが増えたよ～～……）
弥富更紗、２５歳にして何か大切なモノを凌辱された。そんな気持ちで一杯になった記念日。

ダメな自分を改善しよう（前書き）

シスター「神よ、迷える子羊を引きこもりから救い給えッ！」

神「放火しろ」

ダメな自分を改善しよう

現実世界にエロゲーの理論は存在しないし、通用もしない。だから、全国の2次コンやネット中毒者に告ぐ……今、風呂上がりの俺の目の前に、同い年くらいの女性がいます。目つきはちょい怖いけど、清潔感のある結構な美人さんです。ただし――

「では、わたくしは監視を続行いたしますので、弥富殿はおやすみくださいまし」

「は、はあ……」

ドコか変なのです。しかも、まだ時間的に大のオトナが就寝しちゃうには早過ぎだし……。

「あ、あの～～……ネットしててていいですか？」

「ええ、かまいませんわ」

ネットサーフィンは俺のライフワークだ。無職が誇る唯一の仕事……いや、使命だッ！心の中でそう強く主張してみた。軽い優越感に浸れるから。そして、履歴から動画閲覧サイトを……

（いや、待てよッ！）

危うく失念するところだった。自分のネット環境は電薬管理局の実動課によって、遠隔制御されているんだった。だが、具体的にどんな制限がつくのだろう？　気は進まんが、早速、関係者に聞いてみよう。

「あ、あの～～……」

「何かしら？」

「俺のネット環境って、おたくの課長さんから遠隔制御するって聞いたんですけど、要するに……何がどうなるんでしょ？」

「心配はありませんわ。どんなサイトにアクセスするのか、どのようなダウンロードがされるのか、逐一監視するだけでＰＣの機能に実害はありませんもの」

いやいやいや、それって精神的な実害が丸出しだよ！　俺のプラ

イヴェート（恥部）が情報機関に丸出しなんだって！
（す、すんげぇやりにくい……）
男、２５歳。一人暮らし。まだ若くて男性ホルモンも正常に分泌する身体なら、アクセスするサイトはどうしても年齢認証が必要なサイトに偏る。こ・れ・必・然。で、その様子を実動課が逐一監視って……そっちの趣味があるＭっぽいヤツなら一興かもしれんが、俺はマジで御遠慮願いたい。
カチカチッ――
しばらくは辛抱だ。一生続くワケじゃない。ここは監視されても問題のない、海外のアニメダウンロードサイトを巡回して暇を潰そう。
「……」
沈黙の作業。背後に控えているであろう、監視役の女が気になって仕方がない。そもそも、自分の家に異性が踏み込んでいる事実が信じられない。母親すら招いたことのないこの部屋に、大して素性も分からない若い女性と二人っきり。弥富のリアルに対する脆弱な免疫が、「恋愛の神様・仏様・加○鷹ッ助けてぇ～～！」と叫んでいる。それにしても、この人……いつまでそこで見張っているつもりだ？　俺が就寝するまで帰らんつもりか？
（と、とりあえず……空気が重い……）
やはり、ここは場の空気を多少でも和ませるために、世間話の一つでもするべきなのか。ここの家主である俺から話を振るべきなのか。
「と、ところで……津軽さんはこの仕事長いんですか？」
勇気を振り絞って質問タイム。
「いえ、まだ半年程ですわ」
「そ、そうなんですか。それにしては結構さまになっているというか、手慣れた感じというか……」
「以前の仕事でＳＰを務めてましたの。ですから、情報機関での実動任務には戸惑いはありませんわ」

「『ＳＰ』って……政府要人とかＶＩＰを護衛するアレですか？」
弥富が普通に驚く。
「ええ。わたくしは、とある国営企業の支配人が組織したチームの一人でした。今となっては企業は解体され、チームの仲間は方々に散ってしまいました。わたくしは、たまたま経歴が電薬管理局の目にとまり、正規のエージェントとして雇われましたの」
彼女の声のトーンが微妙に落ちた。何か……他人には話しにくい事情でもあるのだろうか。
「スゴイですね。俺と歳もそう違わないんでしょ？」
「今年で２６になりましたわ」
うわぁ～～……やっぱりだ。一つ違いのオネーサンは、国の情報機関に勤める立派な職をお持ちなのに対し、俺はハローワークに行く事すらためらっているミスター・凡庸。ああ、そんな真っすぐで純粋な切れ長の瞳で俺を見ないで……そうさ、俺は社会の不適合者だよ。不燃物だよ。マウスをカチカチしながら電力を消費するのが仕事だよ。
「そ、それはそうと……他の監視役の人はドコに？　外で張っているんですか？」
弥富がおもむろに質問してみた。
「いいえ。わたくしだけですわ」
――――――――――――は？
「２４時間、わたくしがアナタを監視致しますわ」
――――――――――――へ？
鏡で見たら自分自身でも引くくらいのマヌケ面になる。
（な、何を言って……？）
俺ってさあ、次に襲撃される可能性が高いから、監視役と護衛を兼ねたエージェントがつけられたんだよね？　なのに……御一人？
ファミレスの従業員じゃなくてもイヤな顔になっちゃうよ。
「あの～～、別に津軽さんの個人的な力量を疑うワケじゃないんですけど、一人で大丈夫なんですか？」

別の言い方＝「いや、無茶だろ。適当過ぎるだろ」
「問題ありませんわ。情報不足のため、当面の脅威がどれ程のレベルかは解りませんが、警護のための訓練は以前の職場でも一通り受けてますの」
「そ、そうですか……」
ド素人が文句をつけるべきではないのだろうが、正直、強そうには見えない。身長は自分と同じくらいで、ガリガリとはいかないが、明らかに細身で目立った身体的な特徴は確認できない。スーツの内側に銃器の類いを常備しているのか？
「やっぱ、警護の仕事となると、拳銃とか使うんですよね？」
「いいえ。わたくし、無粋な飛び道具は趣味ではありませんので、携帯しておりませんわ」
……はい？　まさかの無手？　俺に対する脅威とやらが再発した時、一目散に撤退する彼女の姿を目撃させられるのか？
（ネットの神よ、俺の残された寿命が分かるなら、そっと耳元で囁いてくれ）
ネット神：「そろそろ死ぬよ★」
「いやだあああ

彼女は優しい声で気遣ってくれた。
「は、はい……じゃあ、そうさせてもらいます」
一日の内にあまりに多くの突発的な事件が発生して、すっかりテンションが高ぶり過ぎていたのだろう。ちょっと気を抜くと、一挙に疲れがやってきた。今日から始まってしまった特殊な生活ペースをこなしていくためにも、メンタル面を意識的に療養させておくべきだ。
(寝よ……雑念は捨てて、寝ちまおう)
弥富はデスクトップの電源を落とし、就寝用のTシャツと短パンに着替え、玄関戸の鍵をしっかりかけてカーテンを閉める。連日の熱帯夜なもんで、エアコンを一時間後に切れるようセット。
ドサッ——
彼の体がベッドの上に力無く横たわる。照明のヒモを引っ張って、部屋の中は闇を纏った。カーテンの隙間から差し込んでくる三日月の光が……光が……ひ、かり——
「ひぃいいいいいいいいいいいいいィィィィィィィィィィ————————ッッッ!?」
月明かりに照らし出されたエージェント・津軽が、床に正座してこっちを静かに見てやがった。弥富は派手に跳び上がり、女の子みたいに掛け布団を抱いて壁を背にする。
「どうかなさいまして?」
「どうかなさいましたッ!!」
混乱のあまり文法がおかしくなる。無理もない。あまりに部屋の中で自然な感じだったので、気付かなかった。そういやこの人……まだ居るじゃん。しかも、薄闇の中、寝ようとしている相手を無言で見てるんだもん。心臓様のバクバクが御いたわしいコトになってるよ。
「い、一体……何をやってんですか!?」

「監視ですわ」
彼女は事も無げに言った。
「……いや、あの～～」
「何か支障でも？」
はい、あります。まずはアナタの一般常識に。
「ええっと～～……この際ですので、ハッキリさせておきたいんですが」
弥富には「そんな、まさかなァ～～（笑）」……みたいな予感が順番待ちしていた。ですんで、対象となる相手を目の前にして、直に聞いてみた。
「もしかして、俺の部屋に住む気ですか？」
「いいえ、２４時間体制で監視するだけですわ」

・　・　・

結論＝この女の病名は『常識欠落症』。
原因＝知りません。
治療法＝ブラッ○ジャック呼んでこい。
（ヤベぇよ、真性だよ……言葉に迷いがねえよ……）
Q．ネットの神よ、俺、２５歳にして初めて異性と一つ屋根の下、一晩過ごそうとしています。けど、相手の女は明らかに変です。こんな時、どうすればいいのでしょう？
A．「あ、ヤベッ。ＴＳＵＴＡＹＡにＤＶＤ返しとかねえと」
ネットの神……逃げた。

買い出しするため街に行くよう【前編】（前書き）

シスター「神よ、私は年若く美人なシスターなんて、実物で見たことありませんッ（作者談）！」

神「逝きたまえ、2次元の向こう側へ」

買い出しするため街に行くよう【前編】

カァカァ……カァカァ……

カラスが鳴いています。つまりは、新しい朝がやってきたワケです。これが都会の世知辛い朝……ニワトリもスズメもいません。彼等、真っ黒で不吉な害鳥によって生ゴミが荒らされる瞬間から、俺の住むアパートでの朝は始まるのです。しかも、夏場なもんで日の出が早く、夜型の生活を営む俺としては、あまりありがたくない仕打ちなのであります。

で――

（……ん？）

デスクの椅子に腰かけた人物が一人……そうだ、“彼女”が居たんだった。昨晩から俺の身に降りかかった罰ゲームの一種だ。“綺麗なオ姉サンと一晩過ごした”……そう言えば、世の童貞共はあらん限りの妄想をフル活用するだろうが、才能の無駄遣いになること請け合いだ。決してハートがときめきメモリアルになる事はないし、甘酸っぱい期待感などお呼びでない。俺はしばらく寝付けなくて、時々、床でキチンと正座して監視（？）役をこなしている津軽さんをチラチラと見ていたが、彼女は微動だにせず、まるでオブジェみたいに佇んでいた。マジで……怖かった。正直、眠気に誘われて目を閉じたが最後、永眠させられるんじゃねえかと錯覚するぐらいだった。

「あ……オハヨウ……ございます」

弥富が弱々しい声で挨拶する。

ガタッ――！

（えッ――！？）

津軽はビクッと全身を小さく震わせ、デスクトップの主電源を素早く押して強制終了した。そして……

「はい、おはようございます（汗）」

微妙に引きつった笑顔で御挨拶。明らかに、彼女にとって何か不都合な事が起きたみたいだ。
「あ、あの～～……何をされてたんですか？」
家主としては当然聞いておくべき状況だ。
「あ、ああ……え～～、さっきのは実動課への定期報告ですわ。何も問題はありませんことよ」
いや、見るからに挙動不審ですよ。顔面に「ウソだよ～～ん☆」って書いちまうより分かりやすいし。おそらくは、ネット環境の遠隔制御とやらに関係しているんだろうが、あまり深く追究して、余計な火の粉が降りかかってくるのはイヤなんで、頭の中のメルヘンボックスにでも片付けておこう。それはそうと……
「それにしても、ずっと起きてたんですか？」
もっともな疑問だった。監視役は彼女一人だけ。つまり、２４時間体制なのだから、睡眠中の俺を護衛する役目も彼女一人なワケで。
「ええ、わたくし睡眠はとりませんの」
「……は？」
妙な事を言い出した。
「わたくし、脳髄が先天性の奇病を患っておりまして、産まれてから一度も睡眠をとった事がないのです」
「えッ……それって、体は大丈夫なんですか……？」
「もちろん、普通なら乳幼児の頃に死亡しております。わたくしは、薬物療法でなんとか命をとどめている状態でしたわ……最早、安楽死という選択しか残されなかった時、当時の政府でとある臨床実験の被験者が募集されていたのです。新発見された特殊なタンパク質を注射するのですが、どうせ死を待つだけの身ならと、わたくしの両親は決意したのだそうです」
「じゃあ、そのおかげで回復したんですね」
「残念ながら、奇病の原因となった中枢神経の遺伝子異常までは回復しませんでした。なんとか延命に成功は致しましたが、完全な不眠である事に変わりはありませんし、以前の職場の支配人からは、

３０歳まで生きられるかどうか分からない……と、言われましたわ」
「え、そんな……」
朝一番でものすごく重い話を聞いちまった。津軽さん本人は軽く苦笑いしたりしているが、俺なんかが気軽に干渉したりできる人生ではない。本日はあまりイイ一日にはなりそうにないな。
「では、弥富殿。今日はドコかへ外出される予定などはありまして？」
「そ、そうですね……」
一人暮らしのニート予備軍に、一日のスケジュールなどあるハズもない。その日暮らしもいいところな生活なんだし。ただ、昨晩は絶食してしまったので、やたらと空腹を覚えている。
「まずは何か食べたいです」
「分かりましたわ。では、支度が出来次第、アパートの前までおこしくださいな」
彼女がそう言うもんで、弥富は簡単に外出の準備を済ませて、アパート前にある月極め駐車場まで行ってみた。
（マジっスか……？）
一台のジープの前に津軽が立っていた。まさかの送迎車だ。
「わたくしが運転致しますので、目的地をおっしゃってください」
一気に生活水準がレベルアップしたような気がした。コレって結構なＶＩＰ待遇じゃねえの？　俺って、もしかして貴重な存在になってんの？
（ふ〜〜む、目的地か……）
残念な事に、弥富の地理的なキャパは貧困そのもの。というワケで――
「アキバの街まで御願いします」
彼はそう言ってジープに乗り込んだ。
〔アキバ電気街〕――国内屈指のオタク街。大型量販店や大手家電メーカーがひしめき、ほとんどの電子部品や家電製品が手に入る。

特にＰＣやアニメ・ゲーム・同人系のジャンルに特化し、合法・違法を問わず、マニアックな欲求を満たしている。そして、一番の特徴は……

「気のせいでしょうか、男性の通行者ばかりいますわね」

「いや、気のせいじゃないっス……コレが真実っス」

弥富が申し訳なさそうな声を漏らす。彼等はアキバ駅前のコインパーキングにジープを停めて、周囲をキョロキョロしていた。津軽としては、全く慣れ親しみのない街に対する警戒に近いモノがあって。弥富としては、フォーマルスーツを纏った美人さんと一緒に居る状況が、街のオタク達にどう見られるか気になって。

「あら、アレは何でしょう？　珍妙なデザインの自動車が駐車してありますわ」

そう言って津軽が指差した先には――

（うわ～～、あんま説明したくねえ～～）

痛車発見。コイツに関しては塗装されたキャラクター云々よりも、金のかかる塗装して、アキバの駅前にこれ見よがしに駐車しとく持ち主の神経自体が痛い。

「と、とにかく、行きましょう……ここって駐車料金カナリ高いですし」

「心配ありませんわ。実動課より特別予算が組まれておりますので、金銭的には余裕がありましてよ」

「えっ、そうなんですか？」

いまいち事件に巻き込まれた感が薄弱だったので、普通に驚いた。自分みたいな社会の底辺一人に、情報機関が予算を捻出してくれたなんて……いや、別の言い方をすれば、今回の事件の重要性や危険性が高い事を意味しているのか？

二人が大通りを歩き出す。この街ではカップルの楽しそうな往来は御法度。これ、暗黙の了解。なのに、こんなカップルはいかかでしょう？

男性＝使い古された半袖Ｔシャツ・ヨレヨレの短パン・いつ洗っ

たか覚えてないスニーカー・戦利品収納用リュック。
女性＝シワ一つ無いブランドスーツ・ピッカピカのピンヒール・瀟洒なクラッチバッグ。……事情を知らない連中が見れば、キャッチセールスに捕まったバカ一名連行中。そんな風にしか見えない。
「あ、津軽さん。ここに入ります」
「……ここは何の御店ですの？」
彼女にとっては周囲の光景やら空気全てが初体験で、メイクの濃い瞳がやたらと動いている。そして、弥富に誘導されてやって来たのは……
「ファミレスです」
弥富は普段から一人でも平気でファミレスに入る。カップルや子連れの家族達が笑顔で食事を楽しむ中、ドリンクバーだけで平気で数時間過ごせられる。そんな常連である彼を長年見てきたウエイトレスは言う……「アノお客さん、去年のクリスマスから年末・年始にかけて、ほぼ毎日来店されてました。正直、涙で会計伝票が見えなかった日もありました」……と。
「さぁ～～て」
自分の縄張りに腰を据えた弥富は、安心感で顔がほころぶ。彼の数少ない安息の地。まずはやっぱりドリンクバー。
「……」
メニューに目を通す津軽が沈黙。何か困惑しているような。
「津軽さん、さっき言ってた予算って食費も込みなんですよね？」
「……あの、弥富殿……ここは本当に食事のできる御店なのでしょうか？」
「え、あ……はい。ファミレスなんで」
当然のように答える弥富に対して、津軽の方はなんかメニューを睨みつけて首を傾げたりしだした。
「もしかして……ファミレス、初めてですか？」
彼女の妙な雰囲気に気付いて小さな声で聞いてみた。
「ええ。わたくし、基本的に外食は緊急時以外しませんので。しか

も、これほど多人数が同じ空間で食事をとる場所など、任務の際ですら入った事がありませんの」
うわ～～……本当にいるんだ、こんな人って。生まれつきの奇病で特殊な人生を送ってきたのだから、やはり、食事一つとっても一般人とは違うんだ。
「じゃあ、俺が適当に津軽さんの分も注文しちゃいますね」
「ええ、御願いしますわ」
弥富は呼び出しボタンを押し、すっかり顔見知りになったウエイトレスに一通りの注文を済ませ、席を立った。全く勝手の分からない津軽に代わって、ドリンクバーの飲み物を取りに行く。
（やっぱ、完璧な人間なんていないよな）
彼はコップに氷を入れながら、軽い安心感みたいなモノを感じて微笑んだ。自分と大して歳の変わらぬ女性が、情報機関でＳＰの任務についている。最初は自分との社会的立場の違いに萎縮してしまった。さほど無い余命を告知されながらも、懸命に任務に準じる彼女の姿勢に畏怖の念すら覚えた。が……人は決して万能には出来ていない。どれほど些細な欠点であっても、その存在こそが人間らしさを定義する。
「おッ……」
炭酸飲料を注いだコップを二つ持って、席に戻ろうとした弥富が偶然目にした自然な光景――向かい側の席で食事を楽しむ家族と、その様子を何か気持ちの良さそうな笑顔で見つめる津軽。ドコにでもいそうな夫婦と、一緒に談笑する小学生くらいの可愛らしい男の子……実に他愛無い光景。
「はい、どうぞ」
「あ……ありがとうございます」
彼女の前にコップを差し出す。少しハッとしながらコップを手に取り、中身をしばらく見つめたりする。父よ、母よ、俺……もしかしたら初の女友達が出来そうです。
「チョウシニノルナ。クソガ」

オウムの幻聴はやっぱ聞こえちゃうんだけどね……。

買い出しするため街に行くよう【後編】（前書き）

シスター「神よ、悪魔の力を退け給えッ！」

神「時給８５０円で」

買い出しするため街に行くよう【後編】

天気はとっても快晴。空気はいつも通り野郎臭が充満しているが、本日の俺は――なんだか気分が良い。って言うか、生まれて初めての優越感に浸っていた。ファミレスで朝食兼昼食を済ませ、日用雑貨の買い出しを始めた俺の傍らには、一人の女性が毅然として立っている。どう見ても、この街をウロついている連中とは別次元の服装と雰囲気。しかも、他の通行人とは違う理由で周囲に目線を張り巡らせ、真剣な表情でゆっくりと歩を進めている。

「あの～～、大丈夫ですか？」

「ええ、今のところは。物理的な脅威は発見されてませんわ。ただ、あまりに人間の密集度が高いため、カナリの集中力を要しますわね」

彼女……津軽さんは監視役であり、護衛役も兼ねている。故に当然の返事ではあったが、ＳＰに守られる重要人物は皆こんな気持ちで過ごすのだろうか？

（津軽さん……キョロキョロし過ぎです……）

上京したての田舎者が、明らかに勘違いをした服装で観光に臨んだらこうなってしまった的な……外野からはそうも見てとれる。しかも、眉目秀麗とまでは言わないにしろ、この界隈ではまずあり得ない特徴的なメイクと空気を醸し出してるもんで、傍らを通り過ぎていく男共が、まあ、これまた振り向くワケだ……尽く。

「あ、ここです。津軽……さん……？」

大型量販店に入ろうとした弥富が目にしたのは、ＤＶＤ専門店舗の正面入り口で、ＣＭ用モニターに釘づけになっている津軽の姿。口を半開きにしてポカ～～ンとしている。

（おいおいおい……）

何かカルチャーショック的な事があったのだろう。まあ、この街全体が一般人にとっては異文化交流発信地みたいなもんだし。外国の観光客は、必ずカメラを首から提げて集団で笑顔をふりまいてい

る。多分、彼等はアキバの街がこの国の首都だと思ってるんじゃなかろうか。で、津軽さんは一体、何を――
「どうかしました？」
「え、あ……いえ、なんでもありませんわ」
モニターで流れているのは、とっても愛くるしい柴犬の子供とじゃれる少年・少女達の映像。もうすぐ発売する邦画ＤＶＤの予告だった。
（へえ……犬好きなんだ）
弥富は思わず頬が緩んでしまった。自分も犬が好きで、大昔、実家で飼っていた。これで一つ、世間話のネタができてなんだかホッとした。
「では、迅速に買い物を終わらせましょう」
彼女は顔つきをキリッと変えて、弥富と量販店の中へ。この街で日用雑貨や消耗品が一通り揃っている数少ない店。弥富のような男の一人暮らしに必要な物は、大抵がここで買いそろえられる。
（ええっと……箱ティッシュにトイレットペーパー、洗濯洗剤に……おッ……！）
物色する弥富の手が止まる。それは、家電製品のコーナーの片隅だった。彼の視界に映ったのは『インカムα・βセット』。本来なら、Ｐ・Ｄ・Ｓの使用が違法とされ刑罰が適用される現在、売っても仕方のない物だ。が、インカム単体なら購入も所持も違法に当たらないため、在庫処分に困った業者が、量販店にタダ同然の値で卸すケースは珍しくない。だから、弥富が凝視しているインカムのセットも、子供の小遣いで買えてしまう程度の値段だ。
（……よし、買ってしまえッ）
弥富はチラッと津軽の方を盗み見て、持っていた箱ティッシュで陰をつくってインカムを手に取った。アパートの部屋に帰っても禁魚は一匹もいない。それは確かなのに、どうしてそんな衝動に駆られたのかは分からない。
「津軽さん、欲しい物は全部買ったんで、もう行きましょう」

「はい、了解しましたわ」
弥富はこっそり買ったインカムをポケットに仕舞いこみ、量販店から出る。なんか少々気まずいが、違法じゃない……そう自分に言い聞かせるだけだ。
（さてと……）
弥富は駐車していたジープに荷物を置いて、周囲をグルッと見渡した。この街にやって来て、自分のようなプチ・アキバ系が戦利品の一つも無しに帰るワケにはいかない。というワケで――
「津軽さん、自由行動とっていいですか？」
男・２５歳、無職。ガキみたいに微笑んでウキウキしている。世間様から言わせれば、実に始末が悪い人種だ。
「いけません」
即、却下。
「街を巡回する事自体に制限はつけませんが、わたくしの任務はあくまで監視と護衛。常に忘れぬよう」
「いや、あの……しかしですねぇ……」
今から弥富が突入しようとしている店舗に女性同伴で入るのは……正直、セクハラ行為に近い。色々と１８禁な広告が貼られてたり、ピンクなボイスが流れてたりするもんで。ハッキリ言っちまえば、エロゲーの専門店。まず、女性客はいない。ＢＬ系を扱うコーナーがある店舗はともかく、ここは野郎のオタ汁１００％の病巣。人格を疑うのなら、さあッ、疑えッ！
「ん……？」
津軽が何かに気付いた。店のジャンルとかとは関係ない――――何かを。
「弥富殿、入りましょう」
「えッ、あ……はい？」
彼女は弥富の腕を引っ張り、８階建ての雑居ビルの中へ。その直後、どこからともなく下水工事業者の制服を身に付けた男達が数人現れ、今、彼等が入って行った出入り口と裏口とに通行止めの看板

を設置し、門番みたいに両脇に立った。無表情で一言も発することなく、静かにソレは行われた。通行人に興味を持つ者はいない……その光景がいつも通りであるかのように。
「ちょ……どうかしたんですか！？」
「追われています。ビルの中で撒きますわよ」
――――――追われている！？　昨日の今日でもう！？
弥富は津軽に腕をグイグイ引かれながら、湿度と野郎率が極めて高い屋内を駆け抜けていく。ヤバイ……深見・父を名乗る正体不明のオッサンに襲撃された記憶が、彼の脳裏でハッキリと甦る。忘れられるワケはない。一生のトラウマになるであろう。そして、今、更なるトラウマが加算されようとしているのか？
タンタンタンッ！
狭く汚い非常階段を1階から駆け昇り、3階のフィギュアコーナーを疾走する。突然の出来事に、常連客達が皆ビックリして振り向く。
「い、一体……ドコまで？」
「では、ここに入っていてくださいまし」
そう言われて5階の男性用トイレのドアが開けられ、弥富が荒々しく放り込まれる。享輪コーポレーションの時といい、なんか、トイレで危機になる運命なのだろうか……。
「あ、あの～～……御客様、どうかされましたか？」
突然の喧騒に驚いた店の男性店員が、怪訝な顔をして津軽に声をかけてきた。
「いいえ、どうという事ではありませんわ」
「左様ですか☆」
店員が何故かニッコリと微笑んだ。そして、何故か……
ガラガラガラッ――――――ガシャン！
フロアと階段をつなぐ通路のシャッターを閉めた。もちろん、まだ閉店時間じゃないし、中には数人の客が居る。
（……おや、懐かしい空気が漂ってきましたわね）

津軽が何か特別な“領域”を感じ取った。一般社会ではまずあり得ない気配と、あってはいけない剣呑な空気だ。
＜皆様ぁ、大変長らくお待たせ致しましたぁ！　本日のメインイベント開始でございま～～ッす！　どうか最後までごゆっくり御覧下さい～～！＞
天井のスピーカーから突如として流れてくる放送。新作コスプレを装着したマネキンを見ていた連中が、何事かと周囲をキョロキョロする。
「下衆な演出ですわね」
小さく毒づきながら、マネキンの前を通り過ぎようとした津軽に――

「キャハハハハハハハハハハハッッッ！！」
――――――――ッ！？

マネキンが笑った！？　盛大に笑った！？
（ちッ……！）
虚をつかれた津軽が口元を歪めて素早く後退する。
にゅ……
ミニスカタイプのメイド服を着たマネキンが、その長い脚を伸ばし、ゆっくりと一歩前に出た。
「どもども～～、はっじめましてぇ～～☆」
えらく軽いノリの女が現れた。
「……どちら様でしょう？」
津軽が目を細める。あまりに派手な格好してて、やたらと瞳をパチクリさせやがって、全くもって無駄なポーズをとるもんだから、津軽としては対応に困る。
「アンタが津軽っていうＳＰさん？」
「……ええ」
個人情報が漏れている。明らかに相手は一般人ではない。毒々し

いまでに染めた蒼いショートボブに、形容し難い色をしたルージュ。ディテールにこだわった作りのメイド服はミニスカ仕様のため、先程からムチムチな太ももが一般の野郎共の視線を一人占め中。
「時間無いからぁ、簡単に“よーきゅー”を伝えちゃうねぇ♪　要するにぃ、さっきアンタがトイレに放り込んだヤツをアタシに譲ってほしいワケぇ。分かるぅ？」
「ええ、構いませんわ。どうぞ、御自由に」
津軽は特に動揺することもなく、いきなり出現した不審人物の要求にすんなりと応えた。
「さすがプロ☆　ハナシが早くて助かるぅ～～☆」
そう言ってメイドコスプレの女は、スキップしながら男性用トイレのドアに向かう。スカートが妖しい揚力でヒラヒラしてて、これまた一般客の薄汚ねえ視線を浴びまくり。
カチャ……
無情にも扉は開けられてしまい、どうしていいのか分からずオロオロしていた弥富のヘタレな画が、公然とさらされる。
「えッ……は……？」
弥富としては首を小さく傾げるしかない。メイドコスプレした17、8歳くらいの女の子が、満面の笑顔で男性用トイレのドアを全開して立ってるもんだから。
「ターゲットはっけ～～ん★」
「へ？」
リアクションに困る光景。コレが……追っ手？　後ろの方でアキバな男共が、ローアングルで写メ撮っていますが。
「デートに付き合ってね、オ兄チャ～～ン♪」
ごめんなさい……本人はポーズを極めてどや顔なんだけど、全くもって萌えは感じません。俺、メイドキャラって趣味じゃないんで。しかも、直感で申し訳ないんだけど……アンタ、多分、ＤＱＮに分類されると思うよ。
ヒュッ――

一瞬、弥富の視界を縦に何かが走った。偽メイドの背後で大きく空気がうねり、次の瞬間――

――――ドッ！！

肉体の一部同士がぶつかり合う音。片膝をつき、頭の上でクロスさせた両手首で踵落としを防御する偽メイドと、強烈な攻撃意志をむき出しにした津軽。

「ヤだなぁ～～、ウザいオバサンって！」

「こちらのセリフですわ、小娘ッ」

うわ～～……とってもよろしくないフラグが立っちゃったよ。これってまさに――

＜勝つのはＳＰ津軽かッ、それとも謎の特Ａ級メイドかッ！？　盛り上がって参りましたあああッッッ！！＞

……ですよね～～→。

銃刀法違反者に守られよう（前書き）

シスター「神よ、世界はいつ終焉を迎えるのですかッ！？」

神「2、3時間後」

銃刀法違反者に守られよう

　ゴングは鳴っちゃいないが、戦いは起きるべくして起きた。って言うか、この店自体がまずどうかしているぞ。でさあ、ターゲットとか言われちゃった俺としては、やっぱ……逃げるべきかなあ？　でも、ＳＰとはいえ、女性を敵地みたいなトコに一人残すのは、男の端くれとしてのプライドが許さないッ！　……とかカッコ良く言ったら、「オメーナンカ、イテモイナクテモイッショダ、ヘタレ」……とかオウムが実家から念波をとばしてきそうです。居ても居なくてもいっしょなら、居させてください。そんな卑屈なカンジで俺は自我を保とうと思う。現状の緊迫感は、その場に身を置いて初めて分かる。作者を使って分かりやすく説明すると、高校で3年間友達だった人（男）の家に卒業後、初めて遊びに行って部屋に通され、友達がトイレに行ったスキに勝手に机の引き出しの中身をあさってたら、ホモ漫画とゲイ雑誌が出てきて……ドン引き。どうする！？

　とっとと逃げ帰るか、もう少し様子をうかがうか……そんな選択に迫られた（実話）時と同じくらいの緊迫感が漂っているワケだ。

「こんな可愛い女の子に後ろから襲いかかるなんてぇ～～、ちょっとイカレてんじゃなぁい？」

「残念ながら特に可愛くはありませんし、わたくしは至って正常でしてよ」

　二人は仁王立ちして対峙する。殺陣の雰囲気が漂いはじめ、彼女達を囲むようにしてギャラリー共が色めき立つ。

「仕方ないなぁ～～、優しく排除してあ・げ・る・ねッ☆」

「実に不愉快です。折檻が必要ですわね」

　お互いの目が合った瞬間――

　スパアアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァァァァ――――――――ッッッン！！

二人とも激烈なビンタ！　しかも、相討ち！　それぞれの左頬に赤黒い手形を作って、同時に不敵に笑ってみせた。
「……ふ～～ん、なかなかヤルじゃん」
「……そちらこそ、良い身のこなしですわね」
ウオオオオオオォォォォォォ～～～～！！
ギャラリーがどよめく。
（あの……もっと建設的な行動はないのか？）
トイレの扉の陰からビクビクしながら様子をうかがう弥富。彼が言いたいのは、「この店はどうなってんの？」・「俺が何でターゲットなの？」・「この女は何者で、俺をどうする気なの？」・「有事の際に実動課への応援要請はできないの？」……とかだ。いきなり、お互いの顔面をブッ叩いてケンカ始めちゃってるけど、そんな対応でいいのだろうか……イイ大人として。
「じゃあ、ちょっぴり“ビックリ”させてあげようかなぁ★」
そう言って偽メイドは、自分の真横に立っているコスプレ展示用のマネキンから衣装を剥ぎ取り、その足首をおもむろに掴む。そして……
ブゥオン――――――！！
「くッ！」
マネキンの頭部が津軽の鼻先をかすめ、彼女は思わず息を呑んだ。
「ど～～お～～？　ビックリしちゃったかなぁ～～？」
偽メイドがわざとらしく微笑む。
（す、すげぇ……！）
弥富がポカンと口を半開き。マネキンを片手で掴み、団扇でも扇ぐみたいに振り回しやがった。
＜おおっと、謎のメイドが凶器攻撃開始だあッ！　高さ１７５センチ、重量１０キロのマネキンを片手で軽々と扱う彼女ッ、とても女性の腕力とは思えなあああ～～い！！＞
店員の解説にも熱がこもる。

「なるほど……少々、鬱陶しい武器ですわね」
マネキンの硬さと重さ、スピードからくる攻撃力。そして、リーチ……素手のまま間合いに入るのは難しい。その上、津軽は銃器の類いは携帯していないって言ってたし……どうすんの！？
「そんじゃ、一気に片付けちゃうよぉぉぉぉぉ！」
タンッ――
軽い足取りで床を蹴り、跳び上がった偽メイド。
一歩後退しつつ、床に置いてあった自分のクラッチバッグを器用に蹴り上げる津軽。
これでもかッ、というくらい大きくマネキンを振りかぶった偽メイド。
蹴り上げられたバッグが開き、そこから飛び出してきた二本の――
――――ギンッ！！
「おッ……斧ぉぉぉぉ！？」
弥富が目をパチくり。片手で扱える小型の手斧を両手に握り、津軽がマネキンの軌道をずらした。
「いかがかしら？　ビックリなさって？」
彼女はバカにするみたいに鼻で笑った。
「へぇ……色気のないモン隠し持ってるじゃん」
偽メイドの目の色が明らかに変わった。お互いが充分な殺意を全身に纏いはじめる。
＜なんとォ――ッ！　対するＳＰは二本の鋭い刃物で迎撃だァ――ッ！　こいつは目が離せないぞッ！！＞
店内放送がムダに煽るもんだから、ギャラリーもケータイで動画撮影まではじめちゃう。
（リーチはこっちが断然に有利……いくら刃物でも、間合いにさえ入られなければ問題ないもんねぇ～～♪）
グッ……
マネキンの足首を掴む手に、より一層の力がこもる。大振りさえしなければ恐れる事はない。

ボッ――！
巨大な弾丸が突っ込んでくるような突き。直撃すれば胸骨が砕け、内臓に致命傷を負わせかねない……が。
――――斬ッ！！
光刃、一閃。上半身を巧みにひねって紙一重で回避しつつ、右斜め下から手斧で斬り上げ、マネキンの首を切断する。
（げげッ！？）
大型の武器を使った突きを繰り出した後は、どうしても体勢を整えるのにスキができる。津軽はそのままの勢いで軽やかにステップを踏み、もう一本の手斧を裏拳を叩きこむみたいに偽メイドの側頭部へ――
ピタッ……
寸止め。ヒットしていれば、眼球がバイオレンスに飛び出していただろう。
「さて、アナタには尋問すべき事項が沢山ありましてよ。これから実動課に連行させていただきますわ」
＜きまったァァァァ！　ＳＰ津軽の勝利だァァァァ！＞
オオオオオオオオオォォォォォォォ――――ッッッ！！
店内放送もギャラリーも最高潮を迎え、狭いフロアに声援が喧しく響き渡る。
「ちッ……なにさ、こんなに強いなんて聞いてないよ」
「答えなさい。雇い主はダレですの？」
＜おおっと～～、残念ながら、そこから先はオ・フ・レ・コだ！＞
フッ――
「うおッ……ちょ、な、何にも見えないし！」
唐突に全ての照明が落ちて、窓が一つもないフロアは真っ暗になり、弥富が情けない声を上げてヘタレこむ。
「弥富殿ッ！」
津軽が自分を呼ぶ声と、バタバタと逃げ惑う幾人かの足音が聞こえる。そして、数秒後……

パッ――
照明が元に戻る。が、そこに偽メイドと男性店員の姿は無く、ギャラリーをやってた一般客等が床に転がってるだけ。
（迂闊でしたわ。この対応の早さ……相手は『個人』ではありませんわね）
津軽は少々悔しそうな面持ちで手斧をバッグに仕舞い、弥富の方に向き直る。
「さあ、行きましょう」
まるで、何事も無かったかのようにスッと手を差し伸べる。
「あ、は……はい……」
この人……よく分らんが、スゴイ。それに引き換え、俺は普通に失禁しそうになってたよ。ダレも25歳・ニート野郎の失禁描写なんか見たくないだろうから、ギリで我慢したよ。

――――――――――――　10分後・アキバの街の片隅にて　――――――――――――

＜首尾は？＞
「ごっめ～～ん、しくじっちゃった～～♪」
＜失敗した？　何があった？＞
「だってさぁ、アイツってば、バッグに危なっかしい武器隠し持ってたしさぁ。妙に運動神経も良いしぃ」
偽メイドが深緑の生い茂る公園にて、無邪気にはしゃぐ子供達に混じってケータイで通話中。
＜SPのプロフィールは昨日の内に送信したハズだが＞
「えっと～～……見てない」
＜貴様ッ、それでもプロか！＞
通話相手の男が激昂している。
「だってぇ、細かい文字とか数字で一杯だったんだも～～ん」
＜いいか、良く聞け。今度の相手は、普通に奇襲をしかけてどうにかできる女ではない。特別な訓練を受けたプロだ。もっとよく考え

て行動しろ……いいなッ！＞
「はいはい、りょ～～かい。期限までには弥富更紗の身柄を確保するって。そっちこそ、報酬の件忘れないでよねッ」
＜問題ない。要望の通り“二匹”用意してある。弥富更紗と交換だ＞
「あはッ、楽しみィ～～！　じゃあねえ、『Ｍｒ．アルビノ』☆」
そう言って偽メイドは笑顔でケータイを切った。
バタバタバタッ……
すぐ側を鬼ごっこしている子供達が走り去っていく。元気だ。アキバの街はとりあえず平和だ。
「さぁてぇ～～」
彼女はメールで受け取っていた添付ファイルを開く。ケータイのモニターに映る津軽の顔写真と詳細な情報。
［本名『津軽六鱗』・年齢２６歳・女性。現在、電薬管理局実動課に所属。某国営企業にてＳＰとしての経験有り。先天的な重度の睡眠障害を患っていたが、特殊な手術により延命処置が施される。が、現在も睡眠を必要としない症状は消えず、延命に成功はしたものの、短命と言われている。ＳＰ時代には仲間内で一番の武闘派と呼ばれ、“鬼姫”などと揶揄されることもあった程、己に課せられた任務には徹底していた。当時の彼女に与えられていたコードネームは『デス』］
「うっわァ～～、『デス』だって！　ただの中二病じゃん！」
ベンチに座った偽メイドが愉快そうにゲラゲラ笑う。
わあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ～～～～ッ！
で、そのすぐ側をまたもや子供達が走り去っていく。やたらと元気な笑顔で。
（とはいえ、コイツはちょっぴり困ったなぁ。眠らないから２４時間体制でターゲットに付きっきりってコトでしょ？　そうなると、奇襲できるタイミングも限られちゃうしなぁ……）
彼女は自分の顎先を人差し指でトントンと叩きながら、あまり利口そうにない頭をフル回転させて考える。

ポク、ポク、ポク、ポク、ポク……チ〜〜ン♪

「バカの考え休むに似たりッ！　さあッ、頑張って行くぞォォォォォ！」

勢い良く立ち上がり、太陽に向かってガッツポーズ。

「わあーッ、バカだあーッ！　バカがいるぅーッ！」

遠くの方から子供達に野次られた。ついでに、空き缶投げつけられた。

「コンのクソガキがあああああッ！　児ポ法に引っかかるようなコトしてやるゥゥゥ！」

偽メイド、子供達を追いかけて公園から消えて行った。

見てはいけないモノをとりあえず見るよう（前書き）

シスター「罪を告白します。懺悔させてくださいッ！」

神「ヤダ。今日は非番」

見てはいけないモノをとりあえず見るよう

夕方……真夏はまだ空が明るい。しかし、弥富の住むアパート周辺は比較的寂しく、夕方にもなれば、人通りはめっきり減って物静かになる。そんな中を一台のジープが停車する。中から出てきたのは両手に斧を握りしめた運転手と、悲痛な表情をした青年。普通に見れば拉致事件の現場だ。

「あ、あの……御近所さんに見られたらマズイんですが（汗）」

「何がですの？」

「手に持っている危険物がです」

「先程のような襲撃に常に備えなければ。わたくしに課せられた任務ですので」

仕事に真面目なのは分かりました。けどですね、この国ではアナタの今の状態を『危険人物』と呼びます。回転灯を装備し、サイレンを鳴らす自動車がやってきちゃいますんで、そういうのは非常時のみの使用に限定してください。

ドサッ……

「ふぅ……」

弥富はアパートのリビングに荷物を置くと、軽く溜息をついた。昨日の今日でまさかの襲撃……しかも、やたらと演出じみていてバカにされたような感じだった。一体、俺を拉致ってどうする気だったんだ？　やはり、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓに深く関係を持ってしまったせいか？

「弥富殿、デスクトップを御借りしますわ」

「あ、はい……何をするんですか？」

「本日の事件の詳細を課長に報告しますわ」

そうか、早くも襲撃があったのだから増援が期待できるワケだ。睡眠を必要としないとはいえ、津軽さんたった一人で２４時間体制の警護は無理がある。それ以前に、女性関係に関する免疫が欠片も

ない俺にとって、同棲みたいな生活は少々マズイ。脳内に住む不思議な妖精さんが、＜まあ、押せよ＞と書かれた謎のスイッチをいつの間にか押しかねない。そうなると、色々と困る……男性的に困るのである。

（メシでも炊くか……）

弥富は広がりかけた妄想を振り払い、狭いキッチンで米を洗い始める。正直、今までの人生で、他人様のために料理をしたことは一度も無い。だから、なんだか変な気分。

「津軽さん、何か好き嫌いはありますか？」

「いいえ、ございませんわ。どうぞ御構い無く」

「じゃあ、米が炊けるまで一時間近くかかるんで、その前に俺はシャワー浴びますね」

「ええ、どうぞ」

こんな何気ない言葉のやり取りも全てが初体験。すごく新鮮で、自分の現状の立場ってヤツを失念しそうになる。

1時間後――

夕飯の支度が整い、長い一人暮らしで鍛えられた粗末な料理がテーブルに並ぶ。

「で、津軽さん……増援はいつ来てもらえるんですか？」

沢庵をコリコリしながら弥富が問う。

「増援？　いいえ、ダレも来ませんわ」

「へ？　いや、あの……事件起きちゃったし……いくらなんでも津軽さん一人だけというのは……」

「心配ありませんわ。他人の救援を当てにするほど、わたくし弱くはありませんの」

彼女は毅然と言い放って赤だしをすすった。

（この人、もしかして……）

弥富が一瞬、何か親近感に似たモノを感じた。他人とのコミュニケーションに微妙な問題がありそうな……特殊な人生や人間環境が

関係したのか、彼女もまた知らない内に、心に薄い壁を形成する人種だった。やがて、夕飯を食べ終わり――

カチャ、ガタン、サアアアアアアアアアッ……

津軽が手際よく戸締りして鍵をかけて、カーテンを閉めた。

「あの……どうかしたんですか？」

「弥富殿、お風呂場を御借り致しますわ」

つまり、入浴。こんな時、男はどんな顔とリアクションで対応すれば、イヤラしく思われないのだろう？

「あ……じゃあ俺、少しの間外に出てますね」

この部屋は狭い。ＵＢのため、もちろん、脱衣所など無い。リビングに居ると、どうしても脱衣する相手の姿を見る事になってしまう。つまり、相変わらずなガラスのハートが、ドキドキでワクワクでオマエはもう死んでいる。

「いけません。弥富殿の身の安全を託された者として、常に側に居ていただかねば」

「いや、あの……しかしですねえ（汗）」

パサッ――　ファサッ――

（うおッと！）

家主の同意を得ずして容赦なくスーツを脱ぎ始めたもんだから、弥富は慌てて彼女に背を向けた。衣擦れの音がなんとも悩ましくて、下半身に余計な血液が全員集合しちゃう。

血液：「フヒヒ、サーセンｗｗｗ」

静まれよ、不埒な血液。

パタンッ

ＵＢの扉が閉まり、シャワーを使う音が聞こえてきた。

（イカン！　はやまるな、俺の中の妖精さん！　そのスイッチは押してはいけない！）

妙な妄想に取り付かれかけている弥富が、頭を抱えて必死に何かと戦っている。

妖精さん：「おおっと、危ねえ……マジで寸止めだったＺＥ★」
「よしッ」
彼は力強く立ち上がってデスクトップの前に座る。雑念を追い払うには、ネットに潜るのが一番！　そんなワケで……
（ん？）
『最近使った項目』にふと目をやると、なんか見覚えの無いファイルの存在が。
「コレって、もしや……」
今日の朝、津軽がデスクトップを使って何か作業していたが、その時のヤツか？　まあ、おそらくは実動課への報告書類か何かだろうが、自分の事がどんな風に書かれているか普通に気になる。
（う～～ん……見たい。けど、見ちゃマズイんだろうなあ。でも、やっぱ……）
チャンスは今しかない！　さあ、勇気を出して左クリック！
――カチッ

「……ん？」
ポンポン、ピロリ～～ン♪　チャンチャン、ピロラ～～ン♪　ズンチャ、ズンチャ♪
えらく愉快なＢＧＭが流れてきた。そして、モニターに映ったのはアニメチックな動画……蠱惑的な美人の女性（全裸）に、後ろから抱き締められる美少年（全裸）。
「……んんッ？」
コレはいわゆるＤＬ版の『エロゲー』ですねえ。オープニング映像を見た感じ、思いっきりショタ系ですねえ。若奥様の年齢から淑女までが揃って、明らかに１０代半ばかそれよりちょい若い美少年達と絡んでますねえ。
「……んんッ！？（汗）」

弥富の脳内で本日、彼が記憶した一コマ一コマが反芻される。てなもんで、気がかりな箇所を挙げてみた。
１つ目・ファミレスで談笑する一家を見つめる津軽。（可愛らしい少年を含む）
２つ目・ＤＶＤ販売店の宣伝用モニターを見つめる津軽。（柴犬とじゃれる愛らしい少年を含む）
３つ目・明らかに児ポ法のグレーゾーンに位置している、ショタ系のエロゲー。（淫語あり）
上記の３つから導き出される回答――

（ちょっとおおおおおおッッ！！　ダレかアグネス呼んできてええええええッッ！！）

弥富は心の中で吐血するぐらいの勢いで叫んじゃった。コイツはヤベぇ！　マジで尋常でないモンを見ちまった！　これから先、どう対応していけばいいのか……と、とにかくファイルを閉じねえと。
――カタッ
慌てて立ち上がった弥富のズボンのポケットから小さな音がした。
（あ、そういえば……）
ポケットの中身を取り出す。ソレは量販店でこっそり買った『インカムα・β』のセットだ。弥富は隅っこに片付けた四つの水槽へ目をやった。もう、中の水も捨てちゃって、殺菌のため乾かしている最中。つい先日まで禁魚達が泳いでいた……なんか不可思議な侘しさを感じてしまうのは何故だろう？　よし、津軽さんに頼んで、アイツ等がどんな様子なのか実動課に聞いてもらおう。
カチャ……
空っぽの水槽にインカムを取り付ける。オリジナルＰ・Ｄ・Ｓをコピーさせた外付けのＨＤをネットにつなぐ。
「……」
インカム・βを装着するが、もちろん、禁魚達のアバターは現れ

ない。彼等は……いない。弥富は何かの儀式を行った後みたいに、妙な空虚感を味わっていた。

シャアアアアァァァァァァァ――――

ＵＢの方から聞こえてくるシャワーの音が、なんだか切ない。

「おお～～、とっても卑猥だぞ～～。アグネスが強制捜査に乗り出してくるぞ～～」

ああ、その通り。しかも、俺のデスクトップ使ってダウンロードしてる……し……？

（……ん？）

不意に耳に届いた低調で抑揚の無い子供の声。弥富がデスクトップの方に目をやると、椅子にチョコンと腰かけた幼児が一人。

「エロゲーにオチはいらん。それこそが世界の真実だぞ～～！」

「…………………………………………あっれえええええ～～～～？」

『ポチ』が居た。

「経過報告を、『Ｍｒ．アルビノ』」

一人の男がノートＰＣのモニターに話しかける。

＜……期限までには確保できる。問題は無い＞

モニターの中年男が機嫌の悪そうな声で答える。

「結構。では、『Ｍｒｓ．タンチョウ』……計画の進行具合は？」

男が別のモニターに話しかける。

＜予定の“頭数”は揃ってるよ。少々、予算をオーバーしたけどね＞

艶やかな着物を纏った淑女が水タバコの煙を燻らせる。

「計画が首尾良く運べばいくらでも補填できる。不満をこぼすヤツがいれば、札束ではたいてやれ」

男はそう言ってイヤラしく微笑んだ。

＜ところでぇ、『Ｍｒ．キャリコ』……深見素赤の肉体を確保する件についてだがクマ～～＞

まだ若い感じの変な訛りのある男の声。モニターには何故か……
やたらと可愛らしいクマのヌイグルミが映っている。
「心配ない。それはこちらで処置を行う。君は今まで通り、ネット環境の安全確保に努めてくれればいい」
＜はいぃ、分かったクマ～～＞
「では、各自怠り無きよう」
フッ――
全てのノートＰＣが落ちた。

アイツ等は今……こうなってるよう【アパート側】（前書き）

シスター「大変ですッ、サタンが攻めて来ましたッ！」

神「セコム呼べ」

アイツ等は今……こうなってるよう【アパート側】

「ええっと～～……何で？」
弥富は首を９０度近くまで傾けながら呟いた。茶髪のショートボブに麦わら帽子を被り、可愛らしいワンピースを着た５、６歳くらいの♀か♂かよく分からん幼児が、椅子に座っている。
「痴れ者めッ。ポチを甘く見るでないッ。水槽の中をよ～～く観察するんだぞ～～」
水槽を？　……あッ、そうか……コイツってば、禁魚じゃないんだった。
まだ濡れている水槽の隅っこに、ウネウネしている生き物を発見。そう……『糸ミミズ』だ。
（うわ～～……なんだか面倒なコトになったなあ……）
オリジナルＰ・Ｄ・Ｓはソフトだけネットにつないでも、電薬管理局に探知はされない。対象となる生物のアバターが発生して、はじめて探知される。つまり、ポチという自虐チック幼児が面前に現れてしまったという事は……マズイ。うちのネット環境って、実動課に遠隔制御されてるってのに。
「津軽さ～～ん！　大変で～～す！　実動課の人にちょっと言い訳させてください！」
――バタンッ！
「何事ですの！？」
大量の湯気を身に纏って、ＵＢから全裸の津軽が飛び出してくる。
「ストップ・ザ・交通事故ッ！？」
あられもない登場シーンに弥富は意味不明な言葉を叫ぶ。
「おおォ～～。稚拙な童貞の妄想力が、ついに現実のオンナを作りだしたのか～～。よくぞ己をここまで磨き上げたな」
ポチから御褒めの言葉を賜わったけど、コレは実物です。つまり、エロス降臨です。

「つ、津軽さんッ……ちょ、まずは服をッ……！」
人生初の若い女体を前にして、弥富は無残に慌てふためくばかりだ。で……

――――――――――　１０分後　――――――――――

「……と、いうワケでして」
事のあらましをかいつまんで説明し、弥富が申し訳なさそうに俯く。
「つまり、今、この部屋の中に『ポチ』と名乗るアバターが居るのですね？」
「ええ、まあ……」
インカムをつけていない津軽にはポチの姿は見えない。で、そのポチはというと……
「せいやッ、せいやッ、ポっチポ～～チにしいてやんよ～～♪」
鼻歌交じりに津軽の頭をＤＶＤのケースでポコポコ叩いてる。
「おいッ、バカッ、やめろって！」
「……は？」
「いや、その……ええっと……（汗）」
こうなったら実際に目にしてもらうより他はない。というワケで、弥富はインカムを手渡し、津軽が装着してみた。
「おっす、ポチだぞ。趣味は捕食されること」
「なッ……！？」
突如、真横に見知らぬ幼児が出現して津軽が身構えた。
「緊張することはないぞ。苦しゅうない。さあ、膝の上にでも乗せてみるといいぞ～～」
「あ、アナタは……本当に糸ミミズなんですの？」
実動課の人間とはいえ、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓを体験したことがあるワケではない。一定の仮想空間が脳内に展開され、非常にリアルなアバターと会話が可能とは彼女も聞いてはいたが、コレは……アバターというより、ほとんど人間？

「その通りだあ。生態系の最下層辺りを生きる、可哀想な身の上なんだぞ。だから、水槽にもう少し新鮮な水を足して欲しい～～」
「え、あ……はい。分かりましたわ」
そう言って津軽は、街で買ってきたミネラルウォーターを少し注いでやった。
「おお～～、自然の恵み的なモノが体を癒してくれるぞ～～☆」
ポチ、御満悦。
「ところで弥富殿、さっきは何を叫んでいたんですの？」
「あ、そう、そうです！　実動課の課長さんに俺から説明させてください！　今回のＰ・Ｄ・Ｓ使用は、その、まあ……ちょっとした事故で、犯罪的な意図があったワケじゃあ……」
「その件でしたら問題はありませんわ。実動課によるネット環境の遠隔制御は監視ではなく、外部からの不正な侵入やサイバーテロなどの脅威を回避するための、局所的な防衛措置です。デスクトップで実行される作業等のプライヴェートが、筒抜けになっているワケではありませんわ」
「へ？　そ、そうなんですか……？」
弥富が間抜けな面で聞き返す。
「電薬管理局はそれこそ海のように広いネットの世界を、常時監視しなければなりません。重大事件とはいえ、一個人の回線を２４時間見張る程の余裕はありませんことよ」
津軽はさも当たり前のように言った。
（だ、騙された……ただのハッタリかよ……）
実動課長の真剣な説明にすっかりのまれていた。くそッ、俺ってやっぱ成長しねえなあ。
「あ、だからあんなヤバイ物をダウンロードしても平気だ……った……あ」
「……？」
しくじったあああああああああああッッッ！！　デスクトップでエロゲーが起動したまんまだあああああああああああああ

あッッッ！！　今はスクリーンセーバーのおかげで隠れてるけど、少しでもいじったらバレちまう！！
ガタガタガタッ……ガタガタガタッ……
顔面蒼白。あり得ない感じで弥富の全身が振動中。
「……？　どうかされまして？」
「あ、ちょ、ちょっと……インカムを」
「ええ、御返ししますわ」
弥富はおもむろにインカムを装着し、わざとらしく何かを思い出したような面で……
「あ、あの……その～～、俺、ちょっとコンビニ行って来ます」
「そうですか。では、御供致しますわ」
よし、まずは津軽をデスクトップから遠ざけるんだ。
（ポチ、後の処理を頼むぞッ）
ウインクする弥富。
（任せろ、クソ野郎☆）
親指を立てて笑顔を返すポチ。
バタンッ――
玄関戸が閉まり、ポチがポツンとお留守番。で、ネットにまだつながったままのP・D・Sを認識し……
ニヤァ～～リィ～～★
ものすごく北叟笑んだ。

タッタッタッ……タッタッタッ……
夕闇はすっかり漆黒となり、会社帰りのお父さんが2、3人寂しく歩いている道を、弥富と津軽は闊歩する。
（とにかく、今は時間稼ぎだ。あんな状況を見られたら、この先気まず過ぎてどうしようもないしな……）
コンビニには一応向かってはいるが、特に目的は無い。そして、話題も。話題……か。
「津軽さんは『禁魚』について何か知ってますか？」

弥富は何故か唐突にその話題をふった。あまりに知らない事が多いのも事実で、禁魚の生態とかに関しては、以前に出雲からちょっとだけ聞いたが――

1．『禁魚』は『金魚』を人為的に変異させて造られた愛玩動物の一種である。

2．当初は精神病患者に使用するドラッグに加工するのが目的だった。

3．魚類にはあり得ない知能の高さが実験で確認された。

――聞いたのはこれくらい。

「わたくしが課長の宇野から聞いているのは、禁魚とオリジナルP・D・Sを決してオンラインで使用してはならない……という事だけです」

その理由は弥富にも解っている。中毒性や依存性の高さが異常な数値を示し、使用した人間をネットが構築した仮想空間から出られなくする。つまり、頭が正常な機能を維持できず、一定の中毒状態のまま麻痺してしまうらしい。

「けど、ソレはあくまで『偽P・D・S』を乱用した場合の症状ですよね？　実際、俺はオリジナルP・D・Sで禁魚と随分コンタクトをとりましたけど、特に病的な症状は出てませんし」

「いいえ。オリジナルにも高い中毒性はありますわ。ただ、影響の及ぶタイミングや度合いには大きな個人差がありますの。そして、電薬管理局が最も懸念しているのは、オリジナルP・D・Sから比較的容易に偽P・D・Sがプログラム出来てしまう点です。偽の方には個人差などは殆ど無く、万人に等しく高い中毒性をもたらしてしまう。実動課は現在、とある人物を指名手配してますの」

「えッ、指名手配って……ネット内では何も……！」

弥富がたじろぐ。

「もちろん、公的な捜査ではありません。警察組織の手は借りず、独自の調査を続けていますの。その人物は、近年多発した偽P・D・S氾濫騒動の火付け役と目され、多種多様なコピーを作製し、短期

間で莫大な利益を上げてますわ」
「けど、相手の特定なんて可能なんですか？　偽Ｐ・Ｄ・Ｓを扱っていたハッカーなんて、それこそ腐る程いたと思うし」
　弥富の脳裏に、ごく最近の記憶がチラつく。『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』……分かりやすく言うと、“とっても残念な人生を謳歌する集団”。
「偽Ｐ・Ｄ・Ｓを扱うハッカーにも一定のランクがあります。『親』と『子』と『孫』。『孫』は既成の偽Ｐ・Ｄ・Ｓをただ単純に複製して自ら使用したり、売却して小銭を稼ぐ小物のハッカー。『子』は大元（ソース）となった偽Ｐ・Ｄ・Ｓに手を加え、各動物に特化したプログラムを構築し、ネット上で派閥を作る党首のような存在。そして、『親』……オリジナルから“完璧な偽物”を創り上げた張本人。１年程前から、電薬管理局が電子指紋をたどって行方を追っていますけど、未だに決定的な手掛かりが得られてませんの」
「基本的な質問なんですけど、Ｐ・Ｄ・Ｓみたいにダレでもネットで共有できたソフトって、本来なら厳重にプロテクトがかかってるんじゃ……？」
「ええ、もちろん。複製防止用のガードが幾重にもかけられてますわ。一国の情報機関が手を加えるならともかく、一個人でガードを解除するのはまず不可能……電薬管理局としては、内通者の洗い出しも並行して実施してますの」
　すっかり重たい空気になってしまった。自分なんかは所詮、『孫』に位置するハッカーからオモチャを安く与えられ、良い気分になっている底辺のネット利用者に過ぎない。となると、一番気になってくるのは……
（浜松はサーバー室で一体、何を俺に見せたかったんだ？）
　彼女は自分が『深見素赤（ふかみすあか）』であり、カナリのリスクを冒してまで電薬管理局からオリジナルをハックしたと言っていたが、オリジナルを使って“何を”したというんだ……？　そして、実動課の課長が言っていた『匿名の情報提供』というのも気にかかる。俺はこれ

からどう進めばいいんだろうか。
「では、弥富殿。コンビニエンスストアに到着致しましたわ。買い物を済ませましょう」
「あ……」
考え込んでいて時間稼ぎの件を忘れていた。しかも、俺ってばサイフを持ってきてなかったし。こうなったら、やるっきゃない！　聞くっきゃない！　ヘタに後でバレたら余計に気まずいんで、ここで大したことのない勇気をかましてやれッ！
「津軽さんは小さな男の子好きですか！？」
「ええ、大好きですわ」
「……それは、弟を可愛がるような感覚ですよねッ！？」
「いいえ、恋人感覚ですわ」
「……津軽さん、『ショタコン』って言葉知ってます？」
「いいえ、存じ上げません」
「……津軽さん、『青少年保護条例』って知ってます？」
「いいえ、存じ上げません」
――――――――――――――――――――――（；゜Д゜）ヒイィィッッ！！
コンビニの店員さん……よろしければ、防犯用のカラーボールを俺にください。今なら魔球を投げられそうです……。

アイツ等は今……こうなってるよう【実動課側】（前書き）

シスター「神よ、聖堂の修繕費がどうしても足りませんッ！」

神「ブルセラ行け」

アイツ等は今……こうなってるよう【実動課側】

「コイツは驚いたな……！」
電薬管理局・実動課・検査棟――
弥富から没収したポータブルＨＤを安全なサーバーにつなぎ、宇野課長が感嘆の声を漏らした。彼の目の前に、居るハズのない人間が四人立っているから。
「やあ、はじめまして。ボクは郡山といいます☆」
笑顔が爽やかなフォーマルスーツの好青年。
「出雲やでえ～～、よろしゅう～～～♪」
全身ムッチムチでプルプルなビキニ水着の女。
「土佐じゃ。段ボールを返してくれんかのう」
継ぎ接ぎだらけの作務衣を着たヒゲのジジイ。
「やっべえええええええッッッ！！　確保されちまったあああああああッッッ！！　畜生ッ、更紗のヤツ……次に会ったら、生殖機能が崩壊するくらいのイジメを施してやるわあああああああッッッ！！！」
意図は分からんが、何故かセーラー服姿の少女が約一名……久し振りの出番で精神状態が崩壊しかけてる。
（信じられん……ハナシには聞いていたが、これ程までリアルなアバターを仮想空間に造り出せるのか。なるほど、禁魚が禁制ペットに指定されるワケだな）
宇野課長が一人で納得する。
「ところで、君達……『深見素赤』というハッカーについて何か心当たりはないかね？」
ギクッ……！
もんどりうってた浜松の動きがピタリと止まり、ビックリするくらいの汗が噴き出す。で、他の禁魚達に視線を送った。

――――――　さあ、皆の衆！　この窮地を脱出するため、一致団結！　協力しようじゃないか！　――――――

その視線に対する返信……

――――――　犯人はこの中にいます。ヒントは“セーラー服がとっても似合わないビッチ”　――――――

「ちょッ、おま……うっそおおお～～！　マジでええええ～～！　このタイミングで裏切っちゃうワケぇ！？　信じらんな～～い、この偽善者共めッ！　２４時間テ〇ビの舞台裏に行って、準備しといた大量の小銭をアクリルケースに詰めてろッ！！」

浜松はどうしようもないくらいの自己中心キャラが露呈しちゃって、完全にビッチの称号を獲得しちゃって……仲間のハズだった他の禁魚達の態度は氷点下。

「な、なんかよく分らんが……まずは各自知っている情報を全て話してくれ」

「ちょっと質問があるンやけど」

出雲が控えめに挙手する。

「何だね？」

「うち等って、この後どうなるン？」

「知っての通り、禁魚は禁制品だ。一般社会に出回った時点で迅速に処理しなければならない」

「ええッ！　つまり、ボク達は焼却処分されちゃうんですか！？」

素で怯える郡山。

「つまり、汚物は消毒だあァァァァァァァァァァァァァァァァ！！」

火炎放射器で遊ぶ浜松。

「落ち着きたまえ。別に殺して捨てるワケじゃない。君達は今後の任務に役立ちそうだしな」

「あっぢいいいいいいいいッ！　スカートに燃え移ったって

ッ、やべえってッ！」
勝手に一人で火だるま。炎が浜松を汚物と認識したようだ。
「儂等の態度次第で今後の身の振り方が変わってくる……そういう事じゃな？」
土佐が立派な白ヒゲを弄りながら呟く。
「理解してもらえたのなら話が早い。現在、我々実動課はかねてより手配中のハッカーに関する情報を探しているんだが、一向に進展が無くてね。ネットの海を自由に行き来できる『デジタル生物』とでも言うべき君達なら、色々と使い道がありそうだしな」
「つまり、晴れて自由の身になるンやったら、誠意を見せろっちゅうワケやな」
出雲が仁王立ちしてポーズをきめてる。背中の贅肉がとってもプルプルだけど。
「よかろう！　ならば、この浜松講師も協力するにやぶさかではない！　諸君、まずは一般的なレクチャーから始めるよ！」
そう言って出現したのは、赤縁メガネをクイッとしながら指示棒を振り回す女教師。大きなホワイトボードは常に抱き合わせ。
（なるほど……仮想空間においては、ネット上の情報全てが連中の好き放題。何でも有りというワケか）
宇野課長はさすがに弥富とは違い、状況を冷静に分析し、迅速に感覚を適応させていた。
「先生、質問や」
「出雲ちゃん、教室ではまず学生服に着替えましょう。他の皆さんもです」
言われてモゾモゾと着替えだす。郡山の男子高生と出雲の女子高生は一応様になってるが、土佐の学生服姿はただの痴呆老人にしか見えん。そして……
「いや、あの……私もか……？」
いつの間にやら宇野課長も悪フザケに巻き込まれ、学生服姿。事情を知らない人から見れば、成り立ての変態。

「では、改めて。出雲ちゃん、何が知りたいのかな？」
「結局、『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』使うとどんなよくないコトが起こるン？」
「ふむ、実に良い質問。では、このホワイトボードに概要を分かりやすくまとめて書くよ。しっかりノートに書き写しなさい！」
で、下記のようになります……

【美人教師・浜松の傾向と対策ワンポイントアドバイス☆】

●初期症状――鬱病の兆しが表れる。軽い幻聴。軽い幻覚。外出が億劫になる。

・

●中期症状――躁鬱病にかかる。重度の幻聴。重度の幻覚。外出が恐くなる。

・

●末期症状――完全に引きこもる。“ガイアがオレにもっと輝けと囁くんだ”……とか言い出す。ラブ〇ラスは現実だと感じるようになる。クリスマスや大晦日を毎年一人で過ごすようになる（作者を含む）。

「以上の症例が確認されております～～す。そこで、偽Ｐ・Ｄ・Ｓの被害に遭った場合は、以下の処置をとりなさい！」
ケース１＝パソコンにバケツで水をかける→感電する→火がつく→全焼。
「先生ぇ、全てが灰になっちゃってます」
郡山君がとりあえずツッコんだ。
ケース２＝１１９番に電話する→救急車で病院に向かう→途中で事故る→逝く。
「先生……結局、死んどるぞ」
土佐君がガッカリしてる。
ケース３＝電薬管理局へ通報する→エージェントが踏み込んでく

る→罪状を述べられる→失禁する
「コレは更紗に該当するケース。理由としては、失禁してるとこ見てみたいからで～～す」
浜松講師の趣味・嗜好はどうでもいいです。
「浜やん先生ぇ。根本的な質問なンやけど、Ｐ・Ｄ・Ｓって何のために開発されたン？　ソフトが一般で発売されとった時分はエライ儲けたらしいけど、売り上げの殆どは契約しとったソフトメーカーに入って、電薬管理局には特に還元されンかったらしいし」
「とってもイイ質問です。御褒美として、２時間後に賞味期限が切れるコンビニ弁当を差し上げま～～す！」
「いらんで」
却下されちゃったんで、教卓から出しかけた冷たい弁当はお蔵入り。
「では……その点については、現場責任者に尋ねてみるのが一番かな～～★」
浜松講師が何故か不吉な笑みをこぼしながら、宇野課長を睥睨する。
「特務事項に該当する内容だ。話せるワケがないだろう」
課長は目を背けると、触れてほしくない事情の存在を明らかにしちゃった。
「では、勤め先の規約により話せない課長さんに代わって、あたしが分かりやくす説明するよ。ここはテストに出しちゃうから注意するように！」
「はぁ～～～～い」
皆さん、良い返事。
「以前、郡山君が更紗に説明していた内容を思い出しなさい。つまり、“電薬管理局は動物の脳髄を搭載した生体ＰＣを開発した”……という件。管理局は数社のソフトメーカーと契約を交わし、生体ＰＣを管理・制御するための防火壁を開発。で、その過程で偶然生まれた副産物……それこそが『Ｐ・Ｄ・Ｓ』なのねん」

浜松講師は得意そうに講釈しながら、宇野課長の方に一瞥をくれた。彼はチラチラと彼女を盗み見るようにして、分かりやすく動揺している。

「当時、彼等は年々深刻化する世界規模のネット犯罪やサイバーテロに対し、迅速且つ確実に対応しなければいけなかった。で、その問題を超合理的に解決する手段として利用されたのが……」

――――パンパンッ！

浜松講師がホワイトボードの『オリジナルＰ・Ｄ・Ｓ』の文字を叩く。

「分かった、分かった！　いいだろう……私は今から“独り言”を口にする。聞きたければ勝手にしろ」

ネット上を漂流するあらゆる情報へアクセスできる禁魚達に、ヘタな隠蔽は無意味と悟ったのか、課長は学習机に両肘をついて手の平を組んだ。

「我々には決して侵されない不動の監視プログラムが必要だった。しかし、公的に法案として成立を待っていたら、プライバシーの大いなる侵害だとマスコミから叩かれるのは必定。ハッカー達にも感知されて、対策を練られてからでは遅い……そこで、一般大衆に迎合する要素を含んだ汎用性の高いソフトを開発した」

「なるほど。それがＰ・Ｄ・Ｓ……確かに効果は抜群だったようですね」

郡山が軽く頷く。

「予想以上にＰ・Ｄ・Ｓは定着した。一般家庭に民間企業のサーバー、世界中のネット環境へ瞬く間に浸透していった。が、何事にも１００％というものはない……Ｐ・Ｄ・Ｓに高い中毒性があると判明し、次第に社会問題化しはじめた。しかも、並行して偽Ｐ・Ｄ・Ｓが横行し、我々は対応に追われるようになった。偽物は更に依存性が高く、多くの中毒患者や廃人を出す結果となった。マスコミからは“全て大元のオリジナルが元凶だ”と非難され、実動課は馬車馬の如く働いている」

「コピーがコピーを生むからのう……一度ネットの海に流れ出した情報は、どれだけサイト管理者を逮捕しても回収しきれんからのう」
土佐君が学ランのボタンを弄りながら寂しそうに呟く。
「独り言をありがとう、宇野君。では、ここからがこの講習の核となるワケだが……皆さん、享輪コーポレーションに深見素赤が勤務していたという事実は、まだ記憶に新しいですね？」
「新しいで～～～～す」
またもや良い返事だ。
「おおっと、時間だ。本日の授業はここまでッ！　ここから先は尺が長くなりそうだから次回ッ！　美人講師は読者のコトも気づかうんですよ～～！」
「浜やん先生ぇ……メタ発言過ぎやでぇ」
起立、礼。授業終了。

藪をつついたら蛇が出ちゃったよう（前書き）

シスター「神よ、柏木志保と中村イネがそろって懺悔に来ているのですが……」

神「追い返せ。マジで」

藪をつついたら蛇が出ちゃったよう

「……………………………あ」
少々長い沈黙の後、弥富がマヌケな声を漏らす。事実の隠蔽に努めて
「よく帰ってきたな。オマエに頼まれた通り、事実の隠蔽に努めてやったぞ〜〜」

ポチがデスクトップの前に座って、勝ち誇ったみたいに腕組みしている。で、現在……弥富の部屋でナニが起きているかと申しますと——

「うっしゃあああああああああああああああああッッ！！」

カキィィィィィィィィィィ——————————————————ッツン！！

弥富が金属バットをフルスイング。
「あべしぃぃぃぃぃ〜〜〜〜」
変な声を漏らして吹き飛ぶポチ。壁で反射して、天井にぶつかり、落下。とても清々しい笑顔で脳天から大流血。
「な、な、な……何のつもりだッ、コレはあああああああああああッッッ！？」
あまりの憤怒により、弥富は脊髄反射で人を殺めかねないテンションだ。何故なら、部屋の床一面にプリントしたてのＡ４用紙が散乱していて、とっても卑猥で、とってもアグネスを覚醒させそうなＣＧが印刷されてるから。とても描写できるレベルではありませんので、妄想の力でモザイクをかけてから御覧下さい。
「ど、毒を以って……毒を……制す……けふぅ〜〜」
ポチ、瀕死。
「俺の脳内プチ裁判が審議を行った結果、判決は極刑」

今の彼には説得も交渉も通じそうにありません。
「べ、弁護士を……呼んで欲しい……ぞ～～」
ポチ、呻きながら再起動。
「弥富殿ッ、どうかされたのですかッ！？」
玄関戸の向こうに待たせておいた津軽が心配して彼を呼ぶ。とにかく、この状況を収拾せねばッ！　……って思ったんだけど、バタバタバタっと足音がして入ってきちゃった。制止するヒマもなく、床一面のピンクなカオスがこんばんは。
「あ……」
「お……」
弥富とポチの両名がマヌケな声を漏らす。
「……こ、コレは……！」
リビングに踏み込もうとした津軽の足が止まり、硬直している。当たり前だ……この光景を直視しておきながら躊躇なく踏み込めたら、基本的に変態。あ、そういえば……
グシャ――
モザイクの塊が非情にも踏みつけられ、「あんッ★」だとか「らめぇ★」とか幻聴が。
「弥富殿……もしかして、マス（わァ～お★）ションをされていたのですか？」
「……」
「……」
弥富とポチが揃って沈黙。この沈黙が導き出す解答――『天然の変態』。特徴――『希少種のため、取り扱いは非常に困難』。

場所は変わって電薬管理局・実動課・検査棟――
「先生、儂の所見なんじゃが……発言してよいかな？」
美人講師の特別講習2時間目が始まり、土佐君が挙手した。
「いいとも～～！　ぶっちゃけちゃいなさい！」

浜松講師が指示棒でビシッと指す。
「もしや、『オリジナルＰ・Ｄ・Ｓ』の開発に深見素赤は深く関わっておったんじゃないのか？」
土佐君の目は真剣そのものだった。今にも眼光で浜松講師を射抜きそうなくらい。
「ちょ、待てッ！　これ以上不用意な発言は控えて……」
「正解。ま、厳密に言っちゃうと……『深見素赤』＝開発者」
宇野課長の制止も空しく、浜松が率直に解答を述べてしまった。
「えッ、というコトはですよ、浜松さんは自分が深見素赤だって言ってましたけど……んんッ？」
郡山が軽く混乱しはじめる。この仮想空間に存在する人の姿をした者達は、禁魚のアバターだ。つまり、郡山や出雲という名前はついていても、人体や人間の意識が備わっているワケではない。あくまで、禁魚の異常発達した脳神経が具現化させるデジタルの人形……本体はあくまで魚類なのだ。そして、浜松の本体は水槽で泳ぐ『黒出目金（♀）』であり、他の者と同様のハズ。なのに、彼女は自分と深見素赤が同一と言う。
「さてッ、盛り上がってまいりましたッ！！」
浜松講師がホワイトボードをバシッと叩き、一枚の大きな写真を張り付けた。

「……ダレ？」

一同、首を傾げる。
「こ・の・あ・た・し☆」
左右の頬に人差し指を押し当てて、全身を斜め４５度に傾けて言う。本人は随分と可愛らしくポーズを極めたつもりのようだが、受講中の生徒達はあまりに微妙な空気。え？　何故かって？　だって……
「アバターとは全く似てませんね」

「せやな。みすぼらしいって言うか……華が無いっていうか……後、貧乳」
「えらく野暮ったいメガネかけとるのう」
「私の知る情報では弥富更紗と同い年のハズだが……えらく老けて見えるな」
感想を総括すると――――『アバター詐欺』。
「お黙りゃあああああああああああああああああああああああ――――――ッッッ！！」
浜松講師、発狂。両の手の平をワキワキさせながら、天を仰いで吠えた。
「みすぼらしい！？　それのせいで他人様に迷惑かけた覚えはないんじゃい！　だいたい、華が無いと女は失格か！？　貧乳は世界が認めるステータスだ！　それに、あたしはド近眼なの！　レンズがブ厚くて大きくてフレームが高齢者臭いのは仕様なの！　しかも、言う事欠いて老けて見えるだあああ！？　生理年齢まで改ざんするかあああ！　写真の写りが悪いだけだッ、撮影技術の低さに定評があるだけだからねえええ！」
……チ～～ン。
「ふぅ……」
一通りまくしたててから、休憩。水を一杯飲んで、プリンを一個食べて、片肘ついてゴロリと横になる。
「――――で？」
宇野課長が彼女の発言に少なからず興味を持ちはじめた。
「あたしは享輪コーポレーションのプログラマーだった。で、電薬管理局との契約に基づき、依頼された通りのソフトを設計・開発したワケ。けど、デバックの最中に気付いちゃったんだよね～～……P・D・Sの“他の使い道”に」
浜松がそう言って意味有り気にニヤリと微笑む。写真の深見素赤

もニヤッと口元を歪める。
「そこまでだッ！！」
野太い怒号がとび、課長が立ち上がった。あまりにいきり立ってるもんだから、他の連中がビックリして口を半開き。
「なぁによ〜〜、プログラムした張本人が自分の作品を紹介しちゃマズイ？」
「享輪コーポレーションと取り交わした契約にあったハズだ……<ソフトの設計・開発の過程で発生した知的財産権は、全て電薬管理局とその直轄組織に帰属する>……とな」
「ええ、ええ。はい、はい。そんなコトは分かっておりますとも。けぇどぉ〜〜、今のあたしは禁魚の『浜松』。口から飛び出る重要機密に卑猥な単語まで、とことん無責任でいかせてもらいま〜〜ッす！」
どうしようもなく確信犯だ。
「き、貴様ッ……！」
宇野課長は耐えかねてインカムを外す。その瞬間――彼の脳髄が認識していた仮想空間は雲散霧消し、検査棟の設備機器が立ち並ぶ無機質な空間に戻る。
（ふぅ……ネット環境を限定しておいて正解だったな）
最悪のケース……電薬管理局のスキャンダルがネットの海に流れてしまえば、国家レベルで収拾がつかない事態に発展する。
「さて、どう報告すべきか……な」
彼には電薬管理局の役員に事の次第を報告する義務がある。が、今ここで短絡的に報告を済ませば、確実に処分命令が出るだろう。しかし、実動課の責任者としては、まだ使える情報を隠しているであろう禁魚達を見捨てるのは惜しい。実動課は現在、偽Ｐ・Ｄ・Ｓの創始とも言うべきハッカーを指名手配している。ネットの海から必要な情報を手軽に且つ、巧妙に引き出せる彼等なら、充分に役立つに違いない。
（言い訳なら後でいくらでもしてやる……“ヤツ”さえ逮捕できれ

ばな）
課長はテーブルの上に両肘を突くと、両手を合わせて自分の口元にあてがった。そんな彼の目は――静かに笑っていた。
「さて。お主の発言の全てを信じるとして、“他の使い道”とは何じゃ？」
講習の時間は終了して仮想空間は解体され、それぞれの禁魚が普段着に変わる。そして、土佐のジジイが白髭を弄りながら浜松に問う。
「教えてやんな～～い！」
浜松、何故か変顔になって質問を却下。べぇ～～って出してる舌を引っこ抜いてやりたい衝動に駆られるが、土佐は至って大人の対応。
「儂は１５年禁魚として生きておる。おそらくは最年長のクラスじゃろう……じゃから、既にネットの海から完全に消去されてしまったカスのような情報も、一部記憶しておる。なぁに、実に下らん話じゃよ。ネット中毒者共の与太話に過ぎん。が、ここにきて奇妙な信憑性が湧いてきおったわい」
「何が言いたいンや？」
出雲がキョトンとしている。
「実は、ボクも一応、推測から月並みな回答が出ちゃったんですけど……」
郡山は何だか申し訳なさそうに苦笑している。
「……ちッ、これだから空気の読めん連中はッ」
セーラー服姿の浜松は赤縁メガネを外すと、不貞腐れたかのようにスカートの裾でレンズを拭きだす。
「ちょ、なあ……うちだけ蚊帳の外っぽいンやけど！」
出雲、顔を赤くして膨れてる。そして、浜松はメガネをかけ直し……
「はいはい、とどのつまり――」

「……マジで？」
所変わって弥富の部屋。家主は床に正座して驚愕の表情で呟いた。
「……ＭＡ・ＺＩ・ＤＥ？」
そのすぐ隣では、これまたチョコンと正座したポチが驚愕してる。
「ええ。この事項は実動課でも最重要機密とされており、宇野課長から断じて部外者への情報漏洩が無きよう、釘を刺されておりますの」
正座する二人の前に腕組みして厳然と立つ津軽。
「いや、あの……聞かされた後で言うのもなんですが、“最重要機密”が今まさに口コミで漏洩されちゃってますけど」
「弥富殿は部外者ではありませんわ。ですので、ここで話しても問題は無くってよ」
いや……宇野課長的には、事件に関わっている組織内部の人間以外には話すなという意味なんだろうが、天然の変態である彼女には正しく伝わってなかったようだ。
（『生命のデジタル化』――バカなッ……そんな陳腐なＳＦもどきが現実にあるワケが……）
弥富が様子をうかがうように、隣のポチを横目で盗み見る。
――ばりッばりッ　――グビぃグビぃ
煎餅かじって茶ァすすっとる。この後の御話に興味津々で準備万端だった。

出てきた蛇をつついたら卵を吐き出したよう（前書き）

シスター「神よ、本日は体調が優れないので、御休みさせていただきます」

神「アノ日？　ねえ、アノ日？」

出てきた蛇をつついたら卵を吐き出したよう

ネット社会では結構有りがちな都市伝説。忘れた頃に泡のように湧いて出てきて、流行る前にどっかに消えていく。次に新しく出てきた時には別の色に脚色され、新味をネット住人に提供する。そんな微妙な繰り返し……まるで、役に立たないダイエット本の悪循環。そんな中に必ずつきまとうのが――『生命のデジタル化』。

「厳密に言いますと、人間の脳内で発生する電気信号を常にデジタル処理できる環境下に置き、対象者の人格・記憶・性質などをデジタル変換してネット内で再構築する……そんなテクノロジーですわ」

「……はぁ」

弥富はリアクションに困って生返事。

「くぎゅうううううッ～～、ポチは尿意に従ってオシッコしてくるぞ」

ポチはトイレに急行。おい、オマエは自由過ぎ。そして、くぎゅうって言うな。

「それって……いわゆる『ＡＩ』ってヤツですか？」

「いいえ。人工知能とは基本的な構成が異なります。デジタル化された人間はネットの海を自由自在に移　動でき、あらゆる情報を回収し、どんなに強力な防火壁も突破してしまうそうですわ」

「いや、ちょっと待って下さい……その言い方だと、既に“前例”が存在しているみたいに聞こえますけど」

「いいえ。わたくしが知る限り、公式の実験結果は存在しません。あくまで理論上の話ですわ」

「理論上……けど、可能性は十分にあるという事なんですよね、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓには」

そう言って弥富が複雑な気分に陥って俯く。そして、思い出した……不可思議な方程式を。

――――――――――――【浜松（禁魚）＝深見素赤（人類）】――――――――――――

（まさか……そんな。いや、もしかすると……？）
津軽の言った内容から察するに、深見素赤はオリジナルＰ・Ｄ・Ｓに組み込まれたチートコードの一種を用い、自らの肉体を被験体として『浜松』という魚類に変貌した……そんな突拍子もない解答が導き出されかねない。
「むむむむッ～～……なんかイライラするッ！」
どうにもハッキリとした正解が見えてこない状況で、弥富の脆い忍耐がそろそろ限界だ。てなもんで、彼はＵＢの扉に向かって呼びかけた。
「なげえよッ！　いつまで残尿感と格闘してんだよッ！」
インカムを付けていない津軽には何が起きているか分りようもないため、キョロキョロと状況を静観するしかない。

ドカアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッン！！

吹き飛ぶ扉。ＵＢの中からポチがムダに格好良くダイナミック退室。床に片方の拳を打ちつけて、俯いたまま硬直中。背景からは“ゴゴゴゴゴゴッ”て変な効果音がしてるし。
「よし、出た」
ポチ、どや顔で立ち上がる。
「知らねえよ。排泄の事後報告なんかいらねえよ」
弥富、迷惑そうな面でポチをつまみ上げる。
「禁魚達と接触できない今、忌々しいことにオマエにしか頼れん。だから、答えろ。深見素赤は自分に一体、何をした？」
彼の瞳はいつになく真剣だ。
「おお～～、男前になってるぞ～～。この一級フラグ建築士め」

意味分かんねえよ。
「弥富殿、少々お待ちを」
静観していた津軽が何故か止めにかかる。
「……何か？」
「できれば、わたくしにもインカムを準備していただきたいのですが」
「え？」
「わたくしは監視・警護役として、弥富殿の身の回りで発生している事象を認知しておく必要がありますの。しかも、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓのコピーがこの場に有る以上、弥富殿の一挙手一投足を確認させてもらいますわ」
め、面倒臭い……。が、任務に忠実過ぎる彼女に対してヘタな返答はできない。また買って来るか？　いや、こんな時間に？　アキバの街の店って早めに閉まるトコが多いし……さて、どうする？
と、思考する彼。そんな時に――
ピンポ～～ン♪
チャイムが鳴る。しかも、結構な遅い時間に。古今東西、こんな時間に鳴るチャイムに従い、ドアを開けても良い知らせや発展は大抵訪れない。最悪、玄関開けたら2秒で刺殺体なんてのもある。
「どなたか来られたようですわね」
案の定、津軽さんから警戒と少々の殺意が発生しちゃってるし。
「あの……とりあえず、いきなり凶器を握り締めるのは控えてください」
部屋の中には既に危険人物が居る。ただの一般人が訪れて来た場合、確実に通報されるんで、刃物をギラつかせるのはストップの方向で。
「分かりましたわ。では、わたくしがまず応対致しますので、弥富殿はいつでも逃走できるよう、窓際に立っていてくださいな」
そう言って彼女は玄関戸の覗き窓に顔をソッと近づけた。
「……ダレですか？」

弥富が心配そうに声をかける。
「くッ……マズイですわね」
津軽の顔色が明らかに変わった。これは――戦慄の色だ。
「えッ、あ……何がッ……！？」
プロの不吉な言葉に気圧されて、弥富は窓の鍵を開ける。
「スーツ姿でサングラスを着用した男女が……確認できるだけでも5人」
「そんな……！」
弥富の目視は必要ないようだ。そんな連中がこんな時間に訪ねてきた時点で、建設的な事態に進むワケがない。
「内の一人の男が紙袋を携帯していますわ……おそらく、爆発物の類いではないかと」
「おいッ、ポチ！　何とかして少しは役に立てよ！」
切迫した雰囲気にのまれたヘタレが、藁をも掴む思いでポチを呼ぶ。
「愚か者めぇ～～、こういう窮地では変装してやりすごすのが常套手段だぞ～～」
「な、なるほど。けど、俺の部屋にある物っていったら……」
素早く周囲を見渡すが、一人暮らしの一般人の部屋に都合良く変装道具など落ちてるワケはなく……
ジョキンッ、ジョキンッ――
乾いた金属音。仁王立ちするポチの手には大きなハサミ。
「お、おい……まさか……断髪しろってか？」
「痴れ者めぇ～～、その程度で隠し通せるか～～」
「じゃ、じゃあ……一体？」
「さあ、勇者よ。今すぐズボンとパンツを脱ぐのです～～」
「勇者ってダレ！？　そして、男を廃業しろってか！？」
「外見より先に中身そのものを変えてしまうんだぞ～～」
キラ～～ン★
ハサミの先端が不気味に光ってて、小さなシザーマンが迫って来

ます。
「いや……性別まで変える必要ねえから」
マジ気味で迫ってくるんで、弥富は金属バットで自衛の準備。
ドンドンドンッ！！
（うおッ、えらく積極的な連中だな！）
他のアパート住人から苦情が発生しかねないくらいのノック。相手が敵性行為を目的としてやって来たのなら、もっと隠密な行動をとるべきだと思うんだが。どうやら頭はあまりよろしくないようだ。更に……
「おーい、弥富くーん！　いないのかーい！？」
御指名入りました。本日も彼は大人気です。
「弥富殿、紙袋を携帯している男が呼んでますわ。お知り合いですの？」
津軽が微妙に困惑する。
「断じて知り合いじゃありません。ええ、この声に聞き覚えは一切ありませんとも（汗）」
頼むから何も言わずに立ち去ってくれッ……そんな表情の弥富はなんとか落ち着こうと、ハサミを奪い取ってポチのショートボブをざっくざく。
「今日はこの前の勧誘の続きに来たんだー！　なあ、開けてくれないかー！」
夏の夜空に響き渡るほどの大声で呼びかけてきやがる。
「一体、何事だいッ！？　こんな夜中にアンタ等大勢でうるさいよッ！！」
「えッ、はあ……スミマセン……」
あ……隣のオバサンに怒られてやがる。
「津軽さん。いいかげん御近所さんに悪いんで、その人達を中に入れてやってください……」
弥富は素直に受け入れる事にした。
「承知しましたわ」

津軽は充分に警戒しつつ、玄関戸の鍵を解除してドアを開けた。
「いやあ、こんばんはー！　……んんッ？　アナタはどちら様？」
土間に入って来るやいなや、鋭い目つきの津軽を発見して紙袋の男が固まる。
「そちらこそ何者ですの？」
「おーい、弥富くーん！　大勢で押しかけちゃったけど、いいよねー！？」
津軽の質問を無視って、傍若無人にまたもや大声で呼びかけるもんで……仕方なく。
「あ、あの～～……マジで困るんですけど」
家主がヒョコッと顔を出す。で、彼の視界には予想していた通りの連中が立っている。アイツ等だよ――享輪コーポレーションで尽く警備員に捕獲されてた『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』だよ。リーダーの『すみす・ブラック』とかいうのが紙袋を愉快そうに振り回してるよ。
「いやあ、先日は大変な目に遭っちゃったよ。まさか、アポイントをとったにも関わらず、企業の横暴に巻き込まれちゃうんだからねえ。全く、リアルの世界はやっぱ恐い事で一杯だよねえ！」
何かを悟ったかのように頷いてますが、人並な社会活動をしていない連中の勘違いです。
「で、本日はどのような御用で？」
無視られた津軽が少々イラつきのこもった声で問う。
「ところで弥富くん、この人はダレかな？　さっきからやたらと荒んだ目つきで我々を睨むんだが……もしや、君の彼女だったりするのかいッ！？」
「ウソでしょ！？　禁魚を飼ったりする男がリア充なワケないじゃん！！」
「だよねえ～～、部屋からヒッキー独特の仄かな異臭もするし」
「……こ、ここ……あ、熱い」
有象無象から口々に言われとります。

「おお〜〜、この童貞と処女の集まりからは、中二病と邪気眼の臭いが漂ってくるぞ〜〜。最寄りの病院へ急がないと御両親が泣くんだぞ〜〜」
ポチが診断を下した。多分、セカンド・オピニオンはいらないと思う。
「で、何しに来たんですか……？」
とてつもなくイヤそうな面の弥富。
「『禁魚』に関する新情報を君に提供しにきたのさ」
「――は？」
「ところで、君の四匹の禁魚達はドコだい？　水槽が……空みたいだが」
まただよ……この連中はまた何か余計な情報を俺に与えて、右往左往させようとしてるよ。そして、津軽さんはすっかり蚊帳の外に置かれた上に、俺の彼女呼ばわりされて瞳が憤怒色に変色しかけてるし。
「よ〜〜し、来るがいい。この人生オンチ共めッ。ポチが次々と更生させてやるぞ〜〜！」
ジョキンッ、ジョキンッ――
清掃業者の方、俺の部屋がついに不審者と変態と悪フザケで占拠されました。申し訳ありませんが、明日は燃えるゴミの日なんで、全員まとめて出したいと思います。

吐き出された卵を投げたら爆発したよう（前書き）

シスター「神よ、大変ですッ！　この教会が姉歯物件であることが判明しましたッ！」

神「ごめん、自分も前髪偽装してた……」

吐き出された卵を投げたら爆発したよう

ただいまの時間――深夜１２時ちょい。残念ながら家主は安眠のひと時を奪われ、床に胡坐をかいて好き勝手やってる連中の接待……じゃなくて、管理。携帯ゲームで興奮してたり、持参したスナック菓子を食ってボロボロとカスを落としたり、レディコミを枕にしてイビキかきはじめたり……ここは大きいお友達の託児所かよ。

「弥富殿、この手の輩はどう扱えばよろしいのかしら？」

「基本的には１１０番で一掃します」

サササッ――――ビシッ！

『１１０番』の単語に素早く反応して、常識知らず共が綺麗に正座&土下座。

「とにかく帰ってください。俺はアンタ達と知り合いになるつもりは毛頭無いし、勧誘もお断りです」

弥富はズバッと言ってやった。

「まあまあ、そんな短絡的に結論を急ぐのは良くないよう。君も偽Ｐ・Ｄ・Ｓにまみれた生活を送れば、真の自分が見えてくるハズだからさあ」

すみす・ブラックが気持ち悪いスマイルでにじり寄ってくる。明らかに自分より年上なんだろうが、こ　んな惨めな人種にだけはなりたくない。っていうか、どうしてこうなったんだ？　どいつも親元を離れて生活すべき年齢だと思うんだが、親の年金食い潰してまで働く事を拒否して生きているみたいな。“働いたら負けだと思っている”――だあ？　バカヤローッ！　勝負以前に土俵に上がってねえじゃんかッ！　……って、俺もじゃねえか！

（ヤベぇ。未来の俺が一瞬、垣間見えた……）

危険だ。このネット中毒者共を俺の眼前に長時間放置しておくのは、精神衛生上非常によろしくない。

「と・に・か・く☆　コレを見てくんない！」

そう言って、『すみす・バイオレット』と書かれた名札を胸元に付けた姉チャンが、紙袋から冊子を取り出して開く。
「……うわぁ……（ドン引き中）」
弥富の表情が著しく曇る。いわゆる一つの“世も末”ってヤツだ。
「コレはあたしが飼ってるワンちゃんで、名前は『シュレディンガー』。ビーグルの可愛い男の子☆」
満面の笑みで紹介してくれたが、掲載されてる写真の犬本体はいいとして、隣のアバターはというと、明らかに飼い主の歪んだ嗜好が組み込まれております。
（出たよ……犬耳っ男だよ……）
しかも、どういう意図かは知らんが、ボーイスカウトみたいな制服に短パン、更には白のハイソックス……おいおい、ドコの准尉だよ。少佐と勝手にじゃれてろよ。
「僕が飼ってる猫は血統書付きでね、『ご奉仕するニャン☆』って囁いてくれてさあ、とてつもなく萌えるんだあ～～！」
「お、オレのは……こ、コレ……ベタっていう熱帯魚のメス。人魚みたいなアバターが……その……ふひひひっ」
ウザっ！　そして、キモっ！　『すみす・ブルー』と『すみす・ホワイト』が奪い合うようにして冊子から紹介してくれたけど、オマエ等の現状の人相はテレビに映すとNGになるレベルだから。
「いいかね、弥富くん。現代社会における人心は大変荒んでいる。長引く不況、年々増加する自殺者、環境汚染にダウンロード規制法……ストレスにまみれている！」
環境汚染とダウンロード規制法が何故に同列？
「そんなストレス社会を果敢に生き抜くためには、やはり、心の潤いと癒しが必須！　だからこそ、私は世の人々に広く偽P・D・Sを勧めるのさ！　解るだろ！？」
「さあてと……」
弥富は冊子を取り上げ、キッチンからチャッカマンを持ってくると、躊躇なく点火。そして、窓からポイッ。

「ば、バカなああああああああああああッッッ！？」
すみす・ブラックとその一味が顔面蒼白。どこまでも面倒臭い連中だ。
「とにかく、アナタ方は偽Ｐ・Ｄ・Ｓの所持及び、使用の自白を行いました。わたくしの立場上、まとめて拘束させていただきます」
ドンッと立ち塞がる津軽。
「……アンタ、何？」
全くもって津軽の存在を気にしていなかったすみす・ブラックが、イヤな顔して彼女を睨む。
「電薬管理局・実動課のエージェントですわ」
そう言って自分のＩＤを高々とかざす。
「なッ、ななななッ……なんとおおおおおおおおおおおおッッッ！？　や、弥富くんッ、まさか……我々を売ったのかいッ！？」
黙れよ。ハナっから部屋に居ただろうが。オマエ等なんかダレも買い取ってくんねえよ。
「ん？　コレは……」
証拠物件の押収のため取り上げた紙袋の中身から、津軽がＰ・Ｄ・Ｓ用のインカムセットを発見する。
「あ、ソレは……その～～……」
最早、言い逃れはできない。昨日の今日でまたもや手が後ろに回るみたいだ。
「コレはわたくしが没収致します。今から実動課に連絡をとって、護送車を派遣してもらいますわ。アナタ達にはしばらく、国民の税金で不自由に暮らしてもらいましょう」
そう言って津軽が冷笑する。
「やだやだやだやだやだッ！！　マジでありえないしッ！！　親呼ぶよッ！！　いやホントにガチでッ！！」
うっわあ～～……無様過ぎるよ。イイ大人が顔真っ赤にしてダダこねだしたよ。

「どうします？」
弥富としてはどうでもいい事なんだが、これ以上部屋で騒ぎになると、また隣のオバサンから怒られるんで普通に困る。
「では、こうしましょう。わたくしも鬼ではありません。アナタ方が更生できる道を用意して差し上げましょう」
「へ？　そ、それって……？」
「取引ですわ。アナタ方はネットの情報に詳しいようですから、わたくしに協力していただきます」
「も、もしかして……協力すれば無罪放免ですか！？　そうなんですか！？」
すみすシリーズ達が、神様でも拝むかのように津軽の前で合掌しとる。
「ええ、よろしくってよ」
パアアアアアアアアアアァァァァァァァァァァァ～～～～ッッッ！
彼女から後光がさしてます。
「おおォォォ～～、神様ぁ仏様ぁ有明ビックサイト様～～！」
異物が混じっとる。
「よくお聞きなさい。アナタ方には『親』の所在をつきとめる手伝いをしてもらいます」
津軽がものすごく真剣な目つきで、面前に並ぶ連中を見下ろす。
「えッ、『親』ってまさか……『Ｍｒ．キャリコ』の事ですか！？」
弥富の関知していない名称がまたもや現れた。
「引き受けるなら、このまま見逃しましょう。拒否されるのなら……」
「いえす！　いえす！　いえ～～ッす！　もちろん、やりますとも！　なあ、みんな！？」
――――ビシッ！
一同、涙目で敬礼。バカだけど意思の疎通は早い。
「ところで弥富くん。インカムを付けてるみたいなんだが……？」

すみす・ブラックが目ざとく発見した。Ｐ・Ｄ・Ｓ専用インカムの所持・着用は、同時にＰ・Ｄ・Ｓの所持を示唆する。彼等の興味津々を止められるワケもない。
「はいはい、じゃあどうぞ……」
これ以上大きなお友達の気持ち悪いダダは目にしたくないんで、彼は素直にインカムβを手渡す。
「……おおッ、君はダレ？」
装着したすみす・ブラックの前に現れるポチ。髪の毛が弥富に刈られてグシャグシャだけど。
「ついに禁断のオリジナルＰ・Ｄ・Ｓを体感しおったか～～！　オマエ達みたいなリアルとアニメの区別がつかない連中に、トイレから出て洗ってない手をとっても優しく差し伸べる、そんなポチに会えて満足か～～！？　満足なら“ワン”と鳴くんだぞ～～！」
「ワンっ（喜）！」
「更には“ニャン”と鳴くんだぞ～～！」
「ニャンっ（喜）！」
「では、質問だぞ。世の中に存在する、最も見てはいけないモノを答えよ～～」
「閉店後、レジのお金を数えてるメイド喫茶のメイドです（泣）！！」
ヒシッ――
抱き締め合うポチとすみす・ブラック。
「素晴らしいぞ～～！　オマエ達に合格点を与えよう～～！」
どんな基準だよ……。
「では、心して聴くがいい～～、社会の底辺共め～～。この歌で貴様等の腐敗した根性を消毒してやるんだぞッ！」

※『サ〇エさん』のＥＤ調で
＜派遣村はドコですか？＞
作詞：回収屋

作曲：ポチ

ＯＩＬ（チャラッチャチャラ♪）ＯＩＬ（チャラッチャチャラ♪）
ＯＩＬ（チャラッチャチャラ♪）・チャ！

１．働き出したら～～、一生損♪　夕方過ぎまで～～、寝て過ごす♪
今日もニートォォォォォ、明日もニートォォォォォ、三十ぅ代～～♪
ほ～～らほら皆がぁ～～、「働けッ」と～～♪　眠いよ眠いよ～～♪
働く気ぃは毛頭な～～い♪

２．明日になったら～～、本気出そう♪　そう思いながら～～、５年経つ♪
今日もニートォォォォォ、明日もニートォォォォォ、躁鬱病～～♪
ほ～～らほらだぁれも～～、訪ねな～～い～～♪　ダルいよダルいよ～～♪
親の年金食い潰すぅ～～♪

「……どうも、申し訳ありません」
一同、深々と土下座。そして、号泣。よく分からん何かがコイツ等の心根をえぐったようだ。
「あたし……街中でリア充やカップルが視界に入る度に、“とりあえず死ね”って念を送ってたんだけど、金輪際やめますッ！」
「僕は……動画投稿サイトにコメントするだけで一日を終える生活を、今後は控えたいと思うッ！」
とっても低いレベルの目標。
「実は私、こう見えて今年で３５になりました。もちろん、バイトすらしてません。こんな我々でも更生は可能でしょうかッ！？」
そう言って、すみす・ブラックはポチにすがりつく有り様。

「あはははははははははははははははは〜〜……ム・リ☆」
天使のような微笑みを浮かべながら、ポチは手の平を左右に振る。
「こんちくしょオオオオオオオオオオオオオオ――――ッッッ!!」
パタッ……
心の底から絞り出すような雄叫びを上げ、バカ共が突っ伏した。
どなたか救命措置を御願いします。

うほッ！　幼児だらけのゲーム大会！（ポロリもあるよう★）（前書き）

シスター「大変ですッ、孤児院の子達がダレも帰ってきません！」

神「この前みんなで遊んでたよ。五反田近辺で」

うほッ！　幼児だらけのゲーム大会！（ポロリもあるよう★）

夏の朝日はとっても早起き。カーテンの隙間から差し込んできた日光が、ベッドの上の弥富を射る。

ムア～～ン……

「あ、あじいぃ～～……（苦）」

エアコンの電源は切れている。そして、窓はしっかり閉まっている。だから、部屋の空気は湿度がとっても高く、淀んでいて、酒臭い……。

（うわぁ……奈落だぁ……）

ベッドから眺める光景はひどく不愉快で、朝一で目にして今日の運勢が急降下すること間違い無し。何故なら、床の上一面に五人の男女が雑魚寝しとるから。飲みかけの酒瓶が転がっていて、柿の種が散乱していて、すみす・ブラックは下半身だけ何故か裸だし、バイオレットは押し入れに上半身を突っ込んだ状態で寝てる。

「ま、窓を開けねえと……新鮮な空気に触れねえと」

弥富は普段、酒を飲まない。だから、自分の部屋にこもった二日酔い生産工場な臭気に耐えられず、這うようにして窓際に立つ。

ガラッ――

おーぷん・ざ・ドア。

（ああ、外の空気が気持ち良い～～☆　オハヨウ、一般社会。皆さん、本日も労働御苦労さまです！）

俺はいつも通りニート予備軍で、部屋にはリアルから見捨てられた燃えカスみたいなのが寝てます。昨晩はコンビニで酒とツマミを大量に買い込んできて、バカ共が居座るという珍事が発生してました。ええ、俺も滅多に飲まない酒を飲まされて、所々の記憶がキングクリムゾンしています……要するに、本日も働いてませんッ！　もう一度言います。働いてませんッ！　というワケで――

「同じ空気を吸っちゃってスミマセ～～～～ン！！」

遠くの方に見える街に向かって御挨拶。

シャアアアアアアァァァァァァァァ――――

ＵＢの方から聞こえるシャワーを使う音。どうやら津軽さんはまた朝風呂中のようだ。だからと言って、また全裸で飛び出せ青春なフラグが立ったワケじゃないよ。

「あらあら、皆さん汗まみれで寝苦しそう」

「えッ……？」

不意に背後から声がしたもんで振り返ってみると、長身の女性が一人立っていた。光沢のある黒髪を一本の太い三つ編みにし、フォックスタイプの銀縁メガネをかけ、ワインレッドのマタニティドレスを着ている。

「うわ～～い☆」

バタバタバタッ！

で、彼女の後ろから四人の幼児達が元気一杯で駆け出し、床の上で発酵しかけてる敗残者共を踏みつけてる。

「あ、『アンジェリーナ』さん……！」

そういえば、インカム付けたまま寝てたんだ。てなワケで二度目の登場、水槽の中に潜む禁魚達の天敵。『白点病原虫』という病原体の一種がＰ・Ｄ・Ｓによってアバターになっているワケなんだが、コレがまた……なんというか……

「うぅ、んん～～……？」

弥富の声に反応して目を覚ましたすみす・ブラック。うつ伏せになってたんで、顔面にフローリングの埃がくっついてる。

「おおォォォ～～、女神様の降臨だァァぁ～～！」

どんな夢を見てたか知らんが起き抜けにアバターを拝むな。そして、まずはパンツを穿け。

「あの……とりあえず顔洗った方がいいっスよ」

弥富がブラックの肩に手を乗せて憐れみの声をかけてやった。

「おお、弥富くんッ……一体、ダレなんだい？　このクイーン〇ブレイドのカ〇レアそっくりな人は？」
「……」
弥富はあえて押し黙りリアクションは避けたが、心の中では“分かってるじゃん、兄弟★”みたいに微笑んでた。
「うわ～～！　遊ぼッ、遊ぼッ、ゲームしよッ！」
――――ドタドタドタッ！
ボーイ二人にガール二人のチビッ子隊が攻めてきて、手に抱えた大きめのゲーム機でブラックの脳天をガンガン殴ってる。
「い、痛いッ……マジで痛いッ！　この仮想空間ってフィードバック率が高過ぎないかい！？」
目には見えていても、決してアバターは現実には存在していない。脳に与えられた一定の信号が、視覚・聴覚・触覚等に影響を及ぼしている。鈍器で殴られれば痛いし、幼児達の駆ける足音は聞こえるし、目の前に爆乳&デカ尻の妖艶なお母さんも見えたりする。
「ところで、アンジェリーナさん……どうかしましたか？」
彼女は元が白点病原虫のため、夏の高い水温が実は苦手だ。前回は禁魚達に無理矢理引きずり出される形での登場だったが、今回は自分から現れた。何か用でもあるのか？
「あのぉ～～、エアコンつけて欲しいんですけどぉ」
申し訳無さそうに、ちょっぴりモジモジしながら答える彼女はとってもカワイイ（あくまで弥富の趣味として）。
ピッ――
冷房が復活し、室外機の振動音が部屋の中まで響いてくる。
「ん～～……？　なんだあ……？」
「はぁふぅ……オハヨウゴザイマス……」
他のすみすシリーズ達が次々と覚醒。インカムを装着していない彼等には、アバターは見えてないが、弥富とブラックの両名の前で始まる――

「第1回ッ、幼児だらけのゲーム大会ィィィィ！　『アグネスにはナイショだぞ杯』開催するぞ～～！」

いつの間にか出現したポチが元気に音頭を取る。赤いワンピース姿で、妙にレンズの大きなメガネをかけて、正体不明のボロいヌイグルミを抱えている。何かイヤな予感がする……

「記念すべき第1回目のソフトは……なんとッ、『ベヨ○ッタ』だぞ～～！　マミー☆　マミー☆」

やっぱりだよ。どう考えてもオメー等じゃ年齢制限に引っかかるだろうが。平日の朝一で幼児だけ集まってするゲームじゃねえよ。ポケ○ンとかにしとけよ。

「マミー☆　マミー☆」

そして、ポチはそのキャラ気に入ってんじゃねえよ。

「あらあらぁ、ボウヤ達。お客様方が暑苦しそうに転がってるんだからぁ、あまり騒いじゃいけませんよぉ」

アンジェリーナが女神の如き微笑みで幼児達の後ろに座る。

「……ふぅ」

自分でもよく分からない溜息が弥富の口から漏れて、彼は額の汗をぬぐった。起動再開したエアコンのヒンヤリした空気が気持ち良い。

「お疲れみたいですねぇ」

「え、あ……いや、別にそういうワケじゃ……」

不意に心理状態をアンジェリーナに見透かされて、弥富は軽く動揺した。

「話したくても話せない事なんてよくありますよぉ。わたくしはただの病原体ですけどぉ、言葉に出してしまえばスッキリするかもしれませんよぉ」

「……実は、そろそろ銀行口座の貯えがつきそうなんです。バイトするか、実家帰って家業を継ぐか……結構、リアルに選択迫られてて。ここ数日間は色んな事があり過ぎて考えるヒマが無かった

んですけど……どうしようかなって」
　なんとも切実な悩みだった。正直、床に転がってるような如何わしい連中と関わっているよりも、地道に働くべきタイミングが差し迫っているのに、自分は何でこうなっているんだろう？　いつまでもネト充でいるワケにはいかない。でも、実家に帰るのはマジで気まずい……やっぱ、バイト探そう。他人とコミュニケーションをとろう。
「更紗ちゃんには『将来の夢』とかないんですかぁ？」
「『夢』……ですか」
　下の名前で“ちゃん”付けされて、弥富が軽く赤くなってる。
（何だろう……夢って必要なのかなあ？）
　弥富の脳裏に懐かしい記憶が薄らと甦る。ダレもが小学生の頃、必ずと言っていいほど『将来の夢』について作文を書かされる。まだ世間を殆ど知らぬ無垢な子供達は、不相応という言葉を無視するように野球選手やらサッカー選手やら、医者やら国家公務員やらと……思いついた職業を書く。当然、その夢が実際に叶う事はまず無い。そもそも、小学生みたいな人生経験値の浅い者達に『夢』を尋ねる行為自体が間違っている。自分には何ができて、何ができないのか。どんな人格の持ち主なのか。肉体的にはドコが優れているのか、どんな環境が苦手なのか……そういったモノが総合的に把握できて、初めてプランを練ることができる。１０才そこそこで作文に書く『将来の夢』はただの願望や、趣味の延長上に存在するであろう、関わりのある職種を挙げているに過ぎない。そして、弥富はそんな仕組みなど理解できるワケもなく、学校の先生に質問した事があった……
＜先生ぇ、この作文書くとみんな夢が叶うんですか？＞
　……って。現在、弥富２５才。将来の展望特に無し。だが、それこそがリアルだ。嘘の無い純粋な現実だ。かつての学校の同級生が

どれほどの社会的地位を得ていようが、そこに勝ち負けは無い。無限にある結果の内の一つが該当しただけ……なるべくして成った。それ以上でもそれ以下でもない。そして、今の弥富には――

「ふらぁ～～い・とぅ・ざ～～・む～～ん！」

幼児達が楽しそうに合唱。コントローラーのボタンを連打しまくってアクション中。

「さあ、ゲストの諸君！　今こそロリ魂とショタ魂を萌えたぎらせ、共に天使達を喰い尽そうぞ～～！　かぁーまぼぉーこーッ！」

やめなさい、ポチ。他人様を巻き込むんじゃありません。

「いいでしょう……見せてやりますッ！　両手に作ったゲームだこは伊達じゃないってトコロをッ！」

すみす・ブラック35才。幼児相手にマジ気味。で、再度言うけど……まずはパンツを穿け。（このあたりがポロリです。申し訳ッ！）

「バイトすれば……何か夢的なモノって見えてくるんでしょうか？」

弥富が独り言のように呟く。

「わたくしは病原体ですからぁ、この先の人生なんて決まってますけどぉ、更紗ちゃんには沢山の選択肢がありますよぉ。よ～～く考えて選んだモノならぁ、たとえ予定外の結末に至ったとしてもぉ、悔いは無いと思いますぅ」

「……そんなモンですかねえ？」

まずは体を動かそう。バイト探すため、本気出そう。明日になったらね……。

「わァ～～！　このジャ〇ヌって女の人、頭にポンデリング付けてるよォ！」

よし、俺もゲームしよ。ニート予備軍の生き様見せたるでぇぇぇ！

よ～～く考えよう、お金は大事だよう（前書き）

シスター「神よ、震災国へ援助金を送りたいのですが、寄付金が全く足りませんッ！」

神「地球のみんなッ、オラに現金を分けてくれッ！」

よ〜〜く考えよう、お金は大事だよう

チャンチャラ♪　チャカチャカ♪　チャンチャラ♪　チャア〜〜〜〜♪

「……ふぅ」

場違いな格好をした一人の女性が、静かに佇みながら場違いな空気を漂わせていた。

「わあああああああああああああ――ッッッ☆」

「きゃあああああああああああああ――ッッッ☆」

辺りから聞こえてくる実に楽しそうな喧騒を完全に無視するかのように、紙タバコの煙を燻らせている。その淑女……歳の頃は４０前後くらいだろうか、絢爛豪華な着物を纏ってベンチに腰かけている。切れ長の眉と、捕食中の爬虫類みたいな瞳……特に何かをしているワケでも無く、周囲の仰々しいアトラクションを眺めているワケでも無く……。

夕方――夏のまだ元気な夕日に照らされながら、擬人化されたネズミやらアヒルやらの着ぐるみが辺りで愛想を振りまいて、ファンタジィーなＢＧＭが往来のカップルやファミリーを和ませている。そんな中で淑女が口を開いた。

「……さあて」

いつの間にか彼女の両脇に男が一人ずつ腰かけ、背後に三人の男が並んで立っていた。

「では、最終確認を御願いしよう、『Ｍｒｓ．タンチョウ』」

左脇に座る口髭と顎鬚を蓄えた少々年配の男が、顔を相手に向けることなく声をかけた。

「契約内容に変更は無いわ。決行は明日の深夜。日付変更と共に目標のポイントを強襲。ターゲットを速やかに奪取した後、所定の場所に集合……以上」

『Ｍｒｓ．タンチョウ』と呼ばれた淑女は淡々とした口調で指示

を出し、夕空に向かって白い煙を吐く。
「……で、報酬の方は？」
右脇に座る三つ編みを垂らした金髪の中年男が、これまた相手に顔を向けず問う。
「ロンダリング済みの現金で各自5千万。承知しているとは思うけど、あくまで『成功報酬』。しくじればアンタ達に先は無い。任務を完遂し、女房に土産を買って自国に悠々と帰るか……あるいは、バカやって拘束され、自国に強制送還されるか。前者には明るい未来が待っているが、後者には国外で違法な戦闘行為に参加した罪での懲役が待っている……娘や息子と再会できる頃には介護が必要になっているだろうねえ」
Ｍｒｓ．タンチョウは悪戯な笑みを浮かべつつプレッシャーをかけた。
「心配無用だ。アンタはヘッドハンティングの才能に恵まれている。我々を引き抜いて正解だったという事実、必ず証明してやろう」
左脇の年配オヤジが野暮ったいメガネを弄りながら呟く。
「それに、第三世界の吹き溜まりに派遣され、後方支援で小遣い稼ぐのには飽きたしな。ここいらでデカイ仕事こなして家族サービスしてやりてえし」
「オレはカジノで豪遊してやるぜッ。最高級のスイートルームに長期滞在してなッ」
「……僕は、その……貯金しよっかな……」
Ｍｒｓ．の背後に立つ三人が小さく色めき立っている。
「で、注文しておいた装備一式はいつ？」
年配オヤジがベンチの背もたれに寄りかかる。
「メインエントランス周辺のコインロッカーに預けてあるよ。言っとくけど、必要経費とロッカーの利用料は報酬から天引きするからね」
「ケチ臭いコト言うなよ～～、知ってんだぜ……アンタとアンタの商売仲間が『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』でしこたま儲けてんの」

金髪の中年が左脚を軋ませながら脚を組む。その脚は重厚な金属加工が施された義足。
「……ふぅ」
Ｍｒｓ．がタバコの煙を金髪の顔に吹きかけた。
「……へいへい、分かりやしたよ。明日は楽しいナイトショーになりそうだね」

チャンチャラ♪　チャカチャカ♪　チャンチャラ♪　チャア～～～～♪

やがて、彼等の目の前で派手なネオンを纏ったパレードが賑やかに始まり、沢山の愉快なキャラクターと観客達でごった返す。世間一般は本日も平和で、何事も無く時が過ぎていく……そして、パレードが通過した頃にはベンチから彼等の姿は消えていた。

「ふ、ふひィ～～……疲れた……」
パタッ――
弥富が自分の部屋の床に倒れ伏す。目は充血しちゃって、指先が軽く痙攣してる。
「ま、マミーぃぃぃ……助けてぇぇぇ～～、ガキ共がいじめるぞ～～……ヤツ等は接待プレイという言葉を知らんぞ～～……けふッ」
その隣では瀕死のポチが仰向けにブッ倒れ、街の裏で暴行された後みたいになっとる。
「うわ～～い！　楽しかったよッ！　じゃあまたねえ～～ッ！」
熾烈なゲーム大会が幕を閉じ、敗残者を二名床に転がして、勝利した幼児達のアバターが弥富の視界から愉快そうに消えていった。
（や、やべえ……しばらくはリアルとゲームの境目がハッキリしなくなりそうだ）
ニート予備軍の特権。日がな一日部屋にこもってゲーム漬け。エアコンとデスクトップがフル稼働して電力会社を喜ばせたり、エコ

への貢献を拒否したり……。ちなみに、すみすシリーズの五人はとっくに力尽き、昼過ぎには「バー〇ヤンでメシ食ってきます」と言い残して逃げた。
「あらあらぁ、すっかり御疲れみたいですねぇ」
アンジェリーナが優しく声をかけながら、倒れる弥富の傍に正座する。
「いや、その……アナタのお子さん達が原因なんですけどね」
一応、ツッコんでおく。
「ごめんなさいねぇ、エアコンのおかげで水温が下がって、あの子達ってばホントに元気になっちゃってぇ」
あ、そういや幼児共も白点病原虫なワケだから、低水温を好むワケか。で、俺は病原体にゲームで負けたのか……うわァ～～、虫ケラ人生ここに極まっとる。
スッ――
不意に弥富の両頬に白く滑らかな手が添えられ、柔らかでイイ香りのする肉感的な太ももが彼の後頭部を迎える。
「あ……」
膝枕されて、弥富が思わず小さな声を漏らした。真上を向けば、アンジェリーナのにこやかな表情がすぐそこにあって、なんだか気恥ずかしい。
「きっと、また会えますよぉ」
「え……？」
「ネットにつながってアバター化しているとぉ、色んな情報が常に全身を駆け巡るんですぅ。だからぁ、口では上手く説明できない“何か”がわたくしに教えてくれるんですぅ」
そう言って彼女は弥富の手を取り――
フニぃ～★
自分の左胸に押し当てた。
「えッ……ちょ……ど、どうも……（汗）」
何がどうもなのかは知らんが、右の手の平から伝わる柔らかな感

触に、彼の頬はあっという間に真っ赤。
「更紗ちゃん、もう少し自信を持ってぇ。必ず、アナタにしか出来ない事が見つかるからぁ……ええ、必ずぅ」
彼女が何を言いたいのかはさっぱり解らない。ただ、深層心理のドコかが癒されて元気になったみたいな……ついでに別の箇所もみなぎってるし……サーセン。
「宜しいでしょうか、弥富殿？」
「は、はいッ！　大きくて柔らかでイイ匂いが……あ……」
不意に呼ばれて慌てて起き上がる。アンジェリーナの姿は消え、代わりにインカムを付けた津軽が腕組みして立っていた。
「実動課よりメールが届いたので伝えておきますわ」
「あ、はい……どうぞ」
「……」
「……ん？　津軽さん？」
何故か押し黙っている津軽の視線は弥富の下半身にフェードイン。
「い、いや……あの……それは年頃の女性が取るべき行動ではないと……ええ、思いますよ」
股間にあらぬ危機を感じ取って内股気味に座り直す。トッテモカッコワルイ……。
「まあ、いいでしょう。では、メールの内容を」
そう言ってデスクトップでメールを開く。添付ファイルを解凍すると、監視カメラの映像を処理した何枚かの写真が出てきた。
「ダレです？」
合計五名の男の姿が映っている。いずれも外国人で、弥富と関わりがありそうな人物には到底見えない。
「電薬管理局と時々合同捜査を実施している、『国家調査室』から提供された情報ですわ。正午前、この五名は空港に到着してますの。ただし、それぞれが別の空港から国内に入ってますわ……そして、衛星による追跡に勘付いたかのように消息を絶ち、未だに発見には至ってないとの事」

津軽がとても神妙な顔つきになっているが、弥富の方は今一つピンときてないもんで呆け顔。
「何か……マズイんですか？」
「国家調査室は、国外から一般観光客などに混じって入国してくるテロリストや敵性因子等を監視、及び拘束した後に国外退去させる任を帯びています。国内と国外で交わされる通信の傍受も任務の一端で、通信内容に秘密工作……あるいは何だかの戦闘行為を臭わせるやり取りがあったため、緊急手配されましたの」
「はあ……」
そう言われてもリアクションに困る。俺は社会の隅っこで控えめに息してるだけのニート予備軍で、追跡が必要な危険な外人との接点など持ち合わせちゃいないんで……って、まさか！？
「とりあえず、現状の可能性の一つとしてピックアップされただけですが、警戒するに越した事はありませんわ」
ハッとして目を合わせた津軽の視線は、ここ数日で弥富の身に起きた事件との関連性を示唆していた。深見素赤の父と名乗る中年男の襲撃、メイド服姿で奇襲をしかけてきたＤＱＮ……本来なら、警察沙汰になるべき事件の続きを感じさせる。
「電薬管理局で独自に行った調査によると、五人とも元は同じ民間の傭兵派遣会社の社員で、つい先日、外部から引き抜かれた事が分かってますの」
「『民間の傭兵派遣会社』って……！？」
弥富の全身からイヤな汗が吹き出る。
「この国では承認されていない職種ですわ。他国の内紛地帯や敵国の最前線に送られ、救援活動を担ったり、ＶＩＰの護衛に当たったりするプロ。とりあえず、観光目的では無い事は確かでしょう」
またしても、人様の生命が左右されるレベルのフラグが立った。頼むッ、俺を取り巻く一件とは無関係であってくれッ！　幸運の女神よッ……どうか、また奇跡を！！
女神Ａ：「ジョリジョリぃ～～♪　ジョリジョリぃ～～♪　フフ～

〜ん☆」

……女神、スネ毛剃ってた。

アニメじゃないッ♪　アニメじゃないッ♪　ホントのこ……とでもないよう♪

シスター「ずっと思っていたのですが……神よ、アナタは品格が下劣です」

神「そうですぅ、わたしがぁ変な神様ですぅ！」

アニメじゃないッ♪　アニメじゃないッ♪　ホントのこ……とでもないよう♪

電薬管理局・実動課――検査棟。現在、深夜。朝から晩まで四匹の禁魚達は精密検査を受けていた。採血や体液の抽出で判明したのは、彼等の基本的な肉体構造は通常の『金魚』と大差は無く、その生体の体質・耐性・内臓機能・運動能力・潜在的寿命なども、特に変質しているワケではなかった。ただ、一つだけ……その『脳』に異常が発見された。人間の脳は発生学的に言うと、『大脳』・『大脳辺縁系』・『脳幹』の三つから構成されている。そして、魚類のような下等な脊椎動物は『脳幹』に相当する部分しか持っていない。つまり、通常の金魚には、進化の過程で最初に発生した“本能を司る神経器官”しか備わっていない。だが、『禁魚』には大脳と大脳辺縁系の役割を担う箇所が構築されており、脳全体の質量と密度は金魚の数倍ある事が解った。

「うち等って……結局、何なンやろう？」

出雲が虚ろな瞳で呟く。

「おいおい、開口一番にどうした？　ついに邪気眼でも覚醒したかね？」

同じ水槽で泳ぐ浜松が訝る。

「だって、『生命のデジタル化』やでッ。人間の精神が丸ごと禁魚って“器”に移せるって……テクノロジー自体も驚異やけど、うち等の体ってどうなっとるン！？」

相変わらず下着姿な出雲は、自分のウエストの肉をモミモミしたり、赤毛のツインテールを引っ張ったり。

「ふ～～む、技術体系の詳細な説明もしてあげたいけどさあ、残念ながら回線が限定されちゃっててて……畜生ッ、今週のア〇ヒ芸能読めないじゃん！」

オッサンじゃねえか……。

オリジナルP・D・Sは常時機能しているが、現在はイントラ

ネットでアバター化しているため、外部からの情報は接収できないでいた。で、別の水槽では――

「本来は躁鬱病の特効薬開発の過程で生まれたんですよね……ボク達って」

「うむ。“内臓の一部を悪くすれば、他の生物の内臓を摂取して治癒を図る”……人類の考えた原始的な理論の一つなワケじゃが、まさか、魚類の脳ミソで人類の脳の正常化を促そうとはな」

「言うなれば、『超強力ＤＨＡ』ですね。確かにＤＨＡは、鬱病やアルツハイマー型痴呆に効果があると言われていますが」

「うむ。儂もそろそろ年齢的にヤバイかもしれんからのう、都合の良いＤＨＡが有るなら恩恵に与りたいもんじゃ」

「ヤバイんですか？」

「……お主、ダレ？」

「大変で――――ッす！　急患が出ました――――ッ！」

郡山と土佐がグダグダしていた。そして、この四匹を直接管理するハメになってしまった者は……

「いえ、それはまだ……はい。承知しております、問題ありません。こちらで対処できますので……それでは」

ピッ――

宇野課長がケータイを切る。

（ちッ、管理局め……現場はタイムテーブル通りには動かんのだよ）

彼はしかめっ面で二つの水槽を交互に見た。

「また上からの催促ですか？」

作業服をきた検査員の青年が声をかける。

「どうせ内務庁の官僚あたりにせっつかれているんだろう。皺寄せはいつも我々現場の人間にやってくる」

「『Ｍｒ．キャリコ』の拘束ですか……闇夜のカラスを捕まえるみたいで、本当に手探り状態ですからね」

検査員が独り言のように呟く。

「ヤツさえ逮捕できれば、芋づる式に全ての『子』と『孫』を摘発できる。そのためには、何としてでも禁魚共を懐柔せねばな」
課長はテーブルに両肘をつき、重ね合わせた手を額に当てて集中する。
（不本意ではあるが、やはり……裏取引きが必要か）
何度か禁魚達にはコンタクトを試みた。が、彼等はあまりに人間臭く、反射で生きる魚類とは全く異なった。こちらの質問に対してまともに回答する様子は無く、上手くはぐらかされる。特に、浜松……いや、『深見素赤』は明らかに重要な情報を隠し持っている。そんな相手との取引は半端でないリスクが伴う。それでも現状では――
「……致し方なしか」
課長は葛藤と熟考を繰り返し、結論に達した。インカムβを装着し、特別に設計された強化水槽の前に立つ。
「おんやあ～～、えらく男前な面になってるねえ☆」
「……ガキがッ」
相手の腹を見透かしたような微笑みを浮かべる浜松に、課長は小さく毒づく。
「で、今度はあたしに何が聴きたいのかな～～？」
「『Ｍｒ．キャリコ』の逮捕に繋がる情報を全て教えるんだッ！」
――――ドンッ！
激昂した課長が水槽を拳で叩いた。
「おやおや、更年期障害かなあ～～？　労災はキチンとおりるのかなあ～～？」
あくまでも挑発的だ。
「いいだろう……取引きだ」
「ムフっ★」
その言葉を待ってましたとばかりに、浜松が口元をイヤラしく歪める。そして、課長の面前に仮想モニターが現れ、取引き内容が表示された。

【要求事項】
（1）オリジナルP・D・Sの違法使用と、それに関連する現時点までの全ての罪状を白紙に
（2）今後、警察機関及び電薬管理局からの干渉は一切無し
（3）禁魚の解放と飼い主への合法的移譲
（4）あたしのバックアップの管理と保護
――以上。

「話にならんッ！！」
宇野課長は声を荒げて踵を返す。
「よ～～く考えた方がイイよ～～。ここで断ったら最後、Mr・キャリコの拘束はおろか、今後展開される計画の防衛手段も失うよ～～」
「――――――『計画』？」
退室しようとしていた課長が立ち止まって振り返る。
「ま、（1）～（3）の事項には法的手続きで時間を食うだろうから、まずは……（4）を最優先で実行してもらいたいねえ」
「『バックアップ』とは何の事だ？」
「仮死状態で保存中のあたし……『深見素赤』のニ・ク・タ・イ☆」
本人は精一杯のポーズでカワイイを作ったつもりだろうが、オマエでは椿姫〇菜にはなれんぞ。
（体の保存……まさか、本当にコイツは禁魚へデジタル化した自分を……！？）
静かに驚愕する課長。その時――
ウォォォォォン！　ウォォォォォン！　ウォォォォォン！　ウォォォォォン！
けたたましく鳴り響くアラーム。同時に、フロアの出入り口の隔壁が作動する。

「か、課長ッ……何がッ！？」
検査員の青年があたふたする。
「落ち着けッ。どうせ電圧異常による誤作動だ」
彼は壁のコンソールから内線電話で警備室につなぐ。
「こちら第1検査室ッ。警備、アラームを止めろ。一体、何が……」
<パンッパンッパンッ！　ガシャアアアアアアアアァァァァァァ――――ッッッ！>
「なッ……！？」
受話器の向こうから聞こえてきた、明らかに尋常ではない状況を伝える喧騒。課長は受話器をコンソールに戻し、周囲を素早く見回した。
（銃声？　……バカな、ここは政府の直轄施設だぞッ！？）
全くの想定外な展開に課長の血の気が引いていく。
「う、宇野さん……ど、どどどどうかしたんですかッ？」
上司の様子を目の当たりにした検査員の青年が、思いっきり動揺しまくっている。
（くそッ、信じられん……）
ケータイを取り出してモニターを見る。そこには［圏外］の文字が。
「あ、え……は、はいッ」
「オマエのケータイをよこせッ」
不安で顔色を悪くしながら検査員が自分のを手渡す。
（……………ちィィィィッ！　携帯ジャマーか……）
モニターには同様に［圏外］の文字。この検査棟全体をカバーするだけのジャミングとなると、並の出力では不可能。おそらく、相手は軍事用の大出力タイプを使っている。となれば、相手はイカレた暴徒でも街のチンピラでもない。歴とした――『敵』だ。
「このフロアに銃火器の装備は？」

「い、いえ……」
「なら、エアダクトから外へ出られないか？」
「ダメです……外部からの侵入を防止するための鉄格子が数枚はめ込まれています」
「……くッ、窮まったか」
課長がホルスターのオートマチックに手をそえる。ここのセキュリティーは軍部に直結している。何かわずかでも異常が発生すれば、衛兵が一個中隊でやってくる。到着まではおよそ――１０分足らず。責任者がこの状況で最優先とすべきは……
「言えッ、『Ｍｒ．キャリコ』はドコにいるッ！？」
政府の施設を強襲しても、余計なリスクを背負い込むだけで割に合う事はまず無い。それでもこんな事態に臨む連中となると……見境の無い過激な反対運動家か、あるいは……
「『敵』の狙いがオリジナルＰ・Ｄ・Ｓであることは明確だ。言うんだッ、もう猶予は殆ど残っていないッ！！」
顔を赤くし、イヤな汗で額を濡らしながら宇野課長が叫ぶ。
「猶予ォ？　別にィ～～、囚われの身のあたしにはカンケーないしィ～～」
これ以上は無いというくらいのふてぶてしい面で、浜松は寝転がってケツかいてる。
「お、おのれェェェ……！」
ブチ切れ寸前の課長の前でブルーレイで映画鑑賞。テレビモニターではジャック・バ〇アーがテロ集団と戦っとる……単純にいやがらせだ。
「い、いいだろう……オマエの要求を呑もう」
苦渋の選択だった。敵はオリジナルを奪取すると同時に、サーバーのバックアップを破壊していくだろう。オリジナルはハッキングによる流出リスクを最小限に抑えるため、他の情報機関にバックアップは存在しない。つまり、検査棟のサーバーを破壊してしまえば、敵がオリジナルを実質的に独占する事となる。そうなっては禁魚と

のコンタクトは不可能……今しかチャンスは無いのだ。
「書面で宜しく。電薬管理局長のサイン入りでね」
「フザけるなッ！！　すぐそこまでイカレた連中が迫っているんだぞッ！！」

ドゴオオオオオオオオォォォォォォォォォォ――――――ッッッン！！

出入り口の隔壁が轟音をたてて振動する。
「ええ、そのようね～～……フフフフッ★」
「貴様ッ、取引きするつもりなどハナっから無いってワケか……」
課長が悔しそうに眉間に皺を寄せた。
「明日には大勢のハッカーが全力でお祭り騒ぎッ！　世界にその名を轟かすハッカー駆逐機関が襲撃を受け、オリジナルP・D・Sを強奪されたってねえ～～！　うっひょおおおおッッッ、ざまあああああッッッ！」

ドカンッ！　ドカンッ！　ドカアアアアアアァァァァ――――――――ッン！！

隔壁から聞こえてくる軋轢をBGMに、浜松の愉快そうな雄叫びが木霊した。

考えても分からないというコトが、考えた結果分かったよう（前書き）

シスター「申し訳ありませんが、私……最終回につき、転職させていただきます」

神&作者「オー人事！？　オー人事！？」

考えても分からないというコトが、考えた結果分かったよう

その電話はド深夜にかかってきた。ネットサーフィンにも疲れて、俺は寝る準備を始めていた。そんな時だ……正座して麦茶を飲んでいた津軽さんのケータイが鳴った。

「はい……はッ！？　襲撃されたッ！？　いえ、こちらは今のところ何も……はい……何故ですの？　……ええ、御任せをッ」

ピッ――

（……な、何事？）

ケータイを切った後の津軽の様子を見る限り、尋常では無い事態が発生したのは明らかだった。あまりに重苦しい空気を噴出してたもんで、弥富はすぐに声をかけることができないでいた。

「実動課の検査棟が奇襲を受け、多数の死者が出たようですわ」

津軽はスッと立ち上がり、夏の闇に溶け込む遠くの方の街を窓から睨んだ。

「き、奇襲って……！　もしかして、オリジナルが……！？」

弥富の眠気が吹き飛ぶ。

「いえ、それが……奪取されたのは『禁魚』が一匹のみ」

「――――――は？」

「黒出目金の『浜松』が誘拐されたとのことですわ」

「……そうですか」

腑に落ちない表情で弥富はインカムを装着。困った時はアイツを呼ぼう。

「おい、起きろや。役立たず」

ゲシッ！

ベッドでヨダレ垂らしながら気持ち良さそうに寝てたポチ。その幸せそうな顔面を蒸れた足で踏みつける。

「おフッ！？　こ、この臭気はッ……ついに世界が終りを迎えるぞ～～！！」

ポチが跳び起きる。足の臭いで滅びる世界ってナニ？
「浜松のバカが誘拐された。何か思いつく理由があれば即答宜しく」
「A・夢オチ　B・日頃の行いが招いた人災　C・ヤ〇オクで高く売るため……さあ、どれでも好きな理由をこじつけるがいいぞッ！」
「D・震えて眠れ……さあ、どうだあ？　何か思いつくかあ？」
――――グリグリグリぃぃぃ！
ポチの顔面を容赦なく攻め立てる弥富の足裏には、“病み付き”の四文字が。特に意味はありません。
「こ、困った時は他力本願だぞ！　早速、『偽P・D・Sバカの会』と連絡をとるべしぃ～～！」
「なるほど……襲撃者は実動課が禁魚を接収した事を知ってた上、その禁魚を危険を冒してまで強奪した。つまり、浜松……いいえ、『深見素赤』と重要な接点を持っている。そして、深見素赤とオリジナルの関係性を考慮した先には――」
津軽の脳裏に『Mr．キャリコ』の名が浮かび上がる。彼女はケータイを手に取り、すみす・ブラックに電話をかけた。
（うううぅぅ～～……空気がトゲトゲしてて近寄れねえ）
状況は明らかにマズイ方向へ流れていた。一国の情報機関を非常事態に陥らせる程に……で、そんな一連の事件の中心人物は、この安アパートに住んでいるワケだが、相変わらず無力で無能で底辺で。特に何か出来るワケでもなく、アンジェリーナが言っていた“自分にしか出来ない事”って本当に見つかるんだろうか。
「……了解ですわ」
津軽がケータイを切る。
「ど、どうでした……？」
「残念ながら、朗報とはいきませんわね。Mr．キャリコの正体や所在は、世界中のハッカーが突き止めようとする程。殆ど神格化されてますわ。昨日の今日で手掛かりにありつけるとは考えてませんでしたが、代わりに別の脅威が発見されたようですわ」
「え？　え？　はい？」

怖ぃよう、恐ろしぃよう、ベッドに潜ってガタガタしてたいよう〜〜。
「この国のインフラを攻撃するという、サイバーテロを予告する情報がネット上に出回り始めました……おそらく、何だかの要求を叩きつける前に力を誇示する腹積りなのでしょう」
「おおォォ〜〜、ついに『見えない敵』が本気を出したぞッ！　現代社会に垂れ流されてるニート共よッ、見習ってすぐに本気を出すべきだぞ〜〜！」
ポチはベッドの上で既に白旗を振って無条件降伏中。
「けど、それって……Ｍｒ．キャリコってヤツと関係があるんですか？」
「分かりませんわ。今のところ、Ｍｒ．キャリコとの繋がりを明確にする情報はありません……が、実動課への襲撃タイミングを考えると、無視できる状況ではなくってよ」
津軽の真剣な面持ちから、これはリアルである……と、痛感せずにはいられなかった。しかし、自分はこの安穏とした部屋から出たくない。そう、俺に出来る事はやはり――無い。本日の弥富の成果――“己の無力の再確認”……以上。
「マジっスかあああああああああああああああああああああああああ――――ッッッ！？」
トラックで搬送される水槽の中で、浜松が力一杯の叫び声を上げる。
水槽にはインカム・αが装着され、βを付けたメガネのオヤジが顎髭を弄りながら呟いた。
「うるせぇなあ……マジなんだよ。もう、遊びじゃ済まねえんだよ」
（あたしがアバター化している……偽Ｐ・Ｄ・Ｓか！？）
浜松はすぐに落ち着きを取り戻し、冷静にこの展開を把握しようと思量する。自分は拉致られた。襲撃部隊は五人。連中は対物ライ

フルで検査室の隔壁を突破し、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓには目もくれず、あたしを水槽から掴み出した。で、運送業者に偽装したトラックで運ばれてるワケだが……予想できる今後の事態。

←

【日頃の行いが招いた人災により、ヤ〇オクで売られる。でも、結局は夢オチで終了】

……だったらいいなあああああああああああああああああッッッ！！

パタッ――

もうなんか息するのもメンドーになった感じで、浜松がふて寝しちまう。

「心配しなさんな。殺すつもりなら、突入した時点で水槽を叩き割ってるよ。オレ達はオマエを安全に目的地まで運び、報酬をもらって消えるからさ」

金髪の三つ編み男が北叟笑みながら言う。義足をカタカタいわせ、義手には対物ライフルが握られたままだ。

「『ボンズ』、そろそろ首都高に入る。エモノは片付けとけ」

「へいへい、分かったよ」

メガネのオヤジに言われて金髪がライフルを分解し始める。

「意外とセキュリティーは薄かったな」

「ま、平和しか知らねえ緩んだ国だしなあ。これで５千万はホントにボロいぜ」

荷台の中はすっかり仕事終わりの空気が漂っていた。

（コイツ等、正規の軍人じゃない……？　傭兵か？　外国の情報機関か？）

尋ねたところで答えてはくれないだろう。今、心配すべきは今後の身の振り方だ。目的地は問題ではない。問題は――

「で、アンタ達のクライアントはあたしに何をさせたいのかな？」

浜松はベタベタな囚人服（手枷・鉄球付き）に着替え、余裕を繕いながら聞いてみた。

「さあな。自分等はオーダー以外の事象には一切触れない、聞かない、口出さない。それを信条に仕事をこなしてきた。クライアントがオマエさんをこの後どう扱おうが興味は無い」
オヤジは高齢のせいか、少々眠たそうに小声で返答する。
「平気っスか、『ジブリ』さん？　金を受け取った後の“予定”を忘れんでくださいよ」
一際体のデカイ男が心配そうに声をかける。全身を防弾処理の施されたアーマーでガッチリと固め、ヘルメットにガスマスクを装着した装甲歩兵だ。
「問題無い。ちょっと仮眠をとれば昼過ぎまでには復活してやるよ」
オヤジは軽く鼻で笑うと、そのまま横になって寝息をたて始めた。
「やれやれ……体にムチ打つ商売やってると歳を食うのが恐くなるなぁ」
装甲歩兵の隣に座る小柄な中年男性がぼやく。男はやたらと人が良さそうな面で、頑丈そうなスーツケースに手榴弾の一種を片付けながら、ジブリの様子を見て苦笑いを浮かべた。
「別にいいじゃないっスか『ピエロ』さんは。美人の奥さんと可愛い娘さんが家で待っててくれて、幸せに歳食ってるんスから」
装甲歩兵が相手の肩に手を乗せてポンポンッと軽く叩く。
（何だよ……この連中……？）
えらくアットホームな雰囲気が出来上がっちゃってて、浜松はとてもじゃないが融け込めそうになかった。ま、談笑する気もないけどね。
キッ――
トラックが停止する。出発してから小一時間程経っただろうか。一応、囚人服に着替えてたんで、退屈していたついでに浜松はさっきから色んな処刑を自主的に実行してた。
バリバリバリッ！
『電気イス』。
ドクンドクンドクンッ！

『薬物注射』。
がっく――――――ッん！
『首吊り』。
この動画は削除されました。
『権利者の申し立て』。
……すみません、ダレでもいいからかまってください。あたし、涙が止まりません（Ｏｒｚ）。
「さて、荷物を降ろすぞ」
短い仮眠を終え、ジブリがゆっくりと立ち上がる。
ガコンッ！
荷台の扉が鈍い音をたてて開く。
「ふぅ……ドキドキでしたよ。検問に引っかかったら完全にアウトですもん」
運転席から降りてきた一番若そうなメンバーが、額の汗を拭いながら他の四人と目を合わせた。
「『エーアイシー』、何か傍受したか？」
義足を軋ませながらボンズが問う。
「いえ、特には。警察機関に連絡しちゃうと、電薬管理局の不始末がバレちゃいますからね。実動課の責任者が手を回したんだと思います」
「よし。では、『サンライズ』。万が一という事もある。先に行け」
「ういっス」
ジブリに言われて巨躯の装甲歩兵が周囲を偵察する。既に午前２時過ぎ――近くの国道を走る車はわずか。歩道を行く通行人の姿は全く見えない。そして、彼等は水槽から浜松を小型のプラスチックケースに移し、歩いて２、３分の場所に到着した。
「モノは予定通り持参した。どうすればいい？」
ジブリはＭｒｓ．タンチョウから渡された、スクランブルのかかったケータイを取り出し通話する。

＜結構、結構。基本、私は大事を他人に頼むのは好かんのだがね。高給を取るだけあって良い首尾だ＞
　男の楽しそうな声が返ってくる。
「我々は個人的な予定が詰まっていてね。早めに仕事を完了させたいのだが」
「よろしい。では、目の前の『建物』に入ってくれ。番号はＭｒｓ．タンチョウから聞いてるハズだ」
「……ここ……か？」
　ジブリはその建物の前に立ち、少し不思議そうな顔をして仰ぎ見た。何故なら、彼らが目にしたのは……
　カチャ――
　サンライズの大きな手が扉を開く。中は殆ど照明が無く、窓から差し込むわずかな街の明かりが、部屋の大まかな輪郭を浮き上がらせている。
「やあ、御苦労さん。手前にあるトレーにケースをのせてくれ」
　鈍重とした闇の中から男の声がした。
「……」
　サンライズは充分に辺りを警戒しながらケースを置いた。
「そうピリピリしなさんな。私はただのひ弱なハッカーだよ。君等みたいなプロの戦闘屋にヘタな真似なぞできる勇気は無いさ」
　男は愉快そうにそう言った。
「では、仕事は完了だ。送金を頼む」
　サンライズを盾にして、その後ろからジブリが男に声をかける。
「いいだろう」
　カタカタカタッ……
　ＰＣのキーボードを叩く音がして、エーアイシーがネットブックを開く。
「……はい、送金を確認しました。五人分の２億５千万キッチリです」
「必要経費とロッカーの使用料を天引きすると言われたが……？」

ジブリが怪訝な顔をする。
「そっちは私の方からＭｒｓ．に払っておいた」
「……なるほど。で、次は何をさせたいんだ？」
パチパチパチパチッ――――
「ははははッ、さすがは老獪なる兵。ハナシが早くて助かるよ」
男はずいぶんと楽しそうに拍手し、またカタカタとＰＣのキーを打つ。
「我々はこの国に１週間程滞在する予定だ。連絡ならメールを寄こしてくれ」
バタンッ――
ジブリはそう言って踵を返し、サンライズが扉を閉めた。
「ああ、そうするよ」
男は小さな声で呟くと、立ち上がって浜松の入ったケースを手に取った。そして、インカム・αを装着した。
「やあ、はじめまして」
男はインカム・βを装着しており、部屋の隅で壁を背にして腕組みしながら立つ『彼女』と目をあわせ、ニンマリと微笑んだ。
「夜中にレディを拉致っといて、独りで真っ暗な中シコシコと……なんかもうキモ過ぎ」
囚人服姿の浜松が吐き捨てるように呟く。
「ははははッ、口が悪いなあ。思った通りのキャラだね」
男は椅子に座り直し、浜松の姿を凝視している。ＰＣのモニターから発する淡い照明で、男の顔が闇の中で浮き上がって不気味だ。
「拉致なんて強硬手段をとった事は謝ろう。ハッカーの端くれとして電薬管理局は忌むべき存在でね。できるだけ連中がストレスでブッ壊れるような戦慄を与えたかった……ああ、本当にゾクゾクしてくるよッ☆」
男は分かりやすく悦に浸っていた。
「くだらんねぇ～～……安全な場所から他人に指示と金を出し、世の中をひっくり返そうってか？　実にくだらんねぇ～～。引きこも

りのハッカーが独りで何か成し遂げられる程、社会は甘くないってのッ！」
ビシッと男を指差すが、囚人の格好したヤツに言われても困る。
「知ってるさ……ああ、知ってるとも。リアルの社会は甘くは無い……けど、私は決して『独り』じゃない」
男はそう言ってノートＰＣのモニターを浜松に向けた。
＜はじめましてぇ。拙者の名前は『プー左衛門』。御覧の通りのキュートなクマさんだクマ～～☆＞
「……はぁ？」
浜松がとてつもなく不愉快な面で首を傾げた。どっかのオモチャ屋で女の子が抱き締めてそうなチョーカー付きのクマのヌイグルミが、ちょこんとロッキングチェアに座っている。どういう仕組かは知らんが手振り身振りで自己紹介した。
「今、こうして偽Ｐ・Ｄ・Ｓを使って君と話しているけど、彼が安全なネット環境を確保してくれてるおかげで、電薬管理局や他国の情報機関に追尾されずにすんでいるんだよ」
＜どう？　スゴイでしょ？　ご褒美頂戴クマ～～☆＞
「はいはい、スパンキングしてやるから二人ともケツ出しやがれ……」
この部屋に流れる空気で完全に萎えたのか、浜松はあさっての方向に視線を向けながら少々投げやり気味に言い返した。
「さて、前置きはここまで。本題に入ろうか……『深見素赤』」
（――――――――ッ！？）
浜松がハッとして顔色を一変させた。
「君が肉体をドコかに保存した事は知っている。だが、未だに所在は不明……だから、一応尋ねておくけど……」
「喋るワケないでしょうがッ、この根暗ニートめがッ！」
「だろうね。なら、仕方無し……今までの自分の人生２８年、全てがリハーサル。ここから……この日からが『本番』だッ！」

＜やってやるクマ～～！　リアル社会を闊歩する有象無象をＳＡ★ＴＵ★ＧＡ★Ｉするクマよ～～！＞
「うっさいよ、中二病の急患共。イタイ妄想は心のメルヘンボックスにそっとしまっとけよ」
浜松は毒づきながら、ふと部屋の窓から外の夜景を目にした。
（……ん？　何、この妙な……違和感？　いや、これは……）
彼女の脳内でつい最近までの情報が撹拌される。この夜景は……
「しまったッ……！！」
浜松が何かとんでもないコトに気付き、男の不気味に微笑む顔を睨みつけた。
「おっと、申し訳ない。女性に対して一方的に無駄話をしてしまったかな？」
浜松の心の機微を読み取ったかのように、男は口元を歪め――
「改めて自己紹介だ。私のことは『Ｍｒ．キャリコ』と呼んでくれ」
――そう言ってＰＣを閉じた。

玄関開けたら2秒で捕獲されたよう

皆さん、オハヨウゴザイマス。俺、弥富更紗です。現在、早朝……誘拐されている真っ最中です。

（ば、ば、ば、ばばばばばばばばばばばばばッ……バカなァァァァァァァァ――――――――ッッッ！？）

俺は心の中で力の限り叫んでみた。どうしてこうなったのかは、時間をさかのぼる事……5分前。

ピンポ～～ン♪

呼び鈴が鳴った。午前5時半――ニート予備軍の生活リズムにおいては、絶対起きてはいけない時間だ。

「マジかよォ～～……一体、何の罰ゲームだよォ～～……」

深夜に実動課から入った連絡――『浜松拉致事件』。その戦慄のせいで余計な身の危険を感じていた弥富。そのためか眠りにつけたのはほんの2、3時間前だというのに……。

ピンポ～～ン♪　ピンポ～～ン♪　ピンポ～～ン♪

容赦の無い連打。

（フザケんなよォ～～……！　ガンジーが舌打ちしながらヘッドロックかけるレベルじゃねえかよォ～～……！）

ワケの分からんイラつきがこもり始め、顔を上げて周囲を見渡してみたが、生憎、津軽の姿は無い。代わりに、UBを使用する音が聞こえてくる。つまり、朝のシャワータイム中のようだ。

「はいはい、開けますよ……（怒）」

目一杯のストレスを滲ませた声をもらしつつ、弥富がベッドから離脱。玄関戸の前に立つ。ここで、対処法を簡単に用意しておく。

1. 【近所のクソガキ】の場合＝即座に目潰し
2. 【イカレた酔っ払い】の場合＝速攻で目潰し
3. 【偽P・D・S友の会】の場合＝目潰し&足の小指に重くて

硬い物を落としてやる
4．【家賃を催促に来た大家】の場合＝スタイリッシュに土下座
5．【不測の事態】の場合＝見なかったコトにして閉める
カチャ……
開く玄関戸。
「迎えに来ちゃったよ♪　オ兄チャ～～ン★」
「……マジで？」
【不測の事態】がきちゃいました。夏の朝一に降り注ぐ日光を背に受けながら、そこに立つのは――『偽メイド』。アキバの街で奇襲をしかけてきて、弥富の誘拐を実行しようとした少女。額からちょっぴり汗を流しつつ、爽やかな営業スマイルを浮かべ、妹系メイドを演じているつもりらしい。で、次の瞬間、弥富は尋常ならざる不吉な空気を感じ、つかんでいるドアノブを思いっ切り引っ張って――
――――ガッ！！
「だ～～ッめ★　今日はアタシとデートしてもらうんだもんねぇ～～♪」
前回はショートボブを蒼に染めていたが、今回はエメラルドグリーンに染めて登場。ルージュも火炎のような色をしていて、本人のヤル気を表しているかのよう。ミニスカを両手で摘まんで持ち上げながら、片足のつま先をドア枠に滑り込ませ、閉めようとするドアを余裕で止めてしまう。ムチッとした太ももが弥富の視界を占めるが、この状況下でナマ唾を飲んでるヒマはない。
「つ、津軽さ――――ッ！」
護衛役の名を叫ぼうとした瞬間、視界が真っ黒に染まった。頭の上からスッポリと何か袋のような物を被せられたのだ。
「ちょ～～っと荒っぽくしちゃうけどォ、我慢し・て・ね☆」
そんな可愛らしい声が聞こえ、同時に弥富の腕に手錠がガチャっとかけられる。で、無理矢理歩かされるのかと思いきや、彼の体がグイッと上に持ち上げられた。袋を被せられているので視認はでき

ないが、おそらく……脇に抱きかかえられてる。
（おいおいおいッ……なんつー腕力してやがるッ！！）
確か、アキバの雑居ビルで津軽と戦闘になった際、重量のあるマネキンを片手で軽々と振り回していた。外見はちょっぴり身長高めの女子高生くらいに見えるが、何かの競技の強化選手か？
「よっこらセックス♪」
偽メイドはアパートの階段を素早く駆け下り、歩道に停めてあった原付に飛び乗る。
グゥオン、グゥオン、ブオォォォォォォォォォォォォォォォ！
御近所さんがとっても迷惑しそうなエンジン音がして、原付が発進する。これが約5分前に発生した出来事のあらましである。

（ど、どどどどどどど……どうすりゃいい！？　叫んで助けを求めるか！？）
いや、待て……この辺り一帯は、真っ昼間でも人通りの少ない住宅街。こんな早朝では人目にはほとんどつかないだろう。それに、ダレかがこの状況を目撃したとしても、袋を被せ、手錠をかけて乱雑に人間を運んでいるようなヤツを、わざわざ呼び止めて関わりたいとは普通思わない。少なくとも、俺なら精一杯無視させてもらう。しかも、原付を片手で運転した状態で、成人男性を一人脇に抱えている。いくら人並み外れた腕力の持ち主とはいえ、いきなり俺が叫んだり暴れたりしたら、バランスを崩して転倒しかねない。その場合、もちろん、特等席にいる俺は容赦無く巻き添えにあうワケで……。
「ナニモデキネーナラ、オトナシクチヂコマッテロ、カス」
はい、実家のオウムが応援してくれてる……そんな気もするんで、大人しくしておきます。で、弥富が消えてしまったアパートでは――
「……弥富殿？」
シャワーを終え、体中に薄らと湯気を纏った津軽が、部屋の中を

見て首を小さく傾げている。ベッドに護衛対象者の姿は無く、代わりに、玄関の土間に見慣れぬ紙キレが一枚落ちていた。
（――――――ッ！？）
その紙キレを何気なく拾い上げた津軽の顔色が一変する。

～～～～　無能なＳＰへ　～～～～
［弥富更紗は、この超絶現役女子高生・『ヤンデレコメット』がいただいちゃったもんねぇ――――！　や～～い、や～～い、奪われてやんのォ～～（笑）ｍ９（＾Д＾）プギャー！！］

（う、迂闊ッ……！！）
津軽の脳裏に、アキバの雑居ビルで目にした偽メイドの愉快そうな顔が浮かぶ。彼女はあまりの悔しさに服を着る事も忘れて、ケータイを手に取り実動課へとつないだ。
＜宇野だ。何事かね……？＞
浜松誘拐の事後処理が続いていておそらく徹夜していたのだろう。やたらと眠気のこもった実動課長の声が届く。
「申し訳ありません、弥富更紗を誘拐されました」
＜なッ、何だって……！？　一体、何があった！？＞
「油断してましたわ……しかし、犯人の目星はついております。誘拐の目的は不明ですが、これより捜索に移りますわ」
＜捜索……？　手掛かりがあるのか？　誘拐の場合、犯人からの連絡を待ってから動くのが定石だ。まずは実動課に戻ってこい＞
「……ッ、了解ですわ」
今の津軽に分かっているのは、相手の背格好や人相くらい。目的や逃走経路が不明の現状、まずは実動課に帰還して、道路交通システムから監視・防犯カメラの映像を確認するのが先決だ。
（発見次第、公共の場で辱めてやりますわ……必ずッ！）
津軽はスーツに着替えながら、少々邪悪な面で歯を噛み鳴らした。
そして、浜松の拉致で渾沌としている実動課・検査棟では――

「た、大変やッ！　浜やんに続き、さっちんまで誘拐されたらしいでッ！」
「な、なんと……！？　儂等のうかがい知れぬ所で、何かよからぬ謀り事が展開しているようじゃのう……」
「う～～ん……せめて、ネットにログイン出来ればめぼしい情報が得られるんでが」
　精密検査用のガラス水槽の中で、アバター化した出雲と土佐と郡山が渋い顔して向かい合っている。一方、水槽の外では、軍部の人間と電薬管理局の役員が現場検証を行っている真っ最中。セキュリティは正常に機能していたが、政府の直轄する情報機関に侵入されたのは事実……真っ赤な顔して怒鳴り散らす管理局の役員の前には、真っ青な顔して萎れている責任者の姿。数分後――こってりとしぼられたその“責任者”＝宇野課長が、三匹の禁魚が遊泳する水槽の前にとぼとぼと歩み寄って来た。水槽にインカム・αを取り付け、自分にインカム・βを装着する。
「……最悪だ」
　課長は口から魂がこぼれ落ちそうな声で一言呟いた。
「そのようじゃな」
　土佐が他人事のように言う。
「この国で、外国人による大規模な秘密工作が実行されただけでも大事件なのに、その対象が機密性の高い情報機関となれば、ヘタをすれば国際問題にも発展しかねん。このままでは私のクビはもちろん、管理局の役員までもが更迭されかねん……」
　課長はすっかり血の気が引いて、立ち尽くす死体になりかけている。
「で……ボク達は何をすれば？」
　スーツ姿の郡山がネクタイを絞め直しながら意味有りげに問う。
「さすがは禁魚……人間の機微というモノを必要以上に理解しているな」

課長は自嘲気味に軽く鼻で笑い、水槽と繋がっている検査棟のサーバーを操作する。
「回線の制限を解除した。世界中のネット環境で泳げるぞ」
課長が小声で囁く。禁魚にオリジナルP・D・Sを使用しているだけでも違法。今までは、禁魚から情報を引き出すという名目で管理局側にも黙認してもらっていたが、あくまでオフラインの状態でのみの許可。現在は――オンライン。もちろん、管理局の許可はない。
「ええンか？　バレたらクビだけでは済まへンやろ？」
マイクロビキニ姿でウエストのお肉をポヨンポヨンさせながら、出雲が一応心配してやる。
「私はこの件の事後処理や雑務で調査に加われん……が、ここを襲撃した連中の用意周到さや拉致の対象から察するに、これから先、何かとてつもなくマズイ事が起きるような気がしてならない……だから――」
「手の空いていない実動課長に代わって、儂等に事件の真相を突き止めろ……と？」
作務衣姿の土佐が白髭を弄りつつ呟く。
「ああ、そうだ。弥富更紗の誘拐とも何だかの関連性があるとすれば、悔しいが『敵』はカナリ首尾良く事を進めている。おそらく、時間はあまり無いだろう」
「ふぅ～～、大変なコトになっちゃいましたね。これも全て『Mr.キャリコ』という人物が関係しているんでしょうか？」
そう言って郡山が宇野課長と目を合わせた。
「分からん……その辺りもオマエ達で調査してもらいたい。宜しく……頼む」
彼は軽く頭を下げた。
「せやったら、早速注文があるンやけど。エージェントの人に連絡して欲しいンや」
「エージェント？　ああ、津軽のことかね？」

「そうや。その人にな――――」
残された三匹の禁魚＆実動課長の抗いが始まった。そして、同じ頃――

キッ――！
３０分近く走行していただろうか、偽メイド……『ヤンデレコメット』が運転する原付が一軒の家の前で停まった。彼女はケータイを取り出してコールする。
＜……えらく早起きだな。何事だ？＞
中年男性の声だ。
「喜べッ、喜べッ、任務完了～～☆　弥富更紗の誘拐にサクッと成功しちゃったもんねぇ～～♪」
＜おッ、本当か！？　よし、でかした！　いいか、ここからが重要だ。こちらは現在、別件で手一杯だ。身柄を引き取りに行くまでおそらく数日かかる。それまでそっちで監禁しておけ。決して逃げられるなよッ＞
「はい、はい、ダイジョ～～ブ。任せなさいって☆　じゃあねッ、『Ｍｒ．アルビノ』」
そう笑顔で返事をし、彼女はケータイを切った。

“戦隊”と“変態”は紙一重だよう

（ここ……ドコ？）

俺、弥富更紗です。誘拐ってさあ……もっと金持ってそうな相手を選んでヤルものじゃねえの？　俺、近所のクソガキから小石投げつけられたこともある、見習いニートなんだけど。血も涙も流してみせますが、金は一切出せません。だから、ここから出してください。真っ暗で普通に怖いんです……。

『ヤンデレコメット』と名乗るメイド姿の少女に拉致られ、到着した先の家屋に監禁されることとなった。袋を頭に被せられたままで相変わらず何も見えないし、手錠もされたままなので、彼は頭を思いっ切り振り回してなんとか袋を外したのだが……結局、弥富の視界は真っ暗なまま。少々カビ臭さが鼻につき、やたらと湿度の高い空間に閉じ込められたようだ。

ポフポフッ……ポフポフッ……

慎重に身体を動かしてみると、回りになんだか柔らかい物体が敷き詰められていて、ゆっくりと立ち上がろうとしたら、すぐに脳天を天井みたいな所にぶつけた。

「狭ッ！　そして、熱ッ！」

真夏だからという理由だけではない。この空間は明らかに風通しが悪く、湿気がこもりやすい造りになっていて――

――ガラッ！

「はいは～～い♪　今出してあげますからねぇ～～、大人しくし・て・て・ね★」

空間が開けて真っ暗闇に光が差し込み、手錠のカギを手にした偽メイドが目の前に現れた。

（ここって……押し入れ？）

やっと理解できた。自分はダレかの部屋の押し入れに押し込まれ、リアルに監禁されている現状を。

「ごめんねぇ〜〜、ちょっぴり手荒くしちゃって。アタシもクライアントからせっつかれててさあ、仕方ないんで強引にイッちゃったあ。アハハハハッ♪」
偽メイドは愉快そうに笑いながら弥富の手錠を外してやった。
「あ、あのさあ……ちょっと聴いていいかなあ？」
「な〜〜に、オ兄チャン？　あッ、エッチな質問ならまだダメだぞッ♪　お互いをもっとよく知ってからじゃないとね〜〜☆」
「……ここドコ？」
弥富が問う。すっかり疲れ切った声で。
「おおッ、よっくぞ聴いてくれましたァ〜〜！　では、御覧下さ〜〜い！」
そう言って、彼女は弥富を押し入れから引っ張り出してやる。
「……わ〜〜お（汗）」
弥富の視界に入ってきたのは、５坪ちょいくらいのフローリングの部屋。床や壁のいたる所に、大きくてモフモフしてそうな『金魚』のヌイグルミが飾ってあり、壁紙はとっても目に優しくないドピンク色。一瞬、目が「うッ」てなりそうだ。南の窓の近くには二段ベッドがあって、すぐ隣にデスクトップが設置された机。良く分からんが、撮影機材のようなモノも見て取れる。
「ここって……君の家？」
「もっちろ〜〜ん☆」
「君って……いくつ？」
「もうッ、男の人ってどーしてすぐ女の子に年齢を聞きたがるかなあッ！」
軽く怒られた。
「え、あ……いや、まあ……言いたくないなら別に……」
「現役バリバリ女子高生ッ、超健康優良の１７歳でぇ――――――す！！」
腰に片手をあてて、もう片方の手で天井をビシッと指差してポーズをきめる。

（……うざッ！！）
弥富、言葉が目に見えて飛び出さんばかりの不愉快さを心の中で叫んでみる。
「Ｍｒ．アルビノがオ兄チャンを回収に来るまで、ここが唯一の生活スペース。ま、ゆっくりしていってちょうだいねぇ～～♪」
「こ、これって完全に犯罪だろッ！？　『アルビノ』ってヤツが何なのか知らないけど、君もタダじゃ済まなくなるぞッ！」
「ウフフフ～～★　そこは心配御無用なんだよねぇ～～。Ｍｒ．アルビノがいつも警察機関に手を回してくれるから、アタシが前科持ちになるコトは無ァ～～し」
「“いつも”って……君はこんな事を何度もやらかしてんのかッ！？」
「うん、そうだよ。アタシってさあ、ネットのアンダーグラウンドじゃ結構名の知れたアイドルなんだよねぇ～～。法に触れるのが怖くて実行に移せない、そんな欲求不満な人達から仕事を請け負うワケ。暴行、誘拐、泥棒、器物破損にＲＰＧのレベル上げ――しっかりと実績つんでるんだからねッ！」
そう言って、前髪をファサッとかき上げながらこちらをビシッと指差してくる。いちいちポーズをとらんと会話ができんらしい。
「い、いくらなんでも……そんな……はははッ、冗談だろ？」
ドコの世界にそんな汚れ仕事を請け負う女子高生が居る？　弥富は少々怯えながらも、枯渇寸前の勇気を振り絞って笑ってみせた。
バキンッ――！！
「残念でした～～♪　冗談じゃないんだよねぇ～～★」
弥富のすぐ目の前で、さっき外した手錠の鎖部分を笑顔で引き千切ってみせた。
「……で、ですよね～～→」
弥富の頬がヒクヒクしちゃってる。
「アタシはこの『腕力』で、受けた仕事はみ～～んな上手くさばいてきたんだからねッ！　そこいらのＤＱＮ女子高生とは格が違うの

だァ――――！」
コイツ、一応ＤＱＮとしての自覚があるらしい。
（ま、マズイ……コレってもしかして……人生終了のお知らせってヤツか？）
弥富の【ドッキリ★　ドキドキッ☆　監禁生活ぅ♪】――が始まってしまった。

「ただいま戻りましてよ、課長」
現場検証でごったがえす実動課・検査棟に津軽の姿が。片手に水が少し入ったビニール袋を携えて。
「とんだ不始末だな……津軽」
たった半日ですっかり痩せ衰えてしまった様子の宇野が、彼女を出迎える。
「この失態は『Ｍｒ．キャリコ』を捕縛して挽回してみせますわ」
津軽の眼光が鋭い。
「そうか……オマエもヤツが関わっていると思うか」
宇野が深く溜息をついた。
「ところで、課長……禁魚達の要望通り“コレ”を持って来ましたが、一体、何を？」
片手に持つ水が満たされたビニール袋を、訝りながら凝視する。
「理由は聞いていない。ま、とにかく水槽に入れてやってくれ」
そう言われて津軽は、三匹の禁魚が遊泳している水槽へと袋の中身を全部流しこんだ。そして、弥富のアパートから持ってきたインカム・βを装着する。
「おおォ～～、よくぞ生きていたな。このロクデナシ共めェ～～」
いきなり現れたワンピースに麦わら帽子姿の幼児――ポチ。面前の禁魚三匹に対して、両手を腰にあてて踏ん反りかえったポーズでニヤニヤ。
「オマエこそ相変わらず美味そうやなあ。ほんなら、早速ッ」
「いただきます、ですね♪」

「ふむ、食おうかのう」
モシャモシャ……ガツガツ……ジュルジュル～～！
とっても描写しづらい御食事光景が展開されだして、このカニバリズムに津軽も思わず表情が曇っちまう。
「いいぞォ～～、どんどん食うがいいぞォ～～。生まれてきた事自体が黒歴史なポチの肉体を摂取し、オマエ達の臓腑も真っ黒になってしまえ～～。アハハハハッ」
辞世の句で呪いをかけながら食われるポチ。食われた所からウネウネと再生している様は完全にホラー。
「……で、この面子で何がしたいんだ？」
宇野が水槽の前にパイプ椅子を持ってきて腰かけた。
「めたもるふぉーぜぇぇぇぇ～～～～！！」
急に水槽とその周辺が暗くなり、妙なテンションの声がした。
「……おい」
宇野、予感がする。これから先は圧倒的な時間の無駄が懸念されると。
パッ――――
照明の無い箇所からいきなりのライトアップ。
「うちはギルティ・バイオレット！　荒んだ現代人のハートを癒すチームの救護役や！　衣装はジャ○コの三階で買ったンやでッ！」
出雲、太ももむき出しのミニスカで登場。
「ボクはギルティ・チェリー！　その筋のオ姉サン達から好評なチームの交渉役です！　正直……すっごく恥ずかしいですッ！」
郡山、前回の弥富の忠告通りにしっかりスネ毛の処理を終えている。
「儂はギルティ・アイリス！　え～～……その～～……アレじゃ、チームのマスコットじゃよ！　見るなッ、儂を見んでくれッ！」
土佐、目出し帽を被っただけ。世間一般で言うところの不審者。
「ポチはギルティ・ブロッサム！　労働意欲の無い若者を無差別にＳＡ☆ＴＵ☆ＧＡ☆Ｉしちゃう、チームのリーサルウエポンだぞ～

～！　せぇ～～のッ――」

＜ワン・ツー・スリー・フォー・ギルティ５（ファイブ）！！＞

ブシュウゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ――――！

どこからともなくレインボーな煙が勢い良く吹き出してきて、その中で禁魚三匹と糸ミミズが珍妙なステッキを手にポーズをきめた。当然、拍手は無い。

「……で？」

津軽が全く関心が無い様子で聞く。

「ネットの海を漂う怪しい情報をピックアップし、電子指紋から目標の人物の居場所を突き止めるンや！」

「そしてぇ～～、完膚なきまでに駆逐してくれるんだぞォ～～！

※ただし、イケメンは除く」

要するに、遊び半分で拉致事件の真相を暴いてやる……そんな心構えだ。

「一応、確認しておく。実動課としてこれは水面下での作戦だ。秘密裏に頼む。“Ｍｒ．キャリコの拘束”・“浜松と弥富更紗の捜索”、及び“大規模なサイバーテロの予防対策”……この三つが急務だ。いいな？」

「任せときッ！」

出雲がウインクして斜め４５度のポーズ。

「では、課長。わたくしは道路交通システムへのアクセス許可を得るため、管理局の方へ――」

と、踵を返そうとした津軽の肩に、ポンッと出雲の手が乗せられる。

「ちょいちょい、独断専行はアカンで、ギルティ・ローズ★」

満面の笑顔という凶器でもって行われた勧誘。出雲の片手には衣装一式が。

「……課長、助けてくださいまし（汗）」

悲壮感にうちひしがれたような表情で、上司に救いを求める津軽。
「スマン。非常時だ……逝ってくれ」
上司、視線を合わせられず、あさっての方向を向きながらポツリと呟いた。

※本エピソードはクリスマスに作成・編集されています（リアルで）。
※２４日と同様に、作者の周囲にはケーキもプレゼントもありません。一緒に過ごしてくれる人も、もちろんおりません（え～～っと、練炭ドコにしまったっけかな？）。
※サンタさん、その大きな袋からリア充を出してください。川に流して遊びます。
※あ、アレッ……目から、トナカイのヨダレが……。

ワクワク♪　ＤＴ弥富の同棲生活（初日・午前中だよう）

どうも、弥富更紗です。最近、思うんです。オッパイは大きい小さいじゃなくて、“ダレについているか”……が問題ではなかろうかと。つまりですね、アンジェリーナさんみたいな御立派な爆乳も、色と艶の素敵な形の良いバストも、持ち主が一体、ダレなのかでその価値は全く違ってくるということです。え？　俺の言いたい事がよく分からない？　……俺、生まれて初めて女の子の部屋に居ます。ここに至るまでの過程にカナリの難はありましたが、一応、事実です。イイ匂いがします……香水？　ヘアスプレー？　ＪＫの体臭……フヒヒ、サーセン。けどね、なんとも残念無念なコトに、相手は金属製の手錠を笑顔でブチッとかやっちゃうゴリラパワーを秘めていてね、俺は押し入れでの生活を余儀無くされているワケ。それに、彼女の話し方がどうにも生理的に受け付けられなくて……なんか、もう……最近の１０代ってコワイ（泣）。

「……どうするよ？」

弥富がその部屋の中で立ち尽くしながら、一人でポツリと呟いた。おそらく、俺の蒸発に気づいた津軽さんが実動課に連絡し、大捜索が始まっているハズ……そう思いたい。目撃者の証言とか、監視カメラの映像とかからこの場所を瞬く間に割り出し、どっかのバーローみたいにカッコ良く救ってくれるハズ……そう思わせてよッ、ねえ、幸運の女神！

女神Ａ：「真実はいつも一つ！　……もしくは二つぐらい！」

（ダメだ……不安で押し潰されそうだ）

弥富はこの部屋の出入り口を直視する。ドアは外と内側のどちらからでも鍵をかけられるよう改造されており、現在は外から鍵がかけられている。窓はあるが、金属製の格子がはめこまれていて脱出

は不可能。しかも、ここは二階。格子がなかったとしても、俺の更年期障害な足腰では着地と同時に何かがポキッといく。そう、ポキッと。

「よし、こうなれば……！」

俺は窓をガラリッと開け、大きく息を吸い込んだ。何をするかというと……そう、大声で叫んで周囲の民家に助けを求めるのである。運動神経や肉体の強度はカスみたいな俺だが、近所のカラオケ屋でアニソンを熱唱して（一人で）鍛えた喉には自信ありだ。

「ダレか――ッ！？」

ガチャ……

（や、ヤベッ……！！）

解錠される音がして、弥富は大口を開いたまま硬直する。ドアノブが回り、ドアが開いたその先には――

「オ姉チャン、居る？」

「……え？」

一人の少年が立っていた。１２、３才くらいのちょっぴり痩せ気味な少年だ。

「あれッ……居ないの？」

「あ、その……俺は、その～～……」

予想外の来訪に弥富は対応に困っている。

「えッ……ダレ？　お客さん？」

少年の声がわずかにうわずっている。そして、何かから逃げるようにドアを半分だけ閉めて、隙間から顔を出す。

（……ん？）

弥富が妙な違和感を感じた。少年は両目のまぶたを閉じたままこちらの様子をうかがっているのだ。

「あ、あの～～……オ姉チャン、部屋に居ますか……？」

オドオドした態度で聞いてくる。やはりそうだ。この少年……目が見えていない。

「こらッ、朱文（しゅぶん）！」

少年の背後から声がして、彼はビクッと体を震わせ振り向いた。
「ダメでしょ、勝手に鍵を開けたら！」
「ご、ゴメンナサイ……ラジオの調子が悪くなっちゃって、直してもらおうと思って……」
「分かったわ。ラジオは後で修理しといてあげるから、自分の部屋に戻ってなさい。いい？」
そう言って、彼女――ヤンデレコメットは少年から携帯式のラジオを受け取り……
バタンッ！
ドアを少々強めに閉めた。
「……見ちゃった？」
「イエス・高須クリニック」
明らかにテンションがダウンしている彼女に対し、弥富は意味不明な返事をする。
「あァァァァ～～、もォォォォ～～！　いきなりプライヴェート目撃されちゃったじゃん！」
彼女は頭を抱えて何故か悔しがってる。先程までは例のミニスカメイド服だったが、今は紺のブレザーにネクタイをしめ、膝まで隠れるスカート。頭髪も黒に染め直してある。
「またコスプレかよ……」
弥富が床の上にキチンと正座しながら面倒臭そうに呟く。
「違うわよッ。言ったでしょ？　アタシは現役の女子高生なの。今は夏休みに入ってるけど部活があるワケ」
「な、なるほど……」
毎日が日曜日な自堕落な生活を営む弥富にとって、『学校』や『学生』という単語は実に恐れ多く、芳しい。しかも、目の前には朝一番の生搾りなＪＫが一人。“恋愛ってナニ？　それって食えるの？”……みたいな学生時代を過ごした日々。そんな彼に、神様がささやかな御褒美を与えてくださったのか？　脳内の造りは痛々しいが、よく見りゃ堀〇由衣に似てて可愛いし……（ポッ）。

「うわッ、キモッ！　ほっぺた赤くしながら物欲しそうな目で見ないでよッ！」
ヤンデレコメットが思わずひるむ。弥富の表情はＴＶに映ったりしたらアウトなレベルにまで変形してた。
「あ、あのさぁ……」
「何よ？」
急に弥富の顔色が悪くなり、モジモジし始める。
「トイレ……行きたい」
「はい、コレ使ってね」
まるで彼の生理現象を予測していたかのように、ヤンデレコメットはズイッとバケツを一つ差し出した。
「……マジですか？」
「イエス・高須クリニック★」
ペロッと舌を出してスカートをヒラリッ。泌尿器の問題でそんな切り返しされても困るんだが……。
「トイレ済ましたらコレで手を拭いて。で、喉が乾いたらコレ飲んで。昼過ぎには帰ってくるから」
そう言って差し出されるボトルタイプのウエットティッシュと、天然水のペットボトル。
「はあ……どうも、御親切に……」
全く感謝する気にはなれない。誘拐された被害者なんだし。
「……」
「……」
無言で見つめ合う二人。
「あの……早速、このバケツを使いたいんだけど」
「いいわよ。どうぞ」
大変申し訳なさそうに言う弥富に対し、ヤンデレコメットは全くの平常心。
「いや、どうぞじゃなくてだねえ……目の前に居られたら困るワケでねえ……画的にも法的にも」

「いいじゃん、しちゃいなよ♪」
ああ、神様ッ――今こそマジで御救いください。オレ、ちょっぴり可愛いと思いかけてる女子高生の前で、排尿行為を強制させられようとしています。しかも、彼女はちょっぴり微笑んでいて、ナニか期待しているような口振りなんです。こんな時、迷える二十代はどうすればよいのでしょうかッ！？
神様Ａ：「気をつけてッ、児ポ法（（アグネス））が見ているよッ！」

本日も弥富の荒んだ心は絶好調に電波を拾ってる。
「まずは出て行ってくれ。ハナシはそれからだ」
尿意が危険値にまで達しているのか、さすがの弥富も真剣な眼差し。
「ええ～～……ねぇ、ちょこっとだけ★　ちょこっとだけでいいから、してるトコ見・せ・て★」
……コイツ、とんでもないポテンシャルを秘めてやがった。弥富もネットの数ある掲示板で、リア充カップルの男の方が彼女に“オシッコするところ見せてって頼む”なんてコメントをたまに目にしていたが、ここに逆バージョンがいます。コレは単なるイヤがらせか？　それとも病的な性癖なのか？　いずれにせよ、この状況下で泌尿器を露出させるワケにはいかない。
「お願いですッ、とっとと出てってください！」
弥富はその場にビシッと土下座しちまった。男・２５歳、排尿するため女子高生に頭を下げる。人生、何が起きるか分からんね。
「もうッ、分かったわよ。じゃ、大人しくしててちょうだいね」
バタンッ――
ヤンデレコメットは欲求不満気味に出て行った。
（……津軽さん、なるべく早く助けてください。オレ、どうしようもなく危険を感じてます。特に下半身が）

残された弥富はストレスの臭いがする溜息を吐き、周囲を観察し始めた。彼女の言う通りなら、後5、6時間は帰ってこないハズ。今のうちにこの部屋にある物でなんとか外と通信するか、物理的に脱出を試みるしかない。『Mr．アルビノ』などという不審人物に贈答される前に！

――――――――― 1時間後 ―――――――――

「ダメだ……………くそッ」
デスクトップはパスワードが設定されていてメールは使えない。部屋に固定電話は無く、格子を破壊できそうな道具も無い。ドアは木製だが非常にブ厚く、鍵も丈夫な造りで出来ていて、何度体当たりしようとも不毛に終わりそうだ。つまり、進退きわまった。そんな時……
ガチャ――
解錠される音がしてドアが開く。
（――――――ッ！）
思わず弥富が身構える。
「あ、あの～～……入ってもいいですか……？」
ドアを半開きにしてヒョコッと顔を出したのは、さっきの少年。やはり目は見えていないようで、顔を上下左右に動かしながらこちらの様子をうかがっている。
（よしッ、これぞ千載一遇のチャ～～ンス！！）
この少年、ＪＫを“オ姉チャン”と呼んでいた。おそらくは弟だろう。そして、どんな症状かは知らないが、この子は目が見えていない。強行突破するなら今をおいて他にはないッ！
（身体障害者を押しのけるのは気が引けるが……致し方な～～し！）
意を決した弥富がドアに手をかけようとした。が――
「ラジオ………直せますか？　また音が悪くなっちゃって……」
そう言って、おずおずと差し出される携帯型ラジオ。カナリ使い

こまれていて、いたる所に細かい傷が入っている。
「えッ……あ、いや……お父さんかお母さんに直してもらった方が……いいよ」
まさかの頼み事をされちゃって、ドアに触れた手がピタリと止まってしまった。
「ご、ゴメンナサイ……パパもママもいなくて、だから、その……」
完全に腰がひけている。
（まいったな、こりゃ……）
この口ぶりからして、この家には自分とこの少年しかいないようだ。まさに脱出の好機なんだが、自分よりずっと年下の相手から、こうも怯えながら頼まれては良心の呵責ってヤツに耐えられない。
「ええっとォ〜〜……パパとママは御仕事かな？」
「ううん……違うんだ。どっかに行っちゃったんだ」
「……どっかに行った？」
「オ姉チャンは“子供を残して蒸発するロクデナシなんか、早く忘れなさい”……って言うんだ」
（蒸発？　子供を捨てて家出しちまったって事か？）
弥富、できるなら耳に入れてほしくない情報に苛まれ、ドアに触れていた手を仕方なく離した。

人類の進化は羞恥心をポイッした瞬間、始まるよう

実動課・検査棟――昼前。
軍部と電薬管理局本部の役員による現場検証が続く中、宇野課長にとっては更なる胃への負担となる原因が来訪する。
「これはこれは……『杜若(かきつばた)室長』」
宇野は曇りそうになる表情になんとか愛想笑いを浮かべ、その男性を出迎えた。
「これはまた……ヒドイ有り様ですね。海外のダウンタウンならともかく、この国の……しかも、政府の直轄機関がこうもあっさり突貫されるとは」
『杜若室長』と呼ばれた30代後半くらいのスーツの男は、慇懃無礼な態度で少し苦笑いを浮かべて言う。
「いやはや、面目次第もありません。敵はこちらの通信手段を全て無力化し、手早く警備を沈黙させ、対物ライフルか何かで隔壁を突破してきました。相手はカナリの訓練を積んだプロ……しかも、ここの構造を把握していたものと思われます」
「つまり、外部からここの情報にハッキングをされていた。あるいは、内部からリークした者がいる……そうなりますな」
「それについては調査中ですが、敵の正体はおそらく……」
宇野が手近にあった端末を操作する。検査棟内の監視モニターは、機能を停止させられて記録は残っていなかった。が、宇野は実際に現場で強襲部隊と鉢合わせしている。数は5名……全員、覆面をしていて人相は確認できなかったが――
「『国家調査室』よりいただいた、不審人物5名の映像記録……プロフィールに目を通したところ、義手と義足を付けている者が一人。私が現場で対峙した5名の中に、明らかに通常動作がぎこちない者がいました。そして、覆面からわずかにブロンドの髪がはみ出していました。映像記録にある一人と確信します」

「……なるほど、我々の情報共有が役立ったというワケですな」
杜若室長は少々皮肉のこもった声で呟いた。
『国家調査室』――国内におけるテロ・暴動発生の予防、及び国外からの敵性因子侵入に対する防衛を主な任務とする、政府直轄機関の一つ。国内と国外で交わされる通信の傍受も行っており、今回、電薬管理局・実動課に元傭兵達の集結情報を伝えた。
「一応、こちらでも警戒はしておりましたが……まさか、こうも迅速に事に移るとは思いませんでしたので」
宇野の胃袋がキリキリと痛む。
「ところで、課長……“彼女”は……その、先程から一体……何を？」
杜若室長がフロアの隅っこの方を指差して問う。
「……（汗）」
宇野課長、完全に返答に困っている。何故なら、室長が指差した先では、巨大な強化水槽をバックに一人の女性が踊っているから。とってもカラフルでフリルな衣装を身に纏い、クリスマス商戦で１９８０円くらいで売ってそうなオモチャのバトンを手にし、床に置かれた小さなラジカセから流れる愉快なアニソンにのってエキサイティング！！　彼女の名は津軽六鱗・２６歳……悩ましげな腰つき&パンチラで、どうしても周囲からの視線が集まって仕方がない今日、この頃。
「彼女はその……一応、実動課のエージェントでして。現在、任務の真っ最中でありまして……（汗）」
「は？」
室長が目を細めて訝る。そりゃそうだ。仮にも政府の役人が多く出入りする情報機関で、コスプレして愉快に踊るという行為が何の任務につながるというのか。それでは皆様、聴いていただきましょう……三匹の禁魚＋糸ミミズ＋超赤面中の津軽による『ギルティ５』の主題歌――

【失笑（スマイル）go　go！】（プリ○ュア5のOP調で）
作詞：回収屋
作曲：ポチ

＜わん、つー、すりー、ふぉー、ギルティィィィィふぁいぶ！＞
（中略）
＜大きくなったけど　何にもなれなぁ～～い♪（職安・オッサン・いっぱい）＞
＜両手に履歴書　内定もらえなぁ～～い♪（氷河期・これが・現実ぅ～～）＞
＜社会から　おっこちたナミダは　ニートの　発生前兆だよ♪＞
＜めたもるふぉ～～ZE～～！（オワタ！）＞
＜他力本願　無収入ぅ～～～♪（朝から晩までネット漬け）　潜むよがんばる自宅警備員～～～♪（両親今日も泣いている）＞
＜年金もらえぬ　未来へ　あすも　ひきこもる～～～♪＞
＜ピンチから（オワタ！）　底辺へ（マジ、オワタ！）　惰性で変身♪（あるある……ねーよッ！）＞
＜ギルティ　ギッ・ギッ・ギッ・ギュワ（＼（＾o＾）／）　毎日イエス、廃人！（＼（＾o＾）／）＞
＜エロゲで　ニヤッと笑って　失笑（世間の目が）go　go！＞
＜わん、つー、すりー、ふぉー、ギルティィィィィふぁいぶ！＞

「……宇野課長」
「申し訳ありません。これも一応、任務の一環でして」
課長、理不尽な思いで一杯なまま謝るしかなかった。周りで調査員達が真面目に勤労しているというのに、同じフロアで珍風景を展開しているのだから。しかも、専用インカムを付けていない者には禁魚達やポチの姿は見えていないワケで、津軽がただ一人、腰振ったり腕をブン回したりしてる……悪フザケに一生懸命な光景しか室長達の目には映ってないワケで……。

「うっしゃあッ！　バッチリきまったでえッ！」
片目を閉じて前かがみになり、胸元を強調したポーズをとる出雲――いや、ギルティ・バイオレットがヤル気充分な声を上げる。
「ボク……色んなモノを失いそうで怖いです」
「儂もじゃ……」
どうしてもこのノリについてこれないでいる郡山と土佐――いや、ギルティ・チェリーとギルティ・アイリスが、顔面を引きつらせてポーズをとっている。
「おおォ～～、初めてにしてはサマになっているぞォ～～。オマエには天性の素質が備わっているとみたッ！」
「……わ、わたくし、このような辱めを受けては……もう……（真っ赤）」
仁王立ちでビシッと指差してくるポチと、顔から火が出かねないくらい恥ずかしがってる津軽――いや、ギルティ・ブロッサムと新ギルティ・ローズ。
この五名に課せられた任務は、“Ｍｒ．キャリコの拘束”・“浜松と弥富更紗の捜索”、及び“大規模なサイバーテロの予防対策”――だ。そのため、彼等は広大なるネットの大海原へ泳ぎ出しているのであり、先程の歌とダンスがどう関係しているのかは不明。って言うか、とっても洗練された無駄な余興である可能性が９割５分だ。
「で、何か目新しい情報は拾えたか？」
宇野が急かすように聞いてくる。
「ふむ……何者かは分からんが、大掛かりなサイバーテロを仕掛けようとしているヤツがおるようじゃ」
土佐が真剣な声で呟く。
「Ｍｒ．キャリコがもう動いたのか！？」
「電子指紋を巧妙に削除してあって、仕掛けている張本人にはたどれませんでしたが、浜松さんを奪取したタイミングから察するに……おそらく」

郡山が凜とした表情で言った。
「……で、具体的にはどのようなテロかね？」
インカム・βを装着し、禁魚達のアバターを知覚できるようになった杜若室長が、宇野課長の真横に立っていた。
「ぬぅ～～、部外者の立ち聞きは禁止だぞ～～！　仲間に入りたければ、人生における黒歴史エピソードを公開するべしぃ～～！」
ポチ、絡む。
「……コンビニ弁当で食中毒になり、２回ほど死にかけた。しかも、２回とも同じコンビニの弁当だった（作者の実体験）」
室長、あさっての方向に視線をやりながら独り言のように答える。
「ご、合格だぞォ～～！　オマエを仲間と認めよう～～！」
涙目で室長の脚にヒシッと抱きつくポチ。
「大したハッカーやで……まるで、自分で組み上げた箱庭をいじるみたいに、セキュリティホールを巧みに突いてハッキングしとる。他人の制作したプログラムやスクリプトを興味本位で悪用する、“偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会”みたいなスクリプトキディとは次元が違うわ」
赤髪のツインテールを人差し指で弄びながら、出雲がムダに戦慄を催させる。『セキュリティホール』とは――ソフトウェアの欠陥（バグ、不具合、システム上の盲点）の一つで、本来操作できないハズの操作（権限の無いユーザが、権限を超えた操作をするなど）ができてしまったり、見えるべきでない情報が第三者に見えてしまうような不具合。このような欠陥は古くから存在したが、ネットの発展に伴い、ネットワークを介して容易に攻撃されるようになり、問題視されている。原因は、プログラムのコーディングミスや、システムの設定ミス、システム設計上の考慮不足など。セキュリティホールを生み出す背景には、ソフトウェア企業が成長を続けるため、アプリケーションのバージョンアップのたびに余計な機能を盛り込み、ソフトウェアを肥大化させる事が挙げられる。
「それで、ターゲットは何だ？　この国のインフラを支える機関を攻撃するという情報が、先日からネットで氾濫しはじめている……

もし、そうなれば、事は電薬管理局だけでは済まなくなる」
宇野課長の胃袋がどうしようもなく痛む。
「ターゲットは『享輪コーポレーション』。ルーターに偽のNATテーブルが設定され、コードが書き換えられています」
郡山がアゴに手をあてながら事実を伝えた。
「なッ――――!?　それは本当かッ!?」
「嘘ついてもうち等には何の得もあらへンしなあ」
「くッ……インフラへの攻撃予告は我々の目を誤魔化す陽動だったか……!」
そう言いながら、宇野は早速ケータイで管理局本部に電話する。
「しかし、何故『享輪コーポレーション』が?　君達に心当たりはあるかね?」
杜若室長が冷静な声で推測を促してくる。
「最終目的までは分からん。じゃが、これで浜松が誘拐された理由が判明したわい」
土佐が被っていた目出し帽を脱ぎつつ言う。
「浜松?　ああ、ここから強奪されたという禁魚の名か。しかし、禁魚一匹とどう関係するんだね?」
「浜やんが言っとったンや。自分は元は“深見素赤”っていう人間で、享輪コーポレーションに勤務しとったって。しかも、『オリジナルP・D・S』を設計・開発した張本人やって」
「んんッ?　いや、ちょっと待ってくれ……オリジナルP・D・Sが電薬管理局との契約に基づき、享輪コーポレーションで生み出された事は私も知っている。しかし、今の言い方だと……まるで、“開発者本人が禁魚になった”みたいに聞こえるんだが」
「ええ、そういう事になります。いわゆる、『生命のデジタル化』というヤツです」
郡山の視線が鋭い。そこからは、先程までの悪フザケな空気は一切感じられない。
「ははははッ、『生命のデジタル化』ときたか。要するに、人間の脳

内で発生する電気信号を常にデジタル処理できる環境下に置き、対象者の人格・記憶・性質などをデジタル変換してネット内で再構築する……確かに理論は私も聞いた事があるし、近い将来、実現可能らしいが、公式にも非公式にも前例は無いよ。国家調査室の責任者である私が言うのだから間違いは無い」

杜若は苦笑いを浮かべながら一蹴した。

「浜やんが言うには、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓには『他の使い道』があるンやて」

「ほう……では、ペットのアバターとコミュニケーションをとるソフトを使い、人間の意識が魚類の脳内に入力された……そういうワケだ。なら、魚になってしまう前の体――つまり、“深見素赤の肉体”があるハズ。だが、どこの警察機関や情報機関からも、そんな名前の変死体が確認されたという話は聞いていない」

「室長……残念ながら、コイツ等の与太話がいよいよ現実味を帯び始めたようでして」

ケータイで管理局本部と話を終えた宇野が、横から割って入る。

「……と、言うと？」

「つい先程、本部に『Ｍｒ．キャリコ』を名乗る男から電話があり、堂々と要求を突き付けてきたそうです。“深見素赤の肉体の移譲が速やかに行われなければ、無差別なサイバー攻撃に出る”――と」

「――――ッ！！　逆探知はッ！？」

「スクランブルのかかった電話からで、発信元は特定できなかったそうです」

「一体……何をしでかそうというんだ……！？」

ついに、国が一つ震撼しはじめた。

ヌイグルミは洗わず空気洗浄して欲しいよう

＜クマぁ～～……どうやら何者かが“作戦内容”に気づいたようだベア＞

薄暗い部屋の中で一台のノートＰＣから声がする。モニターにはチョーカーを付けたとっても可愛らしいクマのヌイグルミが映っていて、デッキチェアにちょこんと座っている。

「……と言うと？」

そのモニターを見つめる男が一人。左手に皿を持ち、右手には一本のフォークが。皿の上には焼きたてのホットケーキが熱を発している。

＜『享輪コーポレーション』に仕掛けた下準備を、拙者達以外が覗き見した形跡があるんだクマ～～＞

クマのヌイグルミが両手をブンブン振り上げながら答える。

「電薬管理局かい？　それとも、国家調査室かな？」

＜いやいや、おそらくはどちらでもないクマよ。バカなハッカー共が近づかないよう設置してある攻性ワームを、ギリギリのタイミングで回避している。これは……浜松の御仲間の仕業と推測するベア～～＞

「ふむ。実動課の連中、禁魚と協定でも結んだかな？　アハッ♪　なりふりかまってられなくなったかな？　アハハッ♪」

モニターを見つめる男は愉快そうにホットケーキをフォークで刻み、口に運ぶ。

「ムダよ……軽く脅迫したくらいじゃ、あたしの身体（バックアップ）は手に入んないからね」

部屋の隅っこで壁にもたれかかるようにして、セーラー服姿の少女が一人立っている。その目は不愉快さに満ちており、決して男と視線を合わせようとはしない。

「なるほど。だが、その言い方だと君の肉体は『電薬管理局』に保

管されている……そう推測できるよね、浜松？」
「うッ……！」
イヤラしく口元を歪める男に対し、そのセーラー服少女――浜松は分かりやすく動揺してしまう。
「ま、ある程度の確信はあったのさ。この国で身元不明の遺体、もしくは脳死状態にある肉体の隠蔽が可能な機関となれば、数は限られる。そして、君は電薬管理局と契約して業務を請け負っていた享輪コーポレーションの元社員。何かしらのコネクションが生じたと考えるのが自然」
＜さっすがはＭｒ．キャリコ～～♪　自宅警備員の無駄に洗練された頭脳が冴えわたるゥ～～★＞
モニターのクマが一生懸命に拍手してる。
「情報機関ってヤツは、他人の情報はなにがなんでも手に入れようとするが、自分達の情報はなにがなんでも公開しようとしない。相手が一国の大臣であろうと、頭のイカレたテロリストであろうと答えは変わらない。“存じ上げません”……だ」
男――Ｍｒ．キャリコが一瞬だけ憂鬱な表情を見せた。そして、ＰＣの近くに置いてあった衛星電話を手に取り、コールする。
＜何だ？＞
相手はすぐに出た。カナリの貫禄を感じる中年オヤジの声が聞こえてきた。
「やあ、Ｍｒ．ジブリ。新しい仕事を頼みたいんだが……手透きだったかな？」
＜今は忙しい。仲間と観光中だ＞
「観光？　カブキ町で散財するにはまだ時間が早いでしょうに」
＜カブキ町？　バカな……そんな如何わしい歓楽街で遊ぶ趣味は無い。我々は今、アキバの街で癒されているところだ＞
「さ、左様で……これはまた、意外な……」
＜噂には聞いていたが、コレが本場のメイド喫茶というヤツか……実に素晴らしい。従業員の女の子達はまだまだ若いのに、立派なプ

ロ意識を感じる＞
「ま、アナタ方がアキバの街にいらっしゃるというのは好都合でした。実は……人間を一人、拉致していただきたい」
＜ふむ。魚を一匹連れて来いと依頼された時は耳を疑ったが、今度のはどのような裏事情があるのかな？＞
「その街の一角に『享輪コーポレーション』というソフトメーカーがあります。本日、そこにとある人物が特別来賓として訪れる予定です。今からおよそ１時間後に」
＜えらく急だな……準備不足なミッションはロクな結果を生まないぞ＞
「その分、報酬は上乗せしますよ。御土産にメイド喫茶が一軒買えるくらい」
＜……いいだろう。で、ターゲットは？＞
「今からそちらの端末に人物の詳細な行動予定表と、顔写真を送信します。拉致完了後は、前回と同様の手順でこちらへ送り届けてもらいたい」
＜了解した＞
ゴトッ……
Ｍｒ．キャリコは通信を終え、満足そうな微笑みを浮かべて衛星電話をテーブルに置く。
「まるで出前だぁね。自分は家から一歩も出ず、カーテン閉め切った薄暗い部屋で他力本願……キモッ！　あ～～～～ッ、キモッ！」
浜松がペッて床に唾を吐いちゃう。
「ネットの海へ“身投げ”した君に言われたくはないな」
Ｍｒ．キャリコが皮肉のこもった言葉を返す。
「アンタ、どこまであたしの事を知ってるワケ？」
浜松の声に殺意にも近い何かが滲む。
「深見素赤・２５歳。享輪コーポレーションの元プログラマー。電薬管理局からソフト開発を請け負い、オリジナルＰ・Ｄ・Ｓを設計した張本人。ちなみに、ド近眼と貧乳にコンプレックスを抱いてい

る」
「おーけー、おーけー。プロのストーカー、乙ってカンジだね。じゃ、ついでにアンタの方も自己紹介しちゃってよ」
「アハッ♪　さっき言ったでしょ？　“情報機関”は決して自分達の情報は与えないって」
「……あァ～～ん？」
浜松が眉間にシワを寄せる。
「私が住むこの部屋が次世代の情報機関さ。これからは端末を持つ者全てが情報機関者になる時代……一国の直轄機関だけが極秘情報を隠匿する時代は終了。偽Ｐ・Ｄ・Ｓの開発を皮切りに、情報格差をなくしてあげるんだよ。ダレもが正しい情報を得られ、政府の嘘や妄言に騙されない日常を形成してやるのさッ！」
Ｍｒ．キャリコはとても愉快そうに答えた。
<プ～～～～ッ、プップップップッ★　いつもながら中二臭が絶えないクマぁ～～♪　それでこそ未来を築くに値する狂人だベア～～♪>
褒めているのかバカにしてるのか、モニターのプー左衛門が口元を手で押さえて爆笑している。
（こりゃ……ちょいとヤバイかな……）
オンラインの状態ならともかく、小型の水槽に監禁された禁魚・浜松には逃げも隠れもできない。今はイントラネットによる限定仕様によりアバター化しているが、当然、外部との連絡手段は断たれている。自分の父親を名乗って弥富の部屋に神経ガスを撒き散らしたオッサンの時のように、相手の脳を焼き切るという強硬手段もとれないのだ。
「ちょっと尋ねたいんだが……どうして君は弥富更紗にポータブルＨＤを託したんだい？」
Ｍｒ．キャリコはテーブルに両肘をつき、両手を組んで神妙な口調で問う。
「だって……大切な友達だったから（ポッ☆）」

「……（黙）」
＜……（黙）＞
頬に両手をあてて顔を薄らと赤くする浜松に対し、傍観者二名は“絶対にツッコまないぞ”――的なオーラで対抗する。
「ちッ……」
適当にはしのげないと分かった浜松が、場末のチンピラみたいに舌打ちしやがった。
「で、どうして託したんだい？」
「一人暮らしで、友達いなさそうで、コミュニケーション能力が乏しい。しかも、他人の言葉を鵜呑みにして疑わず、大して考えもせず、周囲の空気と状況が生み出す惰性で生きている……まずはそんな隠れ家の家主を選定する必要があった。何人かの候補とチャットした結果、最適なバカが弥富更紗だった。だから、あたしは裏サイトで禁魚を購入するよう仕組み、人間の女性としてではなく、魚類としてアイツと直接接触することにしたワケ」
そう言い放った浜松の顔には一片の躊躇も陰りも無く、本心をブチまけたことにより心なしかスッキリとしていた。
「これは、これは。ヒドイ女だよ。アハッ♪」
＜このビッチめぇ～～！　人間のクズめぇ～～！　オマエなんかエロゲの取説以下だクマ～～！＞
当然の野次。プー左衛門にいたっては、モニターの中で洗濯機に飛び込んでグルグル回ってる。
「世界のドコかでダレかが一人幸せになるには、ダレかが一人不幸にならなきゃいけない……そんなリアルの世界で不条理に泣かされるくらいなら、ネットの海で永久に泳いでいたい。そう思ったワケ。ま、ネットの海へ仕掛けた網に、たまたま引っ掛かったのが更紗っていうバカだった。それだけね」
彼女の口から何故そんな言葉が吐き出されるのか……ただ、その呟きを聞いたＭｒ．キャリコは、素直に納得したような面持ちだった。

「『生命のデジタル化』――ネットの社会構造を知りつくしたハッカーならダレもが夢見る未来。ケガや病気や老いに苦しむ生身の肉体を破棄し、デジタル化された不滅の肉体を得て永遠に生きようとする超理論。浜松、君はまさにその一号となる一歩手前まで来ているんだね」
「ええ、そうよ。でも、残念ながら一号から先はいらないの」
「……いらない？」
Ｍｒ．キャリコの顔が曇る。
「ネットの海で生き続けるのはあたし一人で十分。仲間は必要無いってコト」
「何故だい？」
「あのねぇ……世界中の引きこもりやニートをネットの海へ放流したら、クソ溜めみたいなリアルの世界がもう一つ出来ちゃうじゃない。本日は仕事でヘマして落ち込んだからネットの海へ……彼女と別れてブルーだからネットの海へ……消費税の引き上げで生活苦しいからネットの海へ……最後には地球上から人間が消えるでしょうよ」
いくらなんでも極論だが、可能性としては決してゼロではない。人は新しいシステムを手に入れると試さずにはいられない。それが、己の生活水準の向上につながるとなれば尚更だ。隣の人が最新型のデジカメで遊んでいたから、次の日、自分も同じのを買った。見知らぬラーメン屋に行列ができていたので自分も並んだ。中東の小国で大規模な反政府デモが起きたから、自分の国でもデモを起こした――要するに、人間は“群集心理”の中で常に生きているのだ。ダレか一人がネットの海へ潜り込み、快適な生活を永久に送れると呟けば、情報の精査が緩い者から順に“身投げ”していく。
＜プ～～～～ッ、プップップップッ★　Ｍｒ．キャリコ、とっても残念クマ～～。せっかく捕まえた浜松は正反対の考えみたいだベア～～＞
プー左衛門、全自動洗濯機の中で洗われ→すすがれ→脱水されて。

小さなドライヤーで全身を乾燥中。ファーファを使った後のイイ香りをさせて。
「私はこう思っている……“人間みんな、ネットの海へと消えちゃえ”って」
そう言って、Ｍｒ．キャリコはホットケーキの最後の一切れを口に放り込み、持ってたフォークを浜松めがけて投げつけた。
「あァ〜〜あ……キチガイが技術を持っちゃった結果がコレだよ」
彼女は吐き捨てるように呟いた。額からダラダラと血を流しながら。

ドキドキ♪　ＤＴ弥富の同棲生活（初日・午後だよう）

「たっだいまあァ～～！　朱文、ラジオの調子は……ど……おおッ！？」

部屋のドアが開く。開けた本人は中の様子を目の当たりにして口を半開きにし、少々引きつった感じで硬直している。

「あ……（汗）」

マヌケな声をもらす弥富と、ネクタイを外そうとして止まってるヤンデレコメットの視線が――――絡む。

「うりゃあああああああああああああッッッ！！」

ゴッ――！

「ぶべらッ！？」

咄嗟に放たれた蹴りが、あぐらをかいて座っていた弥富の顔面にヒット。

「オ、オ姉チャン！？」

すぐ傍で同じく座っていた少年が、いきなりのアクションに驚いて立ち上がる。

「ちょ～～～～っと、こっち来てちょうだいね、オ・兄・チャ・ン★」

ドス黒い笑顔を浮かべたヤンデレコメットは、ダメージでクラクラしている弥富の襟首をつかみ、自室まで引きずっていく。

ポイッ……

無造作に監禁部屋へと戻された。

「１０秒以内にアタシを納得させられる理由を述べよッ！　い～ち、にぃ～、さ～ん――」

「弟さん、失明してんのか？」

「……だから何？　人並みに同情したいワケ？」

彼女の口調から抑揚が消える。

「ラジオがまた調子悪くなったって……俺のところに来たから。で

も、御両親はいないって言うし……まあ」
「うっわァァァァァァァ〜〜……目の見えない可哀想な少年をいたわって、荒んだ姉の心をサクッと救ったつもりィ？　バーカ、バーカ、ぶわァァァァァ〜〜かッ！　リアルはそんなに単純じゃないってのの！」
　そう毒づきながら、彼女は着ていた学校の制服を荒っぽく脱ぎ始めた。
「あのなぁ……オマエの弟が外から鍵を開けた時点で、俺は外へ逃げられたんだ。せっかくのチャンスを無視して恩を売る意味なんかねえだろが」
　弥富が不満げな表情で呟く。ただし、目の前でＪＫの生着替えが始まっちゃったもんで、内心は微妙にドキ☆ドキ☆。
「じゃあ、何よ？　何か別の目的があって逃げなかったってワケ？」
「一つ聞いておきたいコトがある。どうして警察に捜索願いを出さないんだ？」
「……ふぅ。朱文めッ、余計なコトを……」
「御両親が蒸発して１ヶ月も経つそうじゃねえかよ。普通は家族のダレかが消息不明になったら――」
「黙ってッ！　よその家族はよその家族……アンタとは関係ない」
　バッ……
　そう言って上着を脱ぐ。少々汗で蒸れた若々しい体臭が弥富の鼻腔をくすぐった。
「それに……アタシにはＭｒ．アルビノがついてる。おかげで暮らしに不自由は無いし、学校生活も問題無く満喫できてる」
　普通の女子高生なら決して関わることのない、社会の水面下で蠢く力――それが彼女の本来あるべき正常な精神状態を壊していた。
「おいおい……やっぱそのＭｒ．アルビノってヤツ、どうかしてるって。何かしら職に就いてる人間が１ヶ月も音沙汰無しなら、こっちから通報しなくても警察が動くハズだろ？　ってコトはだな、そのＭｒ．アルビノが情報を操作して――」

「うるさァァァァァァァァァァァァァァァい！！」
――バサッ！
激昂するヤンデレコメットが、脱いだ上着を弥富めがけて叩きつけた。
「アタシも朱文もちゃんと生きてるッ！　学校は楽しいし、アタシが裏仕事をこなせば大金が振り込まれるッ！　親が消えたからって何よ……気味の悪い心配なんかしないでよねッ！」
「じゃあ、弟さんの失明もアルビノってヤツが治してくれるのか？」
「ええ、そうよ。その予定……」
彼女は語気を静め、スカートを外す。
「おッ……と、と、と……（汗）」
唐突に真っ白なショーツが視界に入ったもんで、免疫ゼロな弥富は不格好に顔をそむけた。
「弟はカナリ特殊な緑内障を患ってるの。本来なら、加齢や眼圧や遺伝が原因になるらしいんだけどさ、弟の場合は『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』が原因」
（なッ、何ィィィィィ～～！？）
イヤな汗が弥富の背中を伝う。
「生まれつき症状があったワケじゃない。つい最近まで普通に目は見えてた。けど、アイツ……アタシに内緒で偽Ｐ・Ｄ・Ｓをインストールして、うちで飼ってる猫といつも会話してたの。中毒には個人差があるし、滅多なことじゃ脳に障害は起きないって聞いてたけど……ね」
声が弱々しくなっていく。下着姿になった彼女はヘアゴムで髪を束ね、クローゼットの中からいつものメイド服を取り出した。
「ちょ、ちょっと待ってくれ！　偽Ｐ・Ｄ・Ｓを常用している知り合いがいるけど、連中に肉体的なハンデを負ったヤツなんて一人もいなかったぞ」
弥富が言う“知り合い”とは、『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』のメンバー。確かにニートとして充分に心は病んでいるバカ集団だが、ヤバ

イ病気を患ったり、感覚器官の一部を損傷したりしている様子は無かった。
「Ｍｒ．アルビノが言うには遺伝子レベルの問題らしいのよね。よく分かんないけど、相性がとてつもなく悪かった。失明状態を回復させるには……ええっと……何とか細胞っていうのを使った手術が必要で、まだ実験段階の方法らしいのよね。けど……」
「言う通りに裏仕事をこなせば、手術が受けられるよう取り計らう……どこぞで必ず耳にする小悪党の常套文句だな」
弥富が冷たく言い放った。
「否定はしない。けど、目の見えない息子を置き去りにして姿を消すような親より、アタシはよっぽど親切にしてくれてると思う。だから、彼が言う通りアンタを引き取りの時まで監禁する」
ファサァァァ――――
ミニスカメイド服がヤンデレコメットのスレンダーな肉体を包み、柔軟剤のイイ香りを部屋の中に漂わせた。
「ところでさぁ……オマエの名前って『長洲（ながす）しるく』っていうの？」
「うん、そう――――って、何で知って――！？」
弥富の手には、彼女の学校カバンからはみ出ていたノートが一冊。名前の記入欄に太い丸文字で書かれた本名。
「せくしゃるはらすめんとォォォォォ～～～～！！」
ゴッ……
跳び膝蹴りが弥富のアゴに命中。女子高生の私物を汚い手で触るキモオタに、物理的な天罰が下りました。
「おぉ～～……うぅ～～……（泣）」
痛みに悶える男・２５歳。ヒットする瞬間、パンチラが拝めたのが唯一の救い。けど、弥富君……さっき、彼女の下着姿見たでしょうが。
（ち、違うんだッ……パンモロとパンチラでは基本的な価値が違うんだァァァァ！）
心の中で叫ぶ獣・２５歳。

「オ、オ姉チャン……居る？」
部屋のドアが半開きになり、少年がオドオドした様子で声をかけてきた。
「どうしたの？　まだラジオの調子が悪い？」
「ううん、ラジオはちゃんと直ったよ。だから、弥富さんに……その……ママが、人に親切にしてもらったら必ずお礼しなさいって言ってたから……ありがとうって」
彼は少々気恥かしそうにそう言った。今日初めて会った相手への、精一杯のコミュニケーション。
「お礼ならオ姉チャンの方から言っといてあげる。キッチンに買ってきたお弁当があるから、食べといで」
「うん、そうする。ありがとう」
少年は手すりにしがみつくようにして、ゆっくりと階段を下りて行った。
「……だそうよ」
ヤンデレコメット――いや、長洲が仰向きにブッ倒れてる弥富に言う。
「人から感謝されるのってものすごく久し振りな気がする。やっぱ……悪い気はしないよな」
弥富は見知らぬ天井を何気なく見つめながら、独り言のように呟いた。
ブゥゥゥゥゥン、ブゥゥゥゥゥン――
学校カバンの中からケータイのバイブ音が聞こえてきた。
「はいは～～い♪　もしも～～し♪」
長洲はヒラリとミニスカをひるがえしながら、カバンからケータイを取り出した。
＜私だ。弥富更紗の様子はどうだ？＞
「なぁ～～によ、Ｍｒ．の方から電話してくるなんて珍しい」
＜オマエは攻めには長けているが、繊細で忍耐を必要とする仕事には向いていないからな＞

「ちょっと、ちょっと！　心配ないってば。この家からは一歩も出さない。外部に連絡されないよう、ちゃんと手はうってあるし」
＜……いいだろう。“報酬”は明日の午前中に届くよう手配してある。貴様が“報酬”をどう使うのかは知らんが、決して偽Ｐ・Ｄ・Ｓとリンクさせるな。専用のフィルター無しで一般回線からログインすれば、たちまち電薬管理局のネット監視網に引っかかる＞
「だいじょ～～ぶ☆　そんなヘマしないからさ♪　ところでさぁ……うちの弟の目の件なんだけどさぁ……」
バタンッ――
彼女は弥富の方に一瞥をくれてから部屋を出てドアを閉めた。
＜それは前にも言ったハズだ。ＥＳ細胞を使った再生医療はまだ実験段階。臨床試験が行えるようになるには、多額の資金が必要となる＞
「なら、ヤバイ仕事は全部アタシにまわしてよ。稼ぎたいの」
長洲の声から真剣さが伝わってくる。
＜ま……弟の病気を治そうとする殊勝な心がけはよしとするが、あまり自分の膂力を過信しない方がいいぞ＞
「悪党が人並みに説教するワケ？　バカみたい……」
＜バカで結構。今の社会には、まともな頭の持ち主ではこなせぬ仕事が多いからな＞
「ところでさぁ……あ、あの～～……」
＜何だ？＞
「ん～～……ううん、いいや。やっぱ何でもない」
＜蒸発した両親の件なら、まだ特に新しい情報は入っていない＞
Ｍｒ．アルビノは突き放すように答えた。
「あ……そ、そう。うん、分かった……弟に伝えとく」
長洲がケータイを切った。その顔にはあからさまに影が差していた。そして、部屋の中では――
（もしかしてさあ……大きい方もコレでしろってのか？　いや、待てッ、肝心の紙が無いしッ！）

長洲からトイレ用として渡されていたバケツを見つめ、弥富はどうでもいい葛藤の真っ最中だった。
バタンッ！
長洲が部屋に戻ってきて、バケツと見つめ合ってる弥富の姿を直視する。
「条件があるわッ！」
「……は？」
いきなりビシッと指で差してきたもんだから、弥富の顔面が完全にホワッツだ。
「器の大きいアタシからのサービス★　今後、Ｍｒ．アルビノがアンタの身柄を引き取りに来るまでの間、特別に家の中全ての移動と使用を許可したげるぅ～～～♪」
「マジで？」
どうやらバケツにまたがるという奇行は回避できたようだ。
「ただしッ――――――――――――――――――――お金貸して」
「――――――――――――――――――――――――――――は？」
弥富の口が腹話術の人形みたいにパカッと開いた。そう、パカッと……。

人質になった際は自己責任で宜しく頼むよう

こんちゃ～～っス！　うちの名前は出雲いいます、よろしゅう♪
見た目は水着姿のグラビアアイドル風（自称）やけど、本性は禁魚っちゅう魚類なンや。チャームポイントは赤髪のツインテールと、安産型のヒップ☆　スリーサイズは上から９６・（わァ～～お！）・９０のムッチリ系。うち等禁魚は今、世間一般のしがらみのせいで、とっても偉い御役人さんに見張られながらネットの海を泳いでるンや。『Ｍｒ．キャリコ』っちゅうアホが電薬管理局を脅迫するっていう事態に陥り、そのやんちゃをなんとか阻止すべく、試行錯誤を繰り返してる真っ最中。敵さんはうち等と同じ禁魚である浜やんの肉体――つまり、仮死状態で保存されとるらしい深見素赤の身体を要求。国家調査室の責任者まで同席しとって、面倒なハナシになってきとる。それにしても、誘拐されたうち等の飼い主であるさっちんは無事やろか……？

「こんなバカげた話があってたまるかッ！　引きこもりのハッカーごときに政府の直轄機関が脅迫されるなど……宇野課長ッ、この件に関する一切の情報が外部に漏れぬよう、周知徹底を図ってくださいッ！」
　国家調査室の杜若室長が声を荒げる。
「ご心配なく。ファイアーウォールは正常ですし、ハッキングがあれば禁魚共がいち早く察知するでしょう」
　課長が冷静な口調で返答した。
「課長……管理局側はどう動くつもりでしょうか？」
　ついさっきまで着ていた派手な魔女っ娘衣装を脱ぎ、いつものスーツに着替え終わったエージェント・津軽が神妙な顔つきで課長の傍らに立つ。
「イカレたハッカー達のハッキングや姑息な脅迫はいつもの事だが、

今回はレベルが違う……ついに『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』の生みの親が登場だ。当然、脅迫に応えるつもりも交渉の余地も無い。早急に居所を突き止め、逮捕するまでだ」
「しかし、そのためには……」
「そう、手掛かりが必要だ。脅迫の電話はスクランブルがかかっていて、逆探知による居所の絞り込みは不可能だった。なんとかネット回線でこちらにつないでくれれば、禁魚共が泳いでいき確実に根城を割り出す」
「それにしても、本当に管理局は深見素赤の身体を保管しているのでしょうか？　いくらオリジナルＰ・Ｄ・Ｓを開発した本人のモノとはいえ、仮死状態にした民間人の身体を保管するという事は、機密保持のため本人に関する社会的情報や戸籍データを改ざん、あるいは偽の情報を造り上げて生きているように見せなければなりませんわ。政府の直轄機関が一個人に施す域を逸脱してますわよ」
「インフラへのサイバー攻撃を臭わせる陽動までネットに流していた以上、先方は遊びではない。本気の要求だ。あまり考えたくはないが……管理局と享輪コーポレーションとの間に何かしらの秘密協定が結ばれていたか、あるいは深見個人と……」
「一応、局長に問い合わせた方が宜しいのでは？　今後の管理局の出方次第でわたくし達の対応も変わりますわよ」
「……そうだな。では――」
と、宇野課長がケータイを取り出し、コールしようとしたその時、検査棟の全ての端末が何かを受信してモニターにソレを映し出した。
「――――ッ、杜若室長！　見てください！」
宇野が手近のモニターを凝視しながら声を上げる。
「何だねッ？　一体、な……に、が……！？」
杜若室長が立ったまま固まった。モニターに映るのは、薄暗い部屋の中で悠然と佇む見知らぬ男と、その側で両手を縛られ、猿轡をかまされて正座させられている６０歳前後くらいの老人だ。
＜やあ、諸君。初めてこの不細工な顔を見せたワケだが……今の気

分はどうだい？　絶好調に浮足立っているかい？＞
　その見知らぬ男はそう言って、テーブルの上の懐中電灯で隣の老人の顔を照らし出した。
「なッ――――、局長ッ！？　そんなバカなッ！？」
　宇野課長の顔色が変わる。
「……なるほど。と、いうことは……オマエが例の『Ｍｒ．キャリコ』というハッカーだな？」
　杜若が威圧するような顔をモニターにグッと近づけた。
＜“ハッカー”？　アハッ♪　そんな陳腐な呼び方はよしてくれ。この場はもっと真に迫った感じで“テロリスト”と呼んでくれ。その方が愉快で気分が良い＞
　彼――Ｍｒ．キャリコは完全に主導権を握った様子で、余裕の笑みを浮かべている。
「では、テロリストのカス野郎に一つ質問だ。その男性をどうやって拉致したかは大体察しがつくが、本物の電薬管理局・局長であると証明できるかね？」
　杜若が目を細めて探りを入れる。
＜アハハハッ♪　簡単なコトさ～～。管理局に電話して直接聞いてみればいい＞
「宇野課長ッ」
「少々お待ちを」
　冷や汗で額を濡らしながら宇野が管理局にコールする。
＜ふむふむ、隅の方に大きな水槽が見えるねえ。やはり、禁魚の手を借りて享輪コーポレーションがおかれている状況を把握したようだね。よし、よ～～し。思ってたより利口で融通がきく。安心した＞
「ああ、そのまましばらく安心していたまえ。発見され、拘束された時の驚愕する顔が拝みたいからね」
　杜若がネクタイを緩めながら挑発する。
＜いやいや、申し訳ないがその望みは叶わないよ。私の仲間が安全なネット環境を確保するため、攻性フィルターを展開しているから

ね。禁魚達が無理に突破しよとすれば、そちらのサーバーがダウンしちゃうよ、アハハ～～ン♪＞

Ｍｒ．キャリコは絶対の自信をもって通信してきたのだろう……余裕の態度を崩す様子は全く無い。

「室長……悲報です。管理局によると、しばらく前から局長との連絡が取れなくなっているとの事です……」

ケータイを手にした宇野が杜若の傍で囁くように言った。

「そんな……！　いや、信じられん……！」

室長の喉がゴクリと鳴った。

＜そうかあ～～、未だに信じられないかあ～～。なら、この加齢臭が気になるオッサンからケータイを取り出して……っと。電源を入れて……さあ、コールしてみたまえ。実動課の責任者なら番号は知っているだろう？＞

Ｍｒ．キャリコは人質のスーツの内ポケットからケータイを取り出し、テーブルの上に置いて悪戯な笑みを浮かべる。

「……ッ」

宇野は不愉快そうに口元を歪めつつ、登録してある局長の番号にコールした。すると――

＜スカート、ひらりひるがえし～～♪　走りたくなる時がある～～♪＞

テーブルの上のケータイから流れる着うた。

「このクソ野郎がッ！！」

激昂した杜若が端末のモニターを両手で挟んで声を荒げた。

＜アハハハッ♪　これはまた。男性機能が裏切りだす年頃でしょうに、イイ趣味をされてますねえ！＞

Ｍｒ．キャリコが手を叩いて爆笑している。

（最悪ですわね……！）

このやり取りを静観していた津軽が戦慄を感じ、両手にジワリと

汗を滲ませる。電薬管理局は国内、及び国外からのサイバーテロやハッキング行為を監視し、違法行為が発見され次第、該当者逮捕のため警察機関へ通報する任を受け持つ。場合によっては、軍部の兵員を動かす権限を行使できるのだ。つまり、ネット社会に正常な秩序を固定する最強の砦……その砦が今まさに揺るがされている。万が一、このライブ映像が外部に流れたら、世界中のハッカーやテロリスト達がこう考える――――“最強の砦が瓦解した。ヤルなら今だ！”――――と。

スッ……

津軽はインカム・βを装着し直して水槽に歩み寄る。

「ピンチをチャンスに変えるには今しかありませんわ。頼みますわよッ」

水槽の前に一列に並んだ禁魚達&糸ミミズのアバター。

「アホの居所を突き止めるンやろ？　任しいや☆」

「ボク等が本当の意味で社会に貢献できるんですね。なんか嬉しいです！」

「上手くいけば、御主人の捕らわれている場所も分かるかもしれんしのう」

「おおォ～～、ついに事件の核心へ突っ込むワケだぞ～～！　ハードルは高い……が、ハードルは高ければ高いほどくぐりやすくなるんだぞッ！」

くぐるんじゃねえよ。

「じゃが、アノ男が言う通り攻性フィルターが展開しているとなると、実動課のサーバーがダウンする可能性は高い。管理局ほどではないにしろ、ココもハッカー共から常に狙われとるハズじゃ。サーバーの再起動時を利用して侵入ルートを特定されかねんぞ」

土佐が津軽を睥睨しつつ言及する。

「構いません。全ての元凶である偽Ｐ・Ｄ・Ｓの『親』が手の届く所に現れた。この機を逃すくらいなら、喜んでトカゲの尻尾となりましょう」

津軽が尋常ならざる執念を垣間見せた。
「勝手に実動課の方針を決めるんじゃない。責任者は私だ」
津軽の肩に宇野の手がポンッと置かれる。
「で……どうしますか？」
郡山が何かを期待するような視線を送った。
「しくじれば実動課は間違いなく責任を問われて閉鎖される……だが、首尾良くＭｒ．キャリコを逮捕できれば、国内に潜む有象無象のハッカー共を一斉検挙できる。一応、聞いておく。成功確率はどのくらいだ？」
「……神のみぞ知る」
土佐が天を仰ぎながらポツリと呟く。
「結構、充分だッ」
宇野の口から発せられるゴー・サイン。水槽の中の禁魚達が勢い良く遊泳しはじめ、糸ミミズも懸命にウネウネしている。
「課長、一つ疑問が残るのですが……何故、敵勢力は弥富殿を拉致したのでしょう？　特に取り引きの要求はございませんし、彼が何か役立つとも思えませんわ」
さりげなくヒドイ。
「確かに懸念材料ではあるが、このミッションが成功すれば全て片付く。彼の存在は今のところ記憶から消して、目の前の事象に集中しろ」
「了解ですわ」
やっぱりヒドイ。

「――――さて、ネットの世界平和を守る連中へ宣言はした。まずはどう出るかな？」
薄暗い部屋の中でＭｒ．キャリコは両手を組み、肘をテーブルについて横目で捕らわれの無様な局長を睨んだ。
「んぐぅぅぅ――――！　むぐッ、むぐぅぅぅ――――！」

猿轡をされたままで何を言っているかは分からないが、局長は御怒りのようすで油っこい顔面を真っ赤にしている。
「はいはい、負けた負けたッ！　降参しま～～す！」
部屋の隅に立つ浜松が、両手をブラブラさせながらＭｒ．キャリコの方に歩み寄ってきた。
「……降参？　何がだい？」
「保管されているあたしの身体（バックアップ）が欲しいんでしょ？　ここまで本気見せられたら、こっちも応えないとね」
そう言って、床に座らされている局長を見下ろした。

ドキドキ♪　ＤＴ弥富の同棲生活（初日・夕方だよう）

おい～～っス。自他共に認める国際的アイドル・ポチだぞォ～～♪　見た目は子供、頭脳は大人に成り損ねの糸ミミズなのだァ～～！　フリル付きのワンピースに麦藁帽子、手には時々大きなハサミとか装備してる。三白眼がとってもキュートだって近所のガキ共が空き缶を投げつけながら噂する、そんな今日この頃――ポチ達の飼い主である弥富更紗がダイナミックに拉致されちまって行方不明。マスコミの攻撃に怯える不様な大人達と協力し、事の元凶である『Ｍｒ．キャリコ』ってヤツをとっつかまえるのに奔走中ッ！　首尾良く拘束できたあかつきには、ラフレシアの花の隣でカレーを食わせるという拷問を執行予定だぞッ。で、更紗の居所をついでにサクッと吐かせちゃうんだぞォ～～！　……にしても、拉致った張本人はカナリの危険人物と聞いてる……もしやッ、ニート野郎・２５歳の貞操の危機が迫っているのでは――――！？

（マジかよ……俺、人生初の貞操の危機にさらされてないか……？）

弥富更紗が引きつった表情で固まっている。夕暮れ時――真夏の太陽はまだ元気なため、外は充分明るい。近所からはプールや海から帰ってきた子供達の喧騒が聞こえ、出迎える両親等の朗らかな声も。で、俺は――

カポ～～～～ン♪

――――湯船に浸かっていた。そう、ここは風呂場である。入浴中なのである。この家の長女であるヤンデレコメット――『長洲しるく』の命令。「うわッ、汗臭ッ！　風呂入りなさいよ、風呂ッ！」……いや、部屋のエアコンが壊れてたのは俺のせいじゃねえし。ま

あ、人質ではあるが、人並みの自由を与えてくれたコトには感謝している。ただ、差し迫った問題がある。それは――

「……あのさあ、どういうつもりか……な？」

湯船の中で両脚を折り曲げて浸かっている俺は、横目でその相手に問いかけてみた。

「どうもこうも、“監視”よ。忘れたの？　アンタは大事な捕虜。ここは外から鍵がかけられないから、こうやって直に見張ってるワケ」

洗い場に立って事も無しげに言う長洲しるく。しかも、学校指定の紺色のスク水を着用……事情を知らない人間から見れば、完全にイメクラの営業時間中だ。

「さ、左様で……」

言い返せない。一応、人様の家で入浴させてもらってる身。文句はよそう。そして、なるべく彼女を視界に入れないようにしよう。ＪＫのリアルなスク水姿は、免疫の欠片も無い弥富にとっては壊滅的パワーを持つ。ヘタをすれば、下半身が制御不能になりかねない。鎮まれッ、俺の余計な血液！　鎮まれッ、俺の海綿体！

「あ、あの～～……湯船から出て頭を洗いたいんだが」

「ん？　ええ、いいわよ」

そう言ってシャワーチェアーを差し出してきた。

「……い、いや……そうじゃなくて、湯船から出たいから出て行って欲しいんだが」

弥富、彼女の顔をどうしても直視できない。

「何でよ？」

「……おい」

「はいはい、タオル使えばいいでしょうが」

そう言われて手渡される一枚の白いタオル。

（ちっくしょう～～……最近のＪＫってこうなの！？　これが平均値なの！？　実家の父と母よ……俺、金も度胸も無いから風俗は一度も行ったことないけど、本日、ヤバイ病気をもらっちゃいそうで

す）

「ケンコウホケンカニュウシトケヨ、ドウテイヤロウ」

耳元で実家のオウムが囁いてくる。

サパッ——

弥富は湯船の中でタオルをしっかりと装備し、なるべく長洲の方に前面を向けないようにして立ち上がる。

「あのさぁ……せめて後ろを向いておくっていう心配りは無いワケ？」

「うん、無いワケ★」

ちょっぴり楽しそうに返答されちゃった。

シャアアアアァァァァァァ——

シャワーから勢いよくお湯を出し、弥富は自分の頭を濡らした。

（俺が誘拐されてもう半日経つワケだが………津軽さん、本当に助けてくれるんだろうか？）

彼はシャンプーで頭皮をガシガシやりながら考える。一応、人並みの生活は許可されたみたいだが、このままこの家にいれば、いずれは『Ｍｒ．アルビノ』っていう不審者が迎えに来てしまう。そうなったら、俺が実動課に救出される可能性は更に低くなってしまうだろう。今、この時……俺が外部に何かしらの信号を送って、津軽さんを導かねばならないのでは？

ジャバジャバッ！　ジャバジャバッ！

シャンプーを洗い落とし、次はコンディショナーでガシガシ。

「ところで、さっきのハナシなんだけどさぁ……」

「ハナシ？」

背後から長洲が神妙な口調で呼びかけてきた。

「お金の件」

「はい、却下」

弥富、即答。斬り捨て御免だ。

「ちょ、ちょっと！　少しは聞いてくれてもいいじゃん！」

「あのなあ……俺、ニート。職無し、友無し、実家からの兵糧も先

月から断たれた甲斐性無し。そんなヤツに金銭をせがむんじゃねえよ」
バシャバシャッ！　バシャバシャッ！
毅然とした物言いで断りながら、コンディショナーを洗い落とす。
「ふっふ～～ん♪　アタシ知ってんだからねッ☆」
「……何を？」
不吉な予感がする。根拠は特に無いが、弥富の役に立ったためしのない第六感がそう告げている。
「『友人』はいなくても、少し変わった『知り合い』が数人いるハズでしょ？」
「……（汗）」
長洲のその言葉によって、弥富の脳内に出現してしまう黒いスーツ姿の珍人物共――そう、『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』の連中だ。
「少しずつでいいからさぁ～～、人生に当惑する可憐な女子高生に寄付してくんないかなぁ～～♪」
むにッ★
（――――――おふッ！？）
弥富の背中に不意に押しあてられる二つの膨らみ。人生初の感触ではあったが、背中に軽くのしかかってくる長洲の体勢から、感触の対象はすぐに理解できた。こりゃ～～イカン！　実にけしからんよォ～～！　じ、実に……じ……。弥富の脳内が瞬時にしてホワイト・アウトする。
「ねえ、聞こえてる？」
「……ッ、フヒヒｗｗｗ……じゃなくて、ああ……聞こえてる」
危うく何か得体のしれないモノに引きずり込まれる寸前だった。ネットのネタとしては当たり前に目にしていたが、ＪＫの攻撃力……恐るべしッ！　甘えた声で肉体を武器にしてくるＪＫのパワーは、ナウ〇カの巨神兵にも匹敵する。

女神Ａ：「コイツ、腐ってやがる。早すぎたんだ……」

案の定、いつもの幻聴がしているし。

「イイ歳した成人男性やらオバサンが集まって、働きもせずに偽Ｐ・Ｄ・Ｓで一日中グダグダやってんでしょ？　しかも、実家で。ということは、家はちょっとした金持ちで金銭的に余裕がある可能性が高い。そう思うワ・ケ・よ♪」

「ま、まあ、そうかもしれんが。俺はつい先日連中とは知り合ったばかりだし、それに、向こうから一方的に接触してきただけで、連中の人となりを知ってるワケじゃないし」

ペチャ、ペチャ――

（うおおおおおおォォォォォォ～～！　背中を手がッ、ボディソープでヌルヌルになった手が這っとるぅぅぅぅぅ――――！）

ヤバイ！　完全になんちゃってソープだ。しかも、気持ちイイ……否、良過ぎるッ★

「でも、向こうはアンタに友好的なんでしょ？　なら、ちょっと頼んでみてよ。どうせ親の金をムダに浪費するくらいなら、もっと人のためになる使い道をアタシが教えてあ・げ・る♪」

ヌルヌルッ～～、ヌチャヌチャ――

背中から脇腹を滑りながら通過し、今度は胸元をまさぐるように手が這う。コイツ、上級者だ。

「ちょ、ちょ、ちょ、もういいって！　自分でやるからッ！」

湯の熱以外ですっかり顔が真っ赤になった弥富が、シャワーチェアーから思わず立ち上がろうとしたが――

（あ……しまった）

断念。ここでクイズの時間。正解された方にはハワイ・サイパン７日間の旅をプレゼント。

【問題】＝弥富はどうして立ち上がれなくなったのでしょうか？

それでは皆さん、お答えください。

女神Ａ：「はいッ」

それでは、今日も満面の笑顔で他人の人生に余計な味付けをする女神さん、正解をどうぞ。
女神Ａ：「立ち上がろうとしたが、別のモノが先に勃っていたから★」
正解ッ。
「そもそも、そんなに金の無心なんかしてどうすんだよ？　これだけ立派な一軒家に住んでるなら、多少の蓄えがあるだろ？」
「無理。両親の口座はダレかに凍結されてて使い物にならないの。だから、お金はアタシの裏仕事での稼ぎ次第。確かに仕事一件分の稼ぎは大きいけど……それでも足りないのよ」
長洲の声のトーンが微妙に落ちた。その様子に、弥富は自然と彼女の機微を読みとった。
「……要するに、手術にかかる金か？」
「……そうよ。アタシにはもう朱文しか家族はいない。だから、せめて……アノ子に不自由をさせたくはないのッ」
弥富に人の言葉の真偽を精査する才能など無い。だが、今の彼女が口にする言葉に嘘は無い……そう思いたい。だから――
「はいはい、分かったよ。一応、コンタクトをとってやる。けど、あんまり期待はすんなよ。イカレた連中という点ではオマエの雇い主と変わらないからな」
「ん……ありがと、ね」
長洲は急にしおらしくなり、弥富の背中に頬をあてて静かに呟いた。
「え～～っとだなぁ……まずは俺のケータイと、連中からもらった冊子が必要なんだが、どっちもアパートに置いたっきりだな。朝一でオマエに拉致られたから」
「じゃあ、後でアタシが取りに行く。その間、朱文と遊んであげてて」
「ああ、引き受けたよ。ここ数日で他人の面倒見るのに慣れたしな」
空気が――――――変わった。

――――――よ～～く考えて選んだモノならぁ、たとえ予定外の結末に至ったとしてもぉ、悔いは無いと思いますぅ――――――

弥富の脳裏に、以前、アンジェリーナから言われた言葉が浮かび上がってきた。

（そうだよな。俺は善い事をしている……間違ってないよな）

自分から望んだ現状ではなかったが、結果として俺は人とのコミュニケーションってヤツに触れられた。イイ歳したバカな大人が少し成長したような感じがした。

女神Ａ：「ええぇぇぇ～～！　飛行機はエコノミーなのぉぉぉ～～！　機内食マズそうでヤダぁぁぁ～～！」

電波に乗ってやって来る幻聴はいつも通りだが……。

１００の努力をしたけれど、１の僥倖に負けたよう

皆様、おはようございます。昨今の日常を非日常に変えている禁魚の一匹、郡山です。リクルートスーツが良く似合う好青年、和金のオスです。ここ最近思うのですが、ボクは最初の方から出演しているのに、何故か出番が極端に少なくてキャラが薄いような気がしてならないんです。これは単なる思いすごしでしょうか？　それとも、作者の綿密なる意図でしょうか？　“存在感が無い”っていうのは特徴になるのでしょうか……ボク……鬱が……って、今はそんな事を云々している場合じゃありませんッ！　ついに一連の事件の首謀者である『Ｍｒ．キャリコ』が姿を現し、実動課に直接回線をつないで接触してきたのです。今まで電薬管理局の捜査網をすり抜けてきたＭｒ．キャリコ……非常に用心深く、したたかな敵ではありますが、今回はまさに千載一遇のチャンスです。ボク達は懸命にネットの海を泳ぎ、回線という釣り糸をたぐって、その先に展開されているであろう強固で危険な攻性フィルターを――――――――あれ？

「発信元を特定ッ！　ＩＰアドレスを検索中ッ！」

作戦開始から５分――検査棟の分析官が端末を操作しながら声を上げた。

「……何？」

宇野課長の口からマヌケで拍子抜けな声が漏れる。最悪のパターンとして、実動課のメインサーバーがダウンし、世界中からのハッキングを防衛しているファイアウォールが無効になるのを恐れていたのだが、突破した？　こうも容易く？

「こちらのシステムに何か異常は生じているか？」

「いえ、正常です。全ての機能、オールグリーンです」

「妙ですわね……」

分析官が操作する端末のモニターをのぞきながら、津軽が訝る。彼女は水槽の方に一瞥をくれるが、禁魚や糸ミミズにも変異は見られない。優雅に泳いでいるだけだ。
「ＩＰアドレス判明ッ、住所は……ッ！？」
「どうした？」
不動産リストとの照合を終えた分析官の手がキーボードの上でピタリと止まり、一瞬、息を呑んだ。
「この住所は……バカなッ、弥富更紗のアパートです！！」
「――――――なッ！？」
フロアに緊張がはしる。課長が杜若室長と目を合わせた。
「こちら国家調査室長・杜若。緊急出動を要請。屋内制圧部隊一個小隊を編成した後、これから送信する情報を元に作戦を開始せよッ！　これは訓練ではないッ、繰り返す……これは訓練ではないッ！」
ケータイで軍部に連絡しながら端末を操作する。ついに――――始まった。
「課長、わたくし――――」
「みなまで言うな。行ってこい」
「――――承知！」
エージェント・津軽は水槽から糸ミミズをすくい出し、ビニールの袋に入れる。そして、自分のクラッチバッグをつかみ取り、彼女はポニーテールの黒髪を翻して走り抜けていった。

「急にどうしたんだね？　素直に君の肉体（バックアップ）を引き渡してくれるのはいいが、どういう心境の変化だい？」
実動課への宣戦布告を済ませたＭｒ．キャリコが訝りながら問う。
「このオッサンの身に何かあったら、あたしのバックアップもただじゃ済まないってコト」
バニーガールのコスプレした浜松のアバターが、床に座らされている局長のハゲ散らかった頭を指差している。

「んんッ――――！！　んんッ、ん――ッ、ん――――ッ！！」
顔面を脂汗でテカテカにさせながら、猿轡を噛まされたままの局長が何かを訴えかけている。
「はいはい、今外してあげますから。あまり激昂すると脳血管がブチ切れますよ。アハハッ♪」
そう言って苦笑するＭｒ．キャリコが局長の猿轡を外してやった。
「深見ッ！　貴様ァァァァ……よくも裏切ってくれたなッ！」
開口一番、浜松にかみついてきた。
「裏切るぅ？　あたしは単に“実地訓練”をしてるだけ。契約は守るっての」
「黙れッ！　勝手に禁魚の中に逃げ込みおって……享輪コーポレーションから突然姿を消したと聞かされ、私は今日までストレスで押し潰されそうになっていたッ！」
「へえへえ、イラついてるねえ。デリヘルでも呼んで溜まったストレスをヌイてもらえばぁ？」
浜松はまともに耳を貸そうとはしない。
「ちょいちょいちょい、ちょっと待ってくれ。そちらサイドで勝手にハナシを進められては困る。まずは……そう、“契約”とは何の事だい？」
Ｍｒ．キャリコが浜松と視線を合わせて質問した。
「局長、しゃべっちゃってもイイよね？」
「フザケるなッ！　断じてならんッ！　契約内容を忘れたのかッ！？」
＜うるさい高齢者だクマ～～。拙者も浜松のハナシに興味津津だから、再度口を塞いでもらうんだベア～～＞
プー左衛門がモニターの中でプラカードを掲げてて、「ヤっちまいな★」って書かれているし。
「仕方ありませんね。では、もうしばらく御静かに――」
そう言いながらＭｒ．キャリコは猿轡を手にして歩み寄ったが、局長は彼をキッと睨みつけて……

「待てッ……よし、分かった。どうせこの裏切り者が話してしまうのなら、私から話そう。あること無いこと誇張されてはたまらんからな」
「アハッ♪　さすがは全ハッカーの宿敵・電薬管理局長。潔し」
Ｍｒ．キャリコは納得した様子で椅子に座り直し、テーブルの上に両肘をついて両手を組んだ。
「数年前……管理局は動物の脳髄を使った有機コンピューターの開発に着手していた。世界規模で発生するサイバーテロや、有象無象のハッカー共によるハッキングへの完璧な対抗手段としてだ。ソフトメーカーや警察機関が新しい防衛システムを開発すれば、ハッカーはそれを突破するウイルスやスパイウェアをすぐに造り出す。システムの強化と更新はハッカー共を刺激し、すぐに新しい突破手段が開発される。まさに堂々巡り……だから、次世代のシステムが必要だった。レジストリを決して解析されず、不正な侵入を感知すれば相手のネット環境を著しく破壊できるシステムがな」
「ま、いくつかのウワサは耳にしてましたが、局長御自身から聞かされると重みが違いますね。それにしても……どうして動物の脳髄を？」
「もちろん、人間の脳髄を使用する案が先に挙げられた。だが、シミュレーションの結果……システムの中枢を担う役目には適さないと判断された。人類の脳みそは複雑に進化し過ぎたせいで、多様な感情がどうしても制御しきれずエラーの発生が止まらなかった」
「『シミュレーション』？　局長、もしかして……アハハ～～ン♪」
Ｍｒ．キャリコが嬉しそうに微笑んだ。
「ああ、そうだ。ネット住人が大好きな“都市伝説”だよ……。＜電薬管理局は人体実験を経て、特殊なスパコンを設計・開発している＞……身勝手な大衆の妄想がネットに氾濫した時、私はゾッとした」
＜ニート万歳ィィィ～～、ヒッキー万歳ィィィ～～、妄想の力が情報機関に目潰しをくれてやったクマ～～♪＞

プー左衛門がクルクル回りながら喜んでる。
「話の流れは大体把握できましたよ。確か……禁魚とP・D・Sをネット上でリンクさせた際、禁魚は『生きたファイアウォール』になる。つまり、次世代の有機コンピューターという攻撃手段を開発した結果、それに適応できる防衛機能も必要となった。“攻撃と防御”――その二つがそろってはじめて大局を制御できる存在となる」
「……そうだ。そして、“防御”を受け持つのが深見の役目だった。オリジナルP・D・Sを共同開発した過程で、我々は生命のデジタル化も実現にこぎつけた。これにより、管理局は不動の正義をネットの世界に固定できるハズだった。海賊ソフトの摘発、マルウェアの排除、敵性情報の追尾……全てが思うがままになるッ！……ハズだった。だが、この女は姿を消した。自分の身体を管理局に冷凍保存させたままなッ！」
腸が煮え繰り返るような表情で、局長はバニーガール・浜松を睥睨する。
（やれやれ、まるで親子ゲンカだね）
少々呆れた感じで軽く溜息をつき、Mr．キャリコが浜松の泳ぐ水槽に近づこうとしたその時――

――キンッ！

「……ん？」
金属同士が高速でぶつかったような乾いた音がした。玄関の方からだ。Mr．キャリコと局長が同時に玄関戸に視線を向ける。小さな玄関戸がゆっくりと……非常にゆっくりと内側へ開いていく。同時に、真夏の西日が薄暗い部屋の中にユラリと差し込み、西日が戸の一部を照らし出した。
（鍵が……斬られた――――ッ！？）
Mr．キャリコが息を呑んだその直後――

ボコオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォ――――――――――――ッッッ！！

「――――――――ッ！？」

自動車の衝突事故みたいな轟音とともに、部屋の壁の一部が派手に爆裂し吹き飛んだ。そして、ポッカリと開いてしまった壁の大穴から、数人の武装隊員が突入してきた。

「端末から離れろッ！　我々は軍部の者だッ、国家調査室長の命令によりオマエを拘束するッ！」

隊員の一人がマシンピストルの銃口を向けながら警告する。

「えッ……あぁ……そ、そんな……どうして……？」

Ｍｒ．キャリコは魂をブチ抜かれたみたいに茫然自失。ゆっくりと床の上に両膝をつき、目の前の光景を凝視している。

「とうとうこの瞬間を迎えましたわ。裁きの時ですわよ」

カッカッカッ――

ヒールの足音。全開した玄関戸のすぐ側に、黒のフォーマルスーツを纏った女が一人……毅然として立っていた。その手には手斧が握られ、ギラギラと西日を反射させていた。

「おお……！　君は確か、実動課の……」

ずっと床に座らされていた局長が、安堵の表情でゆっくりと立ち上がる。

「御待たせ致しました、局長。もう安心ですわ」

電薬管理局・実動課エージェント――津軽六鱗がその勇姿を現し、ついに事件の発端となった張本人を逮捕。あらゆるネット犯罪の発信源となった部屋が制圧された。

ラスボスより強いザコがいるのがＲＰＧの定石だよう

ふむ、こんにちは。土佐じゃよ。禁魚として１５年も生きとる琉金のオスじゃ。人間で言えばヨボヨボの老人。実際、アバターの外見は……電車の駅近辺で段ボールハウスを建設して住んどる輩にそっくり。冬でも日焼けしとって、白いヒゲが伸び放題で、腰は曲がって見事な猫背。近所でアルミ缶や空のペットボトルを大量に回収し、錆びついた自転車に乗せてウロウロしとっても違和感が無いレベルじゃよ。じゃがなッ、儂はこれでも禁魚達の中で一番の博学での、ネットの海から得られた情報の記憶はもちろん、情報の断片から鋭い洞察力で物事の水面下を見抜く技にも長けとるんじゃ！　ぬッ、信じておらんなッ……いくら儂が郡山と同様に影が薄いというても、キャラ立ちの努力は怠らんのじゃから――――ん？　儂……何の話をするつもりだったんじゃろ？　あ、ああ～～……そうじゃった！

ついに、儂等は敵の親玉である『Ｍｒ．キャリコ』の追跡に成功したんじゃ！　ただ、よく分からんのは……Ｍｒ．キャリコが言っとった攻性フィルターが展開されておらんかったのじゃよ。じゃから儂等は容易に侵入できて、相手のＩＰアドレスから位置を特定できたんじゃが、なんか妙じゃのう。

「それにしても……まさか、弥富殿の部屋のすぐ隣に潜んでいたとは。灯台下暗しとはまさにこのコトですわね」

玄関の土間で背中に夕日を浴びながら、実動課エージェント・津軽六鱗が腕組みして呟いた。

「……えぇぇぇ？　は、あ……あれぇぇぇ……？（汗）」

一人暮らし専用の非常に狭いアパートの一室では、現在、数人の武装隊員と実動課から派遣された分析官が現場を調査中。壁に大穴を開けた際にできた瓦礫を無造作に踏みしめながら、皆が忙しそう

に歩き回っている。そんな中で床の上にヘタリこみ、何を見ていればいいのか分からないような目をした青年が一人……。その手には既に手錠がかけられ、武装隊員がすぐ側に立って見張っている。
（不様なモノですわ。天才と狂人は紙一重と申しますが……核心に位置する人間程、意外と脆い）
津軽が冷たい眼差しでその青年――Ｍｒ．キャリコを見つめる。見た目にはドコにでもいそうな男性だ。特に際立って何かとんでもない事を成し遂げようとしている人間には……見えない。実動課は、電薬管理局は、こんな男一人に今まで煩わされていたのか？
カッカッカッ――
津軽は自分のバッグに手斧を仕舞い、ヒールを履いたままでフローリングの床に踏み込む。彼女は片手に提げていたビニールの袋（糸ミミズ入りの）にインカム・αを取り付け、自分にインカム・βを装着。
「ダイナミック・逮捕に成功したぞォォォ～～！　本日の一連の流れはまさに手にアレ握る……じゃなくて、手に汗握る展開だったぞォォォ～～！」
大興奮しているポチが出現したんだが、何故か……車イスに座っている。で、浜松が泳いでいる小さな水槽に目をやった。
「おおッ、我が友にして主食ッ！　よくぞここまでぇぇぇぇぇ～～！」
とっても歓迎ムードな笑顔の浜松が出現したんだが、何故か……名作アニメで見かけそうな粗末な服姿。そして、始まる――
「ポチいいいいいいいい！」
「浜松うううううううう！」

――――――　ク○ラが立った☆　ク○ラが立った☆　――――――
――――――　←　――――――
――――――　ク○ラが歩いた♪　ク○ラが歩いた♪　――――――

←

――――ク○ラが走った！？　ク○ラが走った！？

←

――クロスカウンター！！――

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ――――――――――――ッッッン！！

ついさっきまで抱き合うような雰囲気だったのに、出会いがしらに強烈なパンチ。お互いの頬にお互いの拳がメリ込んで、ものすごく険しい表情で立ち尽くしてやがる。

「や、やるじゃない……いつの間にこれほどまで腕を上げ……けふッ！」

「そ、それはこっちのセリフだぞ～～……さすがは汚れたヒロイン……がはッ！」

浜松とポチはわざとらしく吐血し、この勝負――引き分け。

「では、深見素赤。この場で簡単な事情聴取をさせていただきますわよ」

津軽、二人のショートコントをものすごい勢いで無視。

「うっわぁぁぁ～～、空気読めよォォォ～～！　のっかってこいよォォォ～～！」

「さあ、羞恥心をサクッとかなぐり捨てるんだぞ～～！　レッツ・黒歴史の序曲！」

浜松とポチがそろってオモシロ顔で誘ってくるが、津軽、一般人がドン引きするくらいの無視っぷり。

「どうしてなのさッ！？　いくら禁魚でも、あの攻性フィルターを突破できるワケが……ねえ、プー左衛門……答えてよッ！　ねえッ！」

自分の置かれている状況が未だにハッキリと把握できないのか、Ｍｒ．キャリコは床に尻もちをついたまま声を荒げている。
「御静かに。アナタの聴取は実動課へ連行した後、ゆっくりとさせていただきます。壁の修理費用と床のクリーニング代は、アナタの口座を凍結した上でこちらで引き落とさせていただきますので、あしからず」
津軽の攻撃的な瞳が敗残者を見据える。
「ハナシが違うじゃないか……君はいつだって完璧に、そう、いつだって上手くやってくれてたのに……どうしてッ！？　私の言葉が聞こえないのかいッ！？」
津軽の存在を無視し、Ｍｒ．キャリコはテーブルの上のノートＰＣに向かってひたすら呼びかけている。だが、モニターに映る可愛いクマのヌイグルミはピクリとも動かず、一言も喋らず、ただのヌイグルミとして佇んでいるだけ。
「フザケるのはやめてくださいまし。それとも、心神喪失を演じて裁判に備えているおつもり？」
生憎、実動課の者達が得てきた情報はＭｒ．キャリコに関するモノのみ。彼にどんな人脈があって、何者かと共謀していたかどうかは分かっていない。だから、現状の津軽達や武装隊員等には、プー左衛門や裏のスポンサー達の情報は無い。Ｍｒ．キャリコが見えない何かに懸命に話しかけている――そんな痛々しい光景にしか見えないのだ。
「エージェント・津軽、私は今からデスクトップのＨＤを検査棟に持ち帰って調査に入りますが、一緒に戻りますか？」
「いいえ。わたくしはもうしばらく現場検証を行いますわ。弥富殿の救出に役立つ手掛かりがあるかもしれませんし」
分析官に促された津軽だったが、弥富の拉致を許してしまった責任は健在する。一連の事件の司令塔が指示を出していた場所だ。必ず有力な手掛かりが落ちているハズ。と、考えた津軽が最初に視界にとらえたのは――――ノートＰＣ。特に変わった周辺機器は付い

ていない。相手の姿を見ながら会話ができるよう、カメラと専用のスピーカーが取り付けられているだけだ。モニターの中では、木製の小さなデッキチェアに座ったクマのヌイグルミが一つ。Ｍｒ．キャリコは必死になって話しかけていたが、当然、こんなモノが――

＜くぅぅぅぅぅ～～～～～～マッマッマッマッマッマッマッマッマッマッマッ！！＞

――しゃべった！？

「――――ッ、何ですの！？」

ノートのキーボードに手を伸ばそうとした津軽が、ビクリと身体をうねらせて硬直する。急に大音量でクマのヌイグルミが笑い出したものだから、周りで作業をしている武装隊員達も何事かと振り向く。

＜んんん～～～～～～～～ミュージックぅぅぅぅぅ、スタートぉぉぉぉぉぉ！！＞

――――ぼくのおしりにプーさん♪　ムーニーマンのプーさん♪――――

――――世界で一番好きなんだ～～♪　だけどやっぱりママが好き♪――――

――――はっかせるおムツ♪　ムー・ニー・マン♪――――

軽快な音楽にノってクマのヌイグルミが跳んだり回ったり、ムーンウォークをきめてダンシング。

「……はい？」

津軽はどう対応すればいいのか分からず目が点だ。

「おおッ、プー左衛門！　一体、どうしたっていうんだよッ！？私はこんな形で終わるワケには――」

＜じゃかあしいィィィィ～～！　ヘタレの引きこもりは黙ってるんだクマ～～！＞
「なッ、プー左衛門……！？」
クマのヌイグルミは仲間だったハズのＭｒ．キャリコを切り捨てた。
「何者ですの？」
津軽の危険を察知する本能が働き、モニターの不審なクマを睨みつける。
＜はっじめましぃぃいてぇぇぇ☆　拙者の名はプー左衛門。片手にハチミツがタップリの壺（備前焼）を持ち、上着は着ているのに下半身は裸というルックスの変態だべア♪　若い女性からは“プーちゃん”って呼んでもらいたいクマ～～★＞
ものすごく陽気な口調で自己紹介してきた。
「わたくし、電薬管理局・実動課のエージェント・津軽と申しますわ。趣味はアナタ方のような小悪党を捕らえ、完膚なきまでにその腐った性根を滅却する事。後は、街角で発見した可愛い少年を追跡し、その生態状況を観察して癒されるコトですわ」
ものすごく冷静な口調で己の性癖を紹介しちゃう始末。
「プー左衛門……私を裏切ったのかい？　ア……ハハハッ……そんな事はないよね？　今まで一緒に協力して目的をはたして――」
＜協力ぅ？　くぅ～～マッマッマッｗｗｗ。一介のスクリプトキディに過ぎなかったオマエが、『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』で荒稼ぎできたのはダレのおかげクマ？　調子にのって“生命のデジタル化”に手を出そうなんて、寝言は職安行ってから言うんだべア～～！＞
「そ、そんな……！」
悪党共の仲間割れは実に醜いが、一方的に利用されてトカゲの尻尾にされたＭｒ．キャリコの姿は、見るに堪えない不様なモノだった。
「ところでさぁ、アンタは“何が”したいワケ？」
カウンターパンチを食らって口から流血したままの浜松が、ゆっ

くりと近づいてきてプー左衛門に問いかける。
＜ん〜〜〜……“何がしたい”というより、“何ができる”のかを教えてやった方が分かりやすいクマね★＞
「どういう意味ですの？」
と、津軽が目を細めた瞬間——

ドオオオオオオォォォォォォォォォォォォ————————
——ッッッン！！

「————ッ、何事！？」
アパートの外から大きな衝突音が聞こえてきて、津軽と武装隊員達が一斉に部屋の外へ走り出す。
（これは……！？）
アパートのすぐ近くの十字交差点で、普通乗用車とトラックが衝突事故を起こして大破している。そして、津軽だけが即座に気づいた……交差点の信号機が全て青になっている状況に。
＜くぅぅぅぅぅぅ〜〜〜〜〜〜マッマッマッマッマッマッマッマッマッマッ！！＞
訪れる夕闇の帳にプー左衛門の笑い声が木霊した。

ドキドキ♪　DT弥富の同棲生活（初日・夜だよう）

ひゃっはあァァァァ〜〜！！　浜松、見☆参！！　みんな大好き、黒出目金のメスなのよ。常に優雅且つ頼りなく泳ぐその姿は、全国の引きこもりとニート共を魅了して……ああッ、魅了して〜〜♪　しかし、その実態は――なんと、人間の女性だったりするのだあああああッッッ！　深見素赤（年齢詐称疑惑有り）があたしの本性。かつて、大手ソフトメーカー・『享輪コーポレーション』に勤め、『オリジナルP・D・S』を開発したんだけど、色々あって知り合った弥富（バカニート）がギャーになったり、陰で小悪党がフヒヒWWWってしてたり、ついさっきはあたしが拉致られた先のアパートの一室が半壊したりして、なんとか事無きを得てみたワケよ。それにしても弥富のヤツは一体、ドコへ……ん？　クンクン……こ、これは……“リア充臭”！？　バカなッ、ヤツに限ってあり得ない！　まさか、ヒロイン交代！？　えッ、ちょ、待ってぇぇぇぇぇ――――！

「おいおい、どうしたんだよ……？」

俺、弥富更紗は現在、偽メイド――長洲しるくの家で軟禁状態にあって、彼女は少し前に俺のアパートからケータイと冊子を原付で取りに行ったのだが、手にはコンビニの弁当と惣菜が沢山詰め込んだ袋を持っていて、注文しておいたのはドコに？　それに、妙に血相変えてて、何かに追われていたみたいに落ち着きが無い面持ちだ。

「ふぅ〜〜……マジでヤバかった。一体、何事よ……」

しるくは玄関の壁にもたれかかり、軽く溜息をついてそう言った。

「で、何があったんだ？」

「アンタのアパートにケータイと冊子を取りに行ったら、近くの交差点で派手な衝突事故が起きて危うく巻き込まれそうになった……

しかも、アパートの方を見たら、大勢の軍人がアパートの一室から駆け出してくるし。あれって、アンタの部屋の隣だったよ」
「軍人？　それって……俺が誘拐されたのと関係があるのか……？」
「かもね。そういえば……軍人に混じって、この前アキバの街で一戦交えたオバサンもいたし」
「――――ッ、津軽さんが！？」
「一応、見捨てられてはいなかったみたいね」
そう言って、しるくは弥富に見えないように苦笑すると、キッチンの方に行って両手に持ってた大きな袋をテーブルに置いた。
「で、コイツは何だ？」
「何って……夕飯よ」
彼女はさも当たり前のように言う。豚カツ弁当、上海焼きソバ、エビのグラタン、酢豚、筑前煮、コーンサラダ、ビーフカレー……まさに、ザ・コンビニメニューだ。
「ベタな食生活だなぁ」
「外食依存症のニートに言われたくないわね」
「ま、確かにな。じゃ、明日の朝は俺が簡単な朝食を用意してやるよ」
「えッ――――できるの！？」
「うわァ～～、失敬な顔しやがんなあ。外食に頼る前はしっかり自炊してたの。節約のためにな」
「ふぅ～～ん……ま、期待はしないけどヨロシク。けどさあ、炊飯器とかって使い方分かるワケ？」
しるくは真面目な顔して聞いてくる。
「……おい。まさか、米の炊き方からして知らないってハナシか？」
「うん、知らな～～い♪」
あさっての方向にめがけて笑顔。いいか、よく聞け女子高生。料理が一通りこなせるってアピールは男に媚びるためではなく、生活力を磨くために必要なのだよ。

――ってなワケで、二階から朱文を呼んで三人で夕食。
「いただきま～～ッす！」
嬉しそうに手を合わせるしるく。彼女の前に並んだ食事の量は、明らかに一般の年頃女子高生が摂取する量を超越していた。
「なあ、君のオ姉チャン……ものすごいカロリーを前にして怯む様子もないんだが、アレって日常なのか？」
買ってきた大量のコンビニ食料。その約7割がしるくの手によって開封されていく。
「うん、いつもです。オ姉チャンは“燃費の悪い体”だから仕方がないって言ってます」
俺の隣に座ったしるくの弟――長洲朱文が小さな声でそう言った。
「う～～ん☆　やっぱセブ○イレブンの上海焼きソバは最高ぉ♪」
この上なく幸せそうな食いっぷり。オマエはイトー○ーカドーの回し者か？
「タダ飯にありつける俺が言う事じゃないんだが……オマエ、食い過ぎじゃねえの？」
「いいのッ。アタシは部活でストレス発散して、エネルギーも存分に消費するから！　それに、仕事で使う腕力（ぶき）の調子を常にベストに保つために、脳ミソがカロリーを欲してるのッ！」
なるほど。この量が日常化すれば、確実に人体は肥満へ一直線。が、しるくの体型はバスルームで見た通りのスレンダー。多少、四肢にゴツイ筋肉がついているくらいで、デブる兆候は見て取れない。要するに、弟の言う通り“燃費の悪い体”なのだろう。
ピッ――
朱文が何気なくテレビのリモコンを手に取って電源を入れる。目は見えないが、一日中家の中で生活する身。大体の位置は把握している。
＜速報です。昨今、社会現象にまで発展していた『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』

の問題ですが、つい先程、電薬管理局の記者クラブから発表がありまして、偽Ｐ・Ｄ・Ｓの生みの親と目される容疑者が逮捕されたとの事です＞

――――――――ッ！？

忙しく箸を動かしていたしるくの手が止まり、弥富も思わずテレビのモニターを直視した。

＜現場の映像は未だに入ってきてはおりません。未確認ではありますが、国家調査室と電薬管理局の実動課が合同で実施した作戦であるとの情報もあり、今後、ネット上におけるハッカーやサイバーテロリスト達の動向が警戒されます。繰り返します。本日――＞

――ブゥゥゥゥゥン、――ブゥゥゥゥゥン

テーブルの隅に置いてあったしるくのケータイが振動する。

「……」

しるくはすぐにケータイへ手を伸ばしたが、一瞬、弥富の方に目をやって何かをうかがうように沈黙していた。

「出ろよ」

弥富は何か察した感じでそう言ってやる。

「う、うん……ちょっと失礼」

彼女は弱々しい声で呟き、ケータイを握りしめてリビングの隅っこに歩いて行った。

「あ、あの……ボク……」

ニュースから流れた『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ』という単語に反応する朱文。無理もない……自分の目が見えなくなった原因は、本人もよく知っているのだから。

「もしもし、一体、何よ？　夕飯時に……」

＜テレビを見ろッ！　緊急事態だッ！＞

相手はＭｒ．アルビノ。予感した通りの相手からだ。

「はいはい、ついさっき見たっての。で、本当なワケ？」
＜安全な回線を使って接触を試みたが、Ｍｒ．キャリコと連絡がとれん。まさに驚天動地だ……＞
「まさか、そっちも済し崩しに捕まっちゃうとかじゃないでしょうね？」
　しるくの声がわずかに震える。
＜正直……分からん。Ｍｒ．キャリコが予測以上の腰ぬけで、余計な情報をベラベラと吐いてしまう可能性はある。これから私はＭｒｓ．タンチョウと連絡をとり、今後の身の振り方を算段せねばならん＞
「……で、アタシの方はどうすればいい？」
＜今後の展開次第では、人質となった弥富更紗の存在が最も重要になってくる。絶対に監視を怠るな＞
「ちょ、そんなヤバイ状況でアタシが預かってていいワケ？　別の人に代わってもらった方が……」
＜いいや、こんな状況だからこそオマエが一番の適任だ＞
「何でよ？」
＜オマエはＭｒ．キャリコとは一切面識が無い上に、接触した物理的な記録も無い。ヤツが拷問まがいの尋問を受けたところで、オマエに関する情報は流れない＞
「あ……そっか」
＜唯一の懸念材料は、アキバで交戦した実動課のエージェントがオマエの顔を知っていることだけ。だが、相手もダレが拉致したのか目途が立たなければ、捜索に時間がかかるハズだ＞
「あッ……え～～と……（苦笑）」
＜おい、まさか！？＞
「ゴメン。調子に乗って、アタシが拉致ったコトがモロバレな書置きしちゃった……テヘヘッ♪」
＜このマヌケがあああああああッッッ！！　日頃から言ってあるだろうッ、非合法な仕事に悪フザケを持ち込むなと！！＞

Ｍｒ．アルビノの怒号が飛ぶ。
「ダイジョ～～ブ、心配無いって。連れ去る時、交通局のカメラがカバーしてない道をちゃんと選んだし」
＜本当か？　これ以上の抜かりは無いと断言できるのか？＞
「コスプレの神に誓ってッ☆」
えらくコアな神だな。
＜……いいだろう。とにかく、弥富更紗をしっかり見張れ！＞
プツッ――――
Ｍｒ．アルビノは押しつけるみたいに言い放って通話を切った。
（まいったなァ……ちょっぴり緊張してきた）
まさかの事態だ。Ｍｒ．アルビノが多額の出資をしていたハッカーが逮捕されてしまった。偽Ｐ・Ｄ・Ｓの元締めが捕まったということは、『子』や『孫』の一斉検挙もありうる。そうなれば、過去に偽Ｐ・Ｄ・Ｓを使用した個人の経歴までも調査されかねない。つまり、朱文にも火の粉が降りかかる恐れがある。
「で、何の電話だったんだ？」
「ふぎゃあああああああああああァァァァァァァァァ――――――ッッッ！？」
急に背後から弥富が声をかけてきて、しるくがバンザイみたいなポーズでビックリ。ケータイが空を舞う。
「おい、驚き過ぎだぞ。まずは落ち着いて――」
「ええ、落ち着くわよ（怒）。こうやって脈拍を正常に戻すわよ（怒）」
グイグイッ……グイグイッ……
両手で絞め上げられる弥富の首根っこ。
「ちょッ……やめて。マジでキマってるから……き、気が遠くなって……見たこと無い天使が降臨してるから……（苦）」
天使：Ａ「おいおい、殺害現場に降りちゃったよ」
天使：Ｂ「いいのか？　まだ神様から魂を回収する許可は得てねえ

ぞ」
天使：C「いいんじゃないっスか。ちょっとしたフライングっスよ」
天使：B「いやマズイって。少年と大型犬の時と同様に、綺麗にキッチリ死んでからが鉄則。この状況での俺達はただの不法侵入者だから」
天使：A「別にいいんじゃねえの。この世界ってさ、勝手に人の家に上がり込むヤツ多いらしいし。泥棒とかヨネスケとか」
天使：B「そんなのを天使と同列にすんなよ。とにかく、撤収するぞッ」
天使：C「うぃ〜〜っス。先輩、今回って時間外手当てつくんスかねえ？」
天使：A「そんなのは人事部の連中に聞けよ」

天使共、天へと帰還。
（お、おい……助けてくんないワケ……ガクッ）
弥富、天井に手を伸ばしながら――――おちた。

ドキドキ♪　ＤＴ弥富の同棲生活（初日・深夜だよう）

ああ、そうだよ。俺だよ。弥富更紗だよ。この物語の主人公だったりするワケなんだ。２５才にして未だに“彼女”という存在に触れたこともない。それどころか、女友達の一人もできないものだから、次第に社会が俺をイジメてるなんて妄想にとりつかれかけて、今では怠惰な生活を絶好調に満喫するニート。一人暮らしを惰性で続ける俺は、チャットで知り合った女性から『オリジナルＰ・Ｄ・Ｓ』なんて危険物を託されちゃって。そしたら、芋づる式に関わりたくない連中や危険人物がオプションで付いてきて、終いにはＤＱＮな女子高生に拉致されて監禁生活してる。俺……どの辺りで人生間違ったんだろう？　小学生の頃、＜愛と勇気だけが友達さ＞って悲しいタイトルの作文書いた時？　中学生の頃、成長著しい同級生の女の子の胸元を、眼球が発射されるんじゃねえのかって勢いでガン見してた時？　高校生の頃、実家にオウムがやってきて、まず一番に俺の指を敵意むき出しで食い千切ろうとした時？　……いずれにせよ、現在、国家レベルの問題に巻き込まれてるみたいで、俺、今回の件が収拾ついて無事だったら実家に帰ってバイトでもしようかな……。

「おいおい……まだ食うのかよ」

食事が終わり、弥富としるくはしるくの自室（監禁部屋）へ。朱文は風呂に入っている。で、しるくは椅子に座って背もたれにゆったりとその身を預け、手に持った生クリームがタップリのプリンを食している最中。

「今からちょっと激しく体動かすから、糖分をしっかり摂取しとくの」

「え……？」

「うっわァ～～……反応がキモッ。飢えた野郎の頭ン中って思考が単純過ぎッ」
単語の条件反射で微妙に頬を薄赤くする弥富に、しるくが“死ねよゴミ虫！”みたいな面で返す。
「アタシ、『ヤンデレコメット』の名前で動画投稿サイトに投稿してんの。主にはアニソン歌ったり、曲に合わせて踊ったりするワケだけど、サイトじゃ結構な有名人」
そう言ってどや顔したしるくが、空になったプリンの容器をゴミ箱へポイッ。
「ああ、それで……簡単な撮影機材が辺りに転がってるワケか」
「アンタついてるよ～～♪　アップすれば確実にトップ１０に入る動画の生撮影シーンを、こうして目の前で見られるんだからッ☆」
そう言いながら彼女はクローゼットを開ける。中にはコスプレ衣装一式が収納されていて、メイド服にミニスカチャイナ、婦警に魔女っ娘、浴衣に水着……男共の淀んだ需要に対する立派な供給源がそこにあり。
「けしからんッ、ああ～～けしからんよッ！　基本的に若い男ってのはな、エッチな物を投げつけられると爆発するんだよ。主に股間がッ！」
口うるさい父親みたいな態度だが、言ってる内容は欲求不満でゴメンナサイだ。
「はいはい、そんなコトは知ってますってのの。生放送の時はリアルタイムでモニターに視聴者のコメントがのるから、連中がどんな目で観てるかはものすごくよく分かってる。ヒドイ奴なんか“まずは脱いでくれ（笑）”とか、“オッパイ♪　オッパイ♪”とか……ほ～～んと、呆れるくらいバカばっか」
文句をたれてはいるが、彼女の口調は不満を口にしている感じではなく、ミニスカメイドに着替えながら高揚感に似たモノでテンションが上がりつつあった。
「あのさァ……俺の事キモイって言うんなら、どうしてまた目の前

で着替えるワケ？」
「バカ者ッ！　相手の行動により“見られる”のと、アタシが相手に“見せてやる”のとではエロの質が違うのッ！」
下着姿で毅然と仁王立ち。それを床に座って見上げてる俺って……わァ～～お、マヌケ。
「要するに、オマエはバカな男共（弥富を含む）に愉快なエサを与えて楽しむ――陰湿なドＳの思考だな」
「お黙りッ！　こっちは機材に経費かかってんのに、連中にタダでアタシの艶姿を見せてやってんの。こっちの性癖を満たしたってバチは当たんない。コスプレの神様がそう言ってる★」
何でも神様につなげるんじゃねえよ。いちいち神様出てきたら、トイレの女神様と花子さんが殴り合いのケンカ始めちゃうよ。それはそれはキレイな～～♪　女神様がいるんやで～～♪　って、じゃあさあ、男達は女神様の前でいっつも泌尿器を露出してたワケ？

――――――――ファサッ☆

ミニスカを翻し、着替え終了のしるくがあさっての方向に営業スマイル。ＰＣと撮影用機材を機動。そして、スピーカーから流れてくるとってもアップテンポなＢＧＭ。部屋の中の空気が別空間とつながったようなテンションに変わり、彼女の表情に一気にパワーがみなぎった。
（うっわあァァァ～～～～（汗））
アニメ・『きら○んレボリューション』のＯＰ――『バラ○イカ』の替え歌で……
【殺らないか？】
作詞：回収屋
作曲：ヤンデレコメット

1．＜ゆらりゆらり揺れてい・る、JK心ピ～～ンチ！　かなり、かなり、ヤバイの・よ（経済的に）助けてダーリン！　クラクラリン♪＞

＜な～～にもかもが新しい戦場にきちゃったわ♪　たく～～さんの怒☆気　怒☆気　乗りこえ（ピョ～～ン）！　踏みこえ（グリグリッ）！　殺・る・ぞ♪＞

＜殺らないか　殺らららないか　殺ら　ないら　かいかい！　こ～～の殺意は止められない♪　もっと腐女子ちっく・腕力♪　ぎらりんりん　ちょっと危険な惨★事♪＞

＜殺らないか　殺らららないか　殺ら　ないら　かいかい！　もう～～怒☆気　怒☆気　止められない♪　もっと怒羅魔チック・濃い♪キャラクタ　二人だけで　殺・ら・な・い・か？＞

2．＜すごくすごく……大きいです★　JK心チャ～～ンス！　血肉・内臓とび出そう　おねがいダーリン！　ハラハラリン♪＞

＜あなただけを～～監視するワタシにしらんぷり？　気づいてほしいのよ　トキメキ！　ヤキモキ！　ス・キ・よ！＞

＜殺らないか　殺らららないか　殺ら　ないら　かいかい！　そ～～の性癖おしえてよ♪　もっとDQNちっく・モード♪　ぎらりんりん　やっぱ笑顔が不・気・味♪＞

＜殺らないか　殺らららないか　殺ら　ないら　かいかい！　盗撮してちゃダメダメよ♪　もっとドエロチック・濃い♪　絡みだ　前科持ちなの　殺・ら・な・い・か？＞

＜痴女は～～いつだって夢見る乙☆女なの♪　インモラルな心で恋して！　愛して！　S！　O！　S・O・m9（＾Д＾）プギャアアアアアアアアアア――――――！！＞

・・・

ギャラリーとして言わせてもらうと……オマエ、病んでるよ。撮影カメラに向かって夜中に一人で腰振ったりターンしたりする様は、シラフな精神状態では直視できねえよ。
「なッ……何よその人を心底から哀れむような目はッ！？　一人で踊って何が悪いのよッ！？　変じゃないからねッ、アタシはとっても正常な女子高生なんだからねッ！！」
踊りながら歌いきったしるくは、少し息を荒くしながら弥富の方をビシッと指差して声を上げる。おい……まるで、俺がその“変”に含まれる対象みたいに言うなよ。
「いいか、よく聞け。＜そうです、私が変なオジサンですッ！＞って言うのと、＜そうです、私が正常なオジサンですッ！＞って言うのとでは、どっちがより変だ？」
「――――――ッ、何て事なの！　後者の方が……より変に感じる！（汗）」
「その通りだ。それこそが真実だ」
明らかにオカシイ諭し方だが、しるくは驚愕の面持ちで納得しちゃった。
「まあ、人の趣味にケチつけても仕方ねえし。もう遅いから俺、寝たいんだけど」
「ファ～～ック！　夏休みに入ってる女子高生のテンションを甘くみてもらっちゃ困るわね！　夜はまだまだ長い！　さあッ、若者らしく夜遊びするのよ！」
「黙れよ。こっちは二十代の半ばにさしかかって、子供じみたテンションはとっくに萎えてんだよ。オマエ一人で健康的に竹下通りにでも行ってこいよ」
弥富はいまだに拉致されたという緊張感が抜けておらず、ストレスと疲労の蓄積がハンパなかった。
「それはそうと……“お金”の件なんだけどさあ」
急にしおらしい声になったしるくが、手を後ろで組みながらモジモジしだす。正直、さっきまでとの落差が大き過ぎて気持ち悪い。

「ケータイと例の冊子がねえと俺には――」
「それとは別のハナシなんだけど……アタシ、ちょっとした小遣い稼ぎも最近はじめててね」
そう言って彼女はデスクの引き出しから一冊の本を取り出した。
「じゃ～～～～ん♪　綺麗に撮れてるでしょ？」
「……（汗）」
弥富、目を細めて沈黙。しるくが手にしているのは、本人のいわゆる――『コスプレ写真集』。ジャケットには、今着ているのとは別バージョンのメイド服姿でポーズをきめてるしるくが。弥富は恐る恐るソレを手に取り、中身をペラペラっとめくって見てみる。ほとんどがアニメ・ゲーム系のキャラコス。自作なのかオーダーメイドなのかは知らないが、相当な手間ヒマをかけた写真集なのは確かだ。
「オマエ……これ売ってんの？」
「うん、ネット通販のみだけど。結構評判良いんだよ」
「……で、もしや、コイツを量産して俺の知り合い（仮）全員に売ってこいってか？」
「違う、違う。数冊売れたくらいじゃ、コスプレ一着分の材料費にもならないから。やっぱさ、こういう写真集にはもっと“エロス”が必要だと思うのよ。どうせ買うのって野郎ばっかだし★」
「待て待て待てッ……オマエの想定する“エロス”がどういうモノなのかは知らんが、もっと沢山売るため肌をさらすってのは～～……イカン！　お父さんは許しませんよッ！」
「童貞ニートのお父さんなんかもった覚えは無いわよ。それに、18禁指定されないギリギリの構成だから問題ないの。でも、それにはアンタの協力が必要なワケ♪」
しるくが不吉な笑みをこぼす。
「やめてくれ。俺は一切関わりたくねえから。貝になって閉じ込ろう……そう、俺は貝になりたい」
「ねえ、“一宿一飯の礼”って知ってる？」

「……おふッ」

弥富の中で大切な何かが失われようとしていた。またしても……。

歴史はド深夜の寝室でつくられるよう

皆様ごきげんよう。わたくし、津軽六鱗と申しますわ。ネット世界の秩序と正義を管轄する電薬管理局、その実動課に属するエージェントですの。チャームポイントはキメの細かい髪質のポニーテールと、攻撃的なアイシャドウ。年齢は２６歳。そろそろスキンケアに気をつかわなければならない御年頃……しかし、現在重要なのは肌年齢ではなく、水面下で進行中の単独作戦。偽Ｐ・Ｄ・Ｓが関係している一連の事件――その裏側で常に北叟笑んでいた男――『Ｍｒ．キャリコ』がついに逮捕されました。しかし、彼と共謀していたと思われる数人のスポンサーの行方は未だ不明。その内の一人、『プー左衛門』と名乗るＰＣモニターの中のヌイグルミは、現場に踏み込んだわたくし達の前でＭｒ．キャリコを裏切る発言を残し、姿を消しました。しかも、ヤツは自分に“何ができるか”を証明すべく、信号機のシステムに侵入し、現場近くの交差点で事故を誘発させましたの。正直、イヤな予感が致しますわ。昔、ＳＰとして配属されていた国営企業でも修羅場を何度か経験しましたが、今回の一件……事後処理を怠ると、とんでもないテロに発展するような気が致しますわ。

（ここからは時間との勝負……迅速に弥富殿を発見できれば、こちらが確実に有利となりましてよ）

アパートでの現場検証を実動課の分析官と軍部に一任し、津軽は交通局のシステムにアクセスするため実動課のオペレータールームにこもっていた。拉致した張本人の面はハッキリと覚えている。“オバサン”と罵っていたアノ声も耳から離れてはいない。マヌケな自己主張を反映した置手紙のおかげでもあるが、問題は……交通局のカメラも全ての道路に設置されているというワケではないという

事だ。主要な国道や高速道路、公園や国の管理する施設付近などはほとんどカバーできているが、住宅街の中を迷路のようにつながった狭い市町村道を使ったとなれば、カメラによる発見成功率はグンと落ちてしまう。相手は明らかなＤＱＮではあったが、仮にも裏仕事を請け負う身。退路の確保にぬかりがあるとは思えない。これは完全に賭けだ……時間はもう日付変更時刻を迎えようとしていたが、先天的な奇病の影響で睡眠をとる必要のない彼女に睡魔はやってこない。置手紙の文面から受けた屈辱を倍返しにすべく、アドレナリンを分泌しまくっている。複数のモニターに延々と流れる映像を、眼球をフル回転させて見ている。

（さあさあさあッ、恥ずかしがらずに出てきてくださいましッ！）

まさに、砂漠の砂から一粒のダイヤを拾い上げる作業。相手の移動手段すら判明していない状況……乗用車か？　バイクか？　走って連れ去ったなんてのは無いだろうが、誘拐を働くからには、周囲の人間からなるべく見られたくはないハズ。そうなると、乗用車を使った可能性が最も高くなるが――

「――――――ッ、なッ！？」

津軽、発見。住宅街と繁華街の間を通る国道を通過する一台の原付。ほんの数秒間だけだが、斜めに横切る光景が。ただの原付なら普通に見逃していただろうが、その原付の運転手は脇に成人男性を一人抱えていた。道路交通法違反以前の問題だ。

カタカタカタッ……

彼女はキーボードを操作して原付の映像を拡大する。そして、プレートのナンバーを即座に特定。

（よし、盗難車でなければすぐにカタがつきますわッ）

津軽は仕返ししたくてしようがない疼きを抑えつつ、実動課の分析官にケータイでコールした。

――――――――――　１時間後　――――――――――

「ここですわね……」
津軽は原付の持ち主を特定し、ついに長洲家の住所にたどりついた。時刻は既に午前1時を過ぎ、周囲の住宅の殆どは灯りを消して寝静まっている。
（早速、参りますわよッ）
通りに人の気配は全く無く、彼女は正門の塀を側に建っている電柱を利用して三角跳びの要領で器用に越えると、敷地内に着地と同時に持ってきたクラッチバッグから愛用の凶器――二本の手斧を取り出した。
「……さて」
キッと二階を睨みつける。窓の数や構造的に幾つかの部屋に分かれているようだが、灯りがついている部屋が一つ。まずは、消灯している部屋から侵入するのが常套。
ヒュッ――
先程と同様に塀を蹴って三角跳びし、闇夜を舞うムササビのごとく身軽に軒先へ乗り移る。そして、素早く部屋の窓に接近し、バッグからガラス切りを取り出して窓の一部を円形に切り取った。
（さあ、行きますわよ……）
カチャ――
窓に開けた穴からゆっくりと手を差し込み、鍵を開ける。彼女は音がしないよう、手慣れた感じで窓を半分程開いて侵入。
「……」
部屋は大して広くないようだ。光源は外から差してくるささやかな街灯の光のみのため、目が完全に闇に慣れるまでは動き回るワケにはいかない。彼女は中腰で固まったまま息を殺し、耳をすます。
（――ッ、気配が……寝息？）
すぐ近くからとても小さく聞こえてくる人の息使い。間違いない……何者かが寝ているのだ。もしかすると、偽メイド本人にいきなり当たったのかもしれない。津軽は緊張で額に汗を滲ませながら目

をこらす。布団だ……床に布団を敷いてダレかが寝ている。壁の方を向いて寝ているため顔は確認できないが、明らかに例の偽メイドとは体長が異なる。
（家族の一人……？）
情報機関に属する正規のエージェントとしてはあまりとりたくない手段だが、ここはこの人物を拘束し、人質として敵である偽メイドに人質交換の交渉を迫るのが常套。
「失礼致しますわッ」
バッ――！
まさに“寝込みを襲う”。津軽は相手の首に片腕を回して強引に上半身を起こさせると、もう片方の手に握った手斧の刃を相手の背中に当てた。
「あうッ――――、えッ……何？　ダレ？　オ姉チャンなの！？」
背後から羽交い絞めにされ、相手の口から驚きの声が漏れる。
（声のカンジは子供のようですわ……そして、今、“オ姉チャン”と……偽メイドの外見年齢から察するに、コレは弟かしら？）
津軽は冷静に洞察力を働かせ、彼を布団の中から引きずり出した。
「どうか、御静かに。心を静めてわたくしの言う通りにしていただければ、危害は加えませんことよ」
そうは言っても無理なハナシだ。ド深夜に侵入してきた見知らぬ人物が、刃物と思しき物体を背中に当てながら耳元で囁いてくるのだ。どんなに胆がすわった人間でも平常心ではいられない。
グイッ――
津軽は彼を無理矢理立たせて周囲を見渡す。廊下の照明だろうか、部屋のドアの隙間から淡い光が漏れているのが確認できた。
「や、やだッ！　オ姉――――ッ、んぐッ……」
「声を上げてもロクな事にはなりませんわよ。さあ、アナタの姉上の御部屋まで案内してくださいまし」
大声を出しかけた口を津軽が手で塞ぎ、有無を言わさぬ威圧的な

態度で背を押す。
「……う、うん……」
カチャ……
彼はビクビクと怯えつつ部屋のドアを開け、津軽を先導する。廊下に出て左に曲がり、突き当たりの部屋の前で止まった。津軽が耳をそばたてる。見たところ普通の民家……ドアに何かしらのトラップがあるとは考えにくいが、慎重を期するにこしたことはない。
バタバタバタッ！
（――――！？）
部屋の中から何者かが争っているような物音。そして……
「いいかげん観念しなさいよッ！」
「よ、よせッ！　やめてくれッ！」
「ウフフフ～～♪　別に死ぬワケじゃないし、見た目より痛くはないって。すぐに慣れるわよ★」
「な、何で俺がこんなめに……はぐぅぅぅぅ！」
男女が言い争っている。声の主が例の偽メイドと弥富であることはすぐに分かった。
（拷問？　もしや、何かしらの重要な情報を弥富殿から引き出そうと……？）
これはマズイ事態だ。一刻も早く救出しなければ。津軽は意を決して――
――――――――――バンッ！！
「そこまでですわよッ！！」
荒々しくドアを蹴り開け、人質を盾にした状態で津軽が突入。
「なッ……！？」
「あッ……！？」

一瞬にしてフリーズする一組の男女。部屋の中に居たのは確かに弥富と偽メイドであったが、津軽が想定していた事態とは少々異なっていたようで。両手首を縛られて仰向けに寝そべった弥富に偽メイドが馬乗りになり、弥富の上着を強引にめくり上げながら、手に持った専用のピアスを彼の乳首に装着しようとしていた。そんな状態で固まった二人……マヌケだし、恥ずかしいし、青少年保護条例が黙っちゃいないし。

「……失礼致しましたわ」

バタンッ

なんか申し訳なさそうな声でドアを閉める津軽。で、数秒間の沈黙と思考。結論――

「そこまでですわよ、犯罪者ッ！」

「ちょッ……アタシの弟から離れなさいよッ！　この犯罪者ッ！」

再度、ドアを蹴り開けて津軽と偽メイドの不毛な口論。画的にはどちらも色々と犯しちゃってるし。

「つ、津軽さん！？」

貞操の危機に颯爽と現れたヒロインの名を呼ぶ弥富。

「弥富殿ッ、御無事で！？」

「一応、無事っぽいですけど。画的にはあまり無事っぽくありません」

確かに。

「オ、オ姉チャン……一体、どうなって……！？　この人って……！？」

目が見えない彼――朱文はすっかり怯えきっている。

「くッ……この卑怯者め～～！」

「朝駆けして人を誘拐するような輩に言われたくありませんわ。こんな所で無駄な時間を費やしているヒマはありませんの。弥富殿を今すぐ引き渡しなさい。さもなくば、アナタの弟さんを……」

そう言って津軽が背中に当てていた手斧を彼の頬に近づける。そこで、部屋の照明に照らされ、朱文の顔が初めてハッキリと津軽の

目に映った。

「――――――――――まあ☆」

朱文の顔を目の当たりにして津軽の口から漏れた声。とっても不吉な要素を含んだ声。

（なんという運命の悪戯ッ、わたくしのハートにドストライクな美少年♪）

朱文にとって残念（？）なお知らせ。彼は“人質”から“戦利品”に昇格してしまいました。

ド深夜に暴れると御近所の奥様方が勘違いし始めるよう

（マズイ……津軽さんの常識欠落症が炸裂しかけている。しかも、社会的に大問題な性癖と共に）

俺――弥富更紗は床に寝転がされた状態で、ついにやってきた救出者を笑顔で迎えたワケなんだが、その笑顔はすぐにとっても引きつった感じの笑顔に変わった。何故かというと、津軽さんが朱文を人質にして俺との交換を迫った……まではよかったが、彼女がどうも朱文に一目惚れしちまった様子で。要するに、大事故発生である。

「アンタ、それでも政府の役人なのッ！？　アタシの弟に何かしたら……！」

「お黙りなさい。この家がアナタの根城ということは、ここに住む者も調査対象となりますわ。大人しく弥富殿を返しませんと、弟さんを犯し――いえ、共犯とみなして逮捕しますわよ」

津軽さん……冷静な素振りではあるけど、心の中はムラムラ中だ。

「ま、待ってよッ！　弟は事故で全盲なの……それに、まだ１３歳。逮捕なんかされて妙なトラウマができたら……」

「１３歳？　まあ、まさに食べご――じゃなくて、若いのに御気の毒ですわ……」

津軽さん、もう少し頑張って本音を隠してくれ。

「ところで、この有り様は一体、何ですの？　弥富殿はわたくしの護衛対象者。経緯を説明していただきますわよ」

そう言ってキッと睨みつけてくる。

「ええっとですねぇ～～……（汗）」

当惑する弥富。ＳＭチックなアイテムで拘束され、しるくに馬乗りにされていたのには深いワケがありまして……。

――――――――――　十数分前　――――――――――

「はぁ〜〜い☆　それじゃあ、今から撮影始めるんで脱いで♪」
「……は？」
「脱・い・で♪」
「まずは理由を述べろ。その回答いかんによっては要請を却下。あるいは、窓から御近所様めがけて“エロイ子はいねえかあァァァァァ〜〜！”って叫ぶ」
弥富、目が真剣だ。
「だからぁ、とある作品の趣旨とテーマにのっとった動画を作りたいワケ」
そう言いながらクローゼットから取り出したのは、とてつもなくコアな趣味関係の道具一式。ボンテージなレザースーツとブーツ・細い鎖の付いた首輪・ギャグボール・ニップルリング・アイマスク・低温ローソク……おい、一介の女子高生がそろえていいラインナップじゃないぞ。
「ちょっと待てッ……オマエの言う“作品”って何だ？」
「もちろん、『ナナとカ◯ル』★」
「よ、要するに……俺が脱いで卑猥な道具一式の犠牲になり、そっちが責めるってこと？」
「イエス、高須クリニック！」
「待てぇぇぇぇぇぇい！　立場逆じゃねえかよッ！」
「もちろん、別バージョンも撮るわよ。アタシが拘束具付けてそっちが責めるヤツ。ま、有料動画としてアップするけどね」
「……え？　俺が責め……マジでいいの？　社会的に問題は無い？　オマワリさん踏み込まない？」
弥富、静かに嬉しそう。
コスプレ神：「やったね、たえちゃん。余計な性癖が増えるよ☆」
おい、やめろ。そのネタはマジでヤバイから。（ネタ元をググっ

てはいけません)
「そんじゃあ、上も下もポポポポ～～～～ッイといっちゃって♪」
「いやいやいや……えらく当然みたいな言い方だけどさ、丸裸になる必要はないよな？」
「だってぇ～～、拘束具の構造上、服の上からじゃインパクトないし。アタシも楽しめないし」
思い出した……コイツ、自分が見ている前で俺に排尿させようとしてたんだった。
「下半身は勘弁してください。弁護士を呼んでください。心の貞操が遺書を書こうとしてますから」
弥富、しぶる。
「う～～ん……じゃあ、こう考えてみて。アダムとイヴは禁断の果実を食べちゃってピュアな心を失い、羞恥心が芽生えて服を着るようになった。ということは、露出狂の人は失われたそのピュアな心を取り戻しつつある素晴らしい人類ではないか……ってワケよ！」
どんだけ強引な曲論だよ。

・　・　・

「――――――っという事がありまして、結局、コイツに無理矢理剥ぎ取られそうになったトコロに、津軽さんが現れてくれました」
端的に説明し終えて少し落ち着いた様子の弥富。使い道の無い貞操は守られたが、“別バージョン”の撮影チャンスを逃した事実でちょっぴり残念。
「状況は把握致しました。では、早速――」
ヒュッ――！
手の平で軽やかに踊る二本の手斧。津軽は朱文を優しく部屋の外に押し出し、敵である長洲しるくと対峙した。
(やっぱァ～～……このオバサン、完全にヤル気じゃん)
殺陣の空気を感じ取ったしるくが、額に冷や汗を滲ませる。津軽

がこうも早く監禁場所を特定して現れる事自体が想定外。自室とはいえ、こんな狭いスペースでは地の利もクソもない。先に凶器を装備した方が圧倒的に有利だ。
「どうやら、前回のようにマネキンを振り回すというワケにはいかないようですわね。つまり、準備の無いアナタに勝機は皆無。わたくしも畜生ではありません……抵抗しないのなら傷つけはしませんことよ」
厳然たる態度で言い切った津軽。自分の勝利を確信したこの余裕に感化され、低下しかけていたしるくの士気が急上昇。
「ナメんじゃないよッ、オバサン！！」
ジャラッ――！
足元に落ちているＳＭ用アイテム一式に手を伸ばし、細い鎖付きの首輪を拾い上げて構えた。
（ふんッ、所詮は素人ですわね。このような狭い場所では、間合いの微妙な調整が必要なロングレンジの武器は不利）
津軽の口元がわずかにニヤける。鎖を武器として有効活用するには、ある程度のリーチを保たなければならないが、一般家庭の一室で使えば、すぐに壁や天井・家具にぶつかって威力を失ってしまう。
「それでは、御仕置きと参りましょう！」
ダンッ――！
しるくとの距離は床の一蹴りで無くなる程度。鎖をどの方向から振り回してきても、確実に手斧の一撃が先に入る。例え防御として使ったとしても、ＳＭグッズとしての鎖……防ぎきるだけの太さも強度も無い。
「あはッ★　計画通り♪」
フッ――
しるくは腰を垂直にストンッと落とし、真横に薙がれた手斧の一撃を回避すると同時に、超低姿勢の状態から鎖を津軽の足首に絡ませた。
――――ドスンッ！

「うぐッ！？」
カウンター気味に鎖で脚を引っ張られたため、全く受け身がとれないまま仰向けに床へと倒れ込む。しかも、後頭部を強打してしまい……気絶。
「ぅぅぅ………」
津軽が小さな呻き声を漏らし、一瞬にして勝負がついてしまった。
「えッ、ちょッ――――――！？」
弥富が津軽としるくを交互に見ながら慌てる。
「フフフフぅぅぅ～～★　イイ事思いついちゃったぁぁぁ～～♪」
今度はしるくの口元がニヤける番だった。そして……

――――――　10分後　――――――

「うお～～い。起きてちょうだいな」
ペチペチッ、ペチペチッ
「………ッ、んん……うぅぅぅ………？」
片頬を軽くはたかれる感触に意識が覚醒し、津軽は後頭部に鈍痛を感じながら瞼を開いた。

「超ざまぁぁぁぁぁ～～～～！　プギャー！m9（＾Д＾　）m9（＾Д＾）9m（　＾Д＾）9mプギャー！」
起き抜け一番に視界に入った、とっても不愉快なしるくのどや顔。イラッとした津軽がすぐに立ち上がろうとしたが、手脚が上手く動かせなくて尻もちをついた。
「くッ、迂闊ッ……！」
10分も意識を失っていれば、当然、生殺与奪の権利を敵に奪われる。さすがに殺されはしなかったのだが、手首には手錠がかけられ、脚はさっきの鎖で縛られていた。
「夜中に不法侵入して家族を人質にとったり、刃物を振りかざして

襲ってきたり。こんな危険人物はすぐに通報してやりたいけど、アタシの立場上、そうはいかないからね。かと言って、このまま解放してやるほどアタシもバカじゃないもんねぇ～～」
「だ、大丈夫ですか……津軽さん？」
しるくの後ろから心配そうに声をかけてくる弥富であったが、何故だか気恥ずかしそうに目を逸らしている。理由は単純。１０分の間に、彼女はしるくの手によっていいように弄られちゃったから。
「――――なッ、わたくしのスーツが……やってくれましたわね（汗）」
今の津軽は下着姿。着ていたフォーマルスーツは部屋の隅にポイされてる。
「一応、拘束してはいるけど、政府の役人様は仕事熱心だからさ。這ってでもこの家から脱出しかねないと思ってね。ヌフフ～～♪」
イヤラしい笑みを浮かべながら、没収した手斧を津軽の前でチラつかせてからかう。
「甘いですわ。例え全裸にされたとしても、わたくしが任務を放棄するなどあり得ませんことよッ！」
本人の印象とは裏腹に、ピンクのビスチェとＴバックのショーツ。しかも、シースルータイプなんで野郎の目にはとっても毒だったり、御褒美だったり。
「あっそ。それはそうと……歳の割にはイイ肌艶してんじゃん。下着はえげつないけど」
ザ・ＪＫが上から目線で余裕の物言い。
「わたくしは実動課のエージェント。しばらく連絡が無ければ上司が不審に思い、黙っていても電薬管理局が動きますわよ」
「ああ、それなら平気。さっきケータイを叩き壊しといたから、ＧＰＳで探知される心配無いし。それに、わざわざ単独でやって来たということは、この場所を他の人間は知らされてないという事だろうしね」
「うッ……」

ＤＱＮのクセにこういう駆け引きでは妙に頭がまわる。
「さあさあ、撮影しちゃうわよォ～～★　電薬管理局の現役エージェントが、エロエロな格好で出演する動画となれば、世界中のハッカーが我先にと金払ってダウンロードするでしょうね。ヌフフフッ、臨時収入げぇ～～っと♪」

……実家の父と母よ、良い報告と悪い報告があります。良い報告は、津軽さんの下着姿をオフィシャルな感じで堂々と観れた事です。悪い報告は、全くもって事態が好転しなかったという事です。

コスプレ神：「こまけぇこたぁいいんだよ！！」

こうして夜はますます更けていった。

突撃、隣の朝ごはん！　……は限りなく迷惑だよう

やあ、みんなッ！　今日も偽Ｐ・Ｄ・Ｓライフを満喫しているかな？　そう、すみす・ブラックだよ。『偽Ｐ・Ｄ・Ｓ友の会』をしきる３５歳で無職なナイスガイさ☆　我々ってほとんど出番が無いけども、精一杯生きているつもりだ。いつも社会でまっとうに働いている人達の冷たい視線にさらされながら、特に用事も無く街を闊歩してみたり、頼まれもしないのに家に引きこもったりするのだよ。クソ虫？　害虫？　……笑いたければ笑って結構。自分の生きる道を省みることなく突っ走るのもまた“勇気”。病気になっても健康保険料払ってないから病院行けない。老後は年金もらえない。そんな腐り切った連中を引き連れ、私は夕日に向かって吠える――「我々は死ぬ瞬間まで一緒ぉぉぉぉぉ！　“仲良死”だぁぁぁぁぁ！」↑「不吉な単語を作るんじゃねぇぇぇぇぇ！」

チュンチュン――チュンチュン――

外から聞こえる早朝を告げし生物の鳴き声。つまり、スズメの群れが「朝だ。起きろよ、バカヤロー」って言っているのだ。深夜に発生した救出劇があっけなく失敗に終わり、拘束されてしまった津軽さんは、しるくのイヤラしい瞳とワキワキしている指に襲われて、年齢指定が必要な動画の撮影を強要されそうになったのだが、さすがにド深夜……ちょっぴり暴れたという理由もあり、眠くなってたしるくは部屋の外から鍵をかけて弟の部屋で寝てしまった。で、彼女の部屋には鎖と手錠で拘束されたままの津軽さん（下着姿）と、上半身裸のまま（しるくに上着とられた）で床に雑魚寝している俺――弥富の二人だけ。正直、空気は微妙。津軽さんは先天性の奇病のせいで睡眠をとらないから、俺が寝ている間、ずっと同じ空間で見られていたことになる。なんか……とっても珍しいプレイに興じ

るカップルみたいだ。
「弥富殿、御目覚めですか？」
「……え、ええ……はい……」
眠れたといっても４、５時間程度。しかも床の上。体に残る疲れと局所的な痛みのせいで、睡眠をとった気には到底なれない。一応、部屋にベッドはあるのだが、普段はしるくがその身を委ねているベッド。本人の許可なしに嬉々としてベッド☆インするのは、良識がとりあえず残っている者としていかがなものか……そう思い遠慮した。現役ＪＫの体臭に抱かれて睡眠――クソニートにとっては、喉から手と同時に足まで出ちゃうくらいのプレミア。だが、待てッ……俺の中の妖精さん！　その最後のスイッチを押してしまったら、きっと俺は引き返せなくなる。正常な社会人にはなれなかったが、正常な人間を諦めるつもりはないんだァァァァァ！

妖精さん：「だが、断る」

ポチッ……
弥富の中の妖精さん、何の躊躇いもなくスイッチ・オン。
「さらばだ、今までの俺ッ！　ようこそ、新しい俺ッ！」
弥富は意味不明な言葉を呟きながら立ち上がると、しるくのベッドめがけて突☆入。
「……弥富殿？」
突然の奇行に津軽は目が点。
「見ないで、津軽さんッ！　旧弥富は死に、新弥富が就任の儀式を執り行っているんですッ！　分かってくれとは言いません。せめて、母の真心的な目で見逃してくださいッ！」
全くもってワケの分からんコトを言いながら、他人様のベッドの中で身をよじらせている弥富。質感を楽しんだり残り香を嗅いだりで大忙し。そんな変態ヤローを他所に、津軽は考えていた。
（とりあえず、作戦の第一段階は成功しましたわね）

彼女が口元をニヤッと小さく歪める。そう……現状の津軽の状態は、彼女が望む理想の展開だったのだ。颯爽と侵入したのに、バカみたいに返り討ちにされたのにはワケがあった。そう……相手に悟られないよう、わざと捕まってみせたのだ。

（所詮は平和ボケした学生風情。簡単な演技に引っかかってくれましたわ）

ド深夜の攻防戦で弥富を奪取するのは難しくなかった。だが、津軽はもう一手先を読んで行動した。Ｍｒ．キャリコの逮捕には成功したが、彼を裏からバックアップしていたスポンサーの手がかりは皆無。そこで、一連の事件の重要な関係者（被害者）である弥富更紗の拉致を利用する手を思いついた。要するに、何の社会的地位も持たぬニートを拉致って、しかも特に金品を要求してこないという事は、弥富自身に用があるのか……あるいは、人質として何かしらの交渉材料として使われるかなのだ。当然、しるくみたいな一介の高校生にスポンサーとしての財力やネットワークがあるハズもない。何者かに雇われて弥富を拉致したと考えるのが自然。しるくの家に監禁してあるのは、その雇い主に弥富を引き渡すまでの中継地点としてだろう。

「弥富殿、ここに監禁されてから何か新しい情報は得ましたか？今後の予想される展開で有利に働く情報があれば、どんな小さな事でも――――って、聞いてらっしゃいます？」

「ああ～～、ヤベぇ～～、マジで良い匂いするぅ～～～★」

ついに心のストッパーが決壊し、タマっていた色んなモノがあふれ出たらしい。今の弥富の様子は、オマワリさんが無線で応援を呼びかねないレベルだ。

ガチャ――

ドアの鍵が開く音がした。

「うぅぅぅ～～……ねむぅ～～～……」

明らかな寝不足フェイスでしるくが入って来た。で、最初に視界に飛び込んできたのは、もちろん……

「なッ、ちょッ――何やってんのよ、このセクハラ生命体ッ！！」
ベッドでクネクネしながら悶える弥富。ネコが好きな物に自分の臭いをつける行為の逆バージョン。しっかりとＪＫの体臭を楽しむ変質者に対し、しるくは躊躇無く跳び膝蹴りをブチ込む。
「おふッ！？　あ～～う～～ちぃ～～……って、俺は一体、何を……？」
我に返る一匹の童貞。生還オメデトウ。
「朝一でとてつもなくキモい物見せないでよね……ほらッ、アンタは一階のキッチンに来て」
「え？　あ、ああ……分かった」
腕を引っ張られて部屋を出る弥富。ドアを閉めようとするしるくは、拘束されたままの津軽にチラッと一瞥をくれる。
「残念だけど、アンタは家ん中を自由にウロつかせるワケにはいかないから。ちなみに、部屋のＰＣで外と連絡取ろうとしてもムダだからね。パスワードを設定してあるから」
――――バタンッ！
ドアが閉まる。部屋に残された津軽はチッと軽く舌打ちをし、格子付きの窓から差し込む朝日をボンヤリと眺めるのだった。

「じゃあ、買いに行くよ。一緒に来て」
「買いに行く……って、何をだ？」
キッチンに連行された弥富に対し、しるくが冷蔵庫を力強くオープンする。
「コレがこの家における食料自給率」
「うっわァ～～……見事に何もねえし」
大きめの冷蔵庫なのに、中身はチューブのワサビと脱臭剤だけ。まるで、盗難にあった直後みたいだ。
「昨日、朝ゴハン作ってくれるって言ったよね？　だから、まずは買い出しに行くのであ～～る！」

そう言って財布を装備したしるくは、何故だか学校指定のジャージ姿。
「おい……他人のファッションに文句言える立場じゃないんだが、ソレで買い物する気か？」
さすがの弥富も眉間にシワだ。
「別にいいじゃん。２４時間やってるスーパーの早朝は、客なんかほとんどいないし。それに、アタシがコスプレするのは裏仕事と動画作製の時だけなの」
あのね、そっちは大して気にしてないと思うけどさ、一緒に連れて歩かされるこっちはとっても人目が気になるワケだよ。
「けど、いいのか？　家を空けている間に津軽さんが逃げるかもしれないのに」
二人は玄関で靴をはいて外に出る。
「ああ、その心配は無いんじゃない。あっちは“わざと捕まった”みたいだし」
「――――――ッ、え？」
家の前の歩道に出た弥富が足を止める。
「ナメんじゃないわよ。学校の中間考査ならいざ知らず、裏仕事の一環でアタシは状況を読み違えた事なんて無いんだからね」
そう言ってスーパーのある方向に歩き出す。
「わざとって……どうして分かるんだよ？」
「あのオバサンの実力はアキバの街で把握済み。部屋の中で暴れた時、オバサンの微妙な動きの調整ですぐに気づいたっての♪」
えらく得意そうに話すが、ジャージ姿のせいで貫禄がいまいち感じられない。
「だとしても……何でわざと捕まったりしたんだよ？」
「そんな事までは知らな～～い。公務員の道楽か何かでしょ」
どうやら肝心な所は予測できていない。で――

――――――　数十分後　――――――

「お、重い……まさか、米の備蓄まで無かったのかよ」
片手に１０?タイプの米袋を抱え、もう片方には適当に食材を詰めまくった袋。いくら家から近い店で買ったとはいえ、ニートの体力と筋力でカバーしきれる量ではない。
「ガンバレ、ガンバレ、ロクデナシ♪　タダ飯食いたきゃ汗水流せぇ～～～♪」
隣で手ぶらのしるくが愉快そうに笑っている。
「ど、どっちか持ってくれ……腕のとっても大事なパーツが分解しそう……（汗）」
「や～～だ～～よォ～～～☆　男連れて歩いてんのに、荷物持ってんのってカッコ悪いもん♪」
ダメだ。コイツは真性のＳ女だ。
「朱文、帰ったよォ～～！　もう、起きたァ～～？」
家に着くなり、しるくは二階への階段を上りながら弟を呼ぶ。が、彼女が目にしたのは眠たそうな弟の姿ではなく、解錠されて半開きになった自分の部屋のドア……。
「――――ッ、まさか！？」
顔色が一変したしるくが自分の部屋に跳び込むが、案の定、津軽の姿が無い。
（しくじったァァァァァ！　けど、どうやって！？　外から鍵をかけたのに……）
ドアを無理矢理こじ開けた痕跡は見られない。方法は不明だが、巧みに解錠してみせたようだ。
「――――朱文ッ！？」
彼女の背を悪寒がはしる。津軽は朱文を人質にして交渉を迫ってきた。もしかすると、彼を人質として捕らえる機会を見計らうため、わざと捕まったのか！？
バンッ――！！
しるくが弟の部屋に勢い良く突入。そこで目にしたのは、冷房を

つけっぱなしでスヤスヤと眠っている朱文の姿。
「ふうぅぅぅぅ〜〜……セ〜〜フ……」
額に滲む汗をぬぐいつつ深呼吸する。が、津軽には逃げられた……これは決定的にマズイ。てっきりわざと捕まったとばかり考えていたのだが、迂闊だった。このまま家に居れば、確実に津軽は実動課の応援を引き連れて舞い戻って来るだろう。
（くっそ！　どうすりゃいいってのよ……ん？）
思案するしるくの視界に映る、“不自然な光景”。寝ている朱文の掛け布団が、明らかに不自然な盛り上がりを形作っているのだが……。
「……（汗）」
しるくが無言で掛け布団を引っぺがす。
「うぅ〜〜ん、朱文殿ォ〜〜〜♪　とても良い香りですわ〜〜★」
津軽、夜這いならぬ朝這いを実行中。眠る朱文の首に片腕を回して抱きしめるように添い寝しとる。
「助けてアグネスぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ――――――――――――ッッッ！！」
長洲家の一日がまたしても始まる。

ムダに高い生活力で少子化が促進されるよう

やあ、諸君。私の名は杜若（かきつばた）。今年で３８歳になる一介の公僕だ。現在、『国家調査室』という情報機関の責任者を務めており、国内外からのテロ攻撃に対する防衛・捜査や、敵性因子の可能性を含んだ組織・個人・物資・情報などの監視・管理を本業としている。今回は電薬管理局との合同調査により、偽Ｐ・Ｄ・Ｓ関連の事件の裏で暴利を貪っていた男の逮捕に成功した。が、まだ調査は完了していない。男に資金提供し、同様に甘い汁を吸っていた共犯者達も拘束せねばならない。男は今、電薬管理局の地下施設に拘置されており、昼夜を問わず厳しい尋問を受けている。だが、今のところ……裏のスポンサーにたどりつける情報は得られていない。管理局の分析官から交通局のシステムに不正アクセスがあったと報告を受けたが、敵の最終目的は何だ？　それと、誘拐された弥富更紗くんはドコでどうしているのか……心配だ。よし、まずは朝食（コンビニ弁当）を済ませてからだ。今の季節、食中毒は生死に関わるから安物は決して買うな。機動戦艦ナ○シコを観ながら、一晩中激痛に苛まれる回収屋（バカ）にはなりたくないからな。（実話）

「はぁ～～い☆　本日も蒸し暑く気だるい朝がやってきましたぁ～～！　つ・ま・り、３分クッキングなんてクソ手際の良い仕事とかは無理なんで、『約３０分クッキング』の始まりでぇ～～っす♪」

――――　♪『おもちゃの兵隊のマーチ』・ＢＧＭが大音量で流れてる♪　――――

「……（汗）」

エプロン姿のしるくの横で、何故かおさんどんの格好をさせられ

た弥富が突っ立っている。しかも、微妙に似合っている。
（コイツ……生活習慣をいちいちイベントにせんと気がすまんのか？）
キッチンのテーブルに並べられた食材の数々――魚沼産完全無農薬コシヒカリ・有機栽培国産大豆使用の無添加味噌・天然にがりで固めた豆腐・高級白身魚のみ使用のかまぼこ・有明産一番摘みの味付け海苔・良好な環境とミネラル豊富な飼料で育てた鶏の鶏卵・富士山のバナジウム天然水……など。
「いやぁ～～、さすがにこれだけ買いそろえると壮観ですね、先生☆」
「うん、そうだな。スーパーのレジのオバサン、ものすごく迷惑そうな顔してたな。早朝から意味不明な大人買いすんじゃねえって面だったよ……って、先生とか呼ぶな」
「それでは先生、まずは米を炊いてみたりしたいんですが」
そう言ってカナリ多機能な炊飯器を指差すしるく。その顔は、難解な数学の問題に恐れをなす学生の表情だ。
「はいはい、それではまず米をしっかりと研ぐぞ」
ジャッジャッ、ジャッジャッ――
「研ぎ過ぎると旨みの成分まで流れ出ちまうから注意だ」
「研いだ米をお釜に投入しま～～す」
「で、水道水は使わずに、買ってきた天然水を入れる。できたらこのまま30分くらい水に浸けた後に炊くのが良いが、今回は時間が無いので――スイッチ・ポン」
「さっすがは先生！　炊飯なんて危険行為を容易くクリアしちゃいましたねッ！」
爆弾処理かよ……。
「では、炊いている間に卵を焼いたりかまぼこ切ったり、ええっと～～……オマエは人数分の皿でも並べてて」
「承知しました、先生♪　ところで……“コレ”はどう料理するんでしょうか？」

しるくが指差した先には、荒縄でグルグル巻きにされて床に転がる津軽の姿が。
「基本的には食えないから、このままそっとしてあげなさい。それが大人の優しさというもんだ」
「はぁ～～……無情ですわぁ～～」
朱文に朝這いをしかけ、しるくにこっぴどく怒られた彼女は、本懐をとげられなかった乙女の顔でとっても残念そう。
「オ姉チャン、オハヨウ……あれ？　朝ゴハンの準備してるの？」
貞操の危機を迎えていたコトなど微塵も気づいていない朱文が、眠たい目をこすりながら慣れない生活音に反応する。
「そうそう、そうなのッ、そうなのよォ～～！　偉大なる朝ゴハン担当者の登場により、長洲家の朝は充実の一途をたどっているワケよ！」
どんな誇大広告だよ。
ズリズリズ～～リ……ズリズリズ～～リ……
「あふぅ～～ん★　眠たそうな朱文殿の御顔もまたキュートですわぁ～～★」
手脚の自由がきかない津軽が、朱文の立つ方向に尺取り虫のごとく接近。
「――えッ？　何？　この声って……足元の方から聞こえてくるんだけど！？」
全盲の彼にとって、フローリングを這ってくる奇妙な音は恐怖だ。
「ふんッ！」
げしッ……
「うぐぅぅぅぅぅ……」
ゴキブリを駆除する瞬間の主婦みたいな面で、しるくが津軽の背中を踏みつけて進行を阻止。そんなこんなで調理に勤しむ弥富。顔を洗って着替える朱文。無様に暴れる津軽とソレを観察するしるく……やがて時間は過ぎ、テーブルに朝ゴハン一式が並ぶ。

「まあ、何ということでしょう♪　先生、見事な自炊能力です。この調子で家中の掃除と洗濯もお願いしまぁ～～す☆」
食卓に着き、早速食べ始める三人。津軽はテーブルの真下でもがいてる。
「ああ、別にいいけど……って、何だよ？」
弥富の返事が予想外だったのか、しるくが小さくビックリした表情で一瞬固まっていた。
「……え、あ……いや、悪ノリして冗談言ったつもりだったんだけど、マジレスされちゃったから……アハハハハッ（汗）」
「気にすんな。誘拐された身だけどよ、他人様の家にタダで寝泊まりしてタダ飯食わせてもらってんだし。最低限のコトはしてやるよ」
「むッ、もしかして……そうやってアタシの心証を良くし、逃がしてもらおうって腹じゃないでしょうね？」
カマボコに醤油を垂らしながらしるくが睨みつける。
「そこまで器用ならニート予備軍なんかになってねーよ」
だし巻き卵を箸でつまみながら、弥富はごく自然に呟いた。
「ふ～～ん……じゃあさあ、もし……もしものハナシなんだけどさ。万が一、アンタをアタシの雇い主に引き渡す必要がなくなったなんて事態になったら、頼み事聞いてくれる？」
「どんな？」
「うちの専属家政夫として雇われてよ」
「……何だそりゃ」
弥富の視線が冷たい。
「別にいいじゃ～～ん。アンタ、バイトもしてないし、将来の展望とかも特になさそうだし。このまま惰性で一人暮らししててもさ、社会の害悪にしかならないよ。だ・か・ら……ね？」
そう答えるしるくの顔は笑顔だが、言ってる内容は失礼極まりなしだ。
「オマエなあ……俺の生きる気力を削ぎたいの？　それとも、朝からドSの性癖がうずいて仕方がないの？」

弥富、自嘲気味の面持ちで豆腐入りの味噌汁をすする。
「気にしないでください。オ姉チャン……最近、ちょっと寂しがってるだけだから」
味付け海苔で御飯を巻きながら朱文が呟いた。
「ちょ、朱文ッ！　変なコト言わないでよッ！」
「だって、父さんも母さんも……まだ戻ってきてくれないし」
「戻ってくるワケないじゃない。何も言わずに娘と息子を残して蒸発するなんて……理由はどうあれ、そんな親なんかいらない。朱文、アナタはアタシが責任をもって育てるし、その目も必ず治してあげる。約束よ」
「オ姉チャン……」
空気がとってもシリアスで重い。
「朱文殿の事ならわたくしが力になりますわ。良い医者を紹介致しますし、身の回りの世話もそれはもうかいがいしく――」
「変態はお黙りッ！」
ゲシッ……
「はぐぅぅぅぅぅ……」
テーブル下の住人が蹴られた。

――ピンポ～～ン♪　――ピンポ～～ン♪
「おはようございますッ！　宅配便でぇ～～ッす！」

玄関口から元気の良い声が聞こえた。
「おおっと、もう着いたんだ。さすがはアタシの雇い主。乙女の逸る心を分かってるぅ☆」
しるくは箸を置くと玄関まで走って行った。
「何だ？　えらく楽しそうだったが、何が届いたのか聞いてる？」
「い、いえ……ボクは何も……」
朱文も困っている様子だ。
「ひゃっほォ――――――い！　さあ、さあ、さあ、ついに手に入

ったわよ！」
数分後、食卓に戻ってきたしるくの手には、立方体の形をした少々大きめの物体が二つ。厳重に包装されている。
「えらく大事そうだが……お中元でも届いたのか？」
「うんにゃ。コレはアタシの雇い主からの特別報酬よ～～ん★　とって貴重なペットを二匹ももらっちゃった♪」
「ペット？　珍しい爬虫類とか猛禽類か？」
「禁魚」

「ぶぅうううううううううううううううううううううううう――――――――――ッッッ！！」

弥富が盛大に味噌汁を吹いた。
「なッ……な、な、な、何でだよッ！？　禁制品だって知ってるだろッ！？」
「うっさいなあ。四匹も禁魚飼ってるヤツに言われたくないわよ」
「い、いや……俺の場合は成り行きで仕方なくであって……って、オイ！」
しるくが早速、包装紙を破る。中から出てきたのは、専用のアクリル水槽で泳いでいる魚類。見た目には合法的な愛玩動物である金魚と大して変わらないが、その本性は非常に多感で人間性を理解する高等動物だ。本来は、重度の精神疾患を治療するために遺伝子操作で生まれた生物だが、現状の法律では所持するだけでも重罪に問われる危険物。
「こりゃカワイイ～～☆　色艶も良くて健康そうだし、名前をつけて後で大きな水槽に移してあげないとね。ねえ、何かイイ名前思いつかない？」
禁魚は『ピンポンパール』が一匹と『東錦（あずまにしき）』が一匹。どちらも金魚の市場では人気の高い品種だ。
「水槽の下の所にシールが貼ってあるけど、ソレに書いてあるのが

名前じゃねえのか？」
「あ、本当だ。ええっと～～……ピンポンパールの方が『堀口（ほりぐち）』で東錦の方が『三卯（さんう）』か。う～～ん、名前のセンスは大失格って感じね」
「そんな事より……オマエ、禁魚なんかどうする気だよ？　専用インカムも同梱されてるしよ」
「もちろん、偽Ｐ・Ｄ・Ｓを使って仮想空間でコミュニケーションをとるのよ。全ては朱文のためにね」
「……なに？」
急に真剣な表情を見せたしるくに弥富はただ動揺するしかなかった。

敵キャラが重要な情報をゲロするのは死亡フラグだよう

うん？　ああ……私かね？　私は電薬管理局・実動課の責任者を務める宇野という者だ。現在、逮捕した超重要敵性因子を尋問している。相手の名は『Ｍｒ．キャリコ』――若干２８歳にして国内における最大規模のサイバーテロを画策し、それを実行しかけていた張本人だ。彼はニート予備軍で特に取り柄もない弥富更紗と同じアパートに身を潜め、すぐ隣で活動していた。これには我々実動課も完全な想定外で、逮捕に執念を燃やしていたエージェント・津軽にとってもやりきれない事実だった。が、今は電薬管理局の地下施設で拘留されている。もう逃げ場は無い。これにより、偽Ｐ・Ｄ・Ｓが原因となる事件は確実に減少するだろう。しかし、実動課としてはまだ安堵するワケにはいかない。Ｍｒ．キャリコを合法ギリギリまで絞め上げ、共犯者達に関する情報を吐かせなくては……。それはそうと……津軽からの定期連絡が全くこなくなったんだが、何かトラブルに巻き込まれているのでは？

「どうかね、朝一からこんな無機質な空間で取り調べを受ける気分は？」

「……極めて眠い」

「だろうな。不摂生な夜型生活をしていた人間には耐えられんだろう。だが、これから先は健康的で時間のルールにしっかり縛られた生活が送れる。死ぬまでな」

「だろうね」

「社会に相応の損失を与えた者は、それに見合った刑罰を受けねばならない。家のガラス窓を割ったら親に正直に話し、許しを乞う。子供にも理解できる理屈だと思うんだが」

「私の親は何も言わなかった。窓を割ろうが飼い犬を殺そうが……

子供に対して無関心だった。だから、一度ぐらい叱られたくて包丁で刺したんだ。そしたら、何も言わずに死んじゃったよ……ククククッ、アハハハッ、アハッ♪」

「……」

時間は午前7時。場所は電薬管理局の地下拘留室。前日まで住んでいたアパートよりも狭い空間で簡易テーブルを挟み、実動課長の宇野とMr．キャリコが向かい合って座っている。今のところ、有用な情報は得られていない。

「君の出生と経歴に関して調べておいた。本名は『平賀青文（ひらがあおふみ）』。都内の情報システム系大学を中退後、行方をくらまして社会とも親戚とも一切の繋がりを消している。で、数年前……偽P・D・Sという非常に依存性の高い“薬物”を開発し、ネット社会の裏舞台に君臨する」

「“他人の力を頼りにしてはいけない。頼るべきものは、ただ己の力のみである”」

「……ナポレオンか。自分はネットの海を支配する皇帝とでも言いたいのかね？」

「ネットの世界は偉大だ。差別なく平等に情報を与えてくれる。まさに、人類に残された最後の聖域……だが、国家はその聖域ですら統括し、自分達の監視下に置こうとする。だから、私が汚れ役を担った。もう少しだった……後一歩のところで本懐を遂げられたッ！」

「なるほど。コルシカ島という安アパートに座し、自分の力を表の社会でも誇示したい欲求に耐えられなかった。結果、最も大事な瞬間に油断した君は仲間に裏切られ、こうして現代のセントヘレナ島に拘留されている。ナポレオンはこうも言った――“戦いの結果は、最後の五分間に決まる”と」

宇野が哀れむような声で言う。

ヒュイィィィィ――――――

出入り口のドアが上にスライドし、スーツ姿の男が一人加わった。

「アハハッ……これはこれは、公僕の親玉がこんな朝早くから御出

勤とは。この国が相変わらず平和であると再確認しましたよ」
入って来た中年男性に対し、Ｍｒ．キャリコは皮肉タップリに鼻で笑った。
「何か使える情報は？」
「いえ、頑固一徹です。自分のした事を肯定したくて仕方がない、依怙地なガキと同じです」
入って来た男――国家調査室長・杜若に溜息混じりで答える。
「ネットの海でふやけたままの頭にも理解できるよう、私が非常に分かりやすく言ってやろう。君が関与したと思われる事件全ての罪状を合わせると、世界一の弁護士を雇えたとしても無期懲役は逃れられん。要するに……テロは終わった」
杜若は席に腰を下ろし、Ｍｒ．キャリコを指差しながらキッパリと言い放った。

「アハハハハッ……アハァァァァァ～～ハッハッハッハッハッ――――――――！！」
抱腹絶倒。

「そんなにオモシロイ事を言ったつもりはないんだがね」
杜若室長が怪訝な顔をする。
「いやはや、失礼、失礼。あまりに見え透いた警告だったもんで、我慢しきれず……アハッ♪」
「……？」
宇野課長の方は何事かという表情だ。
「情報機関の人間が相手の完全な敗北を宣告し、勝手に量刑を押しつけてくる時は大概の場合、手詰まりで進展が無い事の証明だよね。要するに、私とつながりのあった連中を一網打尽にするためには、私から情報を引き出すしかない。しかも、決められた短時間で」
「室長……まさか、司法取引を御考えですか！？」
宇野が思わず立ち上がる。

「事件の中心人物を拘束したにも関わらず、解決の目途がたたないでは済まないのだよ。これは、上層部からの指示だ」
杜若は少し悔しそうな口調で呟いた。
「しかし、この男の免責を認めれば、ネット内に巣食う“子”や“孫”共をより一層活気づかせる事になります。ネットの裏社会において『Ｍｒ．キャリコ』の名はまさに英雄。全ハッカーから敵視される電薬管理局が保釈せざるをえなかった……そんな事実が露見すれば、連中はこう考えるでしょう――――“電薬管理局は決して無敵ではない。やり方次第で攻略できる”……と」
今のところ、電薬管理局がサイバーテロの脅威に屈した前例は無い。今回の件もカナリ危うかったが、なんとか収拾できた。が、それはハッカー達が常に単独で攻撃を仕掛けてくるからであり、単純に組織の物量の前に敗退しているだけ。もし、連中が何かの気まぐれで手を組み、組織として機能し始めたら非常に危険だろう。で、Ｍｒ．キャリコの免責はその“気まぐれ”を発生させるのに充分なファクターを含んでいるのだ。
「上層部が注目しているのは、偽Ｐ・Ｄ・Ｓを巧妙に一般へ広め、必然的に発生する裏の経済効果の恩恵を最も多く受けている者だ」
「要するに、新型の偽Ｐ・Ｄ・Ｓ開発に必要な設備やネット環境に投資してきた連中……陰からコイツを擁護してきたクズの事ですな？」
宇野はＭｒ．キャリコ――本名・平賀青文を指差して目を細める。
「そうだ。現在までに確認された偽Ｐ・Ｄ・Ｓの全てのバージョン……ネットで手軽に無料で配布されているモノから、裏サイトで直接購入するしかない高級品まで、そのクズ共が必ず一枚かんでいて、売り上げの一部がヤツ等のマージンとして徴収されるシステムになっている。その額は一つのバージョンだけをとっても莫大。にも関わらず、中心人物と目されていた平賀は何のセキュリティも無い安アパートに住み、現場検証した分析官からは、金を持て余している人間の生活臭は全く無かったと聞いている」

「なるほど。金の流れに不審な点が多いワケですな？」
「そういう事だ。この場合、考えられる金の行き先は三つ……一つは、単純に平賀には金銭に関する興味が薄く、クズ共がその殆どを蓄えている。二つめは、今回のような大規模なサイバーテロの準備に必要な費用として、既にハッカーや裏仕事を専門とする非合法員（イレギュラー）にバラまいてある。そして、三つめだが――」
杜若は座っている平賀の背後に歩み寄り、彼の両肩にポンッと手を乗せた。
「オマエの隠し口座を見つけたんだが、残高は３６００円しかなかった。で、引き出された全額は国外の銀行に移されていて、既にこちらからは手を出せない状態だった。これは一体――」
「――――――――――――――――アハッ☆」
平賀の瞳がパッチリと開き、してやられたみたいな苦笑いを浮かべた。
「『３６００円』というのは“彼”に残ったわずかな人間臭さの証明さ」
「……彼？」
「プー左衛門の肉体だよ。あのヌイグルミは私が近所の量販店で買ってあげたヤツ。処分セールで３６００円だった」
「そうか。良い仲間だな。恩義の分はしっかり残し、後は自分のおかげで稼げた分だから根こそぎ持ち逃げ。トカゲの尻尾にされたヤツにはいつも同情するよ」
「同情、結構。プー左衛門には裏切られたけど、スポンサーとして貢献してくれたおかげで、政府の情報機関をここまで焦燥させられた。そして、これからネット住人のダレもが知る――“完璧な絶対性など無い。どんなに強固な組織にも穴はある”ってね」
平賀が杜若を睥睨する。
（やはり、そうくるか……！）
宇野の表情が一層険しくなった。
「室長、少々宜しいでしょうか？」

彼は出入り口のドアを開けると、杜若を拘留室の外に誘う。
「……ああ」
どんな議論をふっかけられるかは予想できる。杜若の顔も重々しい。
ヒュイィィィィ――――――
ドアが閉まり、二人が顔を突き合わせる。
「室長、薬物の使用の許可を」
「――――――ッ、課長！？」
「自分の国の法律は知っています。薬物を使って自白を強要する事、拷問や暴力で情報を引き出す事……どちらも違法でモラルの是非を問われます。が、モラルは平常な社会であってはじめて必要なモノ。このまま免責と引き換えにヤツを解放すれば、確実に平常な社会が失われていきます」
「だが、しかし……」
「上層部の指示を直接受けたのは室長だけです。なら、私は室長からその指示内容を聞かされる前に、既に強引な尋問を試してしまった……そうすればいい。これならバレても私がクビになるだけで済みます」
「宇野課長……」
杜若室長はただならぬ気迫に押され、アゴに手をあてて俯き加減で思案する。国家調査室とて、クリーンな任務ばかりを実行してきたワケではない。違法な秘密工作を国内外で実施した例はいくつもある。
「……いいでしょう。自白剤の使用を許可します。ただし、拘留室内の監視カメラは切って――」
――――――――ピッ
「何だ？」
急に拘留室のドアの電子ロックが起動し、施錠された。

「おい、どうした？」
宇野課長が隣のモニタールームに駆け込み、尋問の様子をモニターしていた分析官に声をかける。
「わ、分かりません……！　急にエラーが発生して……システムがこちらのアクセスを受けつけません！」
分析官の焦りようから、単純な誤作動や電圧異常が原因ではなさそうだ。そして――

＜くぅぅぅぅぅ～～～～～～マッマッマッマッマッマッマッマッマッマッ！！＞

けたたましく不吉な笑い声が地下施設中に響き渡り、宇野と杜若に戦慄がはしる。モニタールームの全モニターと、拘留室内のテーブルに置いてあるノートＰＣのモニターに映る……可愛らしいクマのヌイグルミ。
「やあ、プー左衛門」
一人だけ全く動揺する様子の無い平賀。彼はＰＣモニターにそっと指を添え、口元を歪めて微笑んだ。

悪党ってヤツはいつも人生を正しく間違えるよう

ウオォォォォォォン！　ウオォォォォォォォン！　ウオォォォォォォォン！

けたたましく鳴り響くアラーム。まだ朝も早い内に、電薬管理局の地下施設は極めて混乱していた。

「こんなバカなッ！　とんだ失態だ……侵入に気づかなかったのか！？」

「ファイアー・ウォールからは何も警告はありませんでした。一体、どうやって入り込んだのか……！」

モニタールームで宇野と分析官が慌てふためいている。

「課長、バックアップシステムで強制介入して追い出せないんですか！？」

取調室の中を映すモニターを凝視しながら、杜若が焦燥した声を漏らす。

「ダメです……大元のサーバーが制圧されているようで、コントロールがききません」

宇野が悔しさのあまりに歯を噛み鳴らす。そして、モニターは更なる状況の悪化を彼等に知らせた。

「大変だッ……取調室の『防護システム』が働いています！」

取調室内の状態（気温・湿度・明度・空気圧）をリアルタイムで分析しているモニターが明滅し、緊急事態を告げる。

「防護システム？」

「テロリストの強襲や大災害が発生した場合を想定し、重要な証人やＶＩＰを守るために設けられたシステムです」

「なら、問題はないだろう。少なくとも、この事態に乗じて外部から物理的な攻撃を受けたとしても、平賀の身は守れる」

「いえ、それが……」

「何だ……？」
分析官の上ずった声に杜若が身構える。
「対化学兵器用の密閉機能が作動……その上、取調室内の給気ファンが停止し、排気ファンのみが作動しています！」
「なッ――――くそッ！」
杜若は取調室とをつなぐ内線電話の受話器を手に取る。コールは可能だが、中の平賀が受話器を取る様子は無い。
「窒息までの時間は？」
宇野が分析官の肩に手を乗せて睥睨する。
「お、おそらく……１０分。もって１５分といったところです」
――――――やられた。数々のハッカー達を駆逐してきた牙城なら安心・安全。そんな油断があったのだろう。完全にしてやられた。
（まさか、これほど迅速に口封じを講じてくるとは……迂闊ッ）
宇野は自分のケータイを取り出し、管理局長の番号にコールした。

＜三ツ星ホテルの泊まり心地はいかがクマ～～？＞
ノートＰＣのモニターの中でハチミツを壺に詰めながら、プー左衛門がバカにするような声で問いかける。
「従業員のサービスがとっても控え目でね。ホットケーキの一つも出やしない……アハハッ♪」
裏切り者を前にしても、平賀の声に憎しみや怒りはこもっていない。それどころか、何かを悟ったかのような澄んだ目でモニターを見つめている。
＜結果から言わせてもらうと、オマエのニートな人生は十数分後に終了するんだベア。ネットの海を漂い続け、偽Ｐ・Ｄ・Ｓを全世界にバラ撒きまくった『Ｍｒ．キャリコ』の死亡……しかも、果てた場所が電薬管理局の拘置所となれば、全てのハッカーが猛り狂って弔い合戦を開始するぅぅぅぅ――――クマックマックマッ！！＞
ハチミツの壺を蹴飛ばし、クマのヌイグルミは歓喜の声を上げな

がら飛び跳ねている。
「……なるほど。私は有象無象を一致団結させるための象徴機能（システム）に過ぎなかった……だろ？」
＜単独主義の傾向が強いハッカー共の方向性をかためるには、自分達と同じ立場でありながら絶対権力と拮抗できる存在が必要だったクマ～～。オマエは社会の裏側に充分な実績を残し、若くして華々しく英雄譚（サーガ）となる。大衆はいつの時代も体制と戦う個人を祭り上げるもんだベア＞
「――――――――――ハァ」
平賀が溜息を一つ。その表情は晴れやか。
＜どうしたんだベア？＞
プー左衛門の動きが止まる。
「死ぬ前に“自分の立ち位置”が分かって良かったなってね。お互い、信頼はできても信用はしちゃいけない相手同士……こうして腹を割って話してくれるとものすごく安心する。覚えてるかい？　君が初めて私に接触してきた時のコト」
彼の言葉からは、もうすぐ死んでしまう人間の恐れや焦燥は全く感じられない。テーブルに両肘をつき、手を組み合わせてあさっての方向に目を向けている。
＜拙者が計画を持ちかけ、オマエは喜んで手足となってくれたクマ。親戚も友達も職も金すらも無い……そんな底辺の極めつけなニートだったからこそ、ネットの海を徘徊するのに都合が良かった。今、こうして考えてみると、深見と弥富の関係にどことなく似ているような気がするベア＞
プー左衛門の声に微妙な哀れみがこもる。
「あっ――――――――という間の人生。全ての個人を“情報機関化”させる夢は潰えたけど、強敵・電薬管理局をここまで痛めつけられた。悔いは無い……そう思いたいよね？」
＜後のコトは全て拙者とスポンサー達に任せ、ネットの海に燦然と輝く発光物体になってくれ給えぇぇぇぇぇ～～＞

「アハハッ♪　プー左衛門、そこはせめて星って言ってくれないか？」

二人の会話の様子はモニタールームから確認できているが、取調室内の音声記録装置が機能しておらず、話の内容までは外の連中には分からない。

「局長ッ、緊急事態ですッ！」

ケータイはすぐに局長へつながった。

＜承知している！　まったく、こんな朝早くから老体を走らせおって……で、状況は！？＞

「被疑者が取調室に閉じ込められました。室内の空調システムがのっとられ、このままでは窒息死してしまいます。扉を破壊しますか？」

＜無駄だ。地下施設の殆どは核シェルターに近い仕様になっている。部屋の周囲は鉄筋とコンクリートの複合壁で囲まれ、厚さは２ｍもある。扉はセラミックプレートと高強度ポリエチレンの多重構造……至近距離から大口径の対物ライフルでも撃たん限り、穴すら開かん＞

「では、焼き切りますか？」

＜そのためには扉の四辺を全て切断せねばならん。時間がかかり過ぎる＞

「し、しかし、それでは……！」

＜深見……いや、浜松はドコにいる？＞

「え……は、はい。ヤツなら救助された後、検査棟の強化水槽に戻っておりますが……」

＜すぐに連絡をとってネットに潜らせるんだ。“電力供給元に危険が迫っている”と念を押してやれ。すぐに動くハズだ＞

「……は？」

＜モタモタするな！　説明は後だ！＞

「りょ、了解しました！」

宇野はモニタールームで充電中だった携帯端末（ＰＤＡ）を慌てて手に取り、検査棟のサーバーとつなげる。
＜うみゅうぅぅぅぅぅ〜〜…………（眠）＞
　ＰＤＡのモニターにやたらと眠たそうな面の浜松が映る。
「浜松、緊急事態だッ！　すぐにネットの海を泳いで——」
＜ふわぁ〜〜〜い……将来の夢はぁ〜〜、え〜〜と、一位がケーキ屋さんでぇ二位がお花屋さんでぇ、三位がセーラー〇——ンでぇ〜〜すぅ（眠）＞
「寝惚けるなバカ者ッ！　管理局のシステムが例の共犯者に制圧され、Ｍｒ．キャリコの命が危ない！　オマエ達で排除してくれッ！」
＜はあぁ〜〜……？　公僕の尻ぬぐいを魚類にせがまないでよね…………そっちサイドで汗水とかその他諸々を垂らしながら頑張って……ふぁ＞
「“電力供給元に危険が迫っている”——そう局長がおっしゃった」
＜——————————Ｍ
Ａ・ＺＩ・ＤＥ？＞
　浜松の顔色が一変する。下唇がプルプルと震えだす。汗水とその他諸々が全身から垂れはじめる。
「猶予は１０分も無い！　早急に侵入者をシステムから追い出さないと、捜査に必要な情報を全て失うかもしれん！」
＜そんなん知るかあああああああッッッ！　キモニートの命なんざエロゲのスタッフロール程度の価値しかないわあああああああッッッ！　んなコトより、管理局の主電源ケーブルは絶ぇぇぇぇぇぇっ対に安全を確保して！！＞
「あ、ああ…………承知した（汗）」
＜よし、潜行(ログイン)してくる！！＞
「よ、宜しく…………頼む（汗）」
　浜松はものすごい剣幕で通信を切り、水槽の中で他の禁魚達に一

瞥をくれる。
「ど、どないしたンや？　エライ顔色悪いで……」
「何か事件のようですね」
「まだまだ儂等の知り得ぬ事象が絡んでおるようじゃのう」
出雲・郡山・土佐の三匹が瞠目する。
「どっかのバカ野郎が管理局のシステムを掌握しやがったおかげで、あたしの肉体（バックアップ）が危険にさらされてる……向こうのサーバーに潜って速攻で駆逐してやんのよッ（怒）」
いつになく殺気がみなぎっている。
「おおォ～～、さすがはミス・ビッチ。他人の危機はガン見しながら笑顔で見過ごすくせに、自分の危機にはゴキブリを前にしたＪＫ並の行動力を披露。そんな浜松にポチは本日も萌え萌えキュ～～ン（笑）」
「うっせえぇぇぇぇぇぇ！！」
手の平でハートの形を作りながら半笑いしてるポチを踏みつけ、浜松はセーラー服に着替えてマジ気味。
「どうやら本当のようじゃのう……『深見素赤』の身体が保管されておるという話」
「しかも、電薬管理局内に隠匿されているという事は、管理局側の人間が何かしらの理由で一枚？んでいる……ですよね？」
土佐と郡山の視線がとっても真剣だ。
「はいはい、その通り。あたしの肉体（バックアップ）は管理局の最下層で最新型の生命維持装置（ＬＳＳ）につながってる。もし、主電源がおちたら予備電源に切り換わるけど、そう長くは持たない。管理局はやたらと電気を食うからね」
ついに浜松が核心となる事実を口にした。普段は情緒不安定な言動に定評がある彼女だが、この瞬間ばかりは何だか……３０代のキャリアウーマンみたいな雰囲気をかもし出していた。コイツ――――ヤル気だ。
（浜松さん……いや、『深見素赤』は一体、何をしようとしている

のですか？）

郡山がその表情に疑念の色を見せる。そして、四匹の禁魚と一匹の糸ミミズは、水槽の中で狂ったように踊り始めるのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1584o/

ようこそ、社会の底辺へ

2011年10月11日01時49分発行